

---

## 第5節 各国史

---

本節では下記のヨーロッパ諸国の歴史について説明する。なお、神聖ローマ帝国、ユーゴスラビア、ブルゴーニュ公国はすでに消滅しているが、ヨーロッパについて学ぶ上で重要であるため、併せて解説する。

|                      |       |
|----------------------|-------|
| 1. ドイツ               | 432 頁 |
| 2. オーストリア            | 450 頁 |
| 3. スイス               | 456 頁 |
| 4. フランス              | 459 頁 |
| 5. オランダ              | 467 頁 |
| 6. ベルギー              | 472 頁 |
| 7. ルクセンブルク           | 478 頁 |
| 8. スペイン              | 483 頁 |
| ・カタルーニャ地方            | 490 頁 |
| 9. ポルトガル             | 495 頁 |
| 10. イギリス             | 499 頁 |
| 11. アイルランド           | 507 頁 |
| ・イギリスの EU 脱退と北アイルランド | 509 頁 |
| 12. チェコ              | 511 頁 |
| 13. ロシア・ソ連           | 516 頁 |
| 14. ウクライナ            | 520 頁 |
| 【補説】 神聖ローマ帝国         | 525 頁 |
| ブルゴーニュ公国             | 535 頁 |
| ユーゴスラビア              | 538 頁 |

## 1. ドイツ史

ドイツは第2次世界大戦後の1949年5月に成立した連邦制の単一国家で、正式名称を「**ドイツ連邦共和国**」とする。冷戦終結後の1990年10月、「**東ドイツ**」を編入するまでは「**西ドイツ**」とも呼ばれた。

英語表記の Germany は、ドイツが「ゲルマン人の国」であることを如実に示しているが、スカンジナビア諸国やイギリス、オランダ等もゲルマン人が興した国である (221 頁参照)。

独語でドイツは Deutschland (ドイツラント) と記し、それは「ドイツ人の国」という意であるが、彼ら以外にも非常に多くの国を建設してきた。19世紀中頃には40近くにまで減るが、オーストリア、ルクセブルク、リヒテンシュタインは現在でも存在するドイツ民族の国である。また、スイスもこの民族が創設した同盟を基礎とする (50 頁参照)。このような特殊性、つまり、ドイツは「ドイツ人の国」であるが、彼らが建設したのはドイツだけではないということより複雑な状況が生じている。

ドイツの起源は8~10世紀に成立した**東フランク王国**や**神聖ローマ帝国**に求めることができるが、後者はドイツ人が建てた国々の連合体であり、主権国家ではなかった。ドイツという名称を持つ主権国家が成立するのは1849年以降であり、これを機に他のドイツ人の国々、とりわけ、ドイツとオーストリアの違いが鮮明になる。

※ドイツとオーストリアの違いについて、25頁を参照されたい。

最初の本格的なドイツ国家が成立したのは、1871年に約40の国々が統合し、**ドイツ帝国**が成立したときである。帝国は「勤勉」「実直」を特徴とした**プロイセン王国**が中心となって創設されたため、それらがドイツのイメージにもなる。帝国の発足により、ドイツ人は祖国統一を達成することができたが、47年しか存続しなかった。帝国は第1次世界大戦での敗北を機に解体され、**ヴァイマル共和国 (ワイマール共和国)**が誕生する。14年後の1933年、ヒトラーが首相になると、この国も崩壊し、その後のドイツは**ナチス・ドイツ**と呼ばれた。神聖ローマ帝国、ドイツ帝国に次ぐ「第3の帝国は」はホロコースト (290 頁参照) や第2次世界大戦を発生させ、人類史に大きな傷を残すことになる。

なお、ドイツ帝国、ヴァイマル共和国 (ワイマール共和国)、ナチス・ドイツ、第3帝国はいずれも通称であり、正式名称は「**ドイツ国**」(Deutsches Reich) であった。

第2次世界大戦後、戦犯国ドイツは分割占領され、1949年には西ドイツと東ドイツが成立するが、1990年、東が西に吸収される形で統一し、現在に至る。ヨーロッパの地図からロシアを除くと、ドイツはそのほぼ中央部に位置し、9ヶ国と国境をしている。人口もロシアを除けば最も多く、諸国の歴史にも様々な影響を与えてきた。

### 1) 先史時代

ドイツ地方では先史時代より人類が生息しており、西部のハイデルベルクやネアンデルタールでは数10万年前の人類の化石が発見されている。なお、彼らは4~3万年前に絶滅し、後にアフリカ大陸より移動してきた新人 (クロマニヨン人) が現代人の祖となる (305 頁参照)。

### 2) 古代ローマ時代

古代ローマはドイツの形成にも大きな影響を与えた。紀元前1世紀中頃、カエサルは、ライン川まで北上し、この地域に住んでいたゲルマン人を屈服させた。ローマはこの川をゲルマニアとの境界とし、右岸からの侵入に備えたが、度々、襲撃される。そのため、前12年、初代皇帝のアウグストゥスは大軍を派遣し、対岸の制圧に乗り出した。

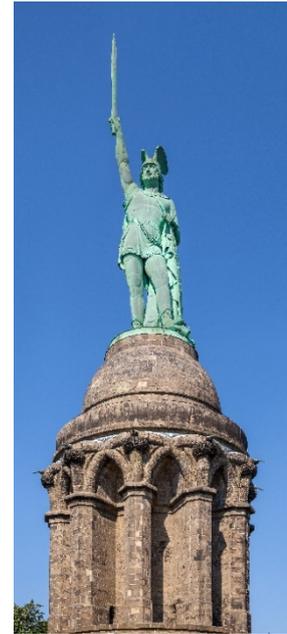
一連の戦いを「アウグストゥス帝のゲルマニア戦争」(Augusteische Germanenkriege) と呼び、ローマは一定の成果を挙げることができた。ゲルマン人を従え、彼らと同盟関係を結び、友好的関係を築いたが、初代皇帝がゲルマニア全域の支配を画策し、ライン川の右岸でもローマ法の執行や徴税を始めると、西暦9年、ゲルマンの諸部族は結束し、反乱を起こした。これを鎮めるため、ローマはドイツ内部に兵を進めたが、木々が生い茂るゲルマンの森で大軍は威力を発揮することができず、壊滅的な敗北を喫する<sup>1287</sup>。

<sup>1287</sup> See planet wissen, Römer in Germanien, in [https://www.planet-wissen.de/kultur/voelker/roemer\\_in\\_germanien](https://www.planet-wissen.de/kultur/voelker/roemer_in_germanien)

◎ トイトブルク森の戦い (ウァルススの戦い) 西暦9年

ゲルマン人の一派 (ケルキス族) を率いていたアルミニウスは、父親がローマとの戦いに敗れたため、捕虜となり、少年期をローマで過ごした。帝国で騎士 (エクイテス) の身分を得ると、「ゲルマンのローマ人」と目されるようになり、ローマと友好的な関係を維持していたが、西暦9年、ゲルマニア支配を強化した帝国に対し反乱を起こした。彼はドイツ北西部のトイトブルク森 (Teutoburger Wald) にローマ軍を誘き出し、隙を突いて大軍を撃退したと言われている<sup>1288</sup>。なお、トイトブルクは厳密には森ではなく、広大な森林地帯である。南部のグローテンブルグ (Grotenburg) の丘には全長約 53 メートルの記念碑も建てられているが、実際にこの地で戦闘が行われたかどうかは分かっていない。1987 年秋、イギリス人の Tony Clunn がこの森の北部に位置するカルクリーゼ (Kalkriese) でローマの武器や硬貨を発見すると議論が再燃した<sup>1289</sup>。

カルクリーゼもトイトブルクの森の中にあることに変わりないが、この森林地帯が戦場であったかどうかは定かではないため、ドイツ語で、この戦闘は「トイトブルク森の戦い」ではなく、ローマ軍総司令官の名をとり、「ウァルススの戦い」 (Varusschlacht) と呼ばれることが多い。なお、戦地として有力視されているカルクリーゼには、2002 年、資料館が建てられた。



アルミニウスの像<sup>1290</sup>  
高さ約 53 メートル

ローマ軍の遠征はその後も行われたが、14 年にアウグストゥスが亡くなると、戦闘は弱まり、16 年に収束した。以後、ローマはライン川の右岸まで統制する構想を放棄し、左岸の開発に力を入れた。

1 世紀後半、ローマはライン川の左岸に二つの植民地を建設し、それぞれ「上ゲルマニア」 (Germania Superior)、「下ゲルマニア」 (Germania Inferior) と名付けた。高地にある前者は現マインツを、また、低地にある後者は現ケルン (65 頁参照) を首都とし、先進の文化をドイツ地方にもたらした。なお、後者の方が約 5 年早く建設されている (85 年)。また、3~4 世紀、属州ベルギカの戦略拠点の一つであったトリーア (165 頁参照) には皇帝 (西の副帝) の住まいが設けられ、「第 2 のローマ」と目されるようになる。ドイツ西部におけるこれらの都市にはローマの遺跡が現存し、2000 年に及ぶヨーロッパ共通の歴史を伝えている。なお、ライン川の右岸で、ゲルマン人が居住する地域は「大ゲルマニア」 (Magna Germania) と呼ばれた。



3) 東フランク王国からドイツ王国・神聖ローマ帝国への移行

395 年、ローマ帝国は東西に分割され、西方には西ローマ帝国が発足した。この帝国は 80 年ほどしか存続せず、滅亡後、領土内にはゲルマン人の王国が建てられた。その一つであるフランク王国は、5 世紀後半、ガリア北部 (現在のフラ

<sup>1288</sup> Reinhard Wolters, Varusschlachten – oder: Neues zur Örtlichkeit der Varusschlacht, Zeitschrift für Ur- und Frühgeschichte, NF 44, 1993, pp. 167–183, 169. なお、この戦いに関する記録はローマによって作成されている。

<sup>1289</sup> See archaeologie-online.de, Forschungen zur Varusschlacht in und um Kalkriese, in <https://www.archaeologie-online.de/artikel/2009/thema-varusschlacht/forschungen-zur-varusschlacht-in-und-um-kalkriese/>

<sup>1290</sup> 画像出典 [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/9/97/Hermannsdenkmal\\_2015.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/9/97/Hermannsdenkmal_2015.jpg) (画像は著者により切り抜かれている)

なお、16 世紀前半、宗教改革を始めたマルティン・ルターがアルミニウスを“Hermann” (ヘアマン) と呼んだことにちなみ、この記念碑は“Hermannsdenkmal” (ヘアマン記念碑) とも呼ばれている。

ンス北西部、ベルギー、オランダ東部)で成立すると、東方にも領土を拡大していき、8世紀後半にはドイツ地方を支配するようになった(330頁参照)。なお、これは一種の「聖戦」であり、国王のカール大帝はゲルマン人をキリスト教(カトリック)に改宗させた。

843年、フランク王国は三つに分割され、現ドイツ地方には**東フランク王国**が建てられた(331頁参照)。国王は、引き続き、カール大帝の家門(カロリング家)より輩出されたが、フランケン、ザクセン、バイエルン等、諸地域でドイツ人の部族が勢力を誇った。911年、カロリング家が断絶すると、これらの部族はドイツ人のフランケン公コンラートを国王に選出した。こうして東フランクはドイツ人が王を務める「**ドイツ王国**」へと変容する。ただし、「ドイツ王国」という名称の国が建てられたわけではない。それは「ドイツ人の王国」であったが、文章を簡潔にするため、「ドイツ王国」とする。

西ローマ帝国 → フランク王国 → 東フランク王国 → ドイツ王国 → 神聖ローマ帝国  
3分割

918年、ザクセン公のハインリヒ1世が新しい国王に選ばれた。彼がザクセン朝を開いてドイツ人の諸部族を統一すると、ドイツ王国としての性格はますます強まる。また、息子の**オットー1世**(332頁参照)が962年、教皇よりローマ皇帝の冠を受けられると、王国は神の恩寵により成立したために神聖で、(西)ローマ帝国を継承する国、つまり、**神聖ローマ帝国**として捉えられるようになる。ただし、「神聖ローマ帝国」という国号が正式に使われるようになったのは、1254年である(527頁参照)。中世、ドイツ地方には300を超える公国、自由都市、教会領等が存在し、神聖ローマ帝国はそれらを緩やかに束ねる組織として機能した(525頁以下参照)。

#### 4) 教皇との対立(叙任権論争)と大空位時代

15世紀まで、代々のドイツ王のほとんどは教皇より冠を受けられ、神聖ローマ皇帝となったが<sup>1291</sup>、両者の関係は常に良好であったわけではなく、11世紀後半には熾烈な**叙任権論争**が生じた(334頁参照)。この争いにおいて、皇帝は教皇との関係では優位に立つことができたが、国内における権威を弱め、地方部族の台頭を招いた(封建制の発展)。

※ 皇帝派(ギベリン)と教皇派(ゲルフ)の争いは、モナコの統治にも及んだ点について、214頁を参照されたい。

また、12世紀初旬から13世前半にかけて続いた**ホーエンシュタウフェン朝**(「シュタウフェン朝」とも言う)のドイツ王は、ドイツ統一よりも、ローマ皇帝として、イタリア半島の統治に力を注いだため、諸侯の群雄割拠という状況がさらに進んだ。そして、皇帝選挙で投票権を持つ諸侯(528頁参照)の思惑により弱小貴族ないしドイツ人以外の者が王に選ばれるようになると、王はいても実質的に存在しない**大空位時代**(Interregnum, 1254~1273年)が到来する<sup>1292</sup>。約20年間続いたこの時代が終わったのは**ハプスブルク家のルドルフ1世**がドイツ王に選ばれた時である。当時、ハプスブルク家はスイス地方やアルザス地方(フランス北東部)に領土を持つ小貴族であり、同家からドイツ王・神聖ローマ皇帝が選ばれたのは彼が最初であった。即位時、すでに55歳になっていたルドルフ1世は当時としては高齢であったが、帝国随一の権勢を誇っていたオタカル2世(ボヘミア王であり、オーストリア公も兼ねた)の覇権を弱めるために選出された。また、1278年、オタカル2世をマルヒフェルトの戦いで破り、ドイツ王の権威を高めることになった(451頁参照)。

<sup>1291</sup> 戴冠を受けず、皇帝にならなかったドイツ王もいる。例えば、ハプスブルク家による王位ないし帝位の独占はアルブレヒト2世の選出(1438年)で始まったが、彼は皇帝として即位していない。ただし、これは2世がドイツ王に選出された翌年に急死したという特殊事情に基づいている。これに対し、マクシミリアン1世以降のドイツ王は戴冠を受けずに帝位に就いた(530頁参照)。

<sup>1292</sup> 大空位時代が始まった1254年、神聖ローマ帝国という国号が皇帝ウィレム2世によって初めて正式に使われるようになる(526頁参照)。彼はネーデルラントに所領を持つホラント伯(Wilhelm von Holland)であった。

彼が1257年に亡くなると、カスティリヤ王のアルフォンソ10世とイングランド王の弟であるコーンウォール伯リチャードの2名が同数の票を獲得し、共に皇帝に選ばれた。しかし、前者の即位に教皇は反対しており、資金面の問題を抱えていた彼が神聖ローマ帝国に入り、皇帝として即位することはなかった。これに対し、後者はグレートブリテン島から帝国に移動し、アーヘンで戴冠式を挙げたが、諸侯が反発したため、帝国の西部でしか皇帝として認められなかった。彼が1272年に亡くなると、新たに選挙が行われ、翌年、ハプスブルク家のルドルフが選出された。

## 5) 宗教改革と宗教戦争

神聖ローマは神の恩寵によって成立した神聖な国とされ、帝国内ではキリスト教が広く信仰されていたが、教会や教皇の権威を失墜させる**宗教改革**もこの帝国で起きた。きっかけとなったのは、1515年、聖ピエトロ大聖堂（251頁参照）の改修費用を調達するため、教皇が贖宥状（258頁の注806を参照）の販売を乱発したことである。ドイツ中央部に位置するザクセンで神学教授を務めていた**マルティン・ルター**は、貧しい人々から取り立てたお金で大聖堂を再建しようとする教皇を厳しく批判した。また、贖宥状を買おうと救われるという教皇の主張は『聖書』に合致しておらず、誤りであると主張したが、教皇は聞き入れず、ルターを破門する。そのため、ルターは新しい教派を立ち上げることになった（258頁参照）。これは現在でも**ルター派のプロテスタント教会**と呼ばれている。



ルターの像<sup>1294</sup>

ドイツ・ザクセン＝アンハルト州（ルターの出身地）

神聖ローマ皇帝の位はカトリックに基づいており、代々の皇帝は旧教派であった。宗教改革期の皇帝**カール 5 世**<sup>1293</sup>はルターの活動を封じ込めようとしたが、皇帝の権限が制限されていたことや、フランスやオスマン帝国との戦い（ウィーン包囲）に対処しなければならなかったため成功せず、ローマより遠い帝国の北部で新教が広まった（351頁参照）。

新旧キリスト教徒の対立は宗教戦争ないし最初のヨーロッパ大戦に発展し、国土を荒廃させた（355頁参照）。また、この戦いを経て、諸侯が領土内の教派を決定する権利を獲得すると、地方分権がさらに進展し、神聖ローマ帝国は有名無実化する（579頁参照）。

## 6) プロイセンの台頭（ドイツ 2 元論）

神聖ローマ皇帝は世襲制ではなく、選挙で選ばれたが（527頁参照）、15世紀以降、代々の皇帝は**ハプスブルク家**より輩出され、同家が帝位を独占した。この貴族は**オーストリア**を所領としたが、同国はドイツ人の**東方植民**の拠点を起源としており、この民族が建てた国の一つである（26頁参照）。中世、彼らは300を超える国や自治都市等を建設しており、それらは神聖ローマ帝国の下で緩やかにまとまっていた。数世紀に亘り、オーストリア（ハプスブルク家）はこの連合体を主導したが、18世紀になると、ドイツ北東部に対抗勢力が現れた。**ホーエンツォレルン家**が治める**プロイセン**である。これによってドイツは二極化する。オーストリアとプロイセンの覇権争いやライバル関係を「**ドイツ 2 元論**」と言うが（26頁参照）、1794年から1814年にかけて、両国はフランスとの戦いに敗れ、弱体化した。この時代、フランス皇帝のナポレオンはドイツ地方で幾つか国を建設しただけではなく、自らが設けた近代的な行政・社会制度をもたらし、大きな影響を与えた。そのため、この20年間は「**フランス人の時代**」と呼ばれているが、当のフランスでは1789年に革命が勃発し、激動の時代が到来していた（359頁参照）。

## 7) ライン同盟の結成と神聖ローマ帝国の崩壊（1806年） ～「フランス人の時代」

フランス革命によって国王や貴族が失脚すると、同様に王国であったプロイセンや、歴代の神聖ローマ皇帝を輩出したオーストリアは革命の波が押し寄せることを防ぐため、フランスと度々、対戦した。当初、ドイツ諸邦は優勢を誇っていたが、1792年10月、ヴァルミー（フランス北東部の小村）の戦いで敗れると、情勢は一変し、敗戦が続いた（581頁参照）。

1793年1月、フランス革命政府が国王ルイ 16 世を処刑すると、プロイセンとオーストリアは、イギリス、ロシア等のヨーロッパ諸国と軍事同盟（第1次対仏大同盟）を結成し、再びフランスと対決したが、またも敗れた。翌年、戦勝国フランスはライン川の左岸地域（ケルン<sup>1295</sup>、アーヘン、マインツ、ザールラント等）を獲得する。7月にはプロイセンと

<sup>1293</sup> ルターが宗教改革を始めた1517年10月当時、皇帝を務めていたのは**マクシミリアン 1 世**であるが、1519年1月に亡くなると、孫の**カール 5 世**が跡を継いだ。5世はハプスブルク家が婚姻政策を進めた結果、スペイン王ともなり、スペイン軍を投入して、ルター派の弾圧にあたった（576頁参照）。

<sup>1294</sup> 画像出典 [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/02/Lutherstadt\\_Wittenberg%2C\\_Luther-Denkmal%2C\\_Sachsen-Anhalt\\_230712.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/02/Lutherstadt_Wittenberg%2C_Luther-Denkmal%2C_Sachsen-Anhalt_230712.jpg) (画像は著者により周りを切り抜いてある)。

<sup>1295</sup> ライン川沿いの都市ケルンを占領したナポレオンが、その地で古くから製造されている水を「**オーデコロン**」と呼んだことについて、65頁を参照されたい。

和約（バーゼルの和約）を結び、この地域の併合を認めさせた<sup>1296</sup>。なお、それまで、この地域には 100 を超える諸侯・司教領や自由都市が存在したが、フランスによって再編され、その数は半減した。こうしてフランスの介入を受けた帝国は崩壊寸前の状況に陥る。

1804 年 12 月、ナポレオンはアウステルリッツの会戦（453 頁参照）でオーストリアとロシアの連合軍を破り、大陸支配を強固にした。なお、南ドイツの諸邦（例えば、バイエルン）はフランスと軍事同盟を結成しており、ナポレオンの陣営に加わり、他のドイツ諸邦と戦った。

1806 年 7 月、フランス皇帝はプロイセンやオーストリアに並ぶ「第 3 のドイツ」を創設するため、つまり、プロイセンとオーストリアをドイツ内で孤立させるため、両者を除くドイツ諸邦にライン同盟を結成させた。翌月、諸邦が神聖ローマ帝国から脱退すると、帝国は消滅する。

ライン同盟には 1794 年よりフランスが占領していたライン川左岸だけではなく、その右岸（マイン川の南側）に位置する諸邦<sup>1297</sup>も加わった。設立当初、加盟していた諸邦は 16 であったが、3 ヶ月後の 1806 年 10 月、フランスがプロイセンを倒すと倍増する。なお、ハンブルク、ブレーメン等のようにライン同盟には加盟せず、フランスに直接、支配される都市もあった。プロイセンもナポレオン軍に占領された（360 頁の注 1122 参照）。

1806 年、フランス皇帝は旧神聖ローマ帝国の領域内にベルク公国を樹立した。また、1807 年にはヴェストファーレン王国を、さらに 1810 年にはフランクフルト大公国を興すと、自らの身内を君主に据えた（583 頁参照）。

このように、ナポレオンはドイツ地方を再編し、統制したが、1813 年 10 月、ライプツィヒの戦い（諸国民の戦い）でプロイセン、オーストリア、ロシア、スウェーデンの連合軍に敗れると、ライン同盟と上掲の 3 国は消滅した。また、前述した「フランス人の時代」も幕を閉じ、プロイセンとオーストリアが勢力を盛り返すことになる。

## 8) ドイツ連邦の発足（1815 年 5 月）

1814 年 4 月、ナポレオンが失脚し、その支配から解放されたドイツ諸邦は、翌年 5 月、ドイツ連邦（ドイツ同盟、442 頁参照）を立ち上げた。こうして神聖ローマ帝国に加盟していた諸邦は再び結束することになるが、南ドイツ（特に、バイエルン）の強い抵抗により連邦国家の建設は見送られた。

## 9) 三月革命とドイツ国の建設（1848～1849 年）

1848 年 2 月、フランスで新たな革命が発生し、国民が王政を倒すと（463 頁参照）、ドイツ各地でも暴動が発生した。プロイセンでは国王が憲法の制定や出版の自由を認めざるを得ない状況に追い込まれる。これを三月革命または「1848 年のドイツ革命」と呼ぶが、実際には革命ではなく、フランスのように、君主制が崩壊することはなかった（もう一つのドイツ革命について、437 頁参照）。

もともと、自由主義運動に押され、ドイツ連邦は解体を余儀なくされた。新しい体制について市民に検討させるため、同年 5 月、国民議会が招集されると、「ドイツ国」と呼ばれる連邦国家が発足し、ドイツ統一が実現する。新体制にはオーストリア大公国も含まれていたが、ハンガリーや北イタリアといったオーストリア帝国（453 頁参照）の領域も加えるべきかどうかをめぐって議会は紛糾し、ドイツは統一どころか、分裂の危機に立たされた。12 月、オーストリア大公国の参加も排除する決議が採択されると（小ドイツ主義、28 頁参照）、同国が反発し、プロイセンとの間で戦争が



三月革命時のベルリン

自由主義運動の高まりを受け、ドイツ諸邦は従来の体制（ドイツ連邦）を廃止し、連邦国家を創設することを決めたが、オーストリア帝国（大公国の参加は認められた）の参加をめぐってドイツ諸邦は分裂し、計画は挫折した。

<sup>1296</sup> なお、神聖ローマ帝国の領土外で成立したプロイセンは帝国に加盟しておらず、プロイセンが結んだ和約は帝国には適用されなかった。帝国は 1797 年 10 月にカンポ・フォルミオの和約を、また、1801 年 2 月にリュネヴィルの和約（1801 年 2 月）をフランスと結び、同国によるライン川左岸地域の併合を認めた（453 頁参照）。

<sup>1297</sup> バイエルン、バーデン、ヴュルテンブルク、ヘッセン等が挙げられる。

勃発しかねない状態に陥る。

この危機を乗り越えるため、議会はプロイセン国王をドイツ皇帝に推挙し、諸邦をまとめようとしたが、国王はオーストリアを除いたドイツ統一や国民による皇帝選出を受け入れず、即位を拒んだ。こうした中、諸邦では君主制の復活を求める動きが強まったため、1849年5月、議会在自主的に解散すると、「ドイツ国」は消滅し、従来の体制、つまり、ドイツ連邦が復活した。

#### 10) 北ドイツ連邦の創設 (1866年8月)

1862年9月、**ビスマルク** (447頁参照) がプロイセンの首相に任命された。彼は富国強兵を進めるとともに、ドイツ内での覇権を確立するため、1866年6月、**普墺戦争** (ドイツ戦争、454頁参照) を起こし、オーストリアを倒した。また、8月、ドイツ連邦を解体し、新たに**北ドイツ連邦**を立ち上げると、その盟主となる。この連邦には、マイン川 (73頁の地図参照) より北に位置する22のドイツ諸邦が加盟したが、その南方にある国 (注1297内の4国) の参加は、プロイセンの勢力拡大を警戒するフランスの介入により阻まれた。また、オーストリアも排除される。これに対し、ルクセンブルクは自主的に参加を見送った。フランス皇帝のナポレオン3世がこの小国の併合を画策すると、南ドイツの諸邦が反発したため、危機的状況が発生するが、イギリスの仲介により戦争は回避された (480頁参照)。

なお、北ドイツ連邦は単なる諸邦の連合体ではなく、主権国家であった。つまり、その創設によってドイツ北部の統一が実現した (444頁参照)。

#### 11) ドイツ帝国の成立 (1871年1月)

フランスとの緊張関係が続く中、1870年7月、**エムス電報事件**が発生し、対立が決定的になると、**ナポレオン3世**が宣戦を布告し、**普仏戦争**が始まった。この「普」はプロイセンを指すが、その他のドイツ諸邦も参戦したため、「独仏戦争」とも呼ばれる (372頁参照)。北ドイツ連邦には参加していない南ドイツの諸邦も加わり、戦いを優位に進めたドイツ軍は、9月、フランス北東部のセダンでナポレオン3世を拘束し、開戦から僅か二ヶ月で勝利を確実にした。

フランスを共通の敵としてまとまったドイツ諸邦は、翌年元旦<sup>1298</sup>、ドイツ帝国を立ち上げた。また、1月18日には、フランスのヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝の戴冠式を挙行するという挑発的な態度に出る (446頁参照)。

ドイツ帝国は南独の諸邦が北ドイツ連邦に加わる形で成立し、ドイツ国 (Deutsches Reich) を正式名称とした。オーストリアはこのドイツ統一から排除され、両者の違いが明瞭になる (454頁参照)。

その後、ドイツは帝国主義政策に乗り出し、先進植民地帝国の英仏と衝突する一方 (373頁参照)、ビスマルクの巧みな外交手腕により戦争を回避し、「ヨーロッパ協調」を生み出した (586頁参照)。また、オーストリアと連携し、バルカン半島進出を狙うロシアを牽制した (379頁参照)。

#### 12) 第1次世界大戦とドイツ帝国の崩壊 (1914年7月~1918年11月)

1914年7月、オーストリアがセルビアに宣戦布告したことを機に第1次世界大戦が勃発する。ドイツは同盟国のオーストリアと共に戦うが、1917年4月、アメリカを敵に回すと、追い込まれていった。敗戦が迫った1918年11月、バルト海に面したキール軍港で水平が出動命令を拒み、暴動を起こすと、他の都市にも広まり、バイエルンでは王政が廃止された。帝都ベルリンでも反政府運動が激しくなると、11月9日、皇帝は退位を余儀なくされ、帝政は崩壊した。これを**11月革命**ないし**ドイツ革命**と呼ぶ。帝国解体後に発足した共和国政府 (社会民主党政権) は連合国と休戦協定を締結し、第1次世界大戦を終わらせた (戦後の賠償問題について、383頁を参照されたい)。

#### 13) ヴァイマル共和国 (ドイツ国) の発足 (1919年8月)

1919年1月、国民議会選挙が実施され、翌月、選出された議員による憲法制定作業が始まった。その頃、ベルリンでは共産主義者が蜂起し、混乱していたため、議会はドイツ中央部の**ヴァイマル** (ワイマール、448頁の注1316参照) に設置された。それにちなみ、8月に施行された憲法は**ヴァイマル憲法**と、また、同憲法の下で発足したドイツは**ヴァイマ**

<sup>1298</sup> Michael Kotulla, Deutsche Verfassungsgeschichte, Vom Alten Reich bis Weimar (1495 bis 1934), Springer, 08, p. 522, para. 2032. なお、北ドイツ連邦の憲法を基盤とする帝国憲法が、1871年元旦、施行されているが、4月、ヴァイスマルクによって改正された。

ル共和国と呼ばれたが、正式な国名は**ドイツ国** (Deutsches Reich) である。つまり、国号はドイツ帝国の時代から変わっていない。新憲法が施行された 1919 年 8 月からヒトラーが首相に就任した 1933 年 1 月までのドイツ国をヴァイマル共和国と呼ぶ。

ヴァイマル憲法は世界で最初に社会権を保障し、諸国の模範になるが、大統領の非常権力を認めており (第 48 条)、ヒトラーの独裁を許すことになった。



ヴァイマル国民劇場の正面に設置された文豪ゲーテ (左) と詩人シラーの像<sup>1299</sup>  
1919 年 2 月から 1920 年 5 月まで、国民議会は文化都市ヴァイマル (ワイマール Weimar) の劇場を使用し、開かれ、後にベルリンに移された。

#### 14) ヒトラーの独裁 (1933~1945 年)

第 1 次世界大戦で敗北したドイツはヴェルサイユ条約によって非常に重い賠償責任を課された。その支払いを可能にするため、大量の紙幣が発行されると、ハイパー・インフレが発生する。これらに対する国民の不満や、1929 年 9 月に起きた大恐慌の煽りを受け、社会情勢が悪化すると、アドルフ・ヒトラーが国民の不満や不安を代弁しながら、人気を獲得していった (387 頁参照)。なお、彼はオーストリア出身であるが、ドイツで政治的成功を収め、1921 年 7 月、国家社会主義ドイツ労働者党 (ナチ党) の党首になる。また、1932 年 11 月の総選挙で躍進すると、翌年 1 月、ドイツ首相に就任した。これを機にヴァイマル共和国は消滅する。ヒトラーは、1934 年 8 月、大統領を兼任する総統の地位に就き、彼が全権を掌握していた当時のドイツは、一党独裁を敷いた所属政党にちなみ、**ナチ・ドイツ (ナチス・ドイツ)** と呼ばれる。また、神聖ローマ帝国、ドイツ帝国に次ぐ「第 3 帝国」と目されることもあった。

##### ◎ 第 3 帝国 (Drittes Reich/Das Dritte Reich 第 3 の国)

日本語では「第 3 帝国」と呼ばれることが多いが、原語であるドイツ語の “Drittes Reich” (ドリッテス・ライヒ) に「帝国」という意はなく、厳密には「第 3 の国」である (527 頁参照)。この表現はヒトラーが全権を握る前から存在し、中世ではキリスト教上の概念として用いられていた。12 世紀後半、神学者のヨアキム (Joachim Florensis 1135~1202 年) は、父なる神が創造した「父の国」、子であるイエスが作った「子の国」、そして、世界が終末を迎え、神が最後の審判 (267 頁参照) を行った後に「聖霊の国」が出現すると説いた<sup>1300</sup>。

このように、「第 3 の国」には将来、創設される理想的な国家という意が含まれており、1923 年、ドイツ人思想家のメラー・ヴァン・デン・ブルック (Arthur Ernst Wilhelm Victor Moeller van den Bruck 1876~1925 年) は『第 3 帝国論』(Das Dritte Reich) と題する著作の中で、神聖ローマ帝国、ドイツ帝国に次ぐ「第 3 の国」の創設について論じている。当時、ドイツ人は「ヴァイマル共和国」を建てて

<sup>1299</sup> 画像出典 <https://> (画像は著者により切り抜いてある) © picture alliance Zooner, Dirk Reuter

<sup>1300</sup> ORF, Gottesreich, in <https://religion.orf.at/v3/lexikon/stories/2602327/>

いたが、とりわけ右派は共和国を支持せず、「第3の国」の出現を待ち望んでいた。1930年代、ナチスがプロパガンダとして使用するようになるが、諸外国はドイツを批判的に「第3帝国」と呼んだため、1939年、ヒトラーは国民にこの概念を使用しないよう指示した。

1938年3月、独裁者は母国オーストリアをドイツに併合した。また、ドイツ民族の血統を守るため、ユダヤ人への迫害を強化する。1939年9月、ドイツ軍が隣国ポーランドに侵攻すると、第2次世界大戦につながった(388頁参照)。独軍は同国の西部を占領し、1941年、アウシュビッツに強制収容所を建設した(292頁参照)。

### 15) 第2次世界大戦と戦後のドイツ分裂

大戦初期、ドイツは、ポーランド西部、デンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギー、フランス等を次々と攻略していった。また、1940年9月、日本やイタリアと三国同盟を結成し、連合国と対戦するが、1943年2月、ソ連との戦い(スターリングラードの戦い)で敗れたのを機に戦況が悪化し、1945年5月、降伏した。

敗戦に伴い、オーストリアとの併合状態は解消された。また、東欧における領土(東プロイセン)を失い、その地域に住んでいたドイツ人は追放されることになった(389頁の注1193参照)。



第2次世界大戦中のドイツの領土  
大戦期、東欧に領土を拡大した結果、  
東プロイセンは飛び地ではなくなった。



現在のドイツの領土  
特に、東プロイセンを失った。

戦後、ドイツ本土は英米仏ソに占領されることになる(399頁参照)。この占領統治に関し東西対立は顕著に表れ、1949年5月、英米仏が占領する地区で**ドイツ連邦共和国(西ドイツ)**が、また、10月、ソ連が占領する地区で**ドイツ民主共和国(東ドイツ)**が成立し、ドイツは東西に分裂した。

なお、首都ベルリンは「東」にあったが、英米仏にも占領地区が与えられており、「西ベルリン」と呼ばれた。1948年6月、3国がソ連と協議することなく、新通貨を発行すると、ソ連は反発し(2頁参照)、3国がベルリンに入れないようにした。「**ベルリン封鎖**」と呼ばれるこの措置は翌年5月まで実施されたが、同月、西ドイツが建設されると、ソ連は軟化し、介助された。

ソ連の衛星国となった東ドイツでは共産主義政党(ドイツ社会主義統一党 SED)を除く政党の活動は禁止され、経済活動も規制されたため、西ドイツへ移動する国民が後を絶たなかった。この「逃亡」を阻止するため、1961年8月、東ドイツ政府は「**ベルリンの壁**」を建設し、それを乗り越え、西側へ移動しようとする者は射殺された(399頁参照)。

このコンクリートの建造物が設置された当時、西ベルリンの市長を務めていたピリー・ブランドは、1969年10月、西ドイツの首相となる。翌年12月、彼は同国の首相としては初めてポーランドを訪問し、東側に属していた隣国との関係改善や国境の画定を図った。また、首都ワルシャワに建てられているゲッター蜂起(1943年4月)の記念碑を訪れると、ぬかるんでいた地面に両膝をつき、戦時中のユダヤ人迫害について赦しを求めた。これらの平和外交が評価され、翌年、**ブランド**にはノーベル平和賞が贈られている。



ワルシャワのユダヤ人・ゲッター蜂起記念碑の前で  
ひざまずくピリー・ブランド(1970年12月)

## 16) ドイツ再統一 (1990年10月)

東西ベルリンを分断する「壁」は冷戦を象徴する建造物になるが、東欧で民主化運動(403頁参照)が進展した1989年11月、その機能を停止し、人々は自由に移動できるようになった。翌年10月、「東」が「西」に吸収される形で両ドイツの統一が実現し、現在に至る。国号は西ドイツの名称、つまり、ドイツ連邦共和国が使用されている。なお、ドイツ再統一は現代史における大きな転換点の一つであり、ドイツで「転換」(Wende)と言えば、この史実を指す。

再統一は、1990年8月31日、両ドイツ間で締結された条約に基づき(発効は9月29日)、「東」が「西」に編入される形で達成され、東ドイツは消滅した。

この条約ではベルリンが統一ドイツの首都として定められたが、西ドイツは、戦後40年間、ライン川左岸に位置する小都市ボン<sup>1301</sup>に政府機関や議会を設置してきた。この慣行を尊重し、新たな決定が下されるまで、行政・立法機関は引き続き、ボンに置かれることになったが、1991年6月、ドイツ議会(下院にあたる連邦議会)は省庁の大半と立法機関をベルリンに移転することを僅差で決定した。これに基づき、1999年9月より連邦政府と議会はベルリンで活動している。

---

<sup>1301</sup> 東ドイツに同じく、西ドイツもベルリンを首都としたが、この都市は東ドイツ領内に位置したため、ボン(Bonn)に政府機関や議会を設置した。ライン川沿いにあるこの都市は、クラシック音楽の巨匠ベートーヴェンの出生地としても知られている(58頁の地図参照)。規模は小さいが、初代首相のアデナウアーは隣接するケルンで生まれており、彼の強い勧めにより、西ドイツの暫定的な首都となった。See Frankfurter Rundschau, Ach ja, Bonn, in <https://www.fr.de/-11731612.html>

## 【補説】幾つかのドイツ統一

中世、ドイツ地方には 300 もの国、自由都市、教会領が存在した。北部ではザクセン、南部ではバイエルン、東部ではオーストリアが台頭し、西部のライン川沿いには多数の司教領が設けられた。それらが統廃合され、10分の1程度にまで減ったのは 19 世紀初頭で、それを行ったのはフランス皇帝のナポレオン 1 世である<sup>1302</sup>。ただし、この異国の君主はドイツ統一まで達成したわけではない。それはドイツ人自身によって実現されるが、フランスを共通の敵とすることでドイツ人はまとまっていった。1871 年 1 月に統一を達成した後も宿敵との争いは続き<sup>1303</sup>、第 2 次世界大戦で敗れたドイツは「鉄のカーテン」によって東西に分断されることになった。しかし、冷戦終結直後の 1990 年 10 月、再統一を果たし、現在に至る。

なお、1867 年 4 月、ドイツ北部で成立した統一国家、すなわち、北ドイツ連邦にオーストリア、ルクセンブルク、リヒテンシュタイン、リンブルク（71 頁参照）は加わっておらず、以後、ドイツとの違いが意識されていく。

このように、歴史上、幾つかのドイツ統一が存在し、国家は民族を統一する枠組みとして機能した。以下ではドイツ統一過程について説明する。

### Nation と Country

英単語の nation と country は共に「国」と訳される。それでは両者の違いが分からないが、前者には「民族」の意味が含まれている。これに対し、country にそのような意はない。「国」を表す英単語としては、その他に state があり、それと nation ないし national を組み合わせた nation-state/national state は、一つの民族で建設された国（単一民族国家、国民国家）を表す。

なお、国連の英語名は United Nations であるが、加盟国は Member States と記される。

※ イギリスはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドという四つの地域からなり、英語でそれらは nation ではなく、country と呼ばれている（499 頁参照）。

ドイツ統一が実現し、ドイツと呼ばれる国が誕生したのは 1849 年以降であるが、それ以前からドイツ人は nation にあたる語を使用してきた。これは nation には「民族」という意味が含まれるためである。つまり、「国」ではなく、「ドイツ民族」という意で nation という表現が使われた。なお、一つの民族であるため、nations という複数形では使用されていなかった。

スペインではカタルーニャ自治州を nation と捉えてよいか争いがある。自らを独自の民族と考えるカタルーニャの住民は nation という表現を用いたが、それはカタルーニャがスペインから独立した国であることを想起させるため、スペイン憲法に違反するとされている（491 頁参照）。

### 1) 神聖ローマ帝国の発足（800 年ないし 962 年）

962 年、ドイツ地方で神聖ローマ帝国が成立したが、帝国はドイツ諸邦の統一を目的とし、ドイツ人によって建設されたのではない。ローマ皇帝が復活し、自らの擁護者となることを希求した教皇がドイツ王にローマ皇帝の冠を授けたのを機に帝国は発足した（525 頁参照）。

帝国は 300 を超える諸邦を束ねる機能も持っていたが、地方では諸侯が勢力を誇っていた。彼らは独自の通貨を発行することができ、領土間の取引には関税を課すこともできた。これに対し、皇帝の権限は制限されていた。例えば、1521 年、皇帝はルターの著作の頒布・閲読を禁止する決定を下すが、帝国全土で実施する権限を持っていなかった（351 頁参照）。そのため、宗教改革を食い止めることができず、教派間の対立は戦争に発展する。この戦いを経て、諸侯が信教の自由（領土内の教派を決定する権利）を獲得すると、皇帝の権威はさらに弱まり、有名無実化した。

<sup>1302</sup> その一方で、ナポレオンはヴェストファーレン王国やフランクフルト大公国等を建設した（583 頁参照）。

<sup>1303</sup> 独仏は、17 世紀前半、ルイ 14 世がフランス国王となり、絶対王制を確立した頃より戦火を交えるようになるが（595 頁参照）、ドイツ国家の一つであるオーストリアとフランスの対立は 15 世紀後半に始まっている（535 頁参照）。

18世紀後半、オーストリアとプロイセンがドイツ内の覇権争いをするようになるが(26頁参照)、両者ともフランスとの戦争に敗れた。1794年、両者を含むドイツ諸邦との戦闘に勝ったフランスはライン川の左岸地域の占領を開始する。また、1800年代初旬、フランス皇帝のナポレオン1世はドイツ全域を支配下に置いた。そのため、1974年以降の20年間は「フランス人の時代」と呼ばれている。

## 2) ライン同盟の設立 (1806年7月)

1806年7月、ナポレオンはオーストリアやプロイセンに次ぐ「第3のドイツ」を創設するため、ドイツ諸邦に**ライン同盟**を結成させた。なお、「ライン」は古くから独仏間の国境と目されてきた「ライン川」を指す。翌月、諸邦が神聖ローマ帝国から脱退すると、800年以上の歴史を持つ帝国は解体された(525頁以下参照)。

神聖ローマ帝国の崩壊後、ライン同盟は(プロイセンとオーストリアを除く)ドイツ諸邦を束ねる役割を果たすが、その本質はフランスとの軍事同盟であり、ナポレオン1世が実権を握った。なお、彼は同盟国に兵役を課したため、ドイツ諸邦はフランス軍の一員としてオーストリアやプロイセンと戦っている(435頁参照)。つまり、ドイツはライン同盟とプロイセン・オーストリアに分裂した。

ライン同盟はナポレオン軍と運命を共にしており、1813年10月、ライプツィヒの戦いで両者がオーストリア、プロイセン、ロシア等の連合軍に敗れると、解散した。

## 3) ドイツ連邦(ドイツ同盟)の設立 (1815年6月)

ナポレオン失脚後のヨーロッパについて協議した**ウィーン会議**ではドイツ国家のあり方が主要な議題になる。フランス革命勃発時、神聖ローマ帝国には約300の諸邦が加わっていたが、「**フランス人の時代**」(584頁参照)に統廃合が進んだため、1815年の時点では39(35の国と4つの自由都市)にまで減少していた。これらの諸邦で新しい連合体を結成することが決まり<sup>1304</sup>、1815年6月、「**ドイツ連邦**」(Deutscher Bund)が正式に発足した。なお、この組織はオーストリアを盟主とするドイツ諸邦間の「同盟」であり、国ではなかった。そのため、「ドイツ連邦」と訳されることが多いが、「ドイツ同盟」ないし「ドイツ連盟」と呼ぶべきである。統一国家の建設には南ドイツの王国(特に、バイエルン)が反対したため、実現しなかった。

## 4) ドイツ国の発足 (1848年5月)

1848年2月、フランスで**新たな革命**が起き、王政が倒れると、翌月、ドイツ諸邦でも市民が暴動を起こし、君主制を脅かした。これを**三月革命**と呼ぶが(436頁参照)、民衆の要請を受け入れ、ドイツ連邦に加盟していた諸邦は従来の体制を廃止し、連邦国家を創設することを決めた。また、国民議会を招集し、憲法を制定させることにした。なお、議会の開設に際し、ドイツ史上初の普通選挙が実施されている。連邦内で最も人口の多いプロイセンには280の議席が割り当てられ、オーストリア大公国(186)がこれに続いた<sup>1305</sup>。なお、後にオーストリアは新体制から排除されることになる。

5月、国民議会が始動し、憲法の制定にとりかかった。なお、会場になったのは講堂や集会所ではなく、フランクフルトのパウル教会(Paulskirche)である。この議会の開設に伴い、「**ドイツ国**」(Deutsches Reich)と呼ばれる連邦国家が発足し、ドイツ連邦は活動を停止した。

翌年(1849年)3月、議会はドイツ国憲法を採択しているが、その施行ないし法的効力には争いがあり<sup>1306</sup>、大規模なドイツ諸邦は憲法を承認していない。最大の勢力を誇ったプロイセンの状況は特殊で、政府は憲法を支持したが、国王は異議を述べている(後述参照)。

ドイツ国の成立はイギリス、フランス、ベルギー、スイス、アメリカ等の西洋諸国によって承認されたが、僅か1年しか存続せず、翌年5月にはドイツ連邦が復活した。

<sup>1304</sup> ボヘミアはドイツ人の王国ではないが、神聖ローマ帝国に属していたため(512頁参照)、ドイツ連邦に加わった。これに対し、ハンガリー王国は同帝国に加盟していなかったため、連邦に加わらなかった。

Christian Jansen: Einheit, Macht und Freiheit. Die Paulskirchenlinke und die deutsche Politik in der nachrevolutionären Epoche 1849–1867, Droste Verlag 2000, p. 40.

<sup>1306</sup> Simon Kempny, Die Staatsfinanzierung nach der Paulskirchenverfassung. Untersuchung des Finanz- und Steuerrechts der Verfassung des deutschen Reiches vom 28. März 1849, Mohr Siebeck 2011, pp. 22–24.

ドイツ国が短命に終わったのは、国の地理的範囲をめぐる激しい対立が起きたためである。ドイツ連邦に加盟する諸邦で連邦国家を立ち上げることは決まっており、実際に発足したが、オーストリア帝国の参加をめぐる大論争が沸き起った。オーストリアはハンガリー、クロアチア、ロンバルディア＝ヴェネツィア (369 頁の注 1143 参照)、トスカーナ等、非ドイツ人が住む国や地域を従える帝国になっていたため (453 頁参照)、ドイツ民族の血統を重視する観点から<sup>1307</sup>、オーストリアを排除する動きが強まった。これを小ドイツ主義と呼ぶが、逆に、その参加を認める立場を大オーストリア主義と言う。白熱した討論の末、議会は、1848 年 12 月、小ドイツ主義を採択した。ただし、オーストリア大公国を完全に排除しておらず、将来の参加を可能にしていた。その一方で、ハンガリーや北イタリアといった非ドイツ人が住むオーストリア領の参加は認めなかった。つまり、議会は実質的に大ドイツ主義<sup>1308</sup>を支持したことになる。なお、神聖ローマ帝国やドイツ連邦にも、オーストリア公国 (大公国) とボヘミア王国は参加していたが、ハプスブルク家のその他の所領も加わっていたわけではない。

|                           |
|---------------------------|
| 小ドイツ主義                    |
| オーストリア帝国を排除したドイツ統一        |
| 大ドイツ主義                    |
| オーストリア大公国とボヘミア王国を含めたドイツ統一 |
| 大オーストリア主義                 |
| オーストリア帝国を含めたドイツ統一         |



1849 年 3 月に採択されたドイツ国憲法による領域 (太い赤線の内側)

上図が示すように、オーストリア帝国 (27 頁参照) が完全に排除されていたわけではない。

<sup>1307</sup> ウィーン会議によって北イタリア (ロンバルディア、ヴェネツィア) を獲得したオーストリアはドイツ諸邦との関係弱めることになった。その一方で、すでに 1820 年代後半には、オーストリアを除いたドイツ諸邦間で関税同盟が完成され、プロイセンが主導的な役割を果たすようになっていた。Jürgen Osterhammel, 1850 bis 1880, Informationen zur politischen Bildung Nr. 315, bpb 2012, pp. 30-55, 30-31.

<sup>1308</sup> ドイツの範囲を広く捉える大ドイツ主義であれ、オーストリア帝国内のハンガリーやロンバルディア＝ヴェネツィア等は統一ドイツに含めない。それはこれらが非ドイツ民族の国であることによる。

オーストリアが議会の決定に反発し、全ての帝国領の参加を認める「**大オーストリア**」(Großösterreich)を提唱すると、小ドイツ主義を支持するプロイセンは、ザクセン、ハノーファー等と共に「**ドイツ連合**」(Deutsche Union)を立ち上げ<sup>1309</sup>、対抗した。両者の対立は軍事衝突を引き起こしかねないほど加熱したため、議会は決定を実行に移すことができなかったが、さらに大きな挫折を味わうことになる。1849年3月、議会はプロイセン国王をドイツ皇帝に推挙したが、オーストリアが新国家から排除されたことを快く思わない国王は即位を拒んだ。また、国民主権を認めない国王は、議회가皇帝を選ぶことにも反発した。このような状況下、三月革命の余波が収まり、君主制を復活させる動きが強まると、5月、議会は自主的に解散するに至った。こうしてドイツ国は消滅し、旧体制、つまり、ドイツ連邦が復活する。

なお、小ドイツ主義を支持する諸邦の領内にも非ドイツ人は居住していた。例えば、現在のブランデンブルク州とザクセン州にまたがる地域にはスラブ人の一派であるソルブ人が住み、彼らはドイツ語とは異なる独自の言語(ソルブ語)を使用していたが、民族として認められず、ドイツ人として扱われた<sup>1310</sup>。これに対し、オーストリアは諸国(ハンガリーやトスカナ等)の独立を認めず、帝政を維持したため、「ドイツ」から排除されることになった。

##### 5) 北ドイツ連邦の発足 (1866年8月)

その後、統一運動が再び強まるのは、約10年が経過した1862年9月、**ビスマルク**(447頁参照)がプロイセンの首相に就任してからである。つまり、彼の思想が強く反映されているが、前年3月のイタリア統一(369頁参照)も刺激剤になった。

小ドイツ主義者のビスマルクは、1866年6月に勃発した**普墺戦争**(ドイツ戦争、454頁参照)でオーストリアを倒し、ドイツ内の覇権を握った。また、この戦争でオーストリア側に付いていたハノーファー、ナッサウ、フランクフルト等を併合した。8月、ビスマルクはオーストリアが盟主になっていたドイツ連邦を解体し、**北ドイツ連邦**を立ち上げており、これによりドイツ史上初の本格的な連邦国家が発足する(後述参照)。なお、名称に「北」が付いているのは、オーストリアや南ドイツ諸邦(バイエルン王国、ヴュルテンベルク王国、バーデン大公国、ヘッセン大公国の南部<sup>1311</sup>)は加わらず、マイン川(73頁の参照)より北に位置する22の諸邦で立ち上げたためである。

もっとも、この新組織は北ドイツに限定されていたわけではない。ナポレオンの失脚後、「北ドイツの雄」プロイセンはライン川沿い、つまり、ドイツ南西部にも領土を持つようになった。それらは本領と接続していない飛び地であったが、普墺戦争(ドイツ戦争)で勝利を取め、ハノーファー、ナッサウ、ヘッセン=カッセル(旧ヘッセン選帝侯国)<sup>1312</sup>、フランクフルトを併合した結果、領土の連結に成功した。このプロイセンが盟主となることで、北ドイツ連邦の地理的範囲は自ずと「北」に限定されなくなった(次頁の地図参照)。

なお、普墺戦争ではオーストリア陣営に与していたが、北ドイツ連邦に加わることでプロイセンへの併合を免れ、独立を維持することができた諸邦もあった(例えば、ザクセン王国)。南ドイツの4国もオーストリアの側についていたが、併合や北ドイツ連邦への参加が見送られたのは、フランスの干渉によるところが大きい。(プロイセンの覇権拡大を警戒していた)ナポレオン3世は、自国に隣接する南ドイツをプロイセンから切り離し、さらにオーストリアを孤立させるこ

<sup>1309</sup> **ドイツ連合**はプロイセン王国内のエアフルトに置かれたため、「**エアフルト連合**」(Erfurter Union)とも呼ばれる。1849年、プロイセンはドイツ連邦を連邦国家に移行させることを意図し、この連合をザクセン王国、ハノーファー王国と共に立ち上げ、オーストリアに対抗した。後に、他のドイツ諸邦も加盟するが、1850年、解散し、ドイツ連邦を復活させた。

<sup>1310</sup> Peter Kunze, Nationale Wiedergeburt, [https://www.sorabicon.de/kulturlexikon/artikel/prov\\_b33\\_gcj\\_r3b/](https://www.sorabicon.de/kulturlexikon/artikel/prov_b33_gcj_r3b/)

<sup>1311</sup> 1806年、神聖ローマ帝国の解体後、ナポレオンはヘッセン=ダルムシュタット方伯領をヘッセン大公国に昇格させた。大公国は①北部の上ヘッセン、②南東部のシュタルケンブルク、③南西部のラインヘッセンに分かれ、②と③は接しているが、①とは接していない。なお、フランクフルト自由都市は①と②の中間に位置していた。北ドイツ連邦には①のみ加盟した。フランクフルト自由都市はプロイセンに併合され、連邦の一部になる。

<sup>1312</sup> ヘッセン=カッセル(旧ヘッセン選帝侯国)は北ドイツ連邦に参加しなかった「ヘッセン大公国」と近距離にあるが、異なる。かつては何れもヘッセン方伯領に属していたが、1567年にフィリップ1世が亡くなると、息子達の間で分割相続された。その一つであるヘッセン=カッセル方伯は、1803年、選帝侯国に昇格した。1807年、ナポレオンによって廃止され、その大部分は彼が興したヴェストファーレン王国に組み込まれたが、1815年、復活した。

とで、ドイツ連邦の3分割に成功している。

南ドイツの4諸邦(バイエルン王国、ヴュルテンベルク王国、バーデン大公国、ヘッセン大公国)は普墺戦争でオーストリア側につき、宗教的にも、プロテスタントが主流の北ドイツ諸邦とは異なっていたが、北ドイツ連邦と対立していたわけではない。4国で南ドイツ連邦を創設する構想もあったが、それを行わず、1870年7月に普仏戦争(372頁参照)が勃発すると、プロイセンとの関係を強化し、11月、北ドイツ連邦に加わった。なお、翌年1月にはドイツ帝国が創設されたことに伴い、北ドイツ連邦は解散しているため、4国が連邦に加盟していた時期は数ヶ月に過ぎない。

他方、ルクセンブルク、リヒテンシュタイン、リンブルク(現オランダやベルギーのリンブルフ州、71頁参照)は、それまでドイツ諸邦の連合体に参加してきたが、(オーストリアとの関係が深かったこともあり)北ドイツ連邦への加盟は見送った。なお、連邦が発足した1867年、ルクセンブルクの帰属をめぐり、ドイツ・フランス間で緊張関係が生じている(480頁参照)。

### ◎ 連邦国家の創設

当初、北ドイツ連邦はプロイセンが主導する軍事同盟としての性質が濃かったが、1848年の三月革命後、国民議会が設置されたことに倣い、北ドイツ連邦も議会を招集した。議会は1867年2月に活動を開始し、4月、憲法を採択している(施行開始は7月)。こうしてドイツ北部に連邦制の国家が誕生し、ドイツ統一が実現した<sup>1313</sup>。つまり、北ドイツ連邦は、普墺戦争の講和条約(プラハの和約)に基づいてドイツ連邦が解体され、それに参加していた22の諸邦によって創設されているが、ドイツ連邦のような諸国の連合体ではなく、主権国家であった。



北ドイツ連邦(1867~1871年)<sup>1314</sup>

連邦は22の諸邦で構成されていたが、そのほとんどはプロイセン領であり(水色)、その領土は南西ドイツ(上系図内のRheinprovinz)にまで達していた。なお、ヘッセン大公国はライン川より北に位置する「上ヘッセン」のみ北ドイツ連邦に加わった(注1311参照)。

<sup>1313</sup> Michael Kotulla, Deutsche Verfassungs-geschichte, Vom Alten Reich bis Weimar (1495-1934), Springer 2008, p. 505.

<sup>1314</sup> 画像出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:NB\\_1866-1871.99.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:NB_1866-1871.99.svg)

## 6) ドイツ帝国の発足 (1871年1月)

北ドイツ連邦の創設に満足せず、南ドイツを含めたドイツ統一を目指したビスマルクは、ドイツ人の民族意識や結束を高めるため、フランスを共通の敵に仕立て上げた。当時、フランスではナポレオン3世が帝政を敷いており、ヨーロッパ内外で覇権を強化していた。その一方で、3世はプロイセンの南下を警戒しており、ルクセンブルクの併合(480頁参照)やスペインの王位継承をめぐるプロイセンと衝突すると、1870年7月、この北ドイツの王国に対して宣戦を布告した(372頁参照)。この戦争は一般に普仏戦争と呼ばれるが、その他のドイツ諸邦もプロイセンの側に付いて参戦したため、独仏戦争とも記される。

ドイツ諸邦は約半年で戦いを制すと、1871年1月18日、フランスのヴェルサイユ宮殿でドイツ皇帝の戴冠式を行った。それに先立ち、同年元旦には**ドイツ帝国**が成立しており、以下の26の国、自由都市、直轄州で構成されるドイツ統一が実現した。なお、神聖ローマ帝国とは異なり、ドイツ人の王国も構成国となる(神聖ローマの実態はドイツ王国であり、領内でそれ以外のドイツ人の王国の創設は認められなかった)。

- ・四つの王国(プロイセン、バイエルン※、ヴュルテンベルク※、ザクセン)
- ・六つの大公国(バーデン※、ヘッセン※、オルデンブルク、ザクセン=ヴァイマル=アイゼナハ等)
- ・五つの公国(ブラウンシュヴァイク、アンハルト、ザクセン=コーブルク、ゴータ等)
- ・七つの侯国(リッペ、ヴァルテック等)
- ・三つの自由都市(ハンブルク、ブレーメン、リュベック)
- ・一つの直轄州(エルザス=ロートリンゲン、594頁参照)

※は北ドイツ連邦には加盟していなかった南ドイツの諸邦



ドイツ帝国 (1871~1918年) 1315

1315 画像出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Deutsches\\_Reich\\_\(1871-1918\)-de.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Deutsches_Reich_(1871-1918)-de.svg)

## ◎ 帝国としての性質

ドイツ語による国号は Deutsches Reich であり、直訳すると、「ドイツ国」になる。つまり、「ドイツ帝国」ではない。「ドイツ国」という国号は 1848 年 5 月より使用されており、1918 年 11 月に帝政が崩壊し、共和政に変わった後も、国号は維持された。なお、帝政期 (1871~1918 年) には国王の上に立つ皇帝が擁立されていた。また、1884 年から 1918 年の期間にはアフリカに植民地を持っていたため、植民地帝国と捉えられていた (375 頁参照)。

1871 年 3 月、それまでフランス領であったアルザス・ロレーヌ (厳密には、ロレーヌ地方は東部のみ) が帝国領に加わるが、帝国は 1 月に発足していたため、皇帝の直轄領となった。なお、この地域は伝統的にドイツ文化圏に属す。神聖ローマ帝国の一部であったため (594 頁参照)、小ドイツ主義の下でも、併合を望む声が多かった。

## ◎ 皇帝と首相

ドイツ帝国は連邦制を採用し、諸邦は行政権を保持したが、プロイセンに強い権限が与えられており、プロイセン国王が皇帝に、また、プロイセン首相が宰相になった。そのため、プロイセンはドイツ帝国と同一視されることがある。面積や人口でも、プロイセンの規模が圧倒的に大きかった。

### ① 初代皇帝ヴィルヘルム 1 世

73 歳で初代ドイツ皇帝となった**ヴィルヘルム 1 世** (Wilhelm I 1797~1888) は、プロイセン国王であることに誇りを持っており、皇帝になることを嫌がったとされている。即位すると絶大な人気を博し、コブレンツの「ドイツ統一記念公園」(Deutsches Eck) には、高さ 14 メートル (台座を含めると 37 メートル) の皇帝の騎馬像が設置された (68 頁参照)。

ヴィルヘルム 1 世は生粋のプロイセン軍人であり、質実剛健であった。また、人情に厚かったとされ、1873 年、座礁したドイツ商船の乗組員を手厚く介護した沖縄県宮古島の人々に記念碑を贈っている。

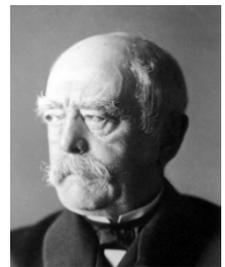
彼と同じ時代に生きたドイツ王としては、「白鳥城」(Neuschwanstein 写真右) を建立したことで知られるバイエルン王国のルートヴィヒ 2 世 (Ludwig II 1845~1886) が挙げられる。この南ドイツの王家からは現在でも「シシー」の愛称で慕われている、エリザベート (Elisabeth von Österreich 1837~1898) が出ており、彼女はルートヴィヒ 2 世の従妹である。シシーはオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世 (Franz Josef I 1836~1916、454 頁参照) の妃になり、ドイツ統一から排除されたオーストリアの復興、つまり、**オーストリア=ハンガリー帝国**の成立に貢献した。



### ② 帝国宰相ビスマルク

プロイセンが推進力となって実現したドイツ統一は、**ビスマルク** (Bismarck 1815~1898 写真右) の存在なくして語れない。皇帝になるのをためらったヴィルヘルム 1 世を説得したのもビスマルクであった。

1862 年、彼はヴィルヘルム 1 世の治世下でプロイセンの首相になり、国威発揚や富国強兵に尽力した。1866 年の普墺戦争 (ドイツ戦争) でオーストリアを下したプロイセンはドイツ内の覇権を掌握する。約 3 年後に勃発した普仏戦争でドイツ諸邦が勝利を収めたのも彼の功績によるところが大きい (372 頁参照)。



1871 年にドイツ帝国が発足すると、ビスマルクは初代宰相となった。ドイツ統一は「鉄と血」、すなわち、「兵器と兵隊」によってのみ実現されると述べたことから、彼は「鉄血宰相」の異名で知られている。内政面では発足したばかりの帝国の治安維持を図るため、反対勢力や、カール・マルクス (368 頁参照) が主導する社会主義運動を徹底して封じ込めた。その一方で、世界で初めて社会保険制度を導入し、国政の近代化に貢献した。

外政面では外交手腕を駆使して列強の利害を調整し、戦争を回避する一方、フランスの報復に備えた。1877~1879 年の露土戦争後は「誠実な仲介人」(ehrllicher Makler) と称してベルリン会議を開き、ロシアのバルカン半島進出を牽制している (427 頁参照)。ビスマルクは当時の欧州で最も影響力のある政治家であり、**ビスマルク体制**として知られている国際秩序を構築した (372 頁参照)。

### ③ 第3代皇帝ヴィルヘルム2世

ヴィルヘルム1世が91歳まで生き長らえたこともあり、その跡を継いだ長子のフリードリヒ3世 (Friedrich III 1831~1888) は、即位後、僅か99日で死去した。これを受け、3世の長子が第3代皇帝になる。29歳で即位した**ヴィルヘルム2世** (Wilhelm II 1859~1941、168頁参照) は祖父の時代の「鉄血宰相」を退陣に追いやり、新しい政治を開始した。初期の友好的な外交政策は外交官の経歴を持つオイレンブルク (Eulenburg 1815~1881) の思想によるところが大きかった。伯爵家出身の彼はプロイセンの外交官としてバイエルンに派遣され、ルートヴィヒ2世に謁見したこともあった。1861年 (ドイツ帝国が成立する前) には江戸幕府と通商協定を締結している。

オイレンブルクの勧めもあり、ヴィルヘルム2世はフランスとの和解を考えるようになった。普仏戦争で獲得した領土 (アルザス・ロレーヌ、594頁参照) を返還する案まで持ち上がったが、軍部の反対にあい、和平構想は闇に葬られる。その後、オイレンブルクは私生活 (同性愛者であり、皇帝とも関係を持っていたとされる) を暴露され、政界から姿を消すが、彼の失脚をもくろみ、陰で動いていたのは祖父の時代の鉄血宰相ビスマルクであった。

平和の推進役を失ったドイツは軍備拡張に傾倒し、第1次世界大戦に突入する。47年前に発足した帝国は敗戦を機に崩壊し (381頁以下参照)、「ラストエンペラー」となったヴィルヘルム2世は、1918年11月、オランダに亡命した。戦後、国内情勢が不安定になり、1923年にヒトラーがミュンヘン一揆を企てた際には、国の安定には君主制が不可欠であるとし、帝政の復活を望んだが、1933年、この極右の政治家がドイツ首相になると、その夢も絶たれた。なお、ヴィルヘルム2世は独裁者と距離を置き、ドイツに戻ることはなかった。1940年、ナチスがオランダに侵攻したときも、他国に逃げていない (これに対し、オランダの女王はイギリスに亡命した)。翌年、ドイツ最後の皇帝は再び祖国の地を踏むことなく、82年の生涯を閉じた。

### 7) ヴァイマル共和国 (1919年8月~1939年1月) と大ドイツ国の建設 (1938年3月)

1919年7月、ドイツ中央部のヴァイマル<sup>1316</sup>で新憲法が制定され、翌月、発効した。それにちなみ、1919年8月からヒトラーが首相に就任する1933年1月までのドイツは**ヴァイマル共和国**と呼ばれているが、正式な国号は「ドイツ国」 (Deutsches Reich) であり、帝政期と変わっていない。

ヴァイマル共和国は重い賠償責任を負わされただけでなく、北東部の領土を失った結果 (ポーランド回廊とダンツィヒ自由都市の創設)、東プロイセンは飛び地になる (384頁参照)。また、普仏戦争で獲得した領土をフランスに返還し、ザール地方は同国に統制されることになった (形式的には、第1次世界大戦後に設立された国際連盟の管理下に置かれた)。なお、後に、この地域の住民はドイツ復帰を住民投票で決め、ヒトラー政権下のドイツに復帰する (591頁参照)。

ヒトラーはオーストリア出身であるが、ドイツで政治的な成功を収め、1934年8月、首相と大統領を兼任する地位を獲得した。また、1938年3月、オーストリアを併合し、大ドイツ主義によるドイツ統一を強行する。こうして成立した国は「大ドイツ国」 (Großdeutsches Reich) と呼ばれたが、1945年5月の敗戦を機にオーストリアは独立した。

<sup>1316</sup> **ヴァイマル** (Weimar) はドイツ中部にある都市である (次頁の地図参照)。旧東ドイツの領土内にあり、モダンなデザインを追求した美術学校「バウハウス」 (Bauhaus) の発祥地となった。18世紀末から19世紀初頭、この都市にはゲーテやシラー等の文人が集まり、ドイツ文学の聖地となる。第1次世界大戦後は共産主義者の活動で混乱していた首都ベルリンを避け、この文化都市に国民議会が設置され、1919年7月、新憲法 (ヴァイマル憲法) が採択された。議場となった国民劇場の前には、現在でもゲーテとシラーの像が建てられている (438頁参照)。

この憲法は第2次世界大戦でドイツが敗れるまで、つまり、1945年5月まで施行されたが、1934年8月、ヒトラーが首相と大統領を兼ねると空文化し、ヴァイマル体制は崩壊した。

なお、ヒトラー政権下の1937年、ヴァイマルにも強制収容所が設けられた。



1920～1939年のドイツ<sup>1317</sup>

1920年、ヴェルサイユ条約に基づき、ポーランド回廊とダンツィヒ自由都市が創設され、東プロイセンは飛び地になるが(384頁参照)、1939年9月1日、ドイツ軍が奪還し、西プロイセンに編入された。なお、独軍のこの奇襲攻撃により第2次世界大戦が勃発する。終戦直前の1945年4月、東プロイセンはソ連軍に占領され、大部分はポーランド領に変わるが、首都のケーニヒスベルクはソ連に併合され、翌年、都市名はカーニングラードに改められた。

8) ドイツ分裂 (1949年5月)

第2次世界大戦で敗れたドイツは戦勝4国によって分割占領された。1949年5月、英米仏が占領する地域でドイツ連邦共和国(西独)が、また、10月にはソ連が占領する地域でドイツ民主共和国(東独)が発足する(399頁参照)。

ザールラントは再びフランスの統制下に置かれたが、1957年1月、ドイツ復帰を果たし、現在に至る(591頁参照)。

9) 東西ドイツの統一 (ドイツ再統一、1990年10月)

1989年12月、冷戦の終結が米ソ首脳によって宣言されると、二つのドイツは急接近し、それから僅か10ヶ月後の1990年10月3日、45年間も分断されていた両者の統一が実現した。ドイツ史上、最も衝撃的なこの「大転換」は「東」が「西」に編入される形で達成されており、東ドイツは消滅した。

<sup>1317</sup> 画像出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Karte\\_des\\_Deutschen\\_Reiches\\_Weimarer\\_Republik-Drittes\\_Reich\\_1919-1937.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Karte_des_Deutschen_Reiches_Weimarer_Republik-Drittes_Reich_1919-1937.svg) (日本語の文字は著者が付けたものである)

## 2. オーストリア史

オーストリアはドイツ人の東方植民の拠点を起源とする連邦共和国である。ドイツ文化圏の東淵に位置していることは「オーストリア」(Österreich)という国号にも表れている。つまり、国号は「東の国」という意であり、民族に由来するものではない(民族名はドイツが使用している)。国の南部はバルカン半島に接しており、この地域の歴史にも大きな影響を与えてきた。

オーストリアの歴史はハプスブルク家(31頁参照)を抜きに語れないが、この貴族による統治が始まったのは1282年と早くない。その所領として発展したオーストリアは神聖ローマ帝国やドイツ連邦の盟主になるが、1871年に成立したドイツ帝国から排除されると、ドイツとの違いが意識されるようになった(25頁以下参照)。1938年、ヒトラー政権下のナチス・ドイツに併合されたが、第2次世界大戦後、中立国として独立し、現在に至る。

※ オーストリアについて、24頁以下を参照されたい。

### 1) 先史時代

オーストリアはアルプス山脈の北東部に位置しており、人が住むようになったのは氷河期が終わった頃(約11,000年前)である。オーストリア南東部のシュタイアーマルクでは30万年前に人類が住んでいた洞窟が見つまっている<sup>1318</sup>。

紀元前8世紀頃には、ケルト人が定住するようになる。古代ギリシアより鉄器が伝わると、ハルシュタット文化が開花した(220頁参照)。ザルツカンマーグートでは彼らの墓が発掘されている。

前200年頃、ケルト人は現オーストリア領にあたる地域にノリクム王国を興した。古代ローマとは良好な関係が築かれ、取引が活発に行われた<sup>1319</sup>。なお、王国は「ノレイア」(Noreia)を首都としたと考えられているが、その所在地は明らかになっていない<sup>1320</sup>。

### 2) 古代ローマ時代(前15年～後395年)

ローマの初代皇帝で、領土拡大に邁進したアウグストゥスは、前15年頃、ノリクム王国を支配下に加えるが、この過程で戦争は発生しておらず、交渉は友好的に行われた<sup>1321</sup>。1世紀中頃、ノリクムはローマの属州となり、ローマ化が進む。この一帯はローマの北辺となり、「リーメス」と呼ばれる防塞が築かれる(74頁参照)。

なお、オーストリア西部(現チロル州、フォアアールベルク州)は属州ラエティアに、東部(現ブルゲンラント州)は属州パannoniaの一部となる。

2世紀になると、キリスト教が伝わった。

### 3) 民族大移動期(5～7世紀)

395年にローマ帝国が東西に分割されると、オーストリアは西ローマに属す。5世紀初旬、西ゴート人が侵入してきたが、スティリコ(325頁参照)に撃退された。5世紀後半には東ゴート人が侵入してくるが、ノリクムは独立を保つことができた。また、476年、オドアケルによって西ローマ帝国が滅ぼされた際も、493年に東ゴート王国に支配されたときも体制を保った。

しかし、6世紀に入り、バイエルン人の入植が進むと、ローマ時代の体制は失われた。また、東方よりスラブ人が侵入してきたため、かつてノリクム王国を築いたケルト人は現ザルツブルク州やチロル州のあたりまで移動を余儀なくされた。

<sup>1318</sup> Austria-Forum, Repolusthöhle, <https://austria-forum.org/af/AEIOU/Repolusthöhle>

<sup>1319</sup> Wien Geschichte Wiki, Kelten, in <https://www.geschichtewiki.wien.gv.at/Kelten>

<sup>1320</sup> Herbert Stejskal, Kärnten. Geschichte und Kultur in Bildern und Dokumenten von der Urzeit bis zur Gegenwart, Universitätsverlag Carinthia 1985, p. 15.

<sup>1321</sup> Peter Pleyel, Das Römische Österreich, Pichler Verlag, p. 12.

#### 4) フランク王国による東方辺境領の設置 (8世紀末)、オーストリア公国の創設 (1156年)

8世紀末以降、南ドイツのバイエルンを含め、オーストリアはフランク王国に制圧され、ゲルマン化が進む。国王のカーールは現オーストリア領東部まで攻略すると、異民族の侵入に備え、東方辺境領 (marchia Orientalis) を設置した。オーストリアはこの防衛の拠点を起源とする。その後、辺境領はマジャール人 (ハンガリー) に攻め入れられ、衰退したが、976年、神聖ローマ皇帝のオットー2世によって再建された。また、この頃より辺境領は「東の国」を意味する「オーストリア」と呼ばれるようになる。

辺境領が再建された976年、バイエルン貴族のレオポルト1世が辺境伯に叙された。彼が立ち上げたバーベンベルク家の下で辺境伯は発展し、1156年、**オーストリア公国**に昇格する。なお、それまではバイエルン公国に属していたが、それより独立し、神聖ローマ帝国にも独立国として加わった。

※ オーストリア公レオポルト5世 (バーベンベルク家) の十字軍参加について、419頁参照

#### 5) ハプスブルク家による統治の開始 (1282年)、オーストリア大公国への昇格 (1453年)

1246年、オーストリア公のフリードリヒ2世がマジャール人との戦いで敗死し、バーベンベルク家の男系は断絶した。オーストリア公の地位は、1251年に亡き王の姉と結婚したボヘミア王のオタカル2世 (512頁参照) に引き継がれることになったが、新国王は、1278年、**ハプスブルク家のルドルフ1世**との戦いに敗れ、オーストリアを失った。なお、その5年前、ルドルフ1世はドイツ王 (神聖ローマ皇帝を兼ねる) に選出されており (434頁参照)、ドイツ王としてボヘミアを撃退している。それまで、スイス・チューリッヒ近郊に居城を構えていた彼はオーストリアに拠点を移し、1282年、長子のアルブレヒトと共に統治を開始した。これを機に1918年まで続くハプスブルク体制の幕が上がる。

12世紀末以降、ドイツ王は世襲ではなく、選挙によって選ばれた (527頁参照)。ルドルフ1世の死後、次の王は他の家門から輩出されたため、ハプスブルク家の影響力は低下したが、1世の死後から約150年経った1438年、子孫のアルブレヒト2世が王に選出されてからは同家が王位を独占するようになる。つまり、従来通り、選挙は行われたが、代々の王はハプスブルク家より選ばれた。

オーストリアはハプスブルク家の下で発展し続け、1453年には公国から大公国に昇格した<sup>1322</sup>。

ハプスブルク家は一族をヨーロッパの王侯・貴族と結婚させ、領土を拡大していった。この婚姻政策によって16世紀には西方のイベリア半島 (スペイン、ポルトガル) を領有するまでになる (576頁参照)。他方、東方のバルカン半島は15世紀中旬よりオスマン帝国に占領されていた (422頁参照)。1526年、このイスラム勢力はヨーロッパ内部に侵攻し、ハンガリーの大半を占領するに至ったが、この戦いでハンガリー王が敗死すると、ハプスブルク家が王位を相続した<sup>1323</sup>。1529年9月、オスマン帝国はオーストリアに攻め入り、ウィーンを包囲したが (**第1次ウィーン包囲**)、翌月、冬の到来を前に撤退したため、オーストリアは存亡の危機を脱することができた。

約150年後の1683年7月、オスマン帝国がウィーンを再び包囲すると (**第2次ウィーン包囲**)、翌年、オーストリアはポーランド、ヴェネツィア、ロシアと神聖同盟を結成して撃退し、ハンガリーをオスマン帝国から奪った。また、バルカン半島北部でも領土を獲得する (スロベニア、クロアチア、現ルーマニア北部のトランシルヴァニア)。なお、**大トルコ戦争**と呼ばれるこの戦いは1699年まで16年間、続いた。30年戦争で衰えていたオーストリアは、大トルコ戦争での勝利を機に国力を回復し、「ドナウ帝国」の礎を築く。18世紀前半には北セルビアをオスマン帝国から奪取した。

18世紀後半、オーストリアは大公**マリア=テレジア**の下で近代的な中央集権国家に発展する一方、急速に台頭してきたプロイセンとドイツ内の覇権争いを繰り返すが (**ドイツ2元論**、26頁参照)、共にフランス革命の波にのまれることになる。

<sup>1322</sup> Wien Geschichte Wiki, Erzherzog, in <https://www.geschichtewiki.wien.gv.at/Erzherzog>. なお、1359年、オーストリア公のルドルフ4世は書類を偽造し、大公への昇格を申請したが、神聖ローマ皇帝のカーール4世は認めていない。

<sup>1323</sup> 1526年、オスマン帝国との戦争で亡くなったハンガリー王ラヨシュ2世の姉はハプスブルク家のフェルディナントと結婚していたため、フェルディナントがハンガリーの王位を継いだ。ラヨシュ2世はボヘミア王も兼ねていたため、フェルディナントはボヘミア王にもなる。なお、亡王はフェルディナントの妹と結婚していた (576頁参照)。

## ◎ マリア=テレジア ～ オーストリアの偉大な母 ～

マリア=テレジア (1717～1780年) はハプスブルク家を代表する啓蒙専制君主で、オーストリアを近代的な多民族国家に導いた。同国史上、最も重要な人物の一人であり、公用語のドイツ語には「テレジアニッシュ」(theresianisch)、英語調にすると「テレジアン」という形容詞が存在するほどである。ハプスブルク家当主の長女として生まれた彼女は、1740年、オーストリア、ハンガリー、ボヘミア、ルクセンブルク等、この大貴族が世襲する諸邦の君主となるが、家督相続はスムーズに運ばず、戦争が勃発した。彼女の即位が問題になったのは、ゲルマンの慣習法(サリカ法典)上、女性は土地やその上にある建造物を相続することができないためである。14世紀以降、この規定が拡大解釈され、ドイツ諸邦やフランス等で女性君主は誕生していない(329頁参照)。

マリア=テレジアの父親で、神聖ローマ皇帝のカール6世には男子がいなかったため、彼は、1713年、女子の家督相続を可能にする勅書を出し、諸国に認めさせた。3年後、男子が生まれたが、生後7ヶ月も絶たない内に亡くなり、翌1717年、マリア=テレジアが生まれる。彼女には妹が二人できたが、弟は生まれなかった。

1740年10月にカール6世が死去すると、勅書の有効性が争われるようになる。5ヶ月前に即位していたプロイセンのフリードリヒ2世は、父が認めた勅書に従わず、マリア=テレジアに家督相続を認める条件として、**シュレジエン**(現ポーランド・シロンスク)の割譲を要求した。彼女がそれを断ると、プロイセンはこの工業地帯に侵入し、戦争を勃発させた。すると、神聖ローマ皇帝の地位を狙っていたバイエルンがプロイセンの側について介入した。ハプスブルク家の弱体化を狙ったフランス(ルイ15世は)もプロイセンに加担すると、アメリカ独立戦争でフランスと戦っていたイギリスは、オーストリアの側について参戦した(358頁参照)。こうして、マリア=テレジアの相続問題は**オーストリア継承戦争**(1740年～1748年)と呼ばれる大戦に発展する。

オーストリアはこの戦争で敗れ、シュレジエンを奪われたが、マリア=テレジアの家督相続を認めさせ、彼女は**オーストリア女大公**として承認された。他方、神聖ローマ皇帝になれるのは男子に限られていたため、1742年、帝位はバイエルンのヴィッテルスバッハ家に移ったが、3年後、**ロートリンゲン**家出身の彼女の夫が皇帝に選ばれた(596頁参照)。なお、両者の結婚(1736年)を機に「**ハプスブルク=ロートリンゲン家**」が成立していた。

1756年、マリア=テレジアは**7年戦争**(1756～1763年)を起こし、シュレジエン奪還を図ったが、まともプロイセンに敗れ、領土回復に失敗した。その後は近代的中央集権国家の確立に努め、ハプスブルク家を代表する君主の一人になる。なお、彼女の時代の官僚は典型的なオーストリア人と目されている(29頁参照)。

1765年に夫のフランツ1世が死去すると、長男のヨーゼフ2世(475頁参照)を神聖ローマ皇帝として即位させた(ただし、帝位は世襲制ではなく、選挙制である)。また、彼をオーストリア大公に叙し、共同で国を治めたが、進歩的な息子とは対立することも多かった。後に彼は啓蒙君主と評されることになる(475頁参照)。

子宝(男子)に恵まれず、跡継ぎ問題で苦慮した両親とは異なり、マリア=テレジアは16人の子を産んだが<sup>1324</sup>、その内、男子は5人であり、やはり女子が多かった。フランス国王ルイ16世の妃マリー・アントワネットは彼女の末娘(第15子)である。プロイセンが新しいライバルになる中、旧敵フランスとの関係は、この結婚により一時的ではあるが、改善された。



Martin van Meytens (1695–1770) 作  
マリア=テレジア(右から2番目)とその家族

<sup>1324</sup> 末子で、マリー・アントワネットの弟のマクシミリアン・フランツは、1784～1801年、ケルン選帝侯、つまり、ローマ・カトリック教会の大司教を務めている。

## 6) フランス革命とオーストリア帝国の成立 (1804年)

1789年7月、フランス革命が起き、国王一家が民衆に拘束されると、王妃はハプスブルク家から嫁いでいたこともあり、オーストリアは革命に干渉し、その進行を阻止しようとしたが、失敗する。また、1792年4月、革命政府がオーストリアに対して戦争を開始すると、オーストリアはプロイセンと同盟関係を結び対抗したが、プロイセンがフランス軍に敗れたため、撤退した。

1796年4月、フランス革命政府はオーストリアを弱体化させるため、後者が支配する北イタリアに攻め入った。オーストリアはこの地域に建てられていたサルデーニャ王国と同盟を結成し、抗戦したが、ナポレオンの進軍を止めることはできず、ミラノ、ロンバルディア等を奪われた。翌年10月、オーストリア大公のフランツ2世はナポレオンと**カンポ・フォルミオの和約**を結び、ライン川左岸(60頁参照)やオーストリア領ネーデルラント(474頁参照)をフランスに割譲する一方、ヴェネツィアを獲得する。

奪われた所領を取り戻すため、オーストリアは、翌年(1798年)、他のヨーロッパ諸国と第2次対仏大同盟(581頁参照)を結成し、北イタリアに侵入した。首尾良く所領を回復することができたが、1800年6月、ナポレオンの反撃にあい、撤退した。1801年2月、リュネヴィルの和約が締結され、オーストリアは北イタリアから一掃されることになる。なお、この戦いに際し、ナポレオンはサン＝ベルナル峠を越えてイタリアに入っており(1800年5月)、この行動は「ナポレオンのアルプス越え」と呼ばれている(581頁参照)。

1804年5月、ナポレオンがフランス皇帝に即位すると、オーストリアはイギリス、ロシア等と第3次対仏大同盟を結成し、フランスに攻撃をしかけた。しかし、ナポレオンの逆襲を受け、翌年11月には首都ウィーンを占領された。北方に逃れたオーストリア軍はロシア軍と合流し、アウステルリッツ<sup>1325</sup>で仏軍と対戦するが、またも敗北を喫し、フランス皇帝の勢いを止めることはできなかった。

1806年7月、ナポレオンはオーストリアとプロイセンをドイツ内で孤立させるため、両者を除くドイツ諸邦に**ライン同盟**を結成させた。これに伴い諸邦が神聖ローマ帝国から脱退すると、帝国は崩壊し、ハプスブルク家出身の皇帝**フランツ2世**(オーストリア大公)<sup>1326</sup>は退位した。なお、その約2年前、ナポレオンがフランス皇帝になったことに対抗し、フランツ2世はオーストリア皇帝を名乗るようになっていた<sup>1327</sup>。これを機に**オーストリア帝国**が成立するが、それまでのオーストリア大公国がオーストリア帝国に変わったのではない。この帝国は、①同大公国を中心とし、②ボヘミア王国、③ハンガリー王国、④ルクセンブルク公国、⑤チロル伯領(43頁参照)等で構成される主権国家であった。

1809年4月、オーストリアはイギリスと対仏大同盟を結成し、再度、フランスに戦争をしかけたが、逆襲され、翌月、ウィーンは再び占領された。その北東部にあるヴァグラムの戦いでも敗れたオーストリアは、同年7月、戦闘を停止する。10月、ウィーンのシェーンブルン宮殿で和約が結ばれ、オーストリアは多くの領土(アドリア海沿岸のトリエステ、ダルマツィア等)を失うことになるが、国体は維持することができた。また、1810年、ナポレオンの要望に応じ、オーストリア皇帝フランツ1世(注1327参照)の長女をナポレオンに嫁がせた<sup>1328</sup>。その一方で、オーストリアはその後もイギリス、プロイセン、ロシア等と対仏大同盟を結成し、フランスとの戦争を繰り返した。

<sup>1325</sup> 戦闘が行われたアウステルリッツ(Austerlitz)はオーストリアの領土内にあったが、現在はチェコ領のスラフコフ・ブルナ(Slavkov u Brna)である。なお、アウステルリッツの戦い(1805年12月)は、フランス皇帝、神聖ローマ皇帝、ロシア皇帝の戦いであったため、「**三帝会戦**」とも呼ばれる。

<sup>1326</sup> **フランツ2世**は伯父であるヨーゼフ2世(マリア・テジアの長男)の跡を継ぎ神聖ローマ皇帝となった父親レポルト2世(マリア＝テジアの3男)が1792年3月に死去したことに伴い、即位した。1797年、ハイドンがフランツ2世のために作曲した『神よ、皇帝フランツを守り給え』のメロディーは、現在でもドイツ国歌(71頁参照)として使われている。

マリア＝テジア → ヨーゼフ2世 → レポルト2世 → フランツ2世(フランツ1世)

<sup>1327</sup> フランツ2世はオーストリア皇帝としてはフランツ1世と呼ばれた。

<sup>1328</sup> 1810年、皇后となったマリー・ルイーゼは、翌年、ナポレオン2世(ナポレオン・フランソワ)を産んでいる。2世について、364頁の注1131を参照されたい。

1814年4月、ナポレオンが対仏大同盟との戦いに敗れ、失脚すると、9月、ヨーロッパ秩序の再建について協議する国際会議がウィーンで始まった。オーストリア外相として、この会議を主導したメッテルニヒは、1821年から約27年間、オーストリア宰相を務め、**ウィーン体制**と呼ばれるヨーロッパの秩序維持に貢献した(585頁参照)。また、国内外の自由主義・民族主義運動、つまり、ハプスブルク体制に対する反発を抑圧するが、1848年2月、フランスで起きた市民革命が波及し、ウィーンで市民が蜂起すると退陣を余儀なくされた。これを**三月革命**<sup>1329</sup>と呼ぶが、宰相であったメッテルニヒが失脚しただけで、帝政が崩壊したわけではない。皇帝のフェルディナント1世が国民の要請に応じ、憲法の制定と自由主義の実現を約すと事態は収まった(442頁参照)。

しかし、同年5月、1世が約束を反故にすると、再び暴動が発生した。その後、市民運動は激しさを増していったため、同年12月、フェルディナント1世は退位し、甥の**フランツ・ヨーゼフ1世**(写真右)が跡を継いだ。新皇帝は第1次世界大戦中の1916年11月に亡くなるまで、68年の長きに亘り君臨し、死後、間もなくして帝国は崩壊した。次代のカール1世の在位期間は2年に過ぎなかったため、フランツ・ヨーゼフ1世は実質的に最後の皇帝と目されている。



画像右：フランツ・ヨーゼフ1世とエリザベータ皇后可  
彼女は「シー」の愛称で知られている。

### 7) オーストリア=ハンガリー帝国の成立 (1867年)

ナポレオンの失脚後、ライン同盟は解散し、それに代わるドイツ諸邦の連合体として**ドイツ連邦**(442頁参照)が発足した。オーストリアがその盟主を務めることになったが、1866年、プロイセンとの覇権争いに敗れると、ドイツから締め出される。そのきっかけとなったのは、デンマークが北ドイツの小国(シュレースヴィヒ公国とホルシュタイン公国)を併合しようとしたことである。オーストリアはプロイセンと共にデンマークを撃退したが(1864年の**デンマーク戦争**)、戦因となった小国の扱いをめぐる戦勝両国は対立し、1866年、**普墺戦争**が勃発した。なお、この戦争は単なるプロイセンとオーストリアの雌雄決戦ではなく、他の諸邦もどちらかの側について参戦し、ドイツを二分する大戦となったため、「**ドイツ戦争**」(Deutscher Krieg)とも呼ばれる。

| プロイセン側の側についた諸邦の例   | オーストリアの側についた諸邦の例   |
|--|--|
| メクレンブルク=シュヴェリーン大公国、オルデンブルク大公国、アンハルト公国、ブラウンシュヴァイク公国、ザクセン=コーブルク=ゴータ公国<br>自由都市ハンブルク、自由都市リュベック、自由都市ブレーメン | バイエルン王国、バーデン王国、ヴュルテンベルク王国、ヘッセン大公国(注1311参照)<br>ヘッセン選帝侯国、ザクセン王国、ハノーファー王国、ナッサウ公国、ザクセン=マイニンゲン公国<br>自由都市フランクフルト |

なお、オーストリアから「未回収のイタリア」の奪還を狙うイタリア王国はプロイセンの側について参戦した(38頁参照)。

2ヶ月間(1866年6~8月)の短期決戦を制したプロイセンはドイツ連邦を解体し、**北ドイツ連邦**を創設した(444頁参照)。これによって北ドイツ(南西ドイツも含む)の統一が実現したが、ナポレオン3世の介入もあり、オーストリアの参加は認められず、ドイツ統一から締め出されることになった。また、オーストリアの衰退に乗じ、領土内のマジャール人が独立運動を起こすと、ハプスブルク家は、翌1867年6月、彼らを懐柔するため、ハンガリー王国の独立を認める一方、この王国と同君連合を結成し<sup>1330</sup>、**オーストリア=ハンガリー帝国**を発足させた。その後、オーストリアはプロイセン(ドイツ)と軍事協定を結び、バルカン半島へ進出する。

<sup>1329</sup> オーストリア国内だけではなく、オーストリアが支配していたチェコ、ハンガリー、ロンバルディア(ミラノ)、トスカーナ(フィレンツェ)等でもハプスブルク家体制に反発する暴動が発生し、「諸国民の春」と呼ばれたが、同年(1848年)の秋までには押さえつけられた。

<sup>1330</sup> オーストリア皇帝のフランツ・ヨーゼフ1世がハンガリー王を兼任した。

## 8) バルカン半島への進出と第1次世界大戦

1878年6月に開催されたベルリン会議で、オーストリア（厳密には、オーストリア＝ハンガリー帝国）はボスニア・ヘルツェゴビナの行政権獲得に成功した（372頁参照）。それ以降、オーストリアは30年に亘り、この地域の近代化に努めてきたが、1908年7月、オスマン帝国で青年トルコ革命が発生する。その波及を恐れたオーストリアが、10月、ボスニア・ヘルツェゴビナの併合を宣言すると、この地域には多くのセルビア人が住んでいたため、セルビアが猛反発し、オスマン帝国やロシアを巻き込む国際問題に発展した。なお、領土問題はオーストリアが補償金を支払うことで解決されたが、バルカン半島の不安定な状況は継続する。

1914年6月、この地域の首都サラエボを訪問したオーストリアの皇位継承者夫妻（381頁の注1176参照）が暗殺される事件が発生する。オーストリアはこれをセルビアの陰謀とみなし、翌月、セルビアに対し宣戦布告すると、列強が参戦し、第1次世界大戦が始まった。

1917年4月、アメリカの参戦により同盟国のドイツが追い込まれると、オーストリアの戦況も悪化した（383頁参照）。敗戦が決定的になった1918年10月以降、チェコスロバキア（ボヘミア）、ハンガリー、クロアチア、スロベニアが独立を宣言する。

同年11月3日、オーストリアは連合国と休戦協定を結んだ。同日9日、ドイツ皇帝のヴィルヘルム2世が退位すると、オーストリアでも皇帝カール1世の退位を求める声が強まった。彼が退位を宣言することはなかったが<sup>1331</sup>、11日、国事への不関与に同意すると、帝政は実質的に終焉を迎え、640年続いたハプスブルク体制は幕を下ろした。

同日、「ドイツ＝オーストリア」（Deutschösterreich/Deutsch-Österreich）と呼ばれる新しい体制ないし国家が発足した（オーストリア革命）。臨時政府はドイツとの合併を決定したが、戦勝国によって禁止され、実現しなかった<sup>1332</sup>。1919年9月、オーストリアは講和条約（サン＝ジェルマン条約）に署名し、政体は共和制（オーストリア共和国）に移行した。

同条約によってオーストリアはチェコスロバキアやハンガリー等の独立の承認を義務づけられた。また、イタリア（38頁参照）、ポーランド、ルーマニア、旧ユーゴスラビア（34頁参照）に領土を割譲したため、国土は戦前の4分の1に縮小する。なお、ハンガリーからオーストリア系住民が多数派を占める地域（ブルゲンラント、37頁参照）を得た。

## 9) 戦間期と第2次世界大戦

1938年3月、オーストリアはヒトラー政権下のドイツに併合された（389頁参照）。また、ドイツの一部として第2次世界大戦に参加するが、1945年4月、ウィーンをソ連軍に占領されると、翌月、無条件降伏した。

戦後は米英仏ソに分割占領されたが、1955年5月、主権を回復し、現在のオーストリア共和国になる（392頁参照）。なお、中立国になることで、ドイツのように東西に分裂することを回避した（30頁参照）。

## 10) 冷戦期とその後のEU加盟（1995年1月）

冷戦期には中立を維持したが、EUとの経済協力や貿易が発展する。そのため、EU加盟は既定路線となり、冷戦終結後の1995年1月、EUに加盟し、現在に至る（31頁参照）。なお、オーストリアは中立を理由に、EUの安全保障政策に完全に参加していない。

<sup>1331</sup> 最後の皇帝となったカール1世は、帝政が崩壊した後もオーストリア国内に留まっていたが、皇帝の暗殺を企む不穏な動きがあったため、1919年3月、スイスに亡命した。1921年11月、皇帝一家はポルトガル領マデイラ島に移り、翌年4月、カール1世は34歳の若さでなくなった。See Richard Lein, 1919: Ausreise der Kaiserfamilie, in <https://hdgoe.at/ausreise-kaiserfamilie>

<sup>1332</sup> その20年後の1938年3月、オーストリアはヒトラーによってドイツに併合された（389頁参照）。

### 3. スイス史

スイスはヨーロッパの中央部に位置し、四方を他国に囲まれた連邦共和国である。1307年に発足した「スイス盟約者団」を起源としており、現在でも、この組織名を国号として使用している（48頁参照）。歴史的にドイツ諸邦との関係が深く、神聖ローマ帝国に属していたが、1648年、正式に独立した。

1798年、フランスに攻め入られると、盟約者団は崩壊し、翌年、**ヘルヴェティア共和国**が発足するが、国政は安定せず、1803年、盟約者団が復活した。1848年、この組織は連邦制の国家に改編され、現在に至る。

※ スイスのアイデンティティや国家建設の基盤等について、50頁以下を参照されたい。

#### 1) 古代ローマ時代

スイス地方には40万年前から人類が住んでいるが、人々が定住するようになったのは氷河期が終わる頃（約11,000年前）と考えられている。紀元前3世紀頃にはローマ人が進出し、前58年、**ユリウス・カエサル**に征服された<sup>1333</sup>。1世紀、スイス東部には属州ラエティア（74頁参照）が建設され、西部は属州上ゲルマニアに属す。395年にローマ帝国が東西に分離すると、西ローマの領土となる。

#### 2) フランク王国、神聖ローマ帝国の時代

8世紀、スイス地方はフランク王国に支配された。次世紀、王国が分割されると、スイス東部は東フランク王国に、西部は中フランク王国に属す。10世紀、東フランクが神聖ローマ帝国に変容すると、スイス東部は帝国領となる。

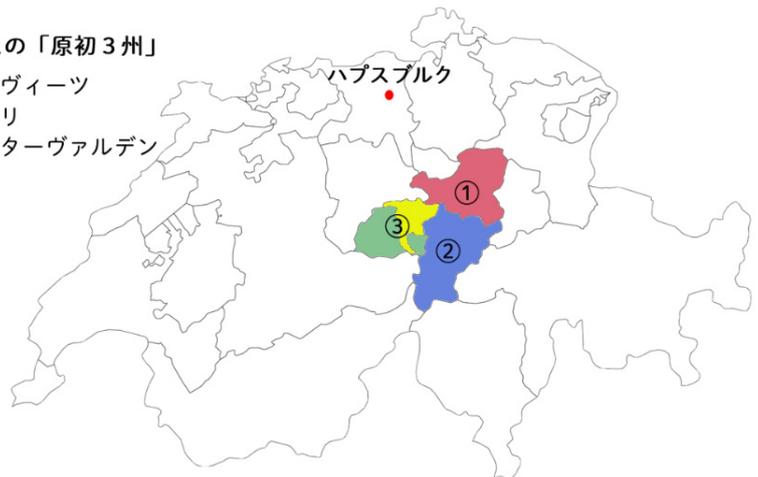
他方、西部は、9世紀中頃、イタリア王国の領土に変わった（332頁参照）。同王国が消滅し、その北西部に高ブルグンド王国（ユーラブルグント王国）が成立すると、それに属すが、1032年、王朝が途絶えると、神聖ローマ皇帝が相続した。その結果、スイス全土は帝国に編入された。

#### 3) 盟約者団（誓約同盟）の発足（1291年）

10世紀中頃、ハプスブルク家がフランス・アルザス地方からチューリッヒ近郊に移住してきた（311頁参照）。1273年、当主のルドルフが神聖ローマ皇帝に選出され、名声を高める。彼はボヘミア王のオタカル2世からオーストリアを奪うと、ウィーンに本拠地を移すが、スイスにも城を残していた。その勢力拡大を警戒し、ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン<sup>1334</sup>の3地域は、1291年8月1日<sup>1335</sup>、「**永久盟約**」を交わし、攻撃されたときは連帯して防御することを誓い合ったとされている。このときに設立された「盟約者団」（誓約同盟

スイスの「原初3州」

- ①シュヴィーツ
- ②ウーリ
- ③ウンターヴァルデン



<sup>1333</sup> Schweizerische Eidgenossenschaft, Geschichte der Schweiz, in <https://www.eda.admin.ch/aboutswitzerland/de/home/politik-geschichte/geschichte-der-schweiz.html>

<sup>1334</sup> ウーリとシュヴィーツは現在でも単一の州（Kanton）として存在するが、ウンターヴァルデンはニトヴァルデン（地図中の緑色の地域）とオプヴァルデン（黄色）に分離した。

<sup>1335</sup> なお、19世紀まで、永久盟約は1307年11月8日に結ばれたと考えられていた。See Swissinfo.ch, Warum wird die Gründung der Schweiz ausgerechnet am 1. August gefeiert?, in <https://www.swissinfo.ch/ger/politik/44284518>; WDR, 8. November 1307 - Der Rütlichschwur wird angeblich geleistet, in <https://www1.wdr.de/stichtag/stichtag7058.html>

Eidgenossenschaft) がスイスの起源である。なお、発足したのは団体であり、国家ではない。前掲の3地域は原初3州と呼ばれており、その一つである「シュヴィーツ」(Schwyz) が「スイス」の由来になる。

1315年、盟約者団(誓約同盟)はスイス地方に攻め入ってきたハプスブルク家を撃退した。戦闘はその後も発生し、この頃、ルツェルン(1332年)、チューリッヒ(1351年)、グラールス、ツーク(共に1352年)、ベルン(1353年)が同盟に加わった。

1415年、同盟はハプスブルク家の居城が残されていたアールガウ(スイス北部)に攻め入り、この地域を制した。

#### 4) 神聖ローマ帝国からの独立(1648年)

このように同盟はハプスブルク家と対立してきたが、同家から代々の神聖ローマ皇帝が輩出されるようになると、神聖ローマ帝国との関係も悪化した。そのため、ハプスブルク家やブルゴーニュ家(535頁参照)との戦い(1474~77年のブルゴーニュ戦争、1499年のシュヴァーベン戦争)で勝利を収め、名声を高めた15世紀末、同盟は神聖ローマ帝国から独立するに至った。なお、独立が正式に承認されたのは1648年である(576頁参照)。

1501年、新たにバーゼルが同盟に加盟した。1506年には教皇がスイス人を傭兵として採用し、現在まで続く「パチカンのスイス傭兵」(画像下)の歴史が始まる。



パチカンのスイス傭兵 (<https://www.vatican.va>)

現在でも傭兵は鎧とカラフルな衣装を身に付け、教皇庁を警護にあたっている。

傭兵になれるのはスイス国籍の男性に限られる伝統も変わっていない。

#### 5) 宗教改革(16世紀)

16世紀前半、ドイツでマルティン・ルターが宗教改革を行ったのと並行し、スイスではフルドリヒ・ツヴィングリとジャン・カルヴァンが改革運動を展開した。チューリッヒで司祭を務めていたツヴィングリはルターよりも福音主義(『聖書』を信仰の基盤とすること)を徹底するだけでなく、社会制度改革(例えば、傭兵の廃止)にも取り組んだ。これは盟約者団を2分する宗教戦争を引き起こすことになり、1531年10月、ツヴィングリは戦場で亡くなった。これを受け、彼が提唱した宗教改革は停滞し、戦争も収束する。その後、ツヴィングリ派の主流はカルヴァン派と合流した。

カルヴァンはフランス人であるが、1536年、フランスとの国境沿いに位置するジュネーブ<sup>1336</sup>で市政の実権を握り、神権政治を開始した。旧教徒を弾劾し、市民でも逆らう者には死刑を科すなど、人々に恐怖を与えている。彼の信条はツヴィングリの福音主義やエラスムス(341頁参照)の人文主義の影響を受けていたが、万物は予め神によって定められており、救いが得られるかどうかは神によって予め決められているという独自の理論(予定説)も提唱した。これを基盤とする彼の思想は西ヨーロッパに広まっていき、民主主義や人権の観念だけではなく、資本主義を育むことになる(259頁参照)。

<sup>1336</sup> 当時、ジュネーブは盟約者団に参加していなかったが、参加するベルンやチューリッヒと密接な関係にあった。

## 6) フランス革命期、ヘルヴェティア共和国の建設と消滅 (18世紀末頃～19世紀初旬)

1789年7月、フランス革命が勃発すると、スイスでも旧体制への反発が強まり、国内は混乱した。1798年3月、フランス革命政府軍(ナポレオン軍)がスイスに攻め入り、戦闘に敗れた盟約者団(誓約同盟)は崩壊する。なお、ジュネーブはフランスに併合された。

翌月、盟約者団に加盟していた諸地域は**ヘルヴェティア共和国**<sup>1337</sup>を樹立した。共和国はフランス型の中央集権制度を導入し、地方の権限を制限したため、各地で反乱が発生し、内戦状態に陥る。1803年2月、ナポレオンが事態収拾に乗り出し、盟約者団を復活させると、ヘルヴェティア共和国は消滅した。

## 7) 連邦共和国の樹立 (1848年)

このように、18世紀末から19世紀初旬にかけて、スイスはフランスの介入を受け、混乱した。そのため、中立を宣言し、列強の干渉を受けないようにすることが模索される。1814年に始まった**ウィーン会議**で、盟約者団の永世中立が承認された(581頁以下参照)。また、ジュネーブの復帰が決まった。

ヘルヴェティア共和国が消滅した後も、スイス地方ではリベラルな連邦制派と保守的な地方自治派の対立が続いていたが、各地域が独自の法律や通貨を持つ体制は経済発展を妨げるため、リベラルな連邦制派が勢力を増していく。

1840年代、宗教対立(カトリックとプロテスタントの対立)の要素が加わり争いが激化すると、原初3州を含む保守的な地域は**特別同盟**(Sonderbund)を結成した。1847年11月、両者間の対立は市民戦争に発展するが、大国(フランス、オーストリア、ロシア)の介入を避けるため、特別同盟は解散し、戦争を終わらせた。翌年9月、憲法を制定し、スイスはリベラルな連邦共和国になる。

1874年、国民投票制度が導入された。1891年には国民請願制度(国民が憲法改正を求める制度)が取り入れられ、スイスの特徴である直接民主主義の基盤が築かれた。

## 8) 世界大戦期

20世紀前半に起きた2度の世界大戦でスイスは武装中立政策をとった。ただし、第2次世界大戦中はドイツに武器を輸出し、ドイツ寄りの政策をとったとして批判されている<sup>1338</sup>。

## 9) 第2次世界大戦後

スイスは第2次世界大戦後の冷戦期も中立を維持した。その一方、経済的には、1960年、イギリスやオーストリア等と共に欧州自由貿易連合(EFTA)を立ち上げ、西側諸国や他の中立国との連携を図った。また、1972年には、EC(現在のEU)と自由貿易協定を結び、経済統合を進める。

1978年、それまでベルン州に属していたユーラが新しい州となり、スイスは現在の26州体制に変わった。

2002年、国民投票の結果を受け、スイスは国連に加盟した。その一方、反対票が圧倒的に多かったため、EUへの加盟は見送った(51頁参照)。もっとも、ヨーロッパ諸国との政策統合は進展しており、2008年には、シェンゲン協定制度に加わり、加盟国間における国境検査を撤廃した(639頁参照)。

<sup>1337</sup> 「ヘルヴェティア」という名称について、48頁を参照されたい。

<sup>1338</sup> See swissinfo.ch, Die Neutralität der Schweiz während des Zweiten Weltkriegs wirft weiterhin Fragen auf, in <https://www.swissinfo.ch/ger/politik/49131972>

## 4. フランス史

フランスは 843 年に成立した西フランク王国を起源としており、国名もこの王国、つまり、「フランク」に由来する。当初、王権は弱く、北西部をノルマン人に占領された。彼らの指導者は貴族に叙され、国王に忠信を誓う一方、国王を上回る力を持つようになる。また、海を渡ってイングランドを制すと、イングランド国王として即位した。このような状況から、英仏が対立する時代が長く続いた。フランス国王が一連の戦争を制し、王権を強化したのは 15 世紀に入ってからである。16 世紀末頃、ブルボン朝が成立すると、国王の権威はさらに強まった。17～18 世紀には諸国の政治にも介入し、「大国」(Le Grand Nation) としての威光を放つことになる。

フランス国王の多くはカトリック教徒で、プロテスタントは様々な弾圧を受けてきたが、18 世紀には異教に対する寛容や人間の理性を重視する啓蒙思想が浸透する。また、自由・平等の理念は、1789 年、フランス革命を起こし、王侯貴族やローマ・カトリック教会を失墜させた。1792 年、王政は廃止され、共和政に変わるが、革命の混乱に乗じ、ナポレオンという新たな独裁者が現れる。1804 年、彼は帝政を開始し、ヨーロッパの広い範囲を支配したが、その栄光は 10 年しか続かず、諸国との戦争に敗れて失脚すると、王政復古、共和政の再開、帝政の復活を経て、1871 年、共和政に戻った。

第 2 次世界大戦中、フランスは 4 年間、ドイツに占領され、政府はロンドンに亡命したが、ノルマンディー上陸作戦 (1944 年 6 月) に成功した米英によって解放された (225 頁参照)。戦後、新憲法の下で第 4 共和政が開始されたが、1959 年、ド・ゴールがそれを倒すと、第 5 共和政に移行し、現在に至る。なお、このような政体の変遷に拘わらず、パリに首都を置く中央集権体制は維持されてきた (202 頁参照)。

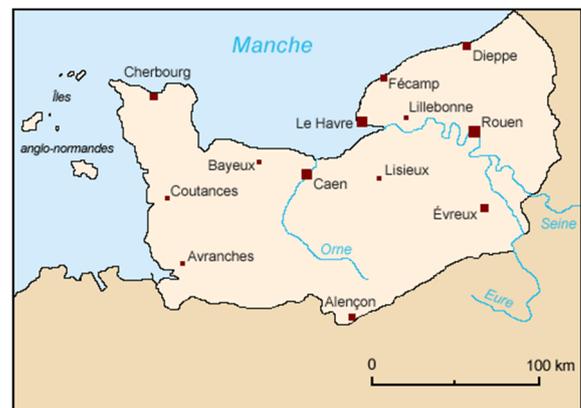
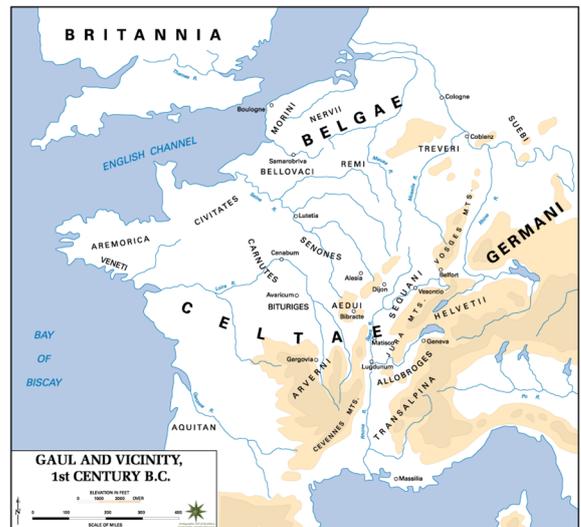
### 1) 先史時代

フランス地方では紀元前 2 万年頃 (旧石器時代) の人類の化石が発見されているが (クロマニヨン人について、305 頁参照)、フランスの源流を作ったのは、前 900 年頃、ヨーロッパ中央部 (ドナウ川方面) より移動してきたケルト人 (220 頁参照) である。古代ローマ人は、彼らが居住していた現フランス地方をケルト人 (Celtae/Celtica) ないしガリア (Galli) と呼んだ。

### 2) 古代ローマ、フランク王国の時代

前 2 世紀、ローマ人はガリア南部を支配し、属州とした。前 1 世紀半ば、カエサルによって北部も平定されると、属州が建設され、ローマ文化が浸透していくが (320 頁参照)、5 世紀、西ゲルマン人の一派であるフランク族が北東部に移り住み、フランク王国を興すと、ゲルマン文化の影響を受けるようになった。なお、「フランス」はフランク王国の「フランク」に由来する (329 頁参照)。

9 世紀前半、王国の最盛期を築いたカール大帝 (Karl der Große) は、フランスではシャルルマーニュ (Charlemagne) と呼ばれている。彼の孫の時代 (843 年)、王国は三つに分割され、フランス地方には西フランク王国が成立した (首都はパリ)。なお、王権は脆弱で、10 世紀初旬、北西部の沿岸地帯はノルマン人 (デーン人) に占領された (223 頁参照)。彼らがこの地域にノルマンディー公国 (右の地図参照<sup>1339</sup>) を建設すると、国王の権威はさらに弱まり、ブルゴーニュ、プロヴァンス、フランドルといった地域も分立するようになる。



<sup>1339</sup> 出展 : <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Cartenormandie2.PNG>

### 3) カペー朝とヴァロワ朝

こうした中、987年に国王シャルル5世が嗣子なく没すると、パリ伯のユグ・カペーが新しい国王に選出され、カペー朝（～1328年）が開かれた（333頁参照）。これを機に西フランク王国はフランス王国と呼ばれるようになるが、カペー家の領地はパリ周辺とオルレアン近辺に限られ、王権は依然として脆弱であった。

11世紀中頃、フランス国王の家臣であるノルマンディー公はイギリス海峡を渡ってイングランドを攻略し、イングランドの国王となる（223頁参照）。12世紀中頃、この王朝（ノルマン朝）が途絶えると、亡き王の孫で、フランス貴族のアンジュー伯が新しい王として即位し、フランス西部からイングランドにまたがる広大な地域を支配した（501頁参照）。「アンジュー帝国」とも呼ばれたこの国はフランス国王の領地よりも広大で、イングランド王を兼ねるアンジュー伯は、フランス国王の家臣であるにも拘わらず、国王よりも権勢をふるった（224頁の地図参照）。

しかし、12世紀後半より王権が強まっていく。1180年に即位したフィリップ2世はアンジュー伯のリチャード1世と旧知の関係にあり、彼と共に第3次十字軍に参加しているが（417頁参照）、遠征から一足早く帰国し、リチャード1世の所領を奪った。1199年、反撃に出たリチャード1世が戦場で倒れ、その弟のジョンが跡を継ぐと、フィリップ2世は攻勢を強め、ノルマンディーやアンジューの奪回に成功した。また、一時はロンドンを占拠するまでになり、「カペーの奇跡」と呼ばれる現象を生んだ。

その後、力を付けた国王は教皇と対立するようになる。カペー朝末期からヴァロワ朝（1328～1589年）初期にかけて、王は教会の首長を統制し、教会の大分裂を引き起こした（教皇のバビロン捕囚について、336頁参照）。

ヴァロワ朝の創設（337頁参照）はイングランド国王との対立を深め、百年戦争（1337～1453年）の遠因になる。実際には100年以上続いた戦闘の舞台となったフランスは荒れ果て、国王の権威も弱まるが、この戦争で勝利を収めると、王権は強化された。

### 4) ブルボン朝（絶対王政期）

16世紀の宗教改革期、フランスではユグノー戦争が勃発した（352頁参照）。新教徒のアンリ4世がこれを制し、ブルボン朝（1589～1792年、1814～1830年）を開いたが、首都では旧教徒が多く、市民の抵抗にあった。新国王が旧教に改宗し、パリに入城することができたのは1594年である。その後、王権がますます強まると、代々の神聖ローマ皇帝を輩出したオーストリア＝ハプスブルク家との覇権争いが深まり、フランスは旧教国であるものの、新教徒の側について30年戦争（355頁参照）に参入した。

国王は何者にも屈さないとする絶対王政はルイ14世の治世下（1643～1715年）で頂点に達する。「太陽王」と呼ばれた14世は、諸国の内政に干渉するとともに、晩年にはスペインの王位をハプスブルク家から奪い（1701～1714年のスペイン継承戦争、487頁参照）、フランスの威光を放った。また、ヴェルサイユ宮殿を建築し、栄華を極めた。



Jacques Laumosnier 作・ルイ14世とスペイン王女の結婚（17世紀制作）

フランスとスペインは30年戦争の講和条約に署名せず、戦闘を継続したが、後に和解し、その印として、1660年、ルイ14世（ブルボン家）とスペイン王女のマリー・テレーズ・ドートリッシュ（スペイン＝ハプスブルク家）が結婚した。1700年、二人の孫がスペイン国王フェリペ5世として即位すると、諸国がフランスの覇権拡大を警戒して介入し、スペイン継承戦争が勃発する（487頁参照）。

## 5) フランス革命 (第 1 共和政) とナポレオンによる第 1 帝政

18 世紀、人間の自由・平等を原理とする啓蒙思想が広まると (358 頁参照)、旧体制に対する国民の不満が膨らんでいった。1789 年 7 月、絶対王政の象徴であるバスティーユ牢獄で民衆が暴動を起こしたのを機に**フランス革命**が勃発するが、革命はナポレオンが政府統領に就任するまで 10 年間も続いた (359 頁参照)。

### 【参考】自由の象徴「フリジア帽」

紀元前 8 世紀、小アジア北部にはフリジア (フィリジア Phrygia) と呼ばれる王国が存在した。国王のミダスは触った物を黄金に変える「ミダス・タッチ」(Midas Touch) で知られている。彼は音楽祭でアポロンに不利な判定をしたため、聴力を疑われ、この神によって耳を「ロバの耳」に付け替えられてしまった。それを隠すため、ミダスは円錐型をした大きな帽子を被っていたが、ある日、理髪師に「王様の耳はロバの耳」であることを暴露される。これを機に、三角形の細長い帽子は権力に屈さない自由のシンボルになる。また、小アジアの象徴でもあるため、イエスの誕生を知り東方より参上した賢人 (231 頁参照) や、サンタクロースのモデルになった聖ニコラス<sup>1340</sup>も三角形の帽子を着用した恰好で描かれている。



後世、この帽子は発祥地にちなみ「フリジア帽」と呼ばれるようになり、古代ローマの時代には解放奴隷が着用した。18 世紀末頃には、フランス革命を主導したジャコバン派が赤色のこの帽子を被っていたことから「ジャコバン帽」と呼ばれ、自由の象徴として広まった<sup>1341</sup>。ドラクロワの代表作である『民衆を導く自由の女神』(463 頁参照)でも、フランスの化身である女神は赤色の「フリジア帽」を着用している。第 3 共和政期には、この帽子を被った女神の胸像が多数、制作されたが、後に、ピエロの帽子にもなる。

フランスでは、現在でも、この帽子は自由の象徴とされており、2024 年パリ五輪のマスコットにも採用された。また、1999 年以降、フランス政府は、フリジア帽を被った**女神マリアンヌ** (Marianne) を非公式ながら政府機関のロゴとして使用している (右の画像参照)。なお、「マリアンヌ」はフランス革命期に多くみられた女性の名前であり<sup>1342</sup>、聖母マリアの名に由来する。国王ルイ 16 世と共に処刑された王妃の名前「マリー＝アントワネット」(Marie-Antoinette) も「マリア」のヴァリエーションの一つである<sup>1343</sup>。



雄鶏もフランスのシンボルとして使用されることが多い。これは夜明けを告げる雄鶏は、この国で発展した啓蒙思想の象徴とみなされていることによる。

1791 年 9 月、農民や市民も参加が認められた憲法制定会によって「1791 年憲法」が制定され、国民主権や国民代表制、制限選挙制等の諸原則が定められた。しかし、国政は安定せず、階級対立が深まる。

1792 年 9 月、王政は廃止され、**第一共和政**に移行した (8 月 10 日の革命について、360 頁参照)。政情が過激化する中、ルイ 16 世は翌年の 1 月、妃のマリー・アントワネットは 10 月、処刑された。

その後、国政は過激さを増し、1793 年 6 月ないし 7 月、革命指導者の**ロベスピエール** (ジャコバン派ないし山岳派)

<sup>1340</sup> **聖ニコラス**は帝政ローマ後期の 4 世紀前半、小アジアのリュキア属州で大主教を務めていた人物である。この属州のミラで活動していたことから「ミラのニコラオス」と、また、彼の遺物がイタリア南部のバーリに移されたことから「バーリのニコラウス」とも呼ばれている。

<sup>1341</sup> Ministère de l'Europe et des Affaires étrangères, Marianne, in <https://www.diplomatie.gouv.fr/de/gastland-frankreich/article/marianne>

<sup>1342</sup> Ibidem.

<sup>1343</sup> 彼女の母親の**マリア＝テレジア**は 11 人の娘の全員に自分の名前でも使われている「マリア」を付けている。末娘の「マリー＝アントワネット」はフランス語調にしたもので、ドイツ語の本名は「マリア＝アントニア」であった。

を台頭させるが、独裁・恐怖政治を敷いた彼も、1年後には処刑された。

1795年8月、新しい憲法が制定され、新政府（**総裁政府**）が発足するが、政局は安定しなかった。また、イギリス、オーストリア等の諸国は革命の波及を恐れて軍事同盟（**対仏大同盟**、581頁参照）を結成し、戦争をしかけたため、フランスの情勢はますます不安定になる。

このような状況下、軍人の**ナポレオン・ボナパルト**が頭角を現していった。1799年11月、彼は総裁政府を倒し、**統領政府**を立ち上げると、その第1統領に就任する。「ブリュメール18日のクーデター」と呼ばれる、この政変を機に、10年続いたフランス革命はようやく幕を下ろした。

その後、ナポレオンはオーストリアやイギリスと和解し、国民が待ち望んでいた平和をフランスにもたらしたが、すぐに**対仏大同盟**との戦争を再開する。失脚する1814年まで続いた一連の戦いを**ナポレオン戦争**と呼ぶ<sup>1344</sup>。その初期の段階ではフランス革命に干渉する列強から祖国を守る防衛戦争としての意義があったが、次第に侵略戦争の性質が濃くなっていく。なお、ナポレオンの進軍には自由・平等というフランス革命の理念を諸国に吹き込む側面もあった。そのため、彼は他国の市民の目にも英雄として映る。しかし、実際には武力による支配者であったため、諸国民を失望させることになり<sup>1345</sup>、被支配地ではナショナリズム（民族意識、独立・解放運動）が高まっていった。このような状況下で勃発したナポレオン戦争末期（1813～1814）の戦いを**ナポレオン解放戦争**（ナポレオン体制からの解放を目的とした戦争）と呼ぶ。

ナポレオン戦争初期の1804年5月、ナポレオンは国民の圧倒的な支持を得て皇帝になる。また、産業を奨励して革命で荒廃した経済を立て直すとともに、「**ナポレオン法典**」<sup>1346</sup>の名で知られる諸法の制定、学制・行政改革、中央銀行の創設等、後世まで残る多くの偉業を達成した。

1807～1810年頃、ナポレオンは絶頂期を迎え、1810年4月にはオーストリアの皇女と結婚するが（453頁参照）、旧敵との接近はロシアの不審を買うことになる。1812年5月、ナポレオンは**大陸封鎖令**<sup>1347</sup>に違反するロシアを取り締まるため、大遠征を開始したが、攻略に失敗し、多くの犠牲者を出した。これを境に皇帝の運気は下がり、翌13年10

<sup>1344</sup> これに対し、1792年4月から統領政府樹立（1799年11月）まで続いた戦いを**フランス革命戦争**と呼ぶ。この戦争はフランスが反革命派のオーストリアに宣戦することで始まったが、1793年1月、フランス革命政府がルイ16世を処刑するだけでなく、ベルギーを占領すると、ヨーロッパ諸国の態度が硬化し、イギリス、オランダ、スペイン、イタリア諸国（当時、イタリアはまだ国家統一を実現していなかった）、ロシアはオーストリアやプロイセンと共に**対仏大同盟**を結成して戦った。しかし、1795～1797年の戦いでオーストリアとプロイセンが敗れると、同盟も崩壊した（581頁参照）。

<sup>1345</sup> 1804年、クラシック音楽の巨匠**ベートーヴェン**（1770～1827年）は交響曲第3番『ボナパルト』（Bonaparte）を完成させ、ナポレオンに献呈しようとした。しかし、同年、ナポレオンが皇帝、つまり、独裁者として即位すると、「彼も俗物だ」と激怒し、交響曲のタイトルを『英雄』（Eroica）に変えたと言われている。See Johannes Saltzwedel, Das rätselhafte Loch im Notenblatt, SPIEGEL Geschichte 1/2021.

なお、ナポレオンは、1805年10月、オーストリア軍を破り、（ベートーヴェンが住む）ウィーンに入城した。このようにして神聖ローマ国内での覇権を握ったナポレオンは、翌年、帝国を崩壊に追いやる。また、1809年4月に起きた戦争でバイエルン・オーストリア軍を破り、再びウィーンを占領した。

<sup>1346</sup> ナポレオンは、1804年3月、民法典（Code civil）を編纂し、それを「ナポレオン法典」と呼んだが、彼の統治下で制定されたその他の法律、すなわち、商法（1807年）、民事訴訟法（1806年）、刑法（1810年）、治罪法（1808年）を合わせて「ナポレオン法典」と呼ぶことがある。なお、これらの法律は議会によって制定されているわけではなく、制定者であるナポレオンは、古代ローマのユスティニアヌス帝（141頁参照）に次いで、最も精力的に活動した。前掲の諸法だけでなく、彼の下で確立した行政組織（行政法）も諸国に大きな影響を与えた。See Jürgen Osterhammel, 1800 bis 1850, Informationen zur politischen Bildung Nr. 315, bpb 2012, pp. 30-55, 15.

<sup>1347</sup> 強力な海軍を持たないナポレオンはイギリスを攻略できなかったが、この島国を孤立させるため、また、産業革命が進展し、生産性が向上していた同国の輸出力を弱めるため、1806年11月、ナポレオンはイギリス船の大陸乗り入れを禁止する勅令を出した。これを**大陸封鎖令**と呼ぶが、彼はプロイセンの首都を占拠し、そこで発令しているため、**ベルリン勅令**とも呼ばれる。翌年、彼はフリードリヒの戦いでロシア軍を倒すと、ティルジット条約を締結し、ロシアにも大陸封鎖令を守らせた。こうして、ナポレオンの大陸支配が確立する。

しかし、イギリスが逆封鎖で対抗すると、大陸諸国の経済事情は悪化した。そのため、フランス皇帝への反発が強まり、没落の原因を作った。

月、ライプツィヒの戦い（現ドイツ・東部）で対仏大同盟に敗れた。1814年4月、パリが陥落すると、ナポレオンは部下によって皇帝の座から引きずり下ろされ、地中海上のエルバ島に流されることになる。

翌年（1815年）3月、ナポレオンは島を脱出してパリに戻り、皇帝に復帰するが、3ヶ月後、**ワーテルローの戦い**（475頁参照）でイギリス、プロイセン等の連合軍に敗北を喫した。その後、大西洋上にあるセントヘレナ島に流されると、1821年5月、この島で51年の生涯を閉じた。

## 6) 七月革命、七月王政と二月革命

1814年4月、国民的英雄の時代が幕を下ろすとブルボン朝が復活する。ナポレオンは嫡男のナポレオン・フランソワを跡継ぎに推したが、対仏大同盟によって却下され、約20年前に処刑されたルイ16世の弟が**ルイ18世**（在位1814～1824年）として即位した。翌年3月、ナポレオンが復活すると、国王はベルギーに逃れるが、ナポレオンの天下は100日しか続かず、6月、パリに戻った。

ルイ18世と後継の**シャルル10世**（在位1824～1830年）は絶対王政の復活を目指したため、1830年7月、再び革命（**七月革命**）が起き、シャルル10世はイギリスに亡命する。その後、新しい国王<sup>1348</sup>が選ばれ、王政（**七月王政、オルレアン朝**）は維持されたが、1848年2月、再び革命（**二月革命**）が起きた。その結果、王政は廃止され、第2共和政に移行した。なお、これを最後にフランスでは現在に至るまで王政は復活していない。



ウジェーヌ・ドラクロワ『民衆を導く自由の女神』（1830年）  
この絵では1789年に勃発したフランス革命ではなく、1830年の七月革命が表現されている。

## 7) 第2共和政、ナポレオン3世による第2帝政、普仏戦争



ナポレオン3世  
在位期 1852～1871年  
Franz Xaver Winterhalter 作  
(1853年頃)

1848年11月、新しい憲法が成立し、大統領制が導入された。翌月、大統領選挙が行われると、**ルイ＝ナポレオン**が当選し、初代大統領になる。ナポレオン1世の甥にあたる彼は圧倒的な知名度と資金力を生かし、投票総数の4分の3を獲得した。

その後、議会では王党派が勢力を盛り返し、ルイ＝ナポレオンと対立するようになるが、大統領の権限は弱かった。また、連続再選は憲法で禁止されていたため、1851年12月、ルイ＝ナポレオンは軍隊を動員してクーデターを執行し、議会を解散させた。その20日後、彼は国民投票を実施し、この政変の信認を得る。翌年11月、再度、国民投票を実施して帝政復活の承認を国民から得ると、12月、ナポレオン3世<sup>1349</sup>として即位した。

伯父のナポレオン1世に同じく、3世も**クリミア戦争**（426頁参照）や**第2次イタリア統一戦争**（369頁参照）を含む一連の戦争に加担し、権勢を誇ったが、1867年、メキシコの統治に失敗し、評判を落とす。また、1870年、プロイセンに宣戦布告し、**普仏戦争**を引き起こすも、敵軍に拘束され、捕虜になる。翌年3月、国防政府が廃位を宣言すると、イギリスに亡命した（371頁参照）。なお、普仏戦争の「普」はプロイセンを指すが、その他のドイツ諸邦もプロイセンの側に付いて参戦したため、「**独仏戦争**」とも呼ばれる。敗戦を喫したフランスはドイツ諸邦の統一、つまり、**ドイツ帝国**（446頁参照）の創設を阻止することができなかった。

<sup>1348</sup> 新国王のルイ・フィリップ（在位1830～1848年）はブルボン家の支流のオルレアン家の出身であり、ブルボン家の王に比べると、民衆よりであった。フランス革命期、父親のルイ・フィリップ2世は革命に賛同し、ルイ16世の処刑を支持しているが、彼も特権階級の一員として処刑されるが、ルイ・フィリップは亡命し、難を逃れた。

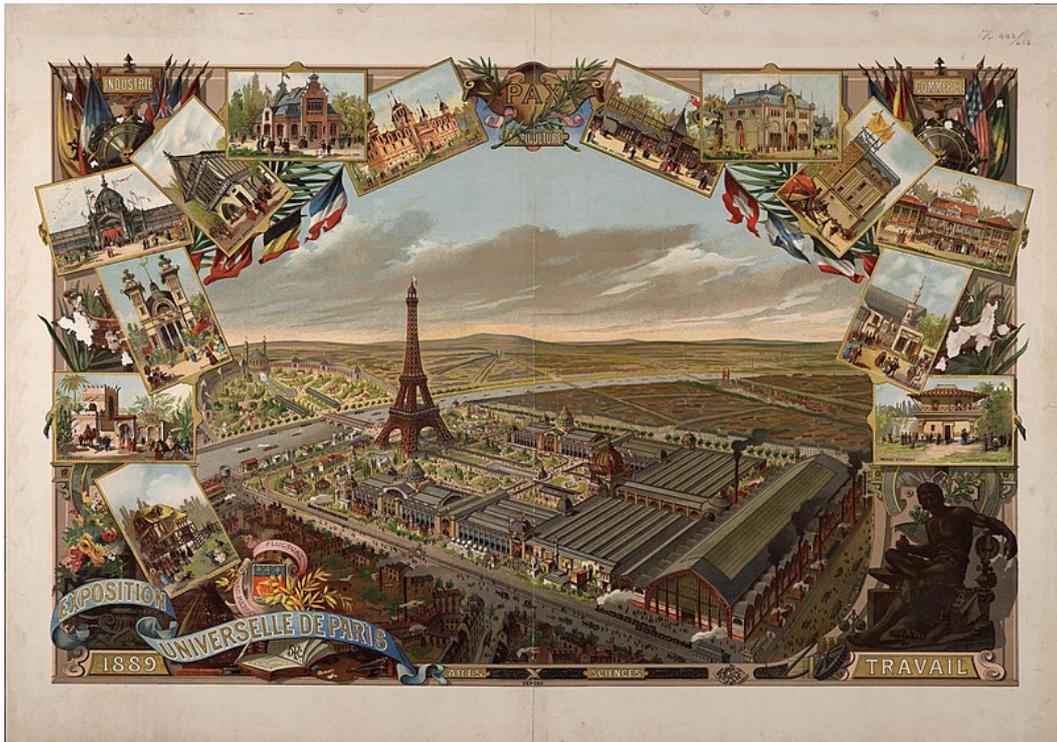
<sup>1349</sup> なお、ナポレオン1世の息子はナポレオン2世と呼ばれた（364頁の注1131参照）。

1871年3月、国防政府はドイツ帝国と休戦協定を締結した。これに反発した民衆は、パリ・コミュンと呼ばれる自治政府を樹立し、史上初のプロレタリア独裁を開始する。しかし、農民層の支持が得られなかったことや、内部対立によって弱体化し、同年5月、国民軍に制圧された。

### 8) 第3共和政

ナポレオン3世の廃位に伴い、国政は第3共和政に移行した。1871年7月、多党連立政権が発足するが、小党乱立やドイツに対する復讐・敵意の高揚を理由に政情は安定しなかった。こうした中、ブーランジェ事件<sup>1350</sup>やドレフュス事件<sup>1351</sup>が発生し、共和政は存続を脅かされるが、軍部や右派の動きを封じ、危機を脱した。

なお、ブーランジェ事件(1889年1月)の数ヶ月後、フランス革命100周年を記念してパリ万博が開催された。エッフェル塔はそれに合わせて建設され、入場アーチ門となる。



1889年のパリ万博

南欧に分類されるフランスではローマ・カトリック教会が広まり、プロテスタントは弾圧を受けていたが、後者の信仰を保障するため、1905年12月、政教分離法(ライシテ法、156頁参照)が制定された。これによってナポレオン1世がローマ・カトリック教会と締結した宗教協約は破棄されることになる。

<sup>1350</sup> クリミア戦争やその他の戦争で功績を挙げたブーランジェ将軍(司令官)は、1866年1月、国防大臣に任命されると、政治に不満を持つ国民や、ドイツへの報復を望む右派の支持を得るようになる。1889年1月の地方選で大勝利を収めると、支持者は(ナポレオン1世や3世が行ったように)クーデターによる政権転覆を計画したが、ブーランジェが躊躇したため、政変は起きなかった。彼に対し逮捕令状が出されると、4月、ベルギーに亡命した。なお、フランス語でブーランジェ(Boulangier)とは「パン屋」の意であり、民衆から「ブーランジェが我々を食わせてくれる」と言われ、人気を博した。

<sup>1351</sup> 1894年、ユダヤ系の陸軍大尉ドレフュスはドイツへ情報を流した罪で終身刑を言い渡された。真犯人は他におり、軍部もそれを認識していたが、反ユダヤ感情や軍部の威信を守るため黙秘した。この不正が新聞で報道されると、共和政擁護派と反対派の政治抗争に発展し、第3共和政を揺るがす事件に発展する。1899年、再審が開かれるが、それでもドレフュスは有罪となったため、大統領特赦が出され、出獄を許された。また、1906年、議会立法によりドレフュスは復権した。

帝国主義時代にあたる 19 世紀末頃、フランスは東南アジアに進出した。また、アフリカでは 1830 年代に占領したアルジェリアから南下し、サハラ砂漠一帯を植民地とする。フランスは、そこから東に進み、イギリスに次ぐ植民地帝国になる（**アフリカ横断政策**、373 頁参照）。

20 世紀初頭、フランスはドイツに対抗するため、イギリスやロシアと**三国協商**を編成した（588 頁参照）。1914 年 7 月、第 1 次世界大戦が勃発すると、英露と共に参戦し、宿敵を撃退する。こうしてフランスは普仏戦争の恨みをはらすとともに、この戦争で奪われたアルザス・ロレーヌ地方（594 頁参照）の奪還に成功した。また、戦後のヴェルサイユ体制下では植民地の独立を押しつけた。

1930 年代の世界恐慌期、フランスでもファシズム（387 頁参照）が台頭した。1935 年 7 月、共産党や急進社会党からなる**人民戦線政府**が発足し、極右の人民党に抵抗したが、大きな成果を上げることはできなかった。

1939 年 9 月、第 2 次世界大戦が勃発すると、フランスは再びドイツ（ナチス・ドイツ）と戦火を交えることになったが、翌年 6 月、独軍にパリを占領され、降伏した。これによって第 3 共和政は崩壊し、傀儡政権（**ビシー政権**、1940 年 7 月～1944 年 8 月）が建てられた。軍人のド・ゴールはロンドンに亡命して**自由フランス政府**を立ち上げ、パリの親独政権に対抗した。

## 9) 第 4 共和政

第 2 次世界大戦期、フランスは 4 年に亘ってドイツに占領されることになり、連合軍によって解放されたのは 1944 年 8 月である（ノルマンディー上陸作戦について、225 頁を参照されたい）。亡命先のロンドンから帰国したド・ゴールは臨時政府の首相に選出されるが、第 1 党の共産党と対立し、1946 年 1 月、辞任した。その後、フランスは新しい憲法の下で**第 4 共和政**に移行し、左派政権が発足する（396 頁の注 1208 参照）。

東西対立期には米国のマーシャル・プランを受け入れるとともに、NATO の原加盟国となり、経済復興と安全保障を強化した（609 頁参照）。

## 10) 第 5 共和政

終戦の翌年、インドシナ戦争が勃発し、フランスは引き続き戦時下に置かれた（401 頁の注 1217 参照）。また、1958 年、植民地のアルジェリアで民族解放戦争が激化すると、軍部がクーデターを起こし、第 4 共和政を崩壊させた。復権したド・ゴールは、1959 年 1 月、第 5 共和政を開始するとともに、自ら制定した憲法に基づき大統領に就任する。

1962 年、ド・ゴールはエヴィアン協定を結んでアルジェリアの独立を認める一方、米国に頼らない核武装を進め、国際情勢の多極化を促した（401 頁参照）。また、NATO 軍から脱退する（406 頁参照）。他方、西ドイツと和解し、欧州統合を推進するが、イギリスはヨーロッパ諸国との関係よりも英連邦諸国との関係を重視しているとし、同国の EU（当時は EC）加盟を阻止した（611 頁参照）。

なお、当時、大統領は国会議員、県会議員、市町村議員の選挙によって選ばれていたが、1962 年、国民が直接、選出する制度に変わった。

1968 年 5 月、経済格差や教育政策に不満を持つ学生らが暴動を起こし、ド・ゴールは危機に立たされた（5 月危機）。翌年 4 月、彼は自ら作成した憲法改正案を国民投票にかけ、国民の信認を得ようとしたが、僅差で否決される。これを受け、77 歳になっていたド・ゴールは引退した。

次期大統領となった**ポンピドゥー**は前任者の自主路線を継承する一方で、イギリスの EC（現 EU）加盟を支持し、実現させた。

1973 年に起きたオイルショックはフランスにも大きな影響を及ぼした。これに対処するため、第 3 代大統領の**ジスカルール・デスタン**は**先進国首脳会議・G5**<sup>1352</sup>の開催を提唱する。1975 年に第 1 回会議が開催されると、毎年開催されるようになった。

第 4 代大統領**ミッテラン**の 14 年にも及ぶ在任期間中（1981 年 5 月～1995 年 5 月）、冷戦が終結した。彼はドイツの

<sup>1352</sup> ジスカルール・デスタンは、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ、日本の 5 ケ国からなる会議を提唱した。イタリアは含まれていなかったが、1975 年に開催された第 1 回会議に乗り込んだ。翌年以降はカナダも参加し、7 ケ国体制（G7）となる。

コール首相と共に欧州統合を牽引し、1993年11月、EUを発足させる(612頁参照)。

1981年と1988年の大統領選挙でミッテランに敗れるものの、3度目の出馬で大統領選を制したシラクは、2003年、ドイツやロシアと共にイラク戦争に反対し、英米との関係を悪化させた(409頁参照)。2005年5月の国民投票では欧州憲法条約の批准が否決され、EU統合が停滞する要因を作る(615頁参照)。

第6代大統領となったサルコジは、2009年4月、フランスをNATO軍に復帰させたが、新保守主義は国民の支持を失い、社会党党首オランドに敗れる。しかし、第7代大統領となったオランドも不況や失業問題に対処することができなかつたため、支持層である労働者から批判された。

こうして左派政党が支持基盤を失っていく中、増え続ける外国人・移民や欧州統合に批判的な極右政党が勢力を拡大した。しかし、2017年の大統領選では、EU統合を支持するマクロンが極右政党党首のル・ペンを下し、第8代大統領に就く。2022年の選挙戦も両者の一騎打ちになるが、現職のマクロンが再選を果たし、現在に至る(179頁参照)。

### 【補説】黄色のベスト運動

フランス国歌(359頁の注1120参照)ではなく、ヨーロッパの歌(604頁参照)に乗せて演説台に向かった彼の姿は欧州統合推進派の勝利を象徴するものであった。当時、ヨーロッパでは反EU派のポピュリストが台頭し、欧州連合は逆風に晒されていたが、マクロンが極右政治家のル・ペンに勝つことで流れが変わる(180頁参照)。史上最年少(39歳)で大統領に就任したマクロンはEUを崩壊の危機から救った。その一方、国内では大混乱を生み<sup>1353</sup>、大規模な反政府デモが半年間も続いた。

2018年11月に始まった抗議活動は、参加者が黄色のベスト<sup>1354</sup>を着用したことから、「黄色のベスト運動」(Mouvement)と呼ばれている。発端になったのは政府によるガソリンやディーゼルにかかる環境税の引き上げであるが、地球温暖化の原因とされている二酸化炭素の排出量を減らすため、フランスは燃油にかかる税金(環境税)を段階的に引き上げてきた。マクロンが環境保護という選挙公約を実現するため、前政権が策定した増税計画を強化すると、燃料費が大幅に上昇していたこともあり、郊外に住み、車で通勤する中産階層の反発を食らった。



2019年3月のデモ(フランス東部のヴズール)<sup>1355</sup>

2018年5月、減税だけではなく、公務員の給与・年金の削減や国民投票制度の導入を求める署名運動がインターネット上で始まった。この活動は組織化されておらず、野党の支援を受けていなかったが、ソーシャルメディアを通じて拡散し、11月以降、毎週土曜日に国内各地でデモが行われるようになる。

反政府運動には1日あたり最大で30万人が参加し、高速道路や一般道を封鎖した。その一部は暴徒化し、器物損壊、放火、建物の破壊だけではなく、警察官に危害を加えたため、大きな社会問題となる。死者が出る事態にまで悪化したことを受け、12月、マクロンは増税の延期を発表するに至った。これにより参加者は当初の目標を達成することができたが、デモは政治運動に発展し、一部の者は三つの政党を立ち上げ、2019年5月の欧州議会選挙(622頁参照)に出馬した。しかし、得票率は全て合わせても0.5%に過ぎず、議席を獲得できずに終わった。その後、運動は急速に弱まり、翌月には実質的に収束したが、小規模ながらデモは続けられた。年末に年金改革が発表され、より所得の低い国民が反発したことや、2020年3月、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、外出や集会が規制されたことも、「黄色のベスト運動」の重しになったが<sup>1356</sup>、マクロン政権に対する抗議活動は現在でも行われている<sup>1357</sup>。

<sup>1353</sup> Barbara Wesel, Macron, der Retter und Zerstörer, in <https://www.dw.com/de/a-43676138>

<sup>1354</sup> これは車道で歩行する際に着用が義務づけられている蛍光色のベストである。

<sup>1355</sup> 画像出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:ManifGiletsJaunesVesoul\\_17nov2018\\_\(cropped\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:ManifGiletsJaunesVesoul_17nov2018_(cropped).jpg)

<sup>1356</sup> Tanja Kuchenbecker, Was wurde aus ... den Gelbwesten?, in <https://www.spiegel.de/a-36c6946e-a3c4-49d8-abcc-31f2819ddcc8>

<sup>1357</sup> Julia Monn, Auch in Frankreich protestieren die Bauern – und versetzen die Regierung in Angst, in <https://www.nzz.ch/ld.1775465>

## 5. オランダ史

1639年、日本は鎖国に踏み切り、キリスト教国からの来航を禁止した。オランダは唯一の例外が認められていた国と言われているが、厳密には、当時、オランダはまだ国ではなかった。スペインから独立し、オランダと呼ばれる国が誕生したのは1648年である（同時に神聖ローマ帝国から脱退した）。その後、ナポレオン帝政期の1810年、フランスに併合され、消滅したが、1815年に復活し、現在に至る。

### ◎ 地域名（州名）としてのオランダ

オランダは「ネーデルラント王国」<sup>1358</sup>を正式名称とするが、Holland州が中心になって建設されたため、この州の名で呼ばれることもある。オランダ語の“Holland”は「ホラント」と発音するが、ポルトガル語では“Holanda”と記し、その音訳の「オランダ」が日本では定着した（本書冒頭のxiii頁参照）。なお、スペインからの独立に貢献し、初代国王と目されているウィレムはオランダ工家の出身であり、「オランダ」は「オレンジ」という意であることから、橙が国のシンボルカラーになった。

1840年、Holland（ホラント州）は南北に分割された。現在でも、Hollandはこれらの州を指すため、通常、オランダ人は自国をHolland、つまり、「オランダ」とは呼ばない。同様の理由から、2019年、オランダ政府は「オランダ」ではなく、「ネーデルラント」という国号の使用を諸外国に求めるようになった<sup>1359</sup>。ヨーロッパ諸国はそれに従っており、「オランダ」の元になったポルトガル語（Holanda）も、オランダの国号の意では使用されていない。このような切り替えが可能であったのは、欧米では「ネーデルラント」という呼称も古くから使われていることによる。これに対し、我が国では専ら「オランダ」が使用されており、「ネーデルラント」はどの国を指すか分からないため、「オランダ」という古称が維持されている。なお、「ネーデルラント」では地域名と混同することもある（54頁参照）。



オランダ（12の州と3つの特別自治体）<sup>1360</sup>

**オランダ**（Holland ホラント）とは北ホラント州と南ホラント州を指し、国全体の呼称ではない。

**ネーデルラント**（Nederland）とは「低地地方」という意のオランダ語で、15～18世紀、この地域を治めていたブルゴーニュ家やハプスブルク家によって用いられた（54頁参照）。両家の本領はフランス北東部やアルプス地方にあっただけに、新たに獲得した領土の平坦な特徴が際立った。オランダはそれにちなみ「**ネーデルラント王国**」を正式な国号とする。

<sup>1358</sup> 「ネーデルラント王国」（オランダ王国）は以下の四つの国（landen）で構成され、①は「ネーデルラント」ないし「ネーデルラント本国」と呼ばれる。つまり、「ネーデルラント王国」と「ネーデルラント」は厳密には異なる。また、後者には「低地地方」という意があり、ベネルクス3国の領域を指すことも少なくない（54頁参照）。

① 大陸上の12州とカリブ海上の三つの特別自治体（ポネール島、シント・ユースタティウス島、サバ島）

② カリブ海における特別自治領のアルバ島

③ カリブ海における特別自治領のキュラソー島

④ カリブ海における特別自治領のシント・マールテン（シント・マールテン島の南部で、北部はフランス領）

<sup>1359</sup> Niederlande, Der Unterschied zwischen Holland und den Niederlanden, in <https://www.holland.com/de/niederlande-oder-holland>

<sup>1360</sup> 画像出典 [https://de.wikipedia.org/wiki/Datei:Netherlands\\_\(%2BBES\),\\_administrative\\_divisions\\_-\\_de\\_-\\_colored.svg](https://de.wikipedia.org/wiki/Datei:Netherlands_(%2BBES),_administrative_divisions_-_de_-_colored.svg)（なお、著者により日本語の付記してある）

## 1) 古代ローマとフランク王国の時代

1世紀後半、オランダ南部には古代ローマの属州「下ゲルマニア」が建設され、先進のローマ文化がもたらされた。ユトレヒト近郊では1〜4世紀の遺跡が見つかる（74、433頁参照）。この地域はライン川の左岸にあたるが、ローマはこの川を国境とみなしており、右岸にはゲルマン人（バターウィー人、フリース人）が住んでいた。南北の一体性、つまり、オランダの原型が作られるのは、5世紀初頭、ゲルマン人の一派であるフランク人が移り住み、**フランク王国**を建設してからである。8世紀末、国王の**カール大帝**（572頁参照）は、ネーデルラントの全域を平定し、北部にまでキリスト教を広めた。なお、その頃より北部はデン人の侵入を受けるようになる（223頁参照）。

843年、フランク王国が三つに分割されると、オランダ地方は中フランク王国の領土となるが、880年、**東フランク王国**領に変わった（332頁参照）。なお、911年、この王国はドイツ王国に変容する（434頁参照）。

## 2) 神聖ローマ帝国、ブルゴーニュ公国、ハプスブルク家領の時代

962年、ドイツ王国は**神聖ローマ帝国**に変わり、オランダ地方は帝国領に組み込まれた（532頁参照）。

1388年以降、フランス王家の支流である**ブルゴーニュ公**がネーデルラントへ勢力を拡大していき、15世紀後半には、その全域を支配するようになる（535頁参照）。

1477年、ブルゴーニュ公はフランス国王との戦争中に敗死した。一人娘のマリーが家督を引き継ぐと、フランス国王は領土獲得を狙い、王太子との縁談を持ち出すが、彼女はそれを断り、亡き父が婚約者に指定していたオーストリア=ハプスブルク家の**マクシミリアン1世**と結婚する。両者の間にフィリップが生まれると、ネーデルラントはフィリップに引き継がれ、ハプスブルク家の所領になる（576頁参照）。

|           |   |       |   |                |   |        |
|-----------|---|-------|---|----------------|---|--------|
| マクシミリアン1世 | → | フィリップ | → | カルロス1世 (カール5世) | → | フェリペ2世 |
|           |   |       |   | カスティリヤ王        |   | スペイン王  |
|           |   |       |   | アラゴン王          |   |        |
|           |   |       |   | 神聖ローマ皇帝        |   | ホルトガル王 |
|           |   |       |   | オーストリア大公       |   |        |

なお、フィリップはカスティリヤ王女のアナと結婚した。二人の子の**カルロス**は父親よりネーデルラントを、また、母親よりカスティリヤ王国を相続する。カルロスは母方よりアラゴン王国も相続したが、カスティリヤ王国とアラゴン王国が合併してスペイン王国となったため（484頁参照）、カルロスはスペインの国王になる。

## 3) スペインによる統治

カルロスは父方のハプスブルク家の血をひく者として神聖ローマ皇帝にもなった。皇帝としては**カール5世**（576頁参照）と、スペイン王としてはカルロス1世と、ブルゴーニュ公としてはシャルル2世と名乗り、広大な領土を治めた。

1566年、カルロス1世の統治期間は50年に達した。これを機に1世は引退し、王位を長男の**フェリペ2世**に譲った。他方、オーストリア大公の地位<sup>1361</sup>は弟のフェルディナント1世に与えた。その結果、ハプスブルク家はオーストリア=ハプスブルク家とスペイン=ハプスブルク家に分離し、ネーデルラントは後者の領土、つまり、スペイン領になる。厳密には、スペイン国王のフェリペ2世はブルゴーニュ公を兼ね、後者としてネーデルラントを治めた（55頁の地図参照）。

## 4) ネーデルラント連邦共和国の建設 ～ スペインからの独立・神聖ローマ帝国からの脱退 ～

ローマより遠く離れたネーデルラント北部、つまり、現オランダでは**カルヴァン派**の新教（457頁参照）が広まったが、新国王となったフェリペ2世は旧教徒で、旧教を強要したことから、新教徒は、1568年、**オラニエ公ウィレム**（354頁の注1110参照）を擁立し、蜂起した。スペイン軍の反撃に遭ったウィレムは国外に逃れるが、1572年、新教徒がホラント州を含む北部の州を制圧すると、ウィレムはホラント州の総督に迎え入れられ、戦闘を指揮した。

1576年、カトリック教徒の多い南部10州（現在のベルギーとルクセンブルク）がスペインと和解し、戦争から離脱

<sup>1361</sup> なお、12世紀末以降、神聖ローマ皇帝の地位は世襲制ではなく、皇帝は選挙で選ばれている（528頁参照）。

すると、プロテスタントが主流の北部7州<sup>1362</sup>は、1579年、ウィレムの下で**ユトレヒト同盟**を結成し、戦いを続けた。また、1581年にはスペイン国王フェリペ2世の統治を否定し、ウィレムを初代オランダ総督に就けたが、スペインは承認しなかったため、戦闘は続いた。

1609年、新教徒がスペイン軍を撃退すると、休戦協定が結ばれ、独立は実質的に達成されたが、12年の休戦期間が終わると、戦闘が再開した。オランダは30年戦争(355頁参照)にも介入したため、戦いは長期化し、戦闘が収まったのは1648年に30年戦争の講和条約(**ウェストファリア条約**)が締結されたときである。同条約によってネーデルラントの独立が承認されるとともに、ネーデルラントは神聖ローマ帝国から脱退した(579頁参照)。

この戦争でオランダはスペインからの独立を勝ち取ったため、**オランダ独立戦争**と呼ばれているが、カルヴァン派の新教徒(ヘーゼン)は信仰の自由を求めて蜂起したため、オランダでは独立戦争とは捉えられていない<sup>1363</sup>。終戦まで80年を要したため、**80年戦争**とも言われる<sup>1364</sup>。

戦時中でもあるにも拘わらず、海運業や毛織物業、学問・文化が発展し、オランダはヨーロッパ随一の先進国に発展した。海外にも進出したオランダは、1602年、**オランダ東インド会社**を設立し、東南アジアでの香辛料貿易を発展させた。1652年にはアフリカ最南部にケープタウンを建設し、東インド会社の補給基地としている。オランダがアジア貿易を独占し、長崎に商館が設けられたのも、この頃である。

同時期、北米にはオランダの植民地が建設され、その中心地は、オランダの首都にちなみ、ニューアムステルダムと名付けられた(後に、ニューヨークに改名され、現在に至る)。なお、ウィレム(1533~1584年)が初代オランダ総督に就任した1581年から1672年<sup>1365</sup>までの約90年は**オランダ黄金期**と呼ばれている。

しかし、1652年、イギリス=オランダ戦争(~1674年)が勃発すると国力を消耗し、繁栄に陰りが始まる。18世紀前半、英仏興隆の陰でオランダの商工業は衰退した。

## 5) フランス革命期：バタヴィア共和国やホラント王国の建設とフランスへの併合

1795年、フランス革命政府軍によってネーデルラント連邦共和国は倒され、フランスの衛星国として、**バタヴィア共和国**<sup>1366</sup>が建てられたが、1806年、ナポレオン1世は**ホラント王国**に改編し、弟のルイ(後のナポレオン3世の父親)

<sup>1362</sup> ①ホラント州(Holland)、②ゼーラント州、③ユトレヒト州、④ヘルダーラント州、⑤オーフェルアイセル州、⑥フローニンゲン州、⑦フリースラント州である(55頁の地図参照)。

ネーデルラント中央部に建てられていたブラバント公国は南北に切り離された。また、北西部に位置したフランドル伯領の大部分はスペイン領に留まった。現在、リンブルフ州がある地域はリエージュ司教領に属していたが、この教会領は北部7州にも、南部10州にも含まれていない。なお、現在のオランダは14の州で構成されている。

<sup>1363</sup> この店について、森田安一(編)『スイス・ベネルクス史』(山川出版1998年)265~266頁を参照されたい。

<sup>1364</sup> 戦争(または蜂起)の名称、目的・性質、期間(つまり、80年続いたかどうか)について長年に亘り様々な考察がなされており、この戦争はオランダ歴史学上の重要な研究テーマの一つにあたる。See Laura Cruz, The 80 Years' Question: The Dutch Revolt in Historical Perspective, History Compass. 5 (3), 2007, pp. 914-934.

<sup>1365</sup> 1672年、フランスのルイ14世がオランダに攻め入り、**オランダ侵略戦争**が勃発すると、オランダの黄金期は終わった。なお、フランスはオランダ独立戦争ではオランダを支援したが、その独立後は、新教徒が主流のこの国を敵視するようになる。オランダ侵入は、1652年以降、海洋覇権をめぐる、オランダと戦争を繰り返していたイングランド(チャールズ2世)によって後押しされた。これに対し、オーストリア(ハプスブルク家)とスペインは侵略戦争ではオランダの側についた。

1674年、イングランドは戦費支出を議会に拒ばれたため、戦争から離脱した。オランダ・フランス間の戦争も1678年に終結し、フランスはフランドル地方の諸都市やフランシュ=コンテを獲得する一方、オランダの独立を承認した。他方、英仏から国を守ったオランダ総督の**ウィレム3世**は名声を高め、1689年、妻のメアリーと共に、イングランド国王として迎え入れられた(504頁参照)。

<sup>1366</sup> フランスの傀儡国家「バタヴィア共和国」(Bataafse Republiek 1795~1806年)の国号は、古代ローマの時代、オランダ南西部の南ホラント州の一帯に居住していたゲルマン人のバターウィー族(Batavii)に由来する。なお、インドネシアがオランダの植民地であった時代、ジャカルタも「バタヴィア」と呼ばれていた。

を国王にした。しかし、1810年、弟の統治に不満を抱いたナポレオンは王国を廃止し、フランスに併合する。これによってオランダは消滅し、フランスの県 (デパルタマン *département*) が設置された (584 頁参照)。

オランダがフランス革命政府軍に倒されたことを受け、1799年、東インド会社は解散した。また、フランスに倒された隙を狙い、イギリスはオランダからケープタウンを奪ったが、1803年、(オランダを継承した) バタヴィア共和国に返還した。しかし、1806年、イギリスは再びケープタウンを占領し、植民地支配を始めた結果、オランダはアフリカ南端に設けていた貿易基地を失った。

## 6) ウィーン体制期：ネーデルラント王国 (オランダ立憲王国) の建設

1815年、ナポレオン失脚後に開かれたウィーン会議で、ヨーロッパの諸侯はケープ植民地をイギリス領として認める一方、オランダを王国 (ネーデルラント王国、全17州) として再建し、ウィレム1世<sup>1367</sup>を国王とすることを決めた。また、南ネーデルラント (ベルギー) と旧リエージュ司教領を王国に編入した。そのため、オランダは**連合王国**とも呼ばれるようになる。なお、ウィーン会議では、オランダ国王がルクセンブルクの君主を兼ねることも決まった (480 頁参照)。

フランスの支配から解放されたオランダは、1815年、**オランダ領東インド**として、東南アジアの植民地支配を再開する。インドネシアのジャワ島に拠点を置き、コーヒーやさとうきび等が栽培された。

## 7) ベルギーの独立

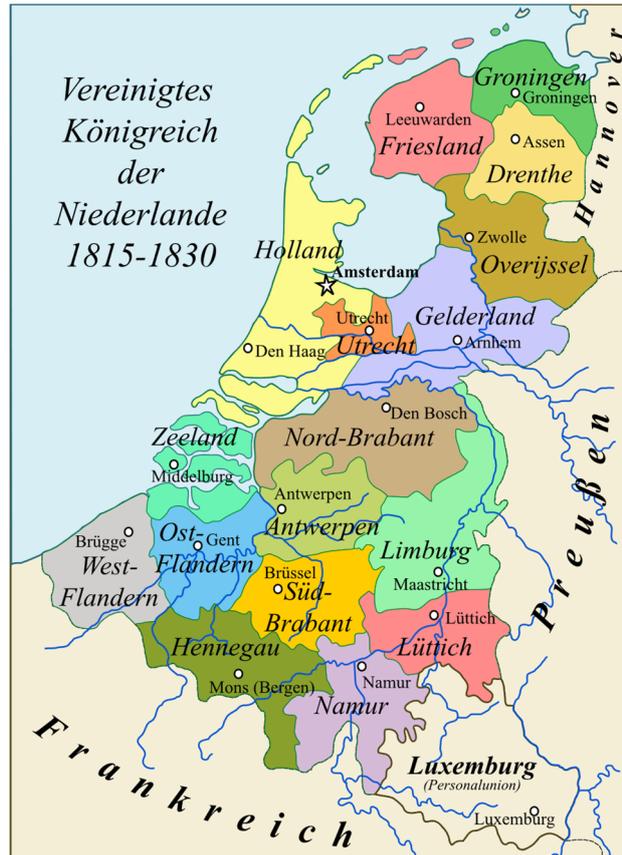
1830年、フランスで起きた七月革命をきっかけとし、ベルギーで独立運動が起き、翌年、オランダからの独立を達成する (476 頁参照)。なお、ルクセンブルクとの同君連合は1890年まで続いた (480 頁参照)。

## 8) 世界大戦期

第1次世界大戦で、オランダは中立を維持し、参戦しなかった。第2次世界大戦でも同様に中立を表明したが、1940年5月、ドイツに占領され、ウィルヘルミナ女王と政府はイギリスに亡命した。

ドイツの統治下で、オランダ人は強制労働を強いられた。また、約10万6000人のユダヤ人が強制収容所に送られた (290 頁参照)。なお、中にはドイツ・フランクフルトからオランダ・アムステルダムに逃れて来たアンネ・フランクの家族も含まれ、ホロコーストの犠牲になる。彼女の手記に基づく『アンネの日記』は、1947年、アウシュビッツ絶滅収容所から生還した彼女の父親によって出版された。

1941年12月、日本軍がマレー半島に上陸すると、東南アジアに植民地を建設していたオランダは我が国に対して宣戦布告したが、翌年3月、降伏した。



1815～1830年当時のネーデルラント (連合) 王国<sup>1368</sup>

南北のネーデルラント、旧リエージュ司教領を統合していたため、ネーデルラント連合王国とも呼ばれた。なお、当時、国王はルクセンブルクの元首を兼ねていた。

全17州の内、リンブルフ州 (Limburg) はドイツ連邦に加盟していた。

<sup>1367</sup> ウィレム1世 (在位期1815～1840年) は、独立戦争期にオランダ総督を務めた人物であり、初代国王と目されているウィレム1世 (354 頁の注1110 参照) とは異なる。

<sup>1368</sup> 出典 <https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/8/81/1815-VerenigdKoninkrijkNederlanden-de.svg>

## 9) 第2次世界大戦後

1944年6月、連合軍がノルマンディーに上陸し、フランスやベルギーをナチス・ドイツから解放したが(225頁参照)、オランダ全土が解放されたのは第2次世界大戦が終結した1945年5月である。なお、それを記念し、5月5日は法定祝日(解放記念日 Bevrijdingsdag)に指定されている(150頁参照)。戦後、オランダは中立政策を放棄し、西側の一員として米国の支援を受けた(609頁参照)。

1945年8月、日本の敗戦を機に、オランダ領東インド(現インドネシア)のスカルノが独立を宣言した。オランダはこれを認めず、軍隊を派遣すると、1947年7月、インドネシア独立戦争が勃発する。しかし、国連の批判を受け、2年後(1949年11月)、インドネシアの独立を承認した<sup>1369</sup>。

植民地を失ったオランダは、経営者と労働者が参加する社会経済協議会を立ち上げ、それを政府の諮問機関とする制度を導入した。この多極共存型社会の下で、1960年代に著しい経済発展を遂げる。オイルショックが発生する1973年まで続いた経済成長は「オランダ経済の脅威」と呼ばれた。

## 10) EU 統合

1952年、オランダは西欧の5ヶ国と共に欧州石炭・鉄鋼共同体を設立し、EU統合をスタートさせた。1992年にはEUを創設するための条約が同国のマーストリヒト(71頁参照)で制定されており、ドイツやベルギーとの国境沿いにあるこの都市は欧州統合の象徴の一つになっている。

このようにオランダはEU統合に初期の段階から参加しているが、21世紀になると、EUに批判的な意見が増えていった。2005年6月に実施された国民投票では、EUの新しい条約(欧州憲法条約)に反対する票が60%を超え、欧州統合を停滞させることになる(615頁参照)。2010年代後半には右派ポピュリストが台頭し、EU脱退を唱えるようになった(179頁参照)。オランダは欧州統合懐疑派の言動が目立つ国の一つであり、国民の支持率も高いが、彼らが訴える脱退が実現する状況には至っていない。

---

<sup>1369</sup> 近年、オランダ国王や政府は独立戦争期(1945~1949年)におけるインドネシア人への暴行や虐待について公式に謝罪している。See ORF, Niederlande entschuldigen sich bei Indonesien, <https://orf.at/stories/3247835/>

## 6. ベルギー史

ベルギーは「ネーデルラント」と呼ばれる地域の南部に位置する立憲君主国で、「ベルギー王国」を正式な国号とする。1831年1月、ロンドン会議で独立が承認されるまではオランダに属し、**南ネーデルラント**と呼ばれていた。なお、オランダがベルギーの独立を認めたのは1839年4月である。

※ ネーデルラントについて、54頁参照

独立に際し、ベルギーはルクセンブルクに攻め入り、領土の大半を奪った(186頁参照)。両国は共にネーデルラントの南部に、オランダは北部に位置しており、3国は地域的一体性を持つ。君主が同じであった時代も長く続き、第2次世界大戦後は「ベネルクス」を立ち上げ、政策統合を行っている(57頁参照)。

古くからキリスト教が広まっている点でも3国は共通する。ただし、オランダではプロテスタントが主流であるのに対し、ベルギーやルクセンブルクではカトリック教徒が多く、教派の違いはネーデルラントを分裂させることになった。

文化面でも、オランダとは異なり、ベルギーとルクセンブルクはフランスの影響を強く受けているといった違いがある。厳密には、この現象はベルギー国内で顕著に表れており、この国は「言語の壁」で分断されることになった。

※ ベルギーの言語問題について、181頁参照

国の分裂を防ぐため、ベルギーは南北双方に自治権を与えてきたが(地方分権化)、地域間の対立は解消されなかったため、1993年、憲法を改正し、連邦制に移行した。ドイツ、スイスといった連邦国家とは異なり、ベルギーでは「二重の連邦制」という特殊な制度が実施されている(182頁参照)。

なお、18世紀末頃まで、ベルギー領内には**ブラバント公国**、**リエージュ司教領**といった領邦国家が建てられていた。**フランドル伯領**は対岸のイギリスから羊毛を輸入し、毛織物業で栄えたが、何れも1795年、フランスによって廃止され、この国に組み込まれた。1814年にナポレオンが失脚すると、オランダ領に変わるが、1830年、独立を宣言した。翌年、イギリスに住んでいたドイツ貴族を国王として迎え、現在に至る。

### 1) 古代ローマ時代

ベルギーは1830年に建てられた比較的「若い」国であるが、その歴史は古代ローマ時代まで遡り語られることが多い。この国はライン川の左岸に位置しており、古代、この地域は**ガリア人**(ケルト人、220頁参照)の居住地であったが、紀元前1世紀半ば、ローマの支配下に入る。なお、その頃にはゲルマン人がライン川の右岸から移り住むようになっており、ゲルマン化が進んでいたと考えられている。この一帯、つまり、現ベルギー地方を制したカエサルによると、住民はガリア人とは異なる特徴を持っており、ゲルマン人であることを自負していた<sup>1370</sup>。

彼らは怒りで興奮する人を意味する**ベルガエ人**(Belgae)と呼ばれていたことから<sup>1371</sup>、前20年頃、初代ローマ皇帝のアウグストゥスによって建設された属州は「**ガリア・ベルギカ**」(Gallia Belgica、320頁参照)と名付けられた。「ベルギガ」がベルギーという国号の由来になる。

### 2) フランク王国時代

395年、ローマ帝国が東西に分割され、ベルギー地方は西ローマの領土となるが、476年、西ローマは滅亡し、その数年後、ベルギー地方には**フランク王国**が建てられた。このゲルマン国家はネーデルラント地方を中心に発展する。特に王国の最盛期を築いた**カール大帝**(572頁参照)は、742年頃、ベルギー東部のリエージュ近郊で生まれている。

カール大帝の孫の時代、ヴェルダン条約(843年)に基づき、フランク王国が3分割されると、ベルギー地方の大半は

<sup>1370</sup> Gaius Iulius Caesar, De bello Gallico 2, 28, 2.

<sup>1371</sup> Julius Pokorny, Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch, Francke 1959, pp. 125-126.

中フランク王国の領土になる (331 頁の地図参照)。その後、メルセン条約 (870 年) によって、この地方の大部分は西フランク王国 (現在のフランス) に併合されるが、リブモント条約 (890 年) によって、東フランク王国領に変わった。911 年、この王国はドイツ王国に変容し、962 年には神聖ローマ帝国に発展する。後述するように、中世、ベルギーには多くの領邦国家が成立し、この帝国に加わっていた。

### 3) フランドル伯領や領邦国家の創設

862 年、西フランク国王 (後のフランス国王) は、**ヴァイキング** (223 頁参照) の侵入を防ぐため、娘婿を**フランドル伯**に叙し、国境を警備させた。彼には王国北西部の海岸地帯 (現オランダ南部、ベルギー北西部からフランス北西部にまたがる地域) が与えられ、**フランドル伯領**が創設される (183 頁参照)。

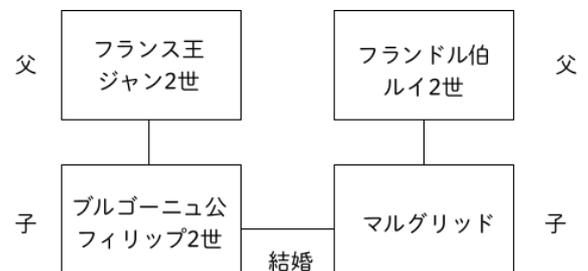
11 世紀以降、フランドル伯領はイングランドから輸入した羊毛を用いた毛織物業で栄え、ヨーロッパで最も経済的かつ文化的に発展した地域になる。これは爵位をめぐる争いを生み、フランス国王の干渉を招いた。13 世紀末、フランドル支配を狙った国王は再び軍隊を派遣して伯爵を拘束し、この地域の実権を握った。その圧政に対し、諸都市が蜂起すると、フランスと対立していたイングランドが介入し、諸都市を支援した。こうしてフランドル伯領は英仏間の対立に巻き込まれ、戦闘が繰り返されることになる。

ベルギーのその他の地域にはブラバント公国、ナミュール伯領、リンブルフ伯領、リンブルク公国 (71 頁参照) 等の領邦国家が建てられ、神聖ローマ帝国に属していた。ベルギー東部には**リエージュ司教領**<sup>1372</sup> (現リエージュ州) が創設され、カトリックの聖職者である司教の所領となる。なお、この司教領も神聖ローマ帝国に加わっていた (118 頁参照)。

### 4) ブルゴーニュ公、ハプスブルク家時代

フランドル伯領は伝統的にイングランド王との関係が強かったため、英仏間で**百年戦争** (1337~1453 年、337 頁参照) が勃発すると、フランドル伯はイングランド王の側についた。

この戦争中期の 1369 年、フランス王ジャン 2 世の 4 男で、**ブルゴーニュ公** (535 頁参照) のフィリップ 2 世は、フランドルの公女マルグリッドと結婚した。こうしてフランドル伯の家督はブルゴーニュ家に引き継がれる (男系相続)。なお、ブルゴーニュ家の本領はフランス北東部にあり、フランドル伯領とは繋がっていなかったが、代々のブルゴーニュ公が領地拡大を目指した結果、次世紀の後半には連結に成功し、ブルゴーニュ公はネーデルラント全域を支配するようになった (535 頁参照)。



前述したように、ブルゴーニュ公はフランス王家に属したが、ネーデルラント (フランドル) を所領に加えると、この地域の利益を優先し、フランス国王と対戦するようになる。ネーデルラント平定から数年が経過した 1477 年、同家の当主シャルル豪胆公 (突進公) が男子の跡継ぎを残さず、敗死すると<sup>1373</sup>、フランス国王のルイ 11 世はブルゴーニュ公国の本領 (ブルゴーニュ公爵領、ブルゴーニュ伯領) を没収した。また、ネーデルラントの獲得を狙い、まだ 7 歳の王太子をブルゴーニュ家の一人娘と結婚させようとしたが、19 歳で家督を承継したマリーは、亡き父が婚約者に指名していたハプスブルク家のマクシミリアンと結婚し、フィリップを生んだ。こうしてネーデルラントはフィリップに引き継がれ、ハプスブルク家の所領になる (576 頁参照)。

<sup>1372</sup> **リエージュ司教領** (Fürstbistum Lüttich) は現在のベルギー・リエージュ州と重なる。14 世紀に成立し、ドイツ諸邦の連合体である神聖ローマ帝国の領邦となるが、フランス革命期の 1795 年、フランスに併合され、消滅した。1815 年、司教領があった地域にはオランダ領リエージュ州が設置されたが、1830 年、ベルギー領に変わり、現在に至る。

<sup>1373</sup> 15 世紀、フランス国王 (ヴァロワ家) とブルゴーニュ家の間で行われた一連の戦争をまとめて**ブルゴーニュ戦争**と呼ぶ。1477 年 1 月に起きたナンシーの戦いでブルゴーニュ公のシャルル豪胆公が負死し、戦争は終わった。

## 5) オランダ独立戦争

ネーデルラントの新しい統治者となったハプスブルク家はオーストリアを本領としており、このアルプス地帯と比べると、新しい所領は標高が低いため、「ネーデルラント」、つまり、「低地地域」と呼んだ。16世紀前半には、さらにスペインを所領に加えたが、この世紀の後半、同家はオーストリア=ハプスブルク家とスペイン=ハプスブルク家に分離し、ネーデルラントは後者の所領になる（468頁参照）。

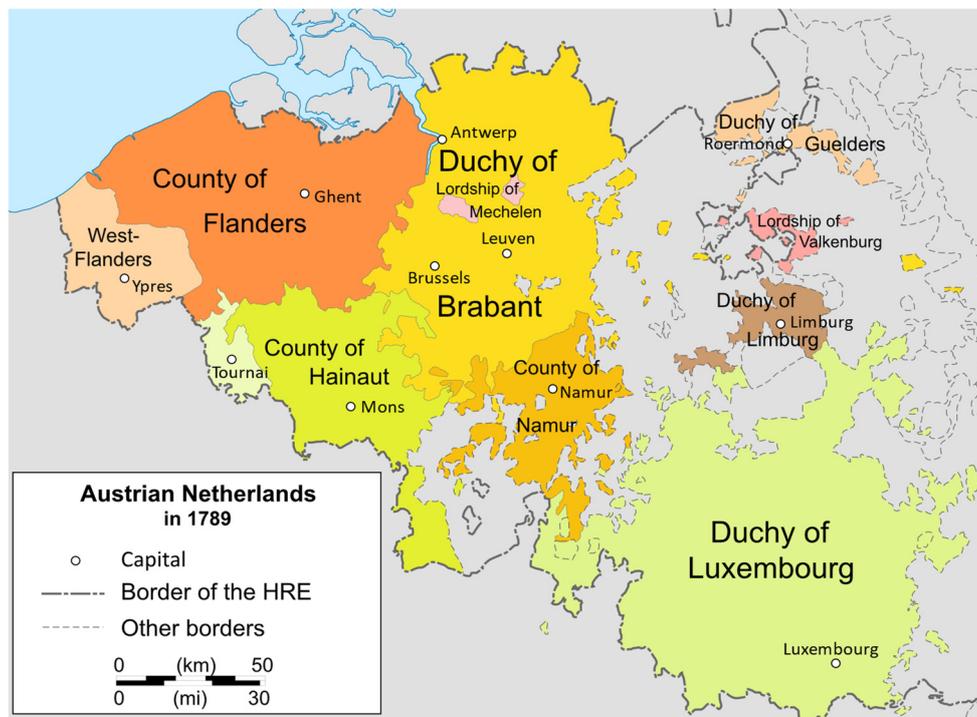
1568年、ネーデルラントはスペイン=ハプスブルク家の圧政や新教弾圧に反発し、蜂起した。ネーデルラントは戦闘を有利に展開するが、1576年、カトリック教徒の多い南部（現在のベルギーとルクセンブルク）はカトリック教国のスペインと和解し、戦争から離脱した。南部はスペイン領に留まる一方（フランドル伯領の大部分も同様である）、北部は戦争を継続し、独立を勝ち取ったため、フランスに併合される19世紀初旬まで、両地域は異なる歴史を歩むことになる。

## 6) オーストリア=ハプスブルク家時代

1700年、スペイン=ハプスブルク家のカルロス2世が嗣子を残さず死去すると、フランス国王ルイ14世は孫のフィリップをスペイン国王（フェリペ5世）として即位させた。

※ ルイ14世はスペイン王女と結婚しており（460頁参照）、二人の孫のフィリップ（アンジュー公）はスペイン王家（スペイン=ハプスブルク家）の血をひいていた。

フランスの覇権拡大を恐れるイギリスがオーストリアやオランダと組み、フランスに宣戦布告すると、スペイン継承戦争が勃発した（487頁参照）。戦いが10年以上、続く中、イギリスやオーストリアがスペイン国王に推挙するカール大公（ハプスブルク家）が神聖ローマ皇帝として即位し、スペイン国王になる途が絶たれると、対立は収まっていった。1713年に講和条約が締結され、ネーデルラントの南部（ベルギー、ルクセンブルク）はスペイン=ハプスブルク家からオーストリア・ハプスブルク家の所領に変わった。翌年からフランス革命政府に占領される1794年まで、この地域はオーストリア領ネーデルラントとも呼ばれた。



1789年当時の南ネーデルラント（オーストリア領ネーデルラント）<sup>1374</sup>

なお、リエージュ司教領は南ネーデルラントに属さないため、色が塗られていない。

<sup>1374</sup> 出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Map\\_of\\_Austrian\\_Netherlands\\_1789.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Map_of_Austrian_Netherlands_1789.svg)

## 7) フランス革命期とその後のナポレオン支配

オーストリア=ハプスブルク史上、最も偉大な君主の一人であるマリア・テレジア（451 頁参照）は長男のヨーゼフ 2 世と共に南ネーデルラントを治めたが、1780 年に死去すると、ヨーゼフ 2 世が単独の統治者になる。彼は母親の政策を引き継ぎ、中央集権化を進める一方、身分制議会の廃止、信仰の自由の保障等、国の近代化を図ったが、ネーデルラントの保守派の抵抗にあう。1789 年 7 月、隣国フランスで革命が起き、王政が倒されると、その 3 ヶ月後、ベルギー地方でもハプスブルク家体制からの独立を目指す革命が発生した。なお、このブラバント革命は、啓蒙専制君主であるヨーゼフ 2 世の進歩的な改革を阻止することを目的としており、絶対王政の倒壊を図ったフランス革命とは方向性が異なっていた。翌年 1 月、革命派はベルギー合衆国(ネーデルラント合衆国 États-Belgiques-Unis/Verenigde Nederlandse Staten)を建設したが、12 月、オーストリア軍によって倒され、従来の体制に戻った。



1790 年 1 月から 12 月まで存在したベルギー合衆国（ネーデルラント合衆国）<sup>1375</sup>

前年のフランス革命やブラバント革命はリエージュ司教領にも波及し、司教領でも革命が発生した。この広大な教会領も「リエージュ共和国」(Luikse Republiek) として「ベルギー合衆国」に加わっている。

ところが、ハプスブルク家はフランスとの戦いに敗れ、ネーデルラントを奪われることになる。1795 年、フランスは南ネーデルラントを併合すると、ナポレオン 1 世が失脚する 1814 年まで、この地域を支配した。なお、フランス革命政府はネーデルラントでも貴族制を廃止し、それまで存在した伯領や公国は、近代的な行政区画である「県」(デパルタマン département) に置き換えられた (584 頁参照)。同様にリエージュ司教領もこの隣国に併合・解体され、三つの県が設置された。

## 8) ウィーン体制期

ナポレオン没落後の 1814 年、ウィーンで開かれた国際会議で、ヨーロッパ諸国はベルギー地方をオランダに併合することを決めた。その結果、この地域はオランダ南部の州になる。

なお、エルバ島を脱出してパリに戻ったナポレオンが再度、失脚するきっかけとなったワテルローの戦い (1815 年 6 月) はブリュッセル近郊で行われた。ワテルロー (Waterloo) とは英軍司令部が設置された町 (現在の人口は約 3 万) で、モン・サン・ジャン (Mont Saint Jean) と呼ばれる農地が戦場となる。

<sup>1375</sup> 出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Verenigde\\_Nederlandse\\_Staten.svg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Verenigde_Nederlandse_Staten.svg)



6月までベルギーの植民地になる。なお、我が国に投下された原子力爆弾は、ベルギーがコンゴで採掘したウランが米国に提供され、製造された。

### 11) 第1次世界大戦

第1次世界大戦中、ベルギーは中立を表明したが、ドイツの侵攻を受け、占領される。しかし、最終的に戦勝国となり、ヴェルサイユ条約によって多額の戦争賠償請求権を獲得した。ドイツ（ワイマール共和国）がその履行を怠ると、1923年1月、フランスと共にドイツ有数の工業地帯（ルール工業地帯）を占領するに至った（385頁参照）。

### 12) 第2次世界大戦

ベルギーは第2次世界大戦でも中立を宣言していたが、1940年5月、僅か数週間の内にナチス・ドイツに占領され、国王レオポルト3世は幽閉された。ドイツの占領期間は4年以上、継続し、ノルマンディー上陸作戦（225頁参照）に成功した連合軍がベルギーを解放したのは1944年8月から11月である。

戦後、レオポルト3世は復位したが、独軍に抗戦せず、降伏したことから、左派政党や国内南部（ワロン地方）の住民より厳しく批判されることになった。1950年3月に実施された国民投票で、レオポルト3世の復位を支持する票は約58%に達したが、3世は君主制を維持するため、翌年、退位し、当時20歳の長子がボードゥアン1世として即位した。

### 13) EU統合

1947年、ベルギーは他のヨーロッパ諸国と共に米国の欧州経済復興援助計画を受け入れ、復興を目指した。1948年にはオランダ、ルクセンブルクと共に関税同盟を立ち上げ、貿易の自由化を図った（57頁参照）。

軍事面では、1949年に設立された北大西洋条約機構（NATO）の原加盟国になり、ソ連の脅威に備えた。なお、NATOの本部はベルギー・ブリュッセルに置かれている（406頁参照）。

ドイツとの和解や政策協力は、1952年7月、フランス、オランダ、ルクセンブルク、イタリアと共に欧州石炭・鉄鋼共同体を設立することで始まった（591頁以下参照）。その成功を受け、1958年1月には新たに欧州経済共同体（EEC）と欧州原子力共同体が発足し、EUの基盤が形成される。なお、両共同体を設立する作業はベルギーで行われた。この実務慣行は設立後も維持され、ベルギーの首都ブリュッセルには共同体（現在はEU）の機関・施設が多数設置されている。

1993年、ベルギーは憲法を改正し、連邦制に移行した（二重の連邦制について、182頁参照）。

## 7. ルクセンブルク史

ルクセンブルクは「ネーデルラント」(54 頁参照)の南東部に位置する立憲君主国で、10 世紀中頃、ドイツ系の貴族が建てた国を起源とする。彼が建てた“Lucilinburhuc”(ルツィリンブルフク、「小さな城」の意)が国号の由来になるが、有力諸侯の攻撃に備え、城塞が拡張されていったため、ルクセンブルクは「北のジブラルタル」とも呼ばれた(ジブラルタルについて、76 頁参照)。1354 年、公国となるが、1795 年、フランスに併合され、消滅した。しかし、1815 年、ウィーン会議の決議に基づき、大公国として復活し、現在に至る。

伝統的にドイツの文化圏に属してきたルクセンブルクは(186 頁参照)、フランスとの国境沿いに位置するため、ドイツの「砦」にもなってきた。1867 年初旬、フランスがその領有を目指す時、「ルクセンブルク危機」が発生するが、同年 5 月、ロンドン条約に従い、ルクセンブルクの中立性が決定され、事態は収束した。同条約に従い、ドイツ軍は撤退し、城塞の多くは壊されることになったが、旧市街に残されている砦(下の画像参照)は国のシンボルであり、旧市街全体が世界文化遺産に登録されている。



Der Bockfelsen

出典 [https://de.wikipedia.org/wiki/Luxemburg\\_\(Stadt\)#/media/Datei:Luxemburg.jpg](https://de.wikipedia.org/wiki/Luxemburg_(Stadt)#/media/Datei:Luxemburg.jpg)

ルクセンブルクはベルギー、オランダと合せて、**ベネルクス 3 国**(57 頁参照)と呼ばれる。ネーデルラント地方に建てられている 3 国は一つの国に属していた時代もあるが(中フランク王国、東フランク王国、ブルゴーニュ公国、スペイン等)、他の 2 国とは異なり、ルクセンブルクは歴史的にドイツとの関係が深い。14 世紀から 15 世紀初旬にかけて、5 名のドイツ王と 4 名の神聖ローマ皇帝を輩出した<sup>1377</sup>。しかし、フランス革命後、フランスやベルギーとの関係が強まる。1867 年以降はドイツ諸邦の連合体に参加せず、現在に至る。

※ ルクセンブルクの公用語について、186 頁参照

<sup>1377</sup> なお、ルクセンブルク家から最初に選ばれたドイツ王はハインリヒ 7 世である。即位した 1308 年(神聖ローマ皇帝としての戴冠は 1312 年)、大空位時代(434 頁参照)はすでに終わっていたが、その時代同様、意図的に弱小貴族の中から国王が選ばれた。王位は世襲制ではなく、1317 年に 7 世が亡くなると、ヴィッテルスバッハ家のルートヴィヒ 4 世が跡を継いだ。彼の死後、王冠はルクセンブルク家に戻った。1346 年以降、同家のカール 4 世、ヴェンツェル、ジクスムント、ヨープスト・フォン・メーレンがドイツ王に選出されており、最後のヨープスト・フォン・メーレンを除き、神聖ローマ皇帝にもなる。なお、ヴェンツェルの後にはファルツ選帝侯(ヴィッテルスバッハ家)のループレヒトが皇帝として即位し、彼の死後、ジクスムントが帝位に就いた。

### 1) 古代ローマ時代

紀元前3世紀、ルクセンブルク地方にはケルト人とゲルマン人の混血であるトレヴィール人が居住するようになるが、前1世紀中頃、古代ローマに征服された。

### 2) フランク王国時代

西ローマ帝国の滅亡後、ルクセンブルク地方はフランク王国の領土になり、王国の3分割後は中フランク王国に属した。870年、メルセン条約によって西フランク王国に併合されたが、880年、東フランク王国(911年以降はドイツ王国)領に変わり、ドイツの影響を強く受けるようになる。隣接するトリーア(トリーア大司教領)との間には確執も生じた。

### 3) 建国(ルクセンブルク家の創始)と公国への昇格

963年、モーゼル川流域に領土を持つジークフリート(アルデンヌ家)がルクセンブルク地方を獲得した。彼はボックフェルゼン(Bockfelsen、前頁の画像参照)と呼ばれる標高282メートルの丘に城塞を築くと、“Lucilinburhuc”(ルツィンブルク)と名付け、それが「ルクセンブルク」という国名の由来になる。

1083年、ジークフリートの曾孫のコンラート1世が初めてルクセンブルク伯と名乗るようになった<sup>1378</sup>。1136年、彼の孫のコンラート3世が男子の嗣子を残さず亡くなると、所領は神聖ローマ帝国に吸収されるが、皇帝の計らいにより、3世の従兄弟でナミュール家のハインリヒ4世が跡を継いだ。3年後、彼はナミュール伯にもなる。1196年、彼が男子の跡継ぎを残さず死去すると、ルクセンブルクは再び神聖ローマ帝国に没収され、皇帝の弟(オトン1世)が承継するが、1197年、ハインリヒ4世の娘のエルメジンデがルクセンブルク女伯に就くことで合意が成立した。こうして初の女伯が出現する。

ハインリヒ4世 → 神聖ローマ皇帝の弟のオトン1世 → ハインリヒ4世の娘のエルメジンデ

1214年、エルメジンデはリンブルク公のヴァルラム4世と再婚し、後者はルクセンブルク=リンブルク家の始祖となる<sup>1379</sup>。

| ルクセンブルクの建設 |            |                    | 公国へ昇格              |       |
|------------|------------|--------------------|--------------------|-------|
| アルデンヌ家     | → ルクセンブルク家 | → ルクセンブルク = ナミュール家 | → ルクセンブルク = リンブルク家 |       |
| 963年       | 1083年      | 1136年              | 1214年              | 1354年 |
| ジークフリート    | コンラート1世    | ハインリヒ4世            | ヴァルラム4世            | カール4世 |

1308年、エルメジンデとヴァルラム4世の曾孫にあたるハインリヒ7世が神聖ローマ皇帝として即位した。その2年後、7世の長子のヨハンがボヘミアに国王として迎え入れられ、この東欧の小国でルクセンブルク朝を開いた。1346年、ヨハンの息子のカール4世(528頁参照)が神聖ローマ皇帝に選ばれると、ルクセンブルク家はさらなる発展を遂げ、1354年、カール4世によってルクセンブルクは公国に引き上げられた<sup>1380</sup>。その後、彼の子孫が神聖ローマ皇帝に選出され、ルクセンブルク家は名声を高めていく(注1377参照)。

#### ※ ルクセンブルク=リンブルク家出身の神聖ローマ皇帝

- ハインリヒ7世(在位1308~1313年)
- カール4世(1346~1378年 ハインリヒ7世の孫)
- ヴェンツェル(1376~1400年 カール4世の子)
- ジキスムント(1410~1437年 カール4世の子、ヴェンツェルの異母弟)

<sup>1378</sup> See monarchie.lu, Die Geschichte Luxemburgs und seiner Dynastien, in <https://monarchie.lu/de/die-monarchie/die-geschichte-luxemburgs-und-seiner-dynastien>

<sup>1379</sup> Ibidem.

<sup>1380</sup> カール4世はルクセンブルク伯の地位を異母弟のヴェンツェル1世に譲り、彼をルクセンブルク公に叙した。

#### 4) ブルゴーニュ時代とハプスブルク時代

英仏間で百年戦争が行われていた時代、ルクセンブルクはブルゴーニュ公国（535 頁参照）に攻め入れられ、その所領に組み込まれた<sup>1381</sup>。これを機に、爵位はルクセンブルク家の手から離れることになる。

15 世紀後半、ブルゴーニュ家の男系が断絶すると、ハプスブルク家が相続した（576 頁参照）。オーストリアに拠点を置き、スペインも支配した同家が、16 世紀後半、オーストリア＝ハプスブルク家とスペイン＝ハプスブルク家に分離すると、ルクセンブルクは後者の領土となる。

1568 年、スペインの圧政や新教弾圧に対し、ネーデルラントの住民は蜂起し、戦争を引き起こしたが、1576 年、カトリック教徒の多いネーデルラント南部（現在のルクセンブルクとベルギー）はスペインと和解して戦いを止め、スペイン領に留まった（468 頁参照）。

17 世紀前半、ルクセンブルクは 30 年戦争の舞台になり荒廃した。1648 年に結ばれた講和条約（579 頁参照）によって領土の一部はフランスに割譲されることになるが、後に、スペイン＝ハプスブルク家領に戻った。

1713 年、スペイン継承戦争の講和条約に基づき、ルクセンブルク地方はオーストリア＝ハプスブルク家領に変わる（487 頁参照、また、474 頁の地図を参照されたい）。

#### 5) フランス革命期、ナポレオン支配

1795 年、フランス革命政府はネーデルラント南部をフランスに併合した。これによって、ルクセンブルクは消滅し（神聖ローマ帝国の領邦でもなくなる）、その領土にはフランスの「森林県」（Département des Forêts）が設置された（584 頁参照）。以後、ルクセンブルク地方は、ナポレオン 1 世が失脚する 1814 年まで、約 20 年に亘りフランスに支配され、同国の影響を強く受けた。

#### 6) ウィーン体制期、ルクセンブルク大公国の創設・オランダとの同君連合の結成

1815 年、ウィーン会議の決議に従い、ルクセンブルク大公国が創設された。ルクセンブルクはフランスに併合される前の「公国」から「大公国」に昇格したが、君主は従前のオーストリア＝ハプスブルク家当主ではなく、オランダ国王（オラニエ＝ナッサウ家、354 頁の注 1110 参照）が兼ねることになった。同時に、ルクセンブルクはドイツ連邦に加盟する一方、オランダは加盟しないという複雑な状況が生じた（442 頁参照）。

なお、ウィーン会議の決定に基づき、ベルギー地方はオランダに編入されることになったが、1830 年、独立を宣言した。その際、ベルギーの独立派はルクセンブルクに侵入し、ほぼ全域を支配下に置いた。

翌年のロンドン会議で、ベルギーの独立は国際的に承認されたが（476 頁参照）、ルクセンブルクの帰属は保留され、オランダとベルギーで決定することになった。当時、ルクセンブルク全土はベルギーに占領され、ルクセンブルク政府もそれに同調していたが、1839 年、ベルギーが譲歩し、隣接する西部のみ自国領とすることでオランダと合意した。なお、この合意は同年のロンドン会議で国際的に承認されている。

領土の分割は「言語の境」を基準にして行われることになった。つまり、「ドイツ語・ルクセンブルク語圏」<sup>1382</sup>と「フランス語圏」で分けられた。ベルギーに割譲された地域の方が大きいため、ルクセンブルクの国土はますます小さくなる（186 頁参照）。

#### 7) ルクセンブルク危機

19 世紀後半、フランス皇帝のナポレオン 3 世はプロイセンの台頭を警戒し、ルクセンブルクを文字通り「砦」として用いる策略を立てた。前述したように、ウィーン会議によってオランダ国王がルクセンブルクの君主を兼ねるようになっ

<sup>1381</sup> 1443 年、ブルゴーニュ公のフィリップ 3 世（善良公）はルクセンブルク公ともなり、シャルル 1 世（豪胆公、在位期 1467～1477 年）、マリー（1477～1482 年）へと引き継がれた。1482 年にマリーが亡くなると、彼女の長男のフィリップ 4 世が跡を継ぎ、家督はハプスブルク家（1555 年以降はスペイン＝ハプスブルク家）に移る（468 頁参照）。

<sup>1382</sup> ルクセンブルク語はドイツ語の方言にあたる。

ていたため、1867年初旬、ナポレオン3世がオランダ国王（ヴィルヘルム3世）に打診すると、3月、承諾された。プロイセンもそれを認めたが、南ドイツではフランスの勢力拡大を警戒する声が強まったため、プロイセンが態度を改めると、フランスは硬化し、一触即発の事態に陥る。これを**ルクセンブルク危機**と呼ぶが、同年（1867年）5月、ロンドンで国際会議が開かれ、フランスによるルクセンブルクの併合を禁止し、この大公国の中立化やプロイセン軍の撤退、駐屯地や城塞の破壊が決定されると、事態は収束した。

## 8) オランダとの同君連合の解消

ロンドン会議ではオランダのウィレム3世<sup>1383</sup>は引き続き、ルクセンブルク大公を兼ねる一方、男系の家系が途絶えるとき、大公位はドイツのナッサウ家に移ることが承認された（1867年のロンドン条約第1条）。これには前年の普墺戦争でナッサウ公国はオーストリアの側に付いて戦うも敗れ、プロイセンに併合されて消滅したこと、つまり、ナッサウ公は領土を失ったことを補う意義があった（444頁参照）。

1890年11月、オランダ国王ウィレム3世が男子の嗣子を残さず亡くなり<sup>1384</sup>、ナッサウ家のアドルフがルクセンブルク大公となる<sup>1385</sup>。これによって、オランダとの同君連合は解消され、現在に至る。

## 9) 第1次世界大戦

第1次世界大戦でルクセンブルクは中立主義をとったが、1914年8月、ドイツに攻め入られた。以後、戦争が終わる1918年11月まで、隣国に占領されることになる。

戦後は政情が一段と不安定になり、1919年1月、左派政党が反乱を起こすと、マリー・アデライード女大公は退位し、妹のシャルロットが即位した。混乱を治めるため、君主制の存続は国民投票で決定することになり、同年9月、ルクセンブルク史上初の国民投票が実施されると、現状維持が80%近い支持を集めた。同時に、フランスとの経済統合が可決された（支持票は約73%。なお、投票の23%はベルギーとの統合を支持した）。しかし、フランスに拒否されたため、1922年、ベルギーと経済同盟を結成し、両国の通貨を統合することになった。

## 10) 第2次世界大戦

1940年5月、ドイツ軍に占領されると、ルクセンブルク大公と政府はイギリスに亡命した。1944年9月、連合国によって解放されるが、同年12月にはドイツの再攻撃を受け、大戦中で最大の被害が発生する。

1945年2月、ルクセンブルクは連合国によって再び解放され、4月には、海外に亡命していたシャルロット女大公が帰国した。

<sup>1383</sup> オランダ国王は「オラニエ＝ナッサウ家」の出身であり、「ナッサウ家」の縁戚にあたる（354頁の注1110参照）。前者は「オランダのナッサウ家」、後者は「ドイツのナッサウ家」と捉えることができる。

<sup>1384</sup> 1867年にロンドン条約が締結されたとき、ウィレム3世には2人の男子がいたが、長男のウィレムは1879年に、また、3男のアレクサンダーは1884年に相次いで死去した。

オランダの王位はウィレム3世の娘のウィルヘルミナが継いだ。ルクセンブルクはサリカ法典によって女性の家督相続が認められていないため、ナッサウ家のアドルフが大公として即位したと説明されることもあるが、正しくなく、アドルフは当時のルクセンブルク憲法旧第3条に従い大公になった。この規定はオランダ王家（オラニエ＝ナッサウ家）の男系が途絶えたとき、大公位はドイツのナッサウ家に移るとするナッサウ家の取り決めを認めていた（1815年のウィーン議定書第71条や1867年のロンドン条約第1条参照）。See *monarchie.lu*, Die konstitutionelle Monarchie, in <https://monarchie.lu/de/das-staatsobershaupt/die-konstitutionelle-monarchie>; *Verfassung des Großherzogtums Luxemburg*, in <https://www.verfassungen.eu/lu/luxemb68.htm>

なお、ルクセンブルクで女子の地位承継は中世にも認められていた（479頁参照）。ハプスブルク家でも、女子の即位が認められるようになり、1740年、マリア・テレジアはルクセンブルク女公として即位している（451頁参照）。

## 11) EU 統合

1947年、ルクセンブルクは他のヨーロッパ諸国と共にアメリカの**欧州経済復興援助計画**（マーシャル・プラン）を受け入れた。ベネルクス3国間ではより緊密な協力体制が築かれ、1948年には関税同盟が発足する（56頁参照）。

軍事面では、1948年、ベネルクス3国は英仏と共に**西欧同盟**を立ち上げた。また、翌年、**北大西洋条約機構**（NATO）の原加盟国となり、ソ連の脅威に備えた。

1952年7月、ルクセンブルクはドイツ、フランス、イタリア、オランダ、ベルギーと共に**欧州石炭・鉄鋼共同体**を設立する。また、1958年1月には、同じ6ヶ国で**欧州経済共同体**（European Economic Community, EEC）と**欧州原子力共同体**を立ち上げ、EU統合の基盤を築く。

1985年6月、ルクセンブルク南部の**シェンゲン**（厳密にはモーゼル川を運行する船上）で、ルクセンブルク、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダは協定を締結し、国境検査の撤廃や第3国からの難民の処遇・審査について取り決めた。これに基づき、1995年3月、締約国間では国境検査が廃止され（空港でのパスポート検査は2008年3月より廃止）、ヨーロッパ統合は大きく進展した（639頁参照）。この制度は一般に「シェンゲン」と呼ばれており、モーゼル河畔のこの村は、EU条約が締結されたマーストリヒト（71頁参照）と並び、欧州統合を象徴する地方自治体になっている。

## 8. スペイン史

スペインはイベリア半島（75 頁参照）の大部分を占める立憲君主国で、正式な国号は**スペイン王国**である。その起源となる王国は 1479 年に成立した。その後、王政は廃止され、共和政への移行と王政復古を繰り返してきた。現在の王政が復活したのは、1975 年 11 月、フランコによる軍事独裁が終わったときである。

スペインは伝統的に**カトリック教国**であり、南米がカトリック大陸となることに貢献してきた。キリスト教は 3 世紀頃までにイベリア半島の全域に広まっており、これは教皇庁が置かれているイタリア半島よりも早い。

8 世紀に入ると、イベリア半島はアフリカ大陸から侵入してきたイスラム教徒（**ムーア人**）に占領された。彼らは半島を**アンダルス**と呼び、先進のイスラム文化をもたらした（416 頁参照）。なお、800 年近い統治期間、半島には複数のイスラム王朝が建てられており、半島は異教徒の抗争の場になる。

先住のキリスト教徒も幾つか王国を建て、統合を繰り返しながら国土回復（レコンキスタ）を目指した。1479 年、スペイン王国を成立させ、勢いに乗った彼らは、1492 年、半島全域の奪還に成功する。また、同年、コロンブスがアメリカ大陸に到着し、新興国スペインは一気に黄金期を迎えた。16 世紀には中南米やフィリピンに進出し、巨大な植民地帝国となる。

同じ頃（1517 年）、スペインの王位はオーストリア＝ハプスブルク家に移った。それに伴い、スペイン国王はハプスブルク家領のネーデルラントを治めるようになるが、これはプロテスタントが多いオランダや、ローマ・カトリック教会から独立していたイングランドとの戦争を引き起こした。18 世紀に入ると、フランスの影響力が強まり、19 世紀初旬にはナポレオンに統制された。それと同時に南米の植民地が次々と独立し、スペインは国力を失っていく（360 頁の注 1123 参照）。

20 世紀前半に勃発した 2 度の世界大戦でスペインは中立を維持し、戦禍を免れることができた。これはファシスト政権の存命も可能にし、1975 年まで軍事独裁が続く。その影響もあり、スペインは中央集権国家としてのイメージが強いが、実際には地方自治の伝統を持つ自治州国家である（205 頁参照）。また、分離・独立運動が最も活発に行われているヨーロッパ諸国の一つにあたる。

※ カタルーニャ自治州の独立問題について、490 頁参照

### 1) 先史時代～古代

イベリア半島には先史時代より人類が生息しており、半島北部のシマ・デル・エレファンテ洞窟で 100 万年以上前の原人の化石が見つまっている（305 頁参照）。また、アルタミラの洞窟には約 4 万年前の新人（クロマニヨン人）が描いたとされる壁画が存在する。

紀元前 1000 年頃、フェニキア人やケルト人が半島に移動してきた。前 6 世紀頃にはギリシア人も到達し、地中海沿岸に植民市を築いている（313 頁参照）。彼らは半島の住民をイベリア人（イベレス）と呼んだ。

前 5 世紀、半島の地中海沿岸部には、フェニキア人の子孫であるカルタゴ人が住み着くようになり、ギリシア人を一掃した。しかし、前 201 年、第 2 次ポエニ戦争で古代ローマ（共和政）に敗れると、北アフリカに逃れた（24 頁参照）。

その後、ローマは半島で領土を拡大していき、前 133 年、属州**ヒスパニア**を建設した。なお、カエサル（319 頁参照）は、前 61 年、半島北部の総督に就任し、短期間ではあるが滞在している（翌年には帝都ローマで三頭政治を始めた）。

ローマ人は半島の制圧に長い年月を費やしたが、前 19 年、初代皇帝のアウグストゥスが自ら出兵して北部を攻略すると、全域を支配するようになった。属州の統治は、**タッラコネンシス**、**パエティカ**、**ルシタニア**に分割して行われたが、3 世紀末、タッラコネンシスが分けられ、属州は全部で五つになる。なお、後世、ルシタニア西部にポルトガル王国



が成立する(495頁参照)。イベリア半島はローマ帝国の主要地域(属州)の一つになり、偉大な皇帝(トラヤヌス、ハドリアヌス、テオドシウス等)を輩出した。

前1世紀より、イベリア半島ではローマ文化が浸透し、各地に寺院、円形劇場、浴場、水道橋等が建設された(125頁の注358参照)。キリスト教も早期に伝わり、1世紀中頃には聖パウロが伝道に訪れている。この宗教は3世紀頃までに半島全域に広まり、欧州では最も早くキリスト教化された地域となる。

## 2) 西ゴート王国の興亡とイスラム支配

395年にローマ帝国が東西に分割されると、イベリア半島は西ローマ帝国の領土になるが、帝国の半島支配は長続きせず、5世紀初頭までに先住民や他の地域から移動してきた民族によって幾つか王国が建設された<sup>1386</sup>。帝国はゲルマン系の西ゴート人と組んで反撃し、奪還した地域には西ゴート人が王国(西ゴート王国)を興した<sup>1387</sup>。その後、西ゴート王国は領土を拡大していき、6世紀後半には半島全域を支配するようになる。首都は半島中央部のトレド(マドリードの南約70km)に置かれ、難攻不落の城塞が築かれた。そのため、1561年にスペインの首都がマドリードに遷されてからも、この古都を制さなければ、国を制したことはないといわれるようになる<sup>1388</sup>。

当初、西ゴート人は三位一体説(265頁参照)を否定するアリウス派のキリスト教を信仰していたが、589年、アタナシウス派に改宗し、カトリック教国になった<sup>1389</sup>。

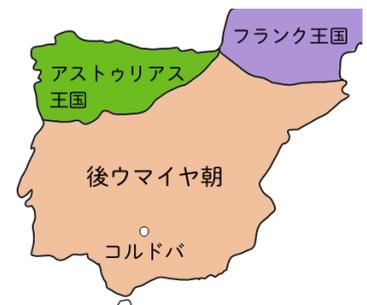
711年、トレドが北アフリカから侵入してきたイスラム教徒(ウマイヤ朝)に制圧され、西ゴート王国は滅亡した。イベリア半島は北西部の山岳地帯(北バスク、アストゥリアス)を除き、この異教徒に占領されることになる。なお、イスラム教徒はムーア人と呼ばれた。

当初、半島は西アジアのイスラム帝国(ウマイヤ朝)が派遣する総督によって治められていたが、756年、西アジアでの政争に敗れ、半島に逃れてきた一族が王朝(後ウマイヤ朝)を開いた(414頁参照)。この国は西カリフ国とも呼ばれたが、首都コルドバは中世ヨーロッパを代表する都市の一つとなり、東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルと対比させ、「西方の真珠」と称えられた。

イスラム勢力はピレネー山脈を超え、フランク王国への侵入を繰り返したため<sup>1390</sup>、同王国のカール大帝は、795年、多数の辺境領を設置し、異教徒の脅威に備えた。後に一部の辺境領は独立し、ナバラ王国やカタルーニャ君主国となる(490頁参照)。

## 3) レコンキスタ(国土回復運動)

711年、イスラム教徒が西ゴート王国を滅ぼした際、先住のキリスト教徒はイベリア半島北西部の山岳地帯に逃れた。彼らはこの地域にアストゥリアス王国を建設し、それを拠点として西ゴート王国の再建を目指すようになる。半島をイスラム教徒から奪回し、再支配を目指すキリスト教徒の活動をレコンキスタ(国土回復運動)<sup>1391</sup>と呼び、722年に開始されるが、その実現には770年という非常に長い歳月を要した。



<sup>1386</sup> 5世紀初頭、ゲルマン系のヴァンダル人はイベリア半島南部に王国を建設した。現在、この地域にはアンダルシア州が置かれているが(州都はセビリア)、「アンダルシア」とは「ヴァンダル人の国」という意である。

<sup>1387</sup> ローマ帝国の傭兵であった西ゴート人は、418年、帝国領のガリア南部とイベリア半島北部に西ゴート王国を興した。当初、首都はガリア南部のトロサ(現フランス・トゥールーズ)に置かれていたが、同じゲルマン系のフランク人にこの地域を奪われたため、507年、イベリア半島中央部のトレドに遷された。

なお、555年、西ゴート王国は東ローマ帝国のユスティニアヌス1世に地中海沿岸部を攻略されたが(326頁参照)、7世紀初頭には領土を回復した。

<sup>1388</sup> この点について、川成洋『図説 スペインの歴史』(川出書房新社 1994年)25頁を参照されたい。

<sup>1389</sup> Roger Collins, Visigothic Spain 409 - 711 (A History of Spain), Wiley-Blackwell 2004, pp. 67.

<sup>1390</sup> 732年、フランク王国の宮宰カール=マルテルは、ガリア内部にまで侵入したイスラム教徒をトゥール・ポワティエ間の戦いで撃退し、名を揚げた(329頁参照)。

<sup>1391</sup> 「レコンキスタ」(reconquista)とは「再征服」ないし「再支配」という意のスペイン語である。

910年、アストゥリアス王国はムーア人を南方に追いやり、首都をオビエドからレオンに遷すと、**レオン王国**と呼ばれるようになる。1035年、**カスティリヤ王国**<sup>1392</sup>が独立するが、その他にも先住のキリスト教徒によって王国（ナバラ王国、アラゴン王国、ポルトガル王国等）が建設されては統合や分離・独立が繰り返された。11世紀後半になると、カスティリヤ王国が勢力をつけ、レコンキスタを牽引するようになった。

1031年、内紛によってイスラム王朝（後ウマイヤ朝）が滅び、異教徒は分裂した。これを機にレコンキスタは活性化し、1085年、カスティリヤ王国はトレドを奪回して、新しい首都とする。その後、カスティリヤは南へと領土を広げていくが、アフリカより援軍に駆け付けたイスラム勢力（ムラービト朝）に撃退され、国土の完全回復は果たせなかった。

異教徒のムラービト朝は北アフリカを主たる領土としていたが、イベリア半島南部の**アンダルシア**だけではなく、北部のサラゴサを支配し栄えた。しかし、1147年、アフリカから侵入してきた他のイスラム勢力（ムワッヒド朝）に滅ぼされる。

1118年、キリスト教国の一つである**アラゴン王国**はサラゴサを攻略した。また、1162年にカタルーニャ君主国と統合して国力を増すと、カスティリヤ王国と対立するようになる。これはレコンキスタを停滞させたが、13世紀に入り、教皇の命に従って和解すると、勢いを取り戻した。また、教皇が中東への（第4次）十字軍遠征を呼びかけたことに促され（417頁参照）、イベリア半島でもキリスト教徒軍が結成された。

彼らの攻勢にあったイスラム王朝（ムワッヒド朝）は内乱の煽りも受けて衰退し、北アフリカに撤退した。その後、イベリア半島南部のアンダルシアにはイスラム王国が乱立するが、カスティリヤに倒された。ただし、半島最南端に建設された**グラナダ王国（ナスル朝）**は、カスティリヤに従属しながら250年近く存続した。同名の首都グラナダにはアルハンブラ宮殿が建てられ、半島における最後のイスラム王朝として繁栄する。

1236年、カスティリヤ王国はコルドバを、また、1248年にはその南西にあるセビリア（17頁の地図参照）を攻略した。他方、アラゴン王国は1238年にバレンシアを奪回する。その結果、半島におけるイスラム勢力はグラナダ（ナスル朝）のみになるが、この王国はカスティリヤの勢力下に入ったため、レコンキスタは実質的に完了した。



13~15世紀のイベリア半島

#### 4) スペイン王国の誕生（1479年）とレコンキスタの完了（1492年）

1469年、カスティリヤの王女**イザベル**とアラゴンの王子**フェルナンド**が結婚した。1474年、イザベルがカスティリヤの女王に、また、1479年にフェルナンドがアラゴンの王となり、二人が共同でカスティリヤとアラゴンを治めるようになると、両国は統合され、**スペイン王国**（連合王朝）が成立する。ただし、18世紀初頭に新しい王朝（スペイン・ブルボン朝）が成立するまで、カスティリヤとアラゴンは独自の法律や制度を持ち続け、カスティリヤ女王、アラゴン王といった称号も存続した（261頁の注820参照）。なお、カスティリヤ語とスペイン語は同意であり、言い換えに過ぎない。



アラゴン王のフェルナンド2世(左)とカスティリヤ女王のイザベル1世

敬虔なキリスト教徒であった両者は国内に異端審問所を設け、ユダヤ人やイスラム教徒をキリスト教に改宗させ、改宗しない者は国外に追放した。また、1481年、イスラム最後の拠点であるグラナダの攻略を目指し、戦闘を開始すると、10年を超える激戦の末、国土回復を実現した。

国土回復を達成した両者はローマ・カトリック教会の保護者となり、異教徒を弾圧した。また、南米にキリスト教を広めた。これらの偉業を称え、両者は教皇より「**カトリック両王**」の称号を贈られた。

<sup>1392</sup> カスティリヤ王国（カスティラ王国 Castilla）のポルトガル語読みであるカステラ（Castela）が「カステラ」の由来になった。なお、カスティリヤと呼ばれる王国が誕生したのは、イスラム勢力との戦闘ため、国内に多数の城塞（castillos、ラテン語では castella）が設置されたためである。

## 5) コロンブスの新大陸到達

レコンキスタが完了した 1492 年、イサベル女王の支援を受けたコロンブス（379 頁参照）がアメリカ大陸に到達し、スペイン黄金期の幕開けを演出する。彼が大量の金銀を持ち帰ると、王室は探検を活性化させ、西インド諸島<sup>1393</sup>の植民地開発に乗り出した（342 頁参照）。

## 6) スペイン=ハプスブルク朝の成立と海外領土の獲得

スペイン王国を誕生させたイザベルとフェルナンドは、不倶戴天のフランスに対抗するため、子息をイングランド<sup>1394</sup>やポルトガルの王族と結婚させた。次女のフアナは、当時、オーストリアやネーデルラント（54 頁参照）等を治めていたハプスブルク家に嫁ぎ、カールを生む。彼はネーデルラント南部（現ベルギー）で育つが、1516 年、スペイン国王として即位した。なお、カールは後に神聖ローマ皇帝（ドイツ国王）に選出され、同皇帝としてはカール 5 世と、また、スペイン国王としてはカルロス 1 世と名乗った。

彼はポルトガルの王女と結婚し、彼女と共にポルトガルも治めた。また、同国の香辛料貿易に対抗するため、マゼランに新しい航路<sup>1395</sup>の発見を命じると、マゼランは南アメリカ大陸の最南端を経由して、1521 年、フィリピンに到達した。なお、この島の名称はスペイン皇太子のフェリペ 2 世に由来する。1565 年（フェリペ 2 世の治世下）、スペインはフィリピンの植民地化を開始し、以後、300 年に亘り、支配した。

カルロス 1 世は新大陸アメリカに征服者（コンキスタドル）を送り込み、コルテスがアステカ王国を、また、ピサロがインカ帝国を滅ぼした。こうして新大陸を制したスペインは黄金期を迎える。

カルロス 1 世は父方のハプスブルク家の当主として広大な領土を支配したが、1556 年の退任に際し、所領を分割し、スペイン、ネーデルラント、ミラノ、新大陸を長男のフェリペ 2 世に、他方、オーストリアやその他の所領を弟のフェルディナント 1 世に与えた。これにより、彼の実家はオーストリア=ハプスブルク家とスペイン=ハプスブルク家に分かれることになった。

それまでスペイン王国は首都を確定していなかったが、1561 年、フェリペ 2 世が王宮をトレドからマドリッドに遷すと、後者が首都として定まる。

1571 年、スペインはレパントの海戦でオスマン帝国を撃退し、地中海での覇権を手に入れた。後世、スペイン海軍は無敵艦隊（アルマダ）呼ばれるようになる。

1580 年、フェリペ 2 世は母方（カルロス 1 世の妃）よりポルトガルの王位を承継し（496 頁参照）、ポルトガルを併合した。また、新大陸だけではなく、東南アジアにも植民地を築いた。こうして世界各地に領土を広げたスペインは、史上初の「太陽の沈まない国」となる（505 頁の注 1446 参照）。もっとも、カトリック教徒であるフェリペ 2 世は新教徒



カルロス 1 世（カール 5 世）と皇后イザベル（ポルトガル王女）  
ルーベンス作（1628 年頃）

二人の長子フェリペ 2 世はスペイン国王の他にポルトガル国王を務めた。彼の統治下で世界各地に領土を持ったスペインは「太陽の沈まない国」と目されるようになるが、ネーデルラントの統治に失敗し、オランダが独立するきっかけを作った。また、イングランド（エルザベス 1 世）を倒すため無敵艦隊を派遣したが、攻略に失敗した。

<sup>1393</sup> この諸島は南アメリカ大陸の北方にあるが、「黄金の国ジパング」を目指していたコロンブスはインドに到達したと考え、西インド諸島と呼んだ。

<sup>1394</sup> 末子のカタリナは生後、間もなくして、イングランドのアーサー王子と婚約し、14 歳の若さで政略結婚を強いられたが、王子（享年 15 歳）の死後、弟のヘンリー 8 世と再婚する。彼女は後にイングランド女王となるメアリーを生むが、男子を生まなかったため、ヘンリー 8 世に離婚を迫られた。しかし、教皇が離婚を認めなかったため、ヘンリー 8 世はローマ・カトリック教会から独立してイングランド国教会を立ち上げ、離婚を成立させた（261 頁参照）。

<sup>1395</sup> ポルトガルが採用していた東南アジア・モルッカ諸島への東回りとは逆の西回り航路である。

が多いネーデルラントの統治に失敗し、この地域が独立するきっかけを作った (354 頁参照)。また、相次いだ戦争で費がかさみ、莫大な借金を残した。

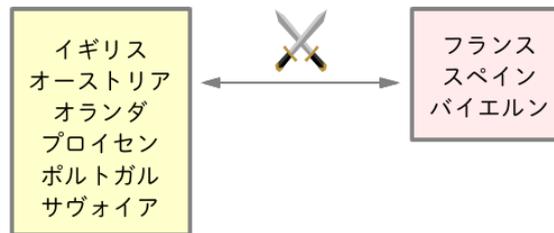
## 7) 覇権の喪失

16～17 世紀の宗教改革・宗教戦争期、スペインは無敵艦隊の敗北 (1588 年、354 頁参照)、ポルトガルの独立 (1640 年)、オランダの独立 (1648 年、354 頁参照) によって衰退する。

スペインは、1659 年に勃発した西仏戦争でも敗北し、15 世紀末に始まった黄金期は幕を下ろした。なお、中南米の植民地が次々と独立を達成したのは、この時代ではなく、1800 年代である ((360 頁の注 1123 参照)。

## 8) スペイン継承戦争 (1701～1714 年) とスペイン・ブルボン朝の創設

1700 年、スペイン＝ハプスブルク家のカルロス 2 世が嗣子を残さず亡くなると、フランス国王のルイ 14 世は孫のアンジュー公フィリップをスペイン王 (フェリペ 5 世) として即位させた。フィリップはフランスの王位を放棄しなかったため、同国がスペインへの影響力を強め、南米貿易を独占することを恐れたイギリスは、王位継承権を持つオーストリア＝ハプスブルク家やオランダと同盟を結成し、フランスに宣戦した。こうして始まった戦いを**スペイン継承戦争**と呼ぶ。プロイセンとポルトガルは同盟側に、他方、バイエルンはフランス側に立って参戦したため、王位をめぐる争いは大規模な戦争に発展した。なお、戦闘はヨーロッパ各地だけではなく、フランス領カナダでも行われた。



10 年近く続いた戦争中、同盟は一貫して優位を保ったが、1711 年、イギリスがスペイン国王に擁立したカール大公 (ハプスブルク家) は神聖ローマ皇帝として即位した。彼がスペイン王になる可能性がなくなると、対立は和らいでいった。

1713 年、諸国はユトレヒト条約を締結し、ルイ 14 世の孫であるアンジュー公フィリップのスペイン王位を承認する一方 (**スペイン・ブルボン朝の創設**)、フィリップが同時にフランス国王になること、つまり、フランスとスペインの同君連合を禁止した。なお、イギリスは、ユトレヒト条約に基づき、スペインからジブラルタル (76 頁参照)、ミノルカ島、アフリカ奴隷売込権 (アシエント) を獲得し、最大の受益国になる。オーストリアは、ラシュタット条約 (1715 年) に基づき、スペインからネーデルラント南部 (現ベルギー、ルクセブルク、474 頁の地図参照)、北イタリアのミラノ、南イタリアのナポリ、地中海上のサルデーニャ島を獲得した。これに対し、多くの領土を失ったスペインの衰退は顕著になる。

## 9) ナポレオン 1 世による支配、共和政と立憲君主制への移行

18 世紀後半、スペインは啓蒙専制君主として名高いカルロス 3 世 (在位 1759～1788 年) の下で国力を回復した。跡を継いだカルロス 4 世 (在位 1788～1808 年) の時代、隣国フランスでは大革命によって王政が倒され、1804 年、ナポレオンが皇帝になる (360 頁参照)。スペインは彼と提携し、イギリスと戦ったが、翌年 10 月、トラファルガーの海戦で敗れ、大西洋における覇権を失った。

その後、ナポレオンとの同盟関係に不満を抱いた国民はカルロス 4 世を退位させ、息子のフェルナンド 7 世 (在位 1808 年 3 月～5 月) を即位させた。この内乱に乗じ、ナポレオンは軍隊を派遣し、首都マドリードを占領した。5 月、民衆が仏軍を襲撃すると、スペイン独立戦争と呼ばれる反仏運動に発展するが、すぐに制圧された。翌月、ナポレオンはスペイン・ブルボン朝を廃し、長兄のジョセフ (ホセ 1 世、在位 1808～1813 年) を国王として即位させた。

ナポレオンはスペインのほぼ全域を占領したが、その支配が及ばなかったイベリア半島南部のカディスでスペイン人は議会を開き、同国史上初の憲法を制定した。1812 年 3 月に採択された「**カディス憲法**」は国民主権や三権分立について定め、立憲君主制の法的基盤になる。なお、同憲法ではカトリックが国教に指定された。

1813年10月、ナポレオンは対仏大同盟との戦争（**ライプツィヒの戦い**、436頁参照）に敗れ、没落が鮮明になる。12月、彼はパリで幽閉されていたフェルナンド7世（前掲のカルロス3世の孫）に王位を返還した。翌年3月、帰国した7世は「カディス憲法」の施行を拒絶したが、1820年1月、海軍兵が反乱を起こすと、その施行を認めた。立憲君主制に移行させた兵士の反乱を**スペイン立憲革命**と呼ぶ。

1833年まで続いたフェルナンド7世の在位期（1808年、1813～1833年）、フランス革命やナポレオンが吹き込んだ自由・平等の理念に促され、中南米の植民地が次々と独立した（360頁の注1123参照）。なお、7世はサリカ法典（329頁参照）に従わず、娘のイザベル2世を即位させたため、弟のドン・カルロスが内乱（第1次カルリスタ戦争）を起こしたが、王位奪還は成功せず、ドン・カルロスはフランスに逃れた。

イザベル2世は3歳で即位したため、母后マリア・クリ스티ナが実権を掌握したが、政情は不安定で、政変や陰謀が絶えなかった。1868年9月には革命が起き、イザベル2世はフランスに亡命した。その後、政体は共和政に移行したが<sup>1396</sup>、1874年、イザベル2世の長男アルファンソ12世が即位し、立憲君主制が復活する。

その後、政情は安定したが、1895年、植民地のキューバで反乱が起きると、米国が介入し、アメリカ＝スペイン戦争が勃発した。この戦いに敗れたスペインは、キューバ、プエルトリコ、グアム、フィリピン諸島を失った。

## 10) スペイン内戦（1936年7月から1939年3月）とフランコの独裁（1939年3月～1975年11月）

20世紀に入ると労働運動、共和革命運動、カタルーニャにおける自治運動（490頁以下参照）、反政府運動、北アフリカの植民地モロッコの反乱等が相次いだ。

第1次世界大戦でスペインは中立を維持し、戦後は好景気に恵まれたが、1921年には恐慌に見舞われ、プリモ・デ・リベラの軍事独裁（1923～1930年）を招く。しかし、この独裁も1929年に発生した世界恐慌の煽りを受け、行き詰まった。

1931年4月、再び革命が起き、立憲君主制は廃止された。その後、国政は再度、共和政（第2共和政）に移行したが、イタリアやドイツに同じく、スペインでもファシズムが台頭し（387頁参照）、共和政は早くも危機に直面することになった。1933年11月、アサーニャ政権が崩壊し、選挙が前倒しで実施されると、極右のファランヘ党<sup>1397</sup>が躍進した。同党が政権に参加した1934～35年は「暗黒の2年間」と呼ばれており、後に独裁を敷く**フランシスコ・フランコ**（写真右）も、この時期に軍最高位の参謀総長に任命されている。



その一方で、ファシズムに対抗する運動も活性化し、1936年1月、左派政党や自由主義政党は**人民戦線**<sup>1398</sup>を立ち上げた。この選挙連合は翌月の国政選挙で勝利を収め、政権奪取に成功する。その結果、フランコはカナリア諸島の隊長に左遷されることになるが、7月にクーデターを起こし、**スペイン内戦**を誘発した。当初、彼は武器を持った市民の反撃にあい、劣勢に立たされていたが、ドイツやイタリアの支援を受けて盛り返すと<sup>1399</sup>、人民戦線政府を倒すに至る。1939年3月には首都マドリードを制し、独裁を開始した。

<sup>1396</sup> 1870年、プロイセン王家の縁戚にあたるレオポルトがスペイン国王として即位する話が持ち上がった。フランスの抗議によって実現しなかったが、プロイセンとの対立は残り、同年7月、普仏戦争が勃発する（371頁参照）。

<sup>1397</sup> 「ファランヘ」(Falange) は、1933年10月、プリモ・デ・リベラの息子が結成したファシズム政党である。1937年、フランコは新ファランヘ党に改組し、党首となった。

<sup>1398</sup> 「人民戦線」(Frente Popular) は、1936年2月に初期に実施される総選挙に勝利し、ファシスト政権を倒すため、共産主義や社会主義を基盤とする左派政党と共和派の自由主義政党が同年1月に結成した選挙連合である。

<sup>1399</sup> ドイツのヒトラーやイタリアのムッソリーニは、スペインのファシストを支援した。特に、ヒトラーはフランコを支援するため、1937年4月、スペイン・バスク地方の小村ゲルニカを空爆している。ピカソの代表作の一つである『ゲルニカ』(画像右)は、その時の様子を表現したものである。



第2次世界大戦中、フランコは中立を保った。そのため、ドイツとイタリアは敗戦を機にファシズムから解放される一方、スペインではフランコによる独裁が存続した。

## 11) 民主化と EU 加盟

フランコは約 35 年にも亘り軍事独裁を敷いたが、1975 年 11 月に死去すると、立憲君主制が復活した。国王として即位したのは、フランコ自らが後継者に指名したファン・カルロス 1 世（フランス・ブルボン家）で、前国王アルフォンソ 13 世の孫であった。こうして、スペインは西ヨーロッパ諸国の中で最も遅れて民主化され、それが進展した 1986 年 1 月、EU（当時は EC）加盟を果たした。

スペインで「移行」（transición）とはフランコ体制から脱却を指す<sup>1400</sup>。民主化は地方分権化と表裏一体の関係にあり（205 頁参照）、各地方（州）に自治権が与えられたが、それに満足せず、完全独立を求める動きもあり、バスク地方では「バスク祖国と自由」（ETA）がテロを繰り返した。その活動は国際調停が成立する 2011 年 10 月まで継続し、治安を悪化させた。

それが取まると、今度はカタルーニャで独立運動が激しくなった。2017 年 10 月、この地域ではスペイン中央政府の命令や憲法裁判所の判決を無視する形で住民投票が強行され、有効票の約 90%が独立を支持した。これを受け、カタルーニャ地方政府（独立推進派）とスペイン中央政府（反対派）の関係はさらに悪化し、後者が地方政府のプチデモン首相に逮捕令状を出すと、彼はベルギーに逃れた。なお、中央政府の反対を無視し、独立が強行される事態には至っていない（490 頁以下参照）。

ところで、フランコの死後、国王として即位したファン・カルロス 1 世はスペインの民主化に貢献しながら約 40 年の長きに亘り国家元首を務めたが、贅沢な暮らしぶりを理由に国民の支持を失っていった。2012 年、スペインが経済危機に見舞われる中、アフリカのボツナワで象狩りに興じ、負傷したというニュースが流れると、国民の反感は強まった。これを受け、2014 年 6 月、ファン・カルロスは長男に王位を譲る意向を示した。当時、スペインでは生前譲位を可能にする法律が無かったため、2014 年 6 月、法改正を経て、ファン・カルロスは退位し、長男がフェリペ 6 世として即位するに至った。なお、フェリペ 6 世は、その 10 年前、離婚を認めないカトリックが普及しているスペインで<sup>1401</sup>、離婚歴のあるテレビキャスターと結婚し（2004 年 5 月、レティシア・オルティスとの結婚）、物議を醸した。

その後、前国王であるファン・カルロスは脱税容疑をかけられると、2020 年 8 月、国外に亡命し、改めて国民の反発を買うことになった。

<sup>1400</sup> Walther L. Bernecker, Spaniens Übergang von der Diktatur zur Demokratie, Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte 4, 2004, pp. 693-710, 693.

<sup>1401</sup> なお、スペインでも法律上は離婚が認められている。法律上の離婚と宗教上の離婚について、112 頁の注 321 を参照されたい。

## 【補説】スペイン・カタルーニャ自治州の独立問題

スペイン北東部に位置し、ピレネー山脈を挟んでフランスに接するカタルーニャ自治州は（下の地図で濃い緑色の部分）、スペイン最大の経済地域で、人口は国の約 16%（750 万）にも達する。州都のバルセロナは国内最大の港湾・工業都市であり、1992 年にはオリンピックが開催された。スペインのその他の都市で五輪が実施されたことはなく、バルセロナを擁するカタルーニャは、この国を代表する地域の一つと言っても過言ではない。

もっとも、典型的なスペイン像に当てはまるわけではない。なぜなら、カタルーニャはスペイン語とは異なる独自の言語を持ち、独自の伝統・文化を育んできたからである。まさに、これらの要素、すなわち、強い経済力と独自の言語・文化を背景に、カタルーニャでは独立の気運が非常に強く、スペイン中央政府と度々、対立してきた。「マドリードとの抗争」は、この地域の伝統の一つとも言える。その成果が実り、カタルーニャには他の地域よりも、若干、多くの自治が認められているが<sup>1402</sup>、近年、完全独立を求める運動が再燃し、世界中の注目を集めた。



### 1) スペイン王国の成立

カール大帝の在位期（768～814 年）、フランク王国の版図は最も広くなり、王国は東方（ドイツ地方）へと領土拡大した。他方、南方への進出はイスラム教徒に阻まれたが、カール大帝はイベリア半島北部から異教徒を追い出すと、彼らの侵入に備え、多数の辺境領を設けた。それらを合わせて**スペイン辺境領**と呼ぶが（571 頁の地図参照）、その内の一つの**バルセロナ辺境領**は、987 年、フランク王国体制から分離し、カタルーニャ君主国となる。

1137 年、この君主国は、その西側にあった**アラゴン王国**（現在のスペイン・アラゴン州）に統合されることになった（485 頁参照）。しかし、地中海貿易の要衝として、その後も独自の商人文化や言語、つまり、カタルーニャ語ないしカタラン語を維持し、繁栄する。

1469 年、アラゴン王国の**フェルナンド王子**は、イベリア半島中央部にあった**カスティリヤ王国**の**イザベル王女**と結婚した。後に、それぞれがアラゴン国王ないしカスティリヤ女王となり、共同で統治するようになると、両王国は統合され、**スペイン王国**が成立する（1479 年）。こうして、アラゴン国内にあったカタルーニャはスペイン王国に組み込まれる。王国はカタルーニャの自治を制限したため、度々、反乱が発生した。スペインからの独立が宣言されることもあったが（1641 年）、成功しなかった。

### 2) オーストリア系のスペイン王朝からフランス系のスペイン王朝へ

1516 年、スペインの王位は神聖ローマ帝国の帝位を実質的に世襲したハプスブルク家に引き継がれることになったが（カルロス 1 世の即位について、576 頁参照）、1700 年にスペイン＝ハプスブルクの家系が途絶えると、フランス国王ルイ 14 世の孫が新しい国王として即位した。これはイギリスやその他のヨーロッパ諸国の反発を招き、**スペイン継承戦争**（1701～1714 年）が勃発する（487 頁参照）。

独立の気運が強いカタルーニャは新国王を敵に回して兵を挙げたが、国王軍（スペイン・フランス連合軍）に首都バルセロナを包囲され、敗れた。その結果、スペイン王によってカタルーニャ憲法は廃止されるだけでなく、公の場におけるカタルーニャ語の使用が禁止されることになった。なお、1714 年（9 月 11 日）に戦火が鎮まったことにちなみ、FCバルセロナのホームの試合では、キックオフから「17 分 14 秒」が経過した時点で、「独立」のかけ声とともに、カタルーニャの旗が振られている。また、近年、この自治州では 9 月 11 日が祝日に指定された。

### 3) ナポレオン 1 世による併合（1812～1814 年）

1808 年 5 月、ナポレオンはポルトガル攻略を理由にスペインに出兵し、スペインを制圧すると、国王に廃位を言い渡し、フランスの属国とした。スペインの他の地域に同じく、カタルーニャもフランスに占領されることになるが、1812 年、カタルーニャはこの隣国に併合され、四つの県が設置された。なお、2 年後、ナポレオンは失脚したため、この状況は長く続かなかった。

<sup>1402</sup> スペインは全ての州が広範な自治権を与えられた自治州である（205 頁参照）。

#### 4) 独裁期における中央への反発

19世紀末頃、自治運動は再び強まるが、1923年、独裁者プリモ・デ・リベラ (Primo de Rivera) によって制圧された。なお、第1次世界大戦後におけるカタルーニャの自治運動はスペインの政情を不安定にし、独裁を生む要因の一つになる。

1929年に大恐慌が発生し、スペイン経済が混乱すると、プリモ・デ・リベラは政策に行き詰まり、失脚した。跡を継いだ政権も安定せず、1931年4月、9年ぶりに統一地方選挙が行われると、カタルーニャでは独立派が勝利を収め、自治政府を立ち上げた。スペイン全土でも共和派が躍進したことを受け、国王アルフォンソ13世はローマに亡命し、王政は崩壊する。その後に公布された共和国憲法の下で、カタルーニャには再び自治権が与えられることになった。また、1932年9月には正式に自治州として認められたが、それに満足しなかったカタルーニャは、1934年10月、独立を宣言した。しかし、僅か10時間後、スペイン中央政府が派遣した軍隊に鎮圧され、2年前に獲得した自治権まで失うことになった。

1936~1939年のスペイン内戦期、カタルーニャは「スペイン中央政府への抵抗」と「ファシストへの抵抗」という二重の抵抗を行っている。また、左派の人民戦線政府は коммуニスト (共産主義者) とアナーキスト (無政府主義者)<sup>1403</sup> に分裂し、武力衝突を引き起こすと (いわゆる内戦中の内戦)、後者の活動が盛んなカタルーニャは戦場と化す。さらに、この地域は人民戦線政府の拠点にもなったため、ファシストの激しい攻撃を受けた。

1939年、フランコが内戦を制すと、カタルーニャは自治権を奪われることになった。また、公の場におけるカタルーニャの言語や旗の使用、伝統音楽の演奏が禁止される等、約40年もの長きに亘り厳しい弾圧を受ける。なお、独裁者が強行した中央集権化の影響を受けたのはカタルーニャだけではないが、独自の文化・言語や法・機構制度を持っていたこの地域はより深い傷を負うことになった。

#### 5) スペインの民主化と地方自治

1975年にフランコが死去すると、スペインは民主化へ向け歩み出した。同時に地方分権が実施され (205頁参照)、1977年、カタルーニャ臨時自治政府の樹立が認められた。翌年12月に公布されたスペイン新憲法はカタルーニャの自治を保障しており (第2条参照)、1979年11月、スペイン議会はカタルーニャ自治憲章を採択した<sup>1404</sup>。これによって、カタルーニャには非常に広い範囲で自治が認められるようになる。ただし、財政分野には例外があり、(現在でも) 税収の使途は中央政府と共同で決定しなければならない。このような状況を改めるだけでなく、地域の独自性ないし自治の基盤を強化するため、州議会は、2005年9月、自治憲章の改正案を採択し、国会に提出した。しかし、特に、カタルーニャを「国」(Nación) として表記することや、カタルーニャ語の扱いについて議会は了承せず、2006年3月、独自の改正案を作成した。それによれば、カタルーニャは「国」ではなく、自治権が与えられた「民族」(nacionalidad) となる。ただし、前文や第8条 (カタルーニャの国旗、国の祝日、国家等) では「国」という表現が用いられることになった。また、カタルーニャ語もスペイン語と並び公用語として認められる一方で、使用する言語によって差別されないことが定められた。

数ヶ月に及ぶ審議を経て、自治憲章は、2006年7月、スペイン中央政府 (左派のサパテロ政権) と国会に議席を持つ、ほぼ全ての政党の支持を得て改正されたが、これに納得しなかった民衆党がスペイン憲法裁判所に提訴したため、争いの

<sup>1403</sup> スペインの共産党はスターリンやコミンテルン (396頁の1208参照) の指導に従い、ブルジョワジーと協力してフランコ勢力と戦ったのに対し、同じ左派でも、アナーキスト (全国労働者連合・イベリア・アナーキスト連盟 CNT-FAI) は、これを革命の放棄と批判した。当初、両者は共に人民戦線政府に参加していたが、激しく対立するようになり、この状況は「スペイン内戦中の内戦」と呼ばれた。闘争に敗れた後者の指導者ドルティについて、ドイツ作家のエンツェンスベルガーは1972年に発表した小説『スペインの短い夏』(Der kurze Sommer der Anarchie) の中で描いている。Alexandre Froidevaux, Klassenkampf in Spanien und ein internationaler Konflikt, Eine kurze Chronik des Spanischen Bürgerkrieges (1936-1939), Alexandre Froidevaux ed., 80 Jahre danach, Der Spanische Bürgerkrieg, MATERIALIEN, No. 14, 2nd edition, 2018, pp. 4-12, 8; Berthold Seewald, Als Anarchisten in Katalonien die Macht übernahmen, in <https://www.welt.de/article169334429/>

<sup>1404</sup> カタルーニャ自治憲章はカタルーニャ議会によって起草され、この地域の住民投票で承認された後、1979年11月、スペイン国会によって承認された。翌月、スペイン国王が国内法の一つとして署名し、同月末、発効した。

場は議会から法廷へと移されることになった。合憲性が問われた規定は 200 を越えたため、審査は長引き、判決が下されたのは約 4 年後の 2010 年 6 月 28 日である。大部分の規定はスペイン憲法に合致することが確認されているが、例えば、「国」という表現が用いられている前文や、租税分野でも州に自治を認める規定は憲法に違反するため無効と判断された。カタルーニヤの住民の多くは、これに反発し、州都バルセロナでは 100 万人規模のデモが発生した。2017 年以降に再燃した独立運動はそれに端を発する。

なお、この法廷闘争は政治的対立が争いの場を変えたものに過ぎない。つまり、改正憲章の合憲性を争い提訴したのは、当時は野党党首であったが、2011 年 12 月から 2018 年 6 月までの期間はスペイン首相を務めたラホイである。この右派政治家はカタルーニヤの独立を断固として認めず、独立派とは対話も拒むほどであった。また、幾度も憲法裁判所に訴えを提起しては、その都度、勝利を手にしてきた。それゆえ、2017 年 10 月の住民投票も、2010 年 6 月の憲法裁判決に端を発するラホイ政権への抗議という意味合いが強かった。実際に、自治憲章が改正された 2006 年当時、独立を支持する住民は 15% 程度に過ぎなかったが、その後は賛否が拮抗する状態になる。また、ラホイをかつての独裁者フランコと同視する住民も少なくなかった。

## 6) 2017 年 10 月の住民投票と独立運動

2017 年 10 月 1 日、スペインのカタルーニヤ自治州ではスペインからの独立の是非を問う住民投票が実施された。この投票は、同年 9 月、自治州議会が下した決定に基づき行われたが、決定の翌日、スペイン憲法裁判所は、同国の憲法上、国民投票（ないし住民投票）を実施する権限は国（中央政府）にのみ与えられているため、自治州の決定は違憲であるという判断を下している。自治州がそれに従わなかったため、スペイン司法当局は、すでに印刷されていた投票用紙やビラを押収し、投票所を封鎖する措置に出た。また、投票日には中央政府より派遣された国家警察や治安警備隊がカタルーニヤの住民にゴム銃を発射し、投票を阻止している。

これらの影響もあり、投票率は約 49% に留まったが、有効票の 90% は独立を支持した。これを受け、自治州政府はスペインからの独立を宣言する一方、まずはマドリッドの中央政府と協議すべきであるとし、宣言の実施を見送った。独立を断固として認めない中央政府（当時のラホイ政権）は、この呼びかけに応じず、両者間の関係が緊張する中、10 月 27 日、州議会は独立を宣言した。



画像左：プチデモン欧州議員<sup>1405</sup>

その数時間後、スペイン議会（上院）は、スペイン憲法第 155 条第 1 項に基づき、州政府の権限を停止する決定を下している。カタルーニヤの自治権は停止され、中央政府より派遣された者によって統治されることになった。また、その一環として、自治州のプチデモン首相（当時）は罷免された。なお、彼に対しては、スペイン憲法裁判所の判断に従わず住民投票を強行したことや、公費を不正に使用したことを理由に逮捕状も出されている。逮捕を逃れるため、プチデモンは、10 月末、ブリュッセルに逃亡した。ベルギーの首都が逃亡先に選ばれた理由としては、この都市には EU の主要機関が多数、設置され、EU 内の注目を集めやすいことや（プチデモンは、スペイン中央政府との対立に際し、EU に支援を求めていた）、ベルギーも分離・独立問題を抱えており（181 頁参照）、特に、ブリュッセルが位置するフランドル地方の要人はカタルーニヤの独立に理解を示していることが考えられる<sup>1406</sup>。

2019 年 5 月、プチデモンは EU の議会である欧州議会（622 頁参照）の選挙に出馬し、当選した。これによって EU 内でも彼の処遇に関する問題が発生し、EU 裁判所での訴訟が繰り返されることになった（後述参照）。

2017 年 10 月、中央政府は前述したカタルーニヤ州政府の権限を停止するだけではなく、州議会を解散させ、12 月 21 日に選挙を実施することも決めている。後者には独立運動を阻止する狙いがあったが、実際に、独立に反対する政党が最も多くの票を獲得した。しかし、独立を支持する 2 つの政党も躍進し、獲得票を合わせると半数を超えた。ベルギーに逃亡していたプチデモンが州首相の再任を目指す、ラホイは憲法裁判所に一連の訴えを提起し、対抗しているが、自治州

<sup>1405</sup> 画像出典：欧州議会の公式サイト（[https://www.europarl.europa.eu/meps/en/202351/CARLES\\_PUIGDEMONT%20I%20CASAMAJO/home](https://www.europarl.europa.eu/meps/en/202351/CARLES_PUIGDEMONT%20I%20CASAMAJO/home)）。

<sup>1406</sup> See The Guardian, Catalan leaders facing rebellion charges flee to Belgium, in <https://www.theguardian.com/world/2017/oct/30/492ft-he492-prosecutor-calls-for-rebellion-charges-against-catalan-leaders>

の外から政権を運営することの適法性は州内の法律家からも問題視された。そのため、翌年 3 月、プチデモンは首相への立候補を暫定的に取り止めている<sup>1407</sup>。なお、その後、州法が改正され、州外に滞在する者が首相を務めることも可能になったが、5 月、スペイン憲法裁判所はこの法改正を無効と判断した。同月までに州政府が成立しなければ、再選挙が必要であったため、プチデモンが独立強硬派のキム・トーラ (Joaquim Torra) を首相候補に指名すると、州議会によって承認され、トーラが新首相になる。しかし、トーラも独立に関わったことで有罪になり、2020 年 9 月、失職した。

上述したように、ラホイはカタルーニヤの独立を断固として認めなかったが、2018 年、彼が所属する国民党の汚職が発覚し、政権を追われることになった。6 月、スペイン議会が僅差ではあるものの、内閣不信任案を可決すると、ラホイは退陣した。その後、社会労働党のサンチェス党首が新政権を発足させると、カタルーニヤ自治州との対立は和らぐことになる。

2023 年 7 月、総選挙が実施され、社会労働党は国民党に敗れたが、プチデモンが党首を務めるジュンツ・パル・カタルーニヤ (Junts)<sup>1408</sup>やその他の政党の支持を得て、11 月、サンチェス首相の続投が決まった。その裏では、カタルーニヤ独立運動に関与したことで起訴されている独立派に恩赦を与える取り決めがなされており、2024 年 3 月、下院は恩赦法の改正を決定した<sup>1409</sup>。なお、この政治取引を「憲法違反」「政治の墮落」として批判する国民も少なくなく、首都マドリッドでは大規模なデモが起きている<sup>1410</sup>。

### ◎ 欧州議員としてのプチデモンと不逮捕特権

チャールズ・プチデモンは、2019 年 5 月の欧州議会選挙で当選を果たしており、2024 年 4 月 1 日現在、欧州議員である<sup>1411</sup>。なお、同選挙では比例代表制が採用されており、彼が党首を務める政党 (1408 参照) は 2 議席、獲得した<sup>1412</sup>。カタルーニヤの独立を支持する政党としては、カタルーニヤ共和主義左翼も 1 議席、得ている<sup>1413</sup>。

プチデモンの議員資格は、2019 年 5 月の選挙後、直ちに認められたわけではない。スペインの中央選挙委員会は、同国の法律上、欧州議員になるには国内憲法に従うことを委員会の前で宣誓・誓約する必要があるとし<sup>1414</sup>、ベルギーのワートルロー (475 頁参照) に逃亡中のプチデモンはそれを拒んだた

<sup>1407</sup> La Vanguardia, Puigdemont renuncia a presidir la Generalitat y señala la 493ft he493ont493 de Jordi Sánchez, in <https://www.lavanguardia.com/politica/20180301/441169224247/493ft he493ont-paso-al-lado-presidente-generalitat-candidatura-sanchez.html>

<sup>1408</sup> 「ジュンツ・パル・カタルーニヤ」(Junts per Catalunya「カタルーニヤのための結束」の意)は、プチデモンが党首を務める「カタルーニヤ欧州民主主義党」(Partit Demòcrata Europeu Català, PdeCat)と無所属の議員で構成される選挙連合で、2017 年 12 月に結成されているが、2018 年 7 月、政党となる。党首はプチデモンが務めている。See <https://www.juntsxeuropa.cat>

<sup>1409</sup> 時事通信「逃亡の元州首相、凱旋へのろし＝恩赦で振り返り目指す独立派―スペイン・カタルーニヤ自治州」(2024 年 3 月 30 日付け <https://sp.m.jiji.com/article/show/3201729>)。なお、上院は法律の制定を最長 2 ヶ月間、遅らせることができるが、下院が再び法案を採択すれば、法律は制定される。

<sup>1410</sup> See tagesschau.de, Landesweite Proteste gegen Amnestie für Katalanen, <https://www.tagesschau.de/ausland/europa/spanien-amnestie-katalonien-separatisten-proteste-100.html>.

<sup>1411</sup> See website of European Parliament, in [https://www.europarl.europa.eu/meps/en/202351/CARLES\\_PUIGDEMONT+I+CASAMAJO/home](https://www.europarl.europa.eu/meps/en/202351/CARLES_PUIGDEMONT+I+CASAMAJO/home)

<sup>1412</sup> なお、2020 年 1 月末、イギリスが EU を脱退したことに伴い、スペインの議席数が増え、プチデモンの所属政党の議員は 3 人になった。

<sup>1413</sup> See website of European Parliament, in [https://www.europarl.europa.eu/meps/en/197832/DIANA\\_RIBA+I+GINER/home](https://www.europarl.europa.eu/meps/en/197832/DIANA_RIBA+I+GINER/home)

<sup>1414</sup> プチデモンは、スペイン法はそのような要件を設けていないとし、中央選挙委員会の法解釈を争っている。なお、欧州議員は EU の議員であり、国内法でその資格について定めてよいかという問題もある。後者について、Order 493ft he Vice-President 493ft he General Court 493ft he EU in the Case C-646/19 P® Puigdemont ® Casamajó

め、当選者リストに掲載しなかった。それを受け、欧州議会もプチデモンを議員として認めていなかったが、その適法性を争い、彼が EU 裁判所に提訴すると、第 1 審（一般裁判所）はプチデモンの主張を退ける一方で、第 2 審（最終審の ECJ）は暫定的に認めた<sup>1415</sup>。これを受け、議会は、2020 年 1 月、彼の議員資格を認めるに至った。

議員となったプチデモンには不逮捕特権が保障されるようになったが、スペイン当局の要請に基づき、欧州議会は、2021 年 3 月、この権利を否認した。それを不服とし、プチデモンが EU 裁判所に提訴すると、第 1 審は仮処分申請を却下したが、第 2 審はこれを認めた（2022 年 5 月）<sup>1416</sup>。これにより、不逮捕特権は暫定的に保障されることになったが、本案審査において、第 1 審は特権を（再び）否認した（2023 年 7 月）。2024 年 4 月現在、控訴が係属中である<sup>1417</sup>。

このように、法廷闘争はまだ終わっていないが、スペインを除く EU 加盟国の裁判所はプチデモンの逮捕・本国送還に消極的である。とりわけ、プチデモンが滞在するベルギーの裁判所はスペイン当局の要請に応じていない。また、2021 年 10 月、彼は、イタリア・サルディーニャ島に移動した際、現地の警察に身柄を拘束されたが、イタリアの裁判所は不逮捕特権に基づき、スペインへの引渡しを認めなかった。

なお、欧州議員になる前の 2018 年、プチデモンはドイツでも当局に拘束されているが、同国の裁判所は彼が反逆罪で起訴されることに疑義を持っていた。つまり、反逆罪は不当な刑罰と考えていたが、スペインはこの罪を排除しなかったため、ドイツは送還要請に応じず、プチデモンは釈放された<sup>1418</sup>。

ところで、欧州議員の任期は 5 年であり、次期選挙は、2024 年 6 月上旬に実施される。プチデモンは、それに先立ち、5 月上旬に実施される州議会選挙での立候補を表明している<sup>1419</sup>。上述したように、彼の欧州議員としての資格（国内法で要件を設けることの許容性、国内選挙管理委員会の決定の拘束性）や不逮捕特権めぐり裁判が繰り返され、まだ決着していないが、6 月の欧州議会選挙で再選されないとすれば、訴訟を継続する必要性もなくなる。

---

and Comín *®* Oliveres v Parlament, para. 29 (Case T-388/19 *®*)を参照されたい。なお、この問題はまだ解決されておらず、2024 年 4 月 1 日現在、EU 裁判所（ECJ）に訴えが係属中である。See Case T-388/19 Puigdemont *®* Casamajó and Others v Parliament; Case C-572/23 P Puigdemont *®* Casamajó and Others v Parliament.

<sup>1415</sup> Order of the Vice-President, *ibidem*. なお、第 2 審は原審に差し戻しているが、差戻審は本案判決で（再び）プチデモンの主張を退けている。See Case T-272/21 Puigdemont *®* Casamajó and Others v Parlament. 彼はそれを不服として控訴したため、2024 年 4 月 1 日現在、法廷闘争はまだ決着していない。See Case C-629/21, Puigdemont *®* Casamajó and Others v Parlament und Spanien.

<sup>1416</sup> Case C-629/21 P<sup>®</sup>, *ibidem*.

<sup>1417</sup> Case C-629/21 P, *ibidem*. See also Case T-272/21, *ibidem*.

<sup>1418</sup> Der Spiegel, Spanien zieht internationalen Haftbefehl gegen Puigdemont zurück, in <https://www.spiegel.de/a-1219232.html>

<sup>1419</sup> See heute.de, Puigdemont will nach Spanien zurückkehren, <https://www.zdf.de/nachrichten/politik/ausland/puigdemont-spanien-rueckkehr-wahl-katalonien-100.html>

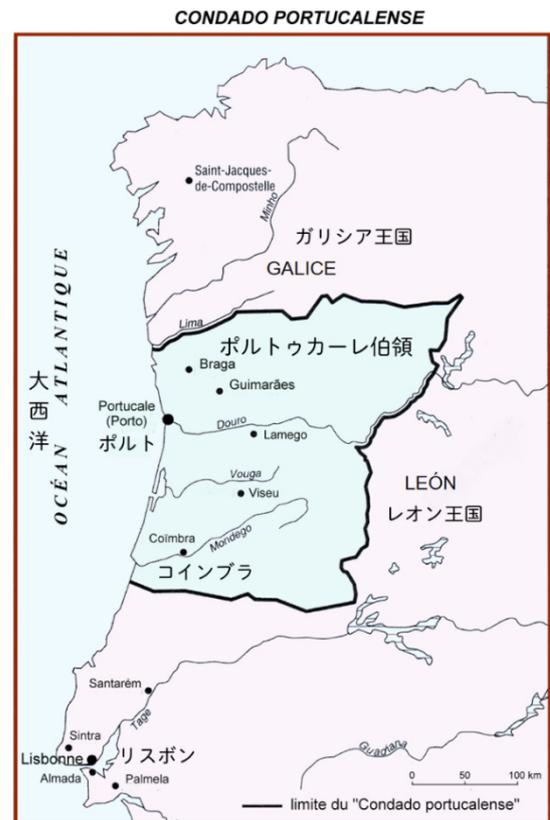
## 9. ポルトガル史

イベリア半島（75 頁参照）の西部に位置する**ポルトガル共和国**は、1143 年に建設されたポルトガル王国を起源とする。1910 年、王政を廃止し、現在の共和政に移行した。

12 世紀半ばに王国が成立するまで、ポルトガル地方は数百年もの長きに亘り、イスラム教徒に占領されていた。先住のキリスト教徒も幾つか国を建設しては分離・統合を繰り返したが、11 世紀後半になると、カスティリヤ王国（485 頁参照）が勢力を伸ばし、異教徒との戦いを牽引した。次世紀の半ば、この国から独立したのがポルトガルである。なお、国土回復運動の拠点となった「**ポルトゥカーレ伯領**」<sup>1420</sup>が「ポルトガル」という国号の由来になる。

1249 年、異教徒を追い出し、イベリア半島の南端まで領土を広げたポルトガルは、その延長線でアフリカ大陸にも進出し、いち早く海洋大国にのし上がった。また、ブラジルを始めとする植民地を世界各地に建設し、植民地帝国の先駆となる。

なお、ポルトガルはヨーロッパ大陸の「西隅」に位置し、国境を接するのはスペインのみである（75 頁の注 235 参照）。そのため、諸国の影響を強く受けていない。第 2 次世界大戦では中立を宣言し、戦争の影響を受けることはなかったため、戦後も軍事独裁が続いた。植民地の独立や西欧諸国との関係改善が図られたのは 1970 年代の中旬である。



11 世紀後半のポルトゥカーレ伯領<sup>1421</sup>

ポルトガルの首都リスボンはポルトゥカーレ伯領に含まれず、イスラム教徒に占領されていた。

レオン王国とガリシア王国はカスティリヤ王国に統合され、後にスペインに変わる。

### 1) 先史時代、古代ローマ時代

ポルトガルの領土であるイベリア半島南西部は、古くは**ルシタニア**と呼ばれ（483 頁参照）、ルシタニア人が住んでいた。彼らは先住民のイベロ人とヨーロッパの中央部から移動してきたケルト人を祖とする。

紀元前 3 世紀末、この地域は古代ローマの属州になるが、ルシタニア人の抵抗が根強く続いたため、ローマが制圧したのは前 1 世紀後半である。また、3 世紀頃までにはキリスト教が広まった。

ポルトガル語は古代ローマの公用語であるラテン語より派生した言語である。発祥地のガリシアはポルトガルの北方に位置し、現在はスペインに属す（207 頁の地図参照）。

4 世紀末頃、ローマ帝国が東西に分割されると、ルシタニアは西ローマ帝国の領土となった。

<sup>1420</sup> ポルトゥカーレ伯領は現ポルトガル北部（ノルテ地方）に位置しており、9 世紀中頃、レオン王国のアルフォンソ 3 世によって創設された。1071 年、ポルトゥカーレ伯はガリシア王国との戦争中に敗死し、領地は王国に吸収されたが、その直後、国王（ガリシア 2 世）は実弟であるアルフォンソ 6 世に幽閉されることになる。1093 年、アルフォンソ 6 世は娘婿のエンリケをポルトゥカーレ伯に叙し、領地を与えた。1143 年、エンリケの長子がポルトガル王国を興し、初代国王アフォンソ 1 世になる。

<sup>1421</sup> 画像出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Condado\\_portucalense\\_carte-1070-fr.png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Condado_portucalense_carte-1070-fr.png)（日本語の表記は著者が付けたものである）

## 2) イスラム支配、ポルトガル王国の成立と国土回復運動（レコンキスタ）の完了

476年に西ローマ帝国が消滅すると、ルシタニア地方にはスエビ王国が成立するが、6世紀末、**西ゴート王国**（484頁参照）に併合された。この王国はトレドを首都として栄えたが、8世紀初旬、アフリカ大陸から北上してきたイスラム勢力（ウマイヤ朝、ムーア人）に滅ぼされる。以後、550年の長きに亘り、ポルトガル地方はこの異教徒に占領されることになる。

先住のキリスト教徒はイベリア半島北部の山岳地帯に逃れ、**アストゥリアス王国**を建てると、この国を拠点とし、西ゴート王国の復活ないし国土回復（レコンキスタ）を目指した。この王国は後に**レオン王国**と呼ばれるようになるが、11世紀前半、**カスティリヤ王国**（485頁参照）が独立し、異教徒との戦いを主導するようになった。同世紀の後半、カスティリヤ王の**アルフォンソ 6世**はイスラム勢力の拠点となっていたトレドを攻略した。また、同じキリスト教国であるフランスの支援を受け、イベリア半島西岸（現ポルトガル北部）から異教徒を追い出すことに成功する。1093年、これに貢献した**エンリケ<sup>1422</sup>**は**ポルトゥカーレ伯**に叙され、領地が与えられた。

1139年、エンリケの子であるアフォンソ・エンリケス（後のアフォンソ1世）は、オーリケの戦いでイスラム勢力を撃退すると、王国建設の意志を固め、1143年、**ポルトガル王国**（ブルゴーニュ朝）を建設した。ムーア人との戦いはその後も続いたが、1249年、イスラム最後の拠点で、半島の南端に位置するファロを奪回すると、ポルトガルはスペインよりも約240年早く、国土回復を達成する。また、1255年、ルシタニア地方の中心地コインブラからリスボンに首都を遷した。

## 3) 大航海時代

1383年、「美男王」と呼ばれたフェルナンド1世が亡くなると、娘婿のカスティリヤ王が王位承継を主張し、侵入してきたが、亡き王の異母弟で、アビス騎士団長を務めていたジョアンによって撃退された。英雄と称えられた騎士団長はジョアン1世として即位し、**アビス朝**の始祖となる。

ジョアン1世の第5子**エンリケ**は西アフリカ探検に乗り出す。後に「航海王子」の異名を与えられる彼が、1415年、ジブラルタル海峡に突き出た**セウタ<sup>1423</sup>**をイスラム勢力から奪取すると、**大航海時代**（342頁参照）の幕が開き、アフリカ大陸西岸に交易の拠点が次々と築かれていった。ポルトガルは国家事業として海洋進出を進め、1498年、ヴァスコ・ダ・ガマがインド航路を発見し、香辛料貿易が確立すると、黄金期を迎える。

1492年、スペイン女王の支援を受けたコロンブスがアメリカ大陸に到達した。新たな植民地獲得で衝突することを避けるため、1494年、ポルトガルはスペインと**トルデシヤス条約**を締結する。これに従い、ブラジルはポルトガルの、それより西方にある地域はスペインの植民地になる。

16世紀中頃、ポルトガルは我が国と南蛮貿易を開始するようになるが（キリスト教と鉄砲ももたらされた）、ポルトガルの繁栄は長く続かず、16世紀後半には衰えが開始する。

## 4) スペインへの併合

1578年、エンリケ1世が66歳で即位した。彼はカトリックの聖職者（枢機卿）の経歴を持っており、結婚して嗣子を残すことは許されていなかったため、2年後、彼が死去すると、長姉の子で、スペイン国王のフェリペ2世（スペイン＝ハプスブルク家、486頁参照）が王位を承継し、スペインとの同君連合が成立した。なお、彼はポルトガル王としてはフェリペ1世と名乗った。以後、60年近く、ポルトガルはスペインの一地方になるが、独自の法律や諸制度を維持することができた。

17世紀に入ると、アメリカの植民地における銀の産出量が減り、国力は低下した。また、アジアにおける植民地（モルッカ諸島やスリランカ等）をオランダに奪われた。なお、1639年、江戸幕府は鎖国に踏み切り、ポルトガル船の来航

<sup>1422</sup> 彼はフランス・ブルゴーニュ公（535頁参照）の5男であり、フランス語名は「アンリ」である。カスティリヤ王アルフォンソ6世の呼びかけに応じてイベリア半島に渡り、国土回復運動に参加した。11世紀末、ガルシア地方とポルトガル地方北部の解放に貢献すると、領地（ポルトゥカーレ）と爵位（伯爵）を与えられた。また、カスティリヤ王の娘を妻にし、二人の間に生まれた男子が初代ポルトガル国王アフォンソ1世（在位1143～1385年）となる。

<sup>1423</sup> 1580年、ポルトガルがスペインに併合されると、セウタはスペイン領となり、現在に至る（77頁参照）。

を禁止した。これはキリスト教の布教を禁止するための措置であったが、その約 90 年前 (1549 年)、我が国に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルはスペイン人である。イエズス会<sup>1424</sup>の創設者の一人である彼は独自に日本に到着しているが、ポルトガル商船も来航し、南蛮貿易を行うようになっていた。他方、：スペインが日本との貿易を始めたのは約 30 年後 (1584 年) である。

## 5) スペインからの独立 (ブラガンサ朝の創始)

30 年戦争末期の 1640 年、カタルーニャ (490 頁参照) がスペインに対して反乱を起こすと、ポルトガルも蜂起し、独立を達成した。ポルトガル貴族でブラガンサ公のジョアンが国王となり、**ブラガンサ朝** (~1910 年) が開かれる。もっとも、スペインとの戦争 (ポルトガル王政復古戦争) はその後も 30 年近く続いた。和平が成立し、スペインが独立を認めたのは 1668 年である。なお、ブラガンサ朝はオランダともアジアや南米で戦っているが、1667 年、停戦に応じ、オランダ領ブラジルを獲得した。

その後、新王朝は海外交易の比重をアジア・アフリカから南米ブラジルに移し、ブラジルの砂糖産業、金鉱開発を強化するようになった。

## 6) イギリスによる支配

19 世紀初旬、フランス皇帝の**ナポレオン**はヨーロッパを広い範囲で支配したが、当初、中立政策をとっていたポルトガルへは侵攻しなかった。しかし、ポルトガルが大陸封鎖令 (462 頁参照) の実施を拒むと、1807 年 11 月、ナポレオンは軍隊を派遣した。女王のマリア 1 世<sup>1425</sup>は戦いを放棄し、約 1 万 5000 人の貴族や官僚等と共に植民地ブラジルに亡命するが、国民はイギリスの支援を受けて抗戦し、1811 年、ナポレオン軍の撃退に成功する。ところが、その後はイギリスに支配されることになったため、国王は帰国しなかった。帰還が実現する 1822 年までの 15 年間、ポルトガルの首都はブラジルのリオデジャネイロに置かれていた。

## 7) 立憲君主政の発足

1820 年 1 月、スペインで立憲革命 (488 頁参照) が起きると、ポルトガルに波及し、地方都市のポルトでイギリスに対する暴動が発生した。反乱は全国に広がり、9 月、臨時政府が発足する (自由主義革命)。

1822 年 7 月、同政府の要請に応じ、国王のジョアン 6 世がブラジルから帰国した。9 月には新憲法が施行され、政体は立憲君主政に移行する。

なお、国王の帰国は植民地の独立を促すことになった。同月、国王を失う形になったブラジルが独立を宣言すると<sup>1426</sup>、ポルトガルは最大の植民地を失うが、アフリカでは 1970 年代まで植民地を保持した (375 頁参照)。また、1842 年まで奴隷貿易を行った。

## 7) 共和政への移行と軍事政権の発足

1910 年 10 月、財政危機や政局不安定を理由に立憲君主制が崩壊し、共和政に移行する。その後、国政はさらに混乱し、1926 年、ダ・コスタ将軍がクーデターを起こして軍事政権を立てた。なお、1914 年 7 月に第 1 次世界大戦が勃発すると、ドイツ軍からアフリカにおける植民地を守るため、1915 年 5 月、参戦した。

## 8) サラザールとカエターノによる独裁

その後も政局は安定しなかったが、1932 年、財政危機への対応で名を揚げた財相のアントニオ・サラザールが首相に就任し、文民政治に戻った。翌年、新憲法の下で新しい国家体制がスタートしたが、彼は権力を独占し、病気で引退する

<sup>1424</sup> イエズス会は、宗教改革期、苦境に立たされていた教皇に絶対服従を誓い、プロテスタントに対抗することを目的として設立された男子の修道会である (350 頁参照)。

<sup>1425</sup> マリア 1 世は精神を患っていたため、4 男のジョアンが摂政を務めていた。彼は、1816 年 3 月、母親の死に伴い、ブラジルでジョアン 6 世として即位している。

<sup>1426</sup> 国王ジョアン 6 世の息子で、ブラジルに残ったドン＝ペドロが皇帝となり、ブラジル帝国が発足した。

1968年まで独裁を敷いた。なお、1961年、アフリカの植民地（西岸のアンゴラ、東岸のモザンビーク、ギリア湾のギニアビサウ）で独立運動が起きたが、他のヨーロッパ諸国とは異なり、ポルトガルは徹底抗戦で臨んだ。そのため、植民地の独立は、独裁が崩壊する1970年代半ばになって、ようやく実現した。

サラザールの跡を継いだカエターノも独裁を断行したが、1974年4月、植民地支配に反対する青年将校が「**大尉たちの革命**」<sup>1427</sup>を起こし、政権を転覆させた。こうして「エストアド・ノヴォ」(Estado Novo 新しい状態)と呼ばれた独裁期(1933～1974年)が終わり、隣国スペインを除くと西欧では最も遅れて民主化が始まった。

## 9) 民主化と欧州統合への参加

1976年7月、マリオ・ソアレス社会党内閣が成立し、民主化を推進した。これを受け、他の西ヨーロッパ諸国との関係も改善し、同年、ポルトガルは欧州評議会に加盟する。また、1986年1月、EC（現EU）に加盟した。

なお、第2次世界大戦中、ポルトガルは中立政策をとっていたが、1943年以降、アゾレス諸島（北大西洋上にあるポルトガルの領土）に建設された空軍基地の使用を米英に許可した。現在でもアメリカは同諸島に基地を設け、ヨーロッパや地中海への重要な中継地として使用している。

戦後は西側陣営に属し、1949年に設立された **NATO** の原加盟国にもなる（406頁参照）。

2004年6月、EU統合を発展させるため、**欧州憲法条約**が制定された。その発効には全てのEU加盟国の批准が必要になるが、フランスとオランダで実施された国民投票で批准に反対する票が半数を超えたことを受け、加盟国は同条約の発効を断念した。それに代わる条約が2007年12月、ポルトガルの首都リスボンで締結され、同条約は、全加盟国の批准を終え、翌年12月に発効している。これに伴い、ECはEUに変わった。現在のEUはこの**リスボン条約**に基づいている。

---

<sup>1427</sup> 革命はほぼ無血状態で実現し、兵士達は銃口にカーネーションを挿していたため、「**カーネーション革命**」とも呼ばれる。

## 10. イギリス史

イギリスは以下の四つの地域ないし「国」(country) からなる立憲君主国である。

- ・イングランド (右図内の赤)
- ・ウェールズ (緑)
- ・スコットランド (青)
- ・北アイルランド (オレンジ)

イングランドは政治・経済、面積、人口といった種々の点で国、すなわち、イギリスの要になっており、イングランドの歴史はイギリスの歴史として扱われている。

1世紀中頃、イングランドはローマ帝国に制圧され、その属州**ブリタニア**となる。9世紀には北欧のデーン人(ヴァイキング)の侵入を受けた(223頁参照)。その後は、フランス貴族が国王として君臨する時代が続き、フランスと対戦する傍ら、ウェールズ公国、スコットランド王国と統合し(それぞれ1536年、1707年)、「**グレートブリテン王国**」に発展した。

1801年、この王国とアイルランド王国が合併し、「**グレートブリテンおよびアイルランド連合王国**」が成立するが、1922年、アイルランド島の南部が独立した(508頁参照)。これを受け、国号は「**グレートブリテン及び北アイルランド連合王国**」に変わり、現在に至る。なお、この国号に示されているように、「北アイルランド」は「グレートブリテン」に含まれておらず、イギリスは両者が統合した王国である。

※ 「グレートブリテン」の「グレート」の由来について、220頁を参照されたい。



### 1) 先史時代

イングランド、スコットランド、ウェールズの領土となっている島を**グレートブリテン島**と呼ぶが、1万年前は大陸とつながっていたと考えられている<sup>1428</sup>。この島には、遙か前(10数万年前)の旧石器時代より人類が生息しており、紀元前3000~前1500年頃には南部のソールズベリーに**ストーンヘンジ**が建てられた(306頁参照)。

前8世紀頃、大陸よりケルト人が侵入してきた。彼らの部族の内、最も有力であったブリトン人にちなみ、古代ローマは彼らの居住地を「**ブリタニア**」と呼んだ。

### 2) 古代ローマ時代

古代ローマがグレートブリテン島を制圧したのは1世紀半ばになってからである。その100年前(前55~前54年)、カエサルはドーバー海峡を渡って、この島に遠征しているが、攻略できなかった。

西暦43年、イングランド制覇を成し遂げた帝政ローマは、この地域に属州ブリタニアを建設したが、島の北部、つまり、スコットランドにまで勢力を拡大することはできなかった。142~144年、**アントニヌス・ピウス帝**は島北部(現スコットランド中央部)に**アントニヌスの長城**を築き、カレドニア人の侵入に備えており、この砦が帝国の北限になる(565頁参照)。

なお、その約20年前、ハドリアヌス帝も長城を建設している。この城壁はアントニヌスの長城よりも160km南に造られ、イングランドとスコットランドの境界の近くにある。保存状態もよく、1987年、世界文化遺産に登録されたが(74頁参照)、アントニヌスの長城(後に登録)の状態は良くない。



ハドリアヌスの長城

<sup>1428</sup> See I. De Groote, M. Lewis & C. Stringer, Prehistory of the British Isles: A tale of coming and going, BMSAP (2017), in <https://doi.org/10.1007/s13219-017-0187-8>

ローマ人が植民地を築いた地域はローマ＝ブリテン (Roman Britain) と呼ばれ、彼らによって先進の文化がもたらされた。各地にコロッセウムや公衆浴場等、古代ローマを象徴する施設が建てられ、道路や水道も整備されている。ロンドン、マンチェスター、ヨーク等はローマ人によって建設された都市であり、中でもロンドンは穀物の輸出地として繁栄した<sup>1429</sup>。

ローマ＝ブリテンの人口は 280～300 万人で、その 3 分の 1 はローマ兵やその家族と推測されている<sup>1430</sup>。これに表われているように、この属州はスコット人 (カレドニア人) やアイルランド人、また、ゲルマン人の一派であるザクセン人の侵入を受けており、ローマは国境の警備に力を入れていた。なお、ブリトン人もローマ人に対して、度々、反乱を起こしている。

395 年、ローマ帝国は東西に分割され、属州ブリタニアは西ローマ領となる。西ローマは発足当初から弱体であり、各地にゲルマン人が進出してくると、帝国はブリタニアを維持することができなくなり、409 年頃、グレートブリテン島から撤退した。

### 3) イングランド統一とデーン人による占領 (デーン朝)

その後、ブリトン人の部族制が復活し、彼らは互いに争うようになった。また、海を渡って侵入してくるゲルマン人から島を防衛する必要性も生まれる。アーサー王は、5 世紀末頃、彼らを撃退した英雄として語り継がれているが、その実在は明らかになっていない。

5～10 世紀、北欧から渡来したアングロ・サクソン人は先住民のブリトン人を征服し、また、彼らと同化しながら定住し、各地に王国を建設していった。その内、七つの大規模な国は「七王国」とも呼ばれるが (221 頁の地図参照)、他にも多数の小国が建設されている。

七王国の一つであるケント王国のエグバード王子はフランク王国のカルル大帝 (572 頁参照) の下で亡命生活を送ることもあったが、802 年、ウェセックス王国<sup>1431</sup>の王になる。また、829 年には史上初のイングランド統一を達成した。しかし、その直後より、デーン人 (デンマーク人) の侵入が激しくなり、島の中・東部には「デーンロー」が形成された (223 頁参照)。11 世紀前半にはデンマーク王のクヌートがイングランドを制し、デーン朝を開いた。なお、その約 100 年前、デーン人はフランス北西部にノルマンディー公国を建てており (223 頁参照)、彼らは後にイングランドを制覇することになる。

### 4) ノルマン・コンクエスト (ノルマン朝)

クヌートの死後、ウェセックスのエドワード<sup>1432</sup>がイングランドを奪回し、イングランド王になるが、彼が後継者を指定せず亡くなると、姻戚関係にあるノルマンディー公ギョーム 2 世が王位継承を主張して兵を挙げた。1066 年、彼はこの戦いを制し、イングランドでノルマン朝を開く (ノルマン・コンクエスト、223 頁参照)。これを機に、ノルマンなまりのフランス語が支配階級の言葉として用いられるようになり、多方面でイングランドに影響を与えた。例えば、英語の beef (ビーフ) や pork (ポーク) はフランスから伝わり、上流階級が使用する単語であった<sup>1433</sup>。

<sup>1429</sup> Anne Lancashire, London Civic Theatre: City Drama and Pageantry from Roman Times to 1558, Cambridge University Press 2002, p. 19.

<sup>1430</sup> Joan P Alcock, A Brief History of Roman Britain Conquest and Civilization, Robinson Publishing 2011, p. 260.

<sup>1431</sup> ウェセックス(Wessex)は「西サクソン」(West Saxon)に由来する。なお、「サクソン」はドイツ北部の「ザクセン」(Sachsen)より生まれた語である。

<sup>1432</sup> 11 世紀以降、イングランド (イギリス) 国王の戴冠式や埋葬式が行われているウェストミンスター寺院は、エドワードによって建てられた。

<sup>1433</sup> 英単語の beef や pork の基になった仏単語の bœuf や porc には「牛」や「豚」といった意もあるが、イングランドでは上流階級には家畜より食肉の方が重要であり、「牛肉」や「豚肉」という意で用いられた。この慣例は現在でも残っており、英語の beef や pork は食肉を指す。

人名も英語調に変更されており、ノルマンディー公のギョーム 2 世 (Guillaume II) は、イングランド王としては、**ウィリアム 1 世** (William I 征服王) と名乗った。彼はフランス国王の封臣でもあったため、イングランド国王もその封臣になる。なお、当時、フランス国王 (カペー朝) の権威は弱く、実質的に地方領主の一人に過ぎなかった。その結果、国王よりもその封臣であるノルマンディー公の方が所領が広く、権勢を振るうという特殊な状況が生じた (459 頁参照)。

## 5) フランス王朝 (プランタジネット朝) の成立と百年戦争

ノルマン朝の第 3 代国王ヘンリー 1 世には男子の跡継ぎがおらず、娘のマティルダを後継者に指定した。しかし、女王には前例がなかったこともあり、1135 年に彼が亡くなると、甥のステューブン<sup>1434</sup>が王の座に就いた。マティルダがこれに反発すると、内戦が勃発し、イングランドは「無政府状態」に陥るが、彼女の息子が戦いを制し、1154 年、**ヘンリー 2 世**として即位した。なお、彼はマティルダとフランス貴族であるアンジュー伯の長男で、フランスで生まれ育った。

ヘンリー 2 世の即位で始まったフランス貴族による王朝は「**プランタジネット朝**」と呼ばれている。なお、この王朝名は家名ではなく、ラテン語で「プランタ=ゲニスタ」(日本語では金雀枝、画像右) と呼ばれるマメ科の植物に由来する。ヘンリー 2 世の父親 (アンジュー伯のジョフロワ 5 世) は、春に黄色の花を付けるこの植物を兜<sup>かぶと</sup>に付けていたため、それがアンジュー家の象徴となり、彼の息子が開いた王朝は「プランタジネット朝」と呼ばれるようになった。なお、ノルマン朝に同じく、宮廷ではフランス語が使用された。



ヘンリー 2 世はイングランドだけではなく、ノルマンディーを含む、フランスの西半分を治めた。また、スコットランドでも領地を獲得するとともに、ウェールズの支配を回復した。後世、その広大な領地は「**アンジュー帝国**」と目されるようになるが (224 頁の地図参照)、この時代は半世紀しか続かず、13 世紀初頭、プランタジネット朝 3 代目の**ジョン王**はフランス王との戦いに敗れ、ノルマンディーを含む大陸領の大部分を失った (アンジュー帝国の消滅、460 頁参照)。また、国内の統治にも行き詰まり、1215 年、貴族・僧侶の要求に屈し、『**マグナ・カルタ**』を承認した。この憲章はイギリス憲法の祖とされており、国王の徴税権の制限、選挙の自由、都市の特権、不当な裁判による刑罰・財産没収・追放の禁止等、王の権限を制限し、貴族に特権を与えている。

### ◎ リチャード 1 世



プランタジネット朝 2 代目の**リチャード 1 世** (1157~1199 年) は勇敢であったことから「**獅子心王**」(Lionheart) の異名を持ち、騎士の鑑と称えられた。ウェストミンスター宮殿は彼の騎馬像が建てられており、イングランドを代表する国王の一人になるが (左図参照)、生涯、戦争や冒険に明け暮れたため、10 年の在位期、国内にはほとんど滞在しなかった。即位した 1189 年には、フランス国王、神聖ローマ皇帝 (ホーエンシュタウフェン朝)、オーストリア大公 (バーベンベルク家) と共に第 3 次十字軍を編成し、パレスチナに遠征している (417 頁参照)。なお、彼らの関係は良好ではなく、リチャード 1 世は、帰途、オーストリアを通った際、捕らえられ、1 年余に亘って拘束されるというヨーロッパ史上、重大な事件が発生する。その間、弟のジョンがイングランド国王として即位したが、母親が身代金を払って解放されたリチャードは王位を回復した。また、フランス国王フィリップ 2 世と対戦し、拘束中に奪われた領土を奪還していくが、1199 年、敗死し、41 年の生涯を閉じた。

その他にも、baron (男爵) や dame (貴婦人、レディ) といった地位を指す単語や、government (政府) や parliament (議会) といった統治に関する単語もフランス語を起源とする。

<sup>1434</sup> ステューブンはフランスのプロワ家出身であったため (他方、母親はヘンリー 1 世の姉であった)、彼の即位により**プロワ朝**が開かれたが、彼もノルマン朝の国王に含めることがある。

14世紀前半、プランタジネット朝第7代目の国王エドワード3世がフランスの王位承継を要求し、兵を挙げると、百年戦争(1337~1453年、337頁参照)が勃発した。実際には100年以上続いたこの戦争で、イングランド王はフランス王としての地位を獲得するどころか、大陸における領土を失った(ただし、フランス北西部のカレーを除く)。

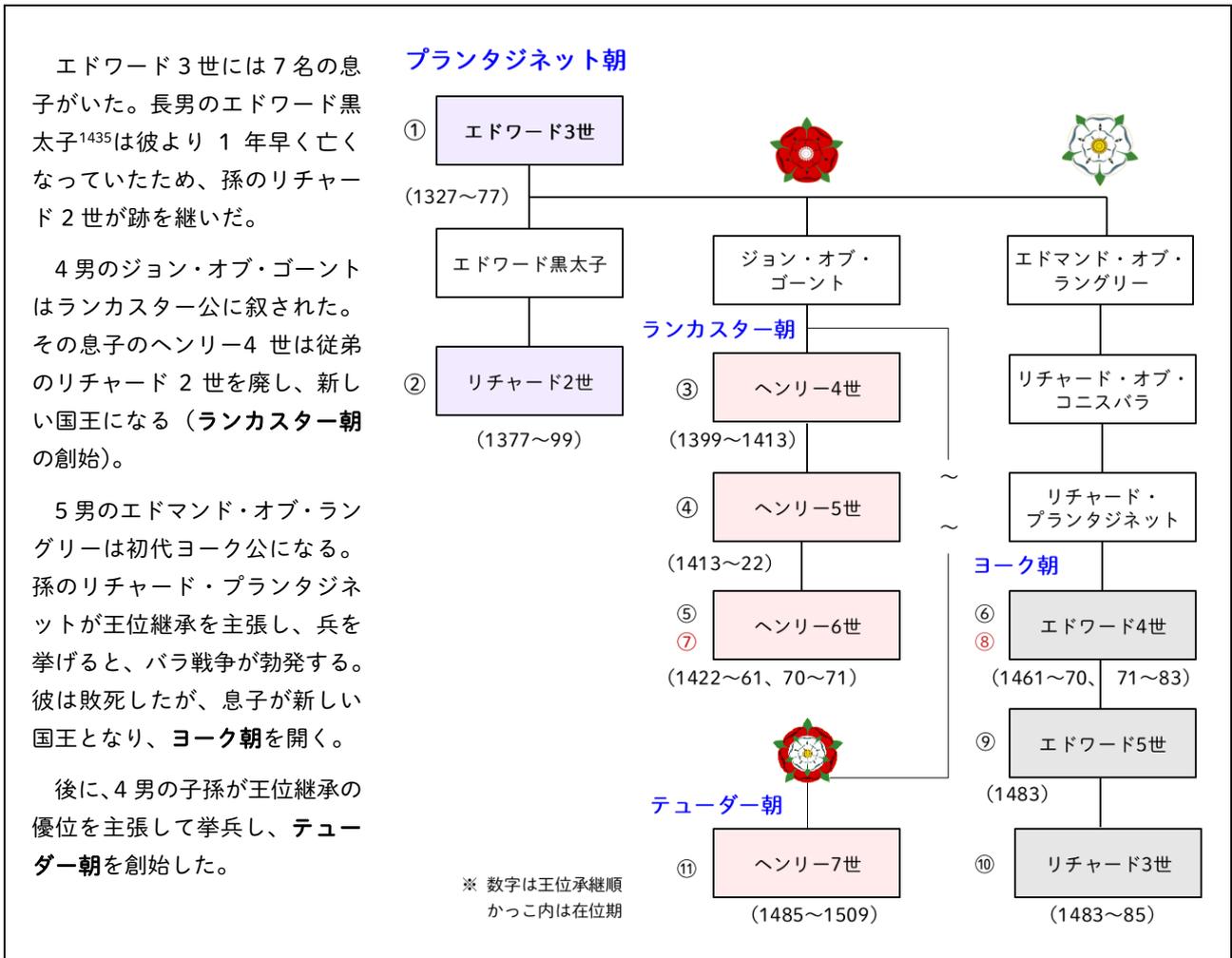
なお、百年戦争中の1399年、第8代国王のリチャード2世は専制を敷き、議会の活動を停止させたため、貴族や都市の商人の反感を買う。彼が従弟のヘンリーに捕らえられ、廃位を言い渡されると、イングランドにおけるフランス貴族の王朝(プランタジネット朝)は幕を下ろした。

6) バラ戦争

リチャード2世を倒したヘンリーは新しい国王(ヘンリー4世)となり、ランカスター朝を開いた。彼の息子のヘンリー5世はフランス国王の娘と結婚し、王位継承権を得たが、病に倒れ、フランス国王として即位することはなかった。

次の王となったヘンリー6世の時代、縁戚であるヨーク公のリチャード・プランタジネットが王位承継を主張し、バラ戦争(1455~1485年)を引き起こした。彼は戦死したが、1461年、次男のエドワードがヘンリー6世を倒し、新しい国王(エドワード4世)になる。これによってヨーク朝が始まるが、1470年、ヘンリー6世(ランカスター朝)が復位した。ところが、翌年、殺害され、ヨーク朝が復活する。

1485年、リチャード3世はランカスター家の系統を踏むヘンリーに敗れた。ヘンリーが新しい国王(ヘンリー7世)として即位し、テューダー朝を開くと、30年間、続いたバラ戦争は終わった。



<sup>1435</sup> エドワードは黒い鎧を身につけていたため「黒太子」と呼ばれた。

## 7) イングランド国教会の発足

前述したように、409年に西ローマ帝国が属州ブリタニアを放棄し、撤退した。それに伴い、キリスト教は信徒を減らし、教会は取り壊されることになる。グレートブリテン島が再びキリスト教化されたのは、6世紀末、教皇のグレゴリウス1世が宣教師を派遣してからである。

テューダー朝の第2代王となる**ヘンリー8世**も敬虔なキリスト教徒であったが、男子を産まない王妃との離婚を教皇が認めなかったため、1534年、ヘンリー8世はローマ・カトリック教会から独立し、イングランド国教会を立ち上げた(261頁参照)。なお、彼は敬虔なカトリック教徒であり、この時期、大陸で起きていた宗教改革(350頁参照)には批判的であった。また、国教会の急速な確立にも消極的で、諸制度が整備されるのは彼の息子や娘の時代である。

1547年、ヘンリー8世が亡くなると、息子のエドワード6世が9歳で即位するが、15歳で死去し、異母姉のメアリー1世が跡を継いだ。彼女はカトリックの復興を図り、国教徒を弾圧したため、「血まみれのメアリー」(Bloody Mary)と呼ばれたが、その跡を継いだエリザベス1世は異母姉の政策を廃止し、イギリス国教会を確立した。なお、エドワード6世、メアリー1世、エリザベス1世は何れもヘンリー8世の子であるが、3人の母親は異なる。

エリザベス1世が即位したとき(1538年)、イングランドはまだ人口約300万の小国であったが、旧教国スペイン(人口約800万)の無敵艦隊を降し、国威を高めた(354頁参照)。女王は生涯独身で子供を生まなかったため、1603年に死去すると、いとこの孫で、スコットランド王のジェームズ6世<sup>1436</sup>が新しい王になる。彼はイングランドとスコットランドの王を兼ねた最初の君主であり(同君連合の成立)、非公式であるが、グレートブリテン王の称号を用いている。

## 8) 市民革命の勃発

ジェームズ6世(イングランド王としては**ジェームズ1世**)の即位により、イングランドでも**ステュアート朝**<sup>1437</sup>が開かれた。彼は王権神授説を唱え、絶対王政の基礎を築いた王であり<sup>1438</sup>、息子の**チャールズ1世**がそれを強化すると、議会在反発し、1642年、内戦が勃発する。初めは王党派が優勢であったが、1645年、**オリバー・クロムウェル**に率いられた議会軍が国王軍を倒し、1649年、国王を処刑するに至った<sup>1439</sup>。この政変はプロテスタントの**清教徒**(**ピューリタン**)<sup>1440</sup>が中心となって起こしたため、**清教徒革命**ないし**ピューリタン革命**(1642~1649年)と呼ばれており、チャー

<sup>1436</sup> ジェームズ6世はスコットランド女王メアリー・ステュアートの息子であるが、彼女は秘書のリッチオを寵愛しており、彼がジェームズ6世の父親であるという噂が広まっていた。リッチオは貴族達の反感を買って、殺害されたが、その後も不道徳な行為を重ねたメアリーは、1567年、議会によって王位を剥奪され、ジェームズ6世が跡を継いだ。メアリーは身内であるイングランド女王エリザベス1世を頼り、イングランドに逃れるが、1587年、エリザベス1世によって処刑された。しかし、エリザベス1世の死後、メアリーの息子のジェームズ6世がイングランドの王となる。

<sup>1437</sup> **ステュアート朝**は、1371年、スコットランドで成立した王朝であるが、1603年、スコットランド国王のジェームズ6世はイングランドの国王ともなったため、イングランドでも同王朝が始まり、1714年に**ハノーヴァー朝**(169頁の注495参照)が開始されるまで続いた。なお、「ステュアート」(Stewart)とは「王室執事長」(Lord High Stewart)という役職に由来する。16世紀中頃、フランスで育ったメアリー女王(注1436参照)は綴りをフランス語風のStuartに変えている。

<sup>1438</sup> ジェームズ1世はイングランド国教会を強化し、非国教徒を弾圧したため、1620年10月、41名のピューリタンが信教の自由を求め、新大陸アメリカに渡った。メイフラワー号に乗船していた102名は全員が清教徒であったわけではないが、船上で共同体の設立を約しており、新大陸に上陸すると植民地を建設した。後に彼らは「巡礼始祖」と呼ばれるようになる。See Deutschlandfunk, Der Aufbruch der Pilgerväter nach Amerika, in <https://www.deutschlandfunk.de/400-jahre-mayflower-der-aufbruch-der-pilgervater-nach-100.html>  
 なお、彼らがアメリカ北部のプリスマ(現マサチューセッツ州ボストン近郊)に上陸し、植民地を築くよりも早く、ヴァージニアに植民地が建設されている(注1447参照)。

<sup>1439</sup> この頃、フランスではルイ14世の下で絶対王政が頂点に達する(460頁参照)。

<sup>1440</sup> **清教**とは16世紀後半、イギリス国教会より派生したプロテスタントの一派(カルヴァン派、457頁参照)で、これを奉じる人々を清教徒(ピューリタン)と呼ぶ。彼らはエリザベス1世による宗教改革、つまり、イングランド国教会の確立では不十分で、『聖書』に従い、教会をより純化することを訴えた。ステュアート朝のジェームズ1世の

ル1世が内戦を引き起こしてから処刑されるまで、7年、続いた。その間、ピューリタンの主勢力は王政の改革を求める長老派(プレスビテリアン)から王政に反対する独立派に移ることになる。後者のリーダーであり、厳格な清教徒のクロムウェルは、1649年、王政を廃止し、イングランド共和国<sup>1441</sup>を樹立したが、その内実は清教主義に基づく軍事独裁で、議会は開かれなかった。また、厳格な清教主義の下、劇場や競馬といった娯楽は禁止されたため、国民の支持を失っていき、1658年に彼が亡くなると、息子のリチャードが跡を継ぎ、第2代護国卿(Lord Protector)になるが、翌年、議会の支持を失って退陣し、1660年、王政(ステュアート朝)が復活した。

即位したチャールズ2世<sup>1442</sup>と跡を継いだ弟のジェームズ2世も専制を敷いたため、1688年、議会はジェームズ2世を追放し、翌年、2世の長女メアリーと、彼女の夫のオランダ総督オラニエ公ウィレム3世(イングランド王としてはウィリアム3世)を新しい王として迎えた(469頁の注1365参照)。清教徒革命とは異なり、血を流すことなく元首の交代が実現したため、この革命は**名誉革命**(1688~1689年)と呼ばれている。なお、王のカトリック優遇策に対する新教徒の反発も革命の一因になっており、新教徒の国民が迎え入れたメアリーとウィリアムは新教徒であった。なお、彼女はカトリック教徒であったが、オランダ人のウィリアムとの結婚を機に改宗している。

それ以前にも、王の身内や家臣が謀反を起こし、自ら即位することはあったが、国民が王を追放し、新しい王を選出すること、また、選ばれた王が国民の判断を受け入れることは画期的であり、それを敢行したイングランド国民は法で元首を縛る立憲君主制を確立していった。1689年、議会は国王に対する議会の優位や信教の自由(新教の信仰の自由)等について謳った「**権利宣言**」を起草し、メアリーとウィリアムに承認を求めると、両者はそれに応じたため、それを「**権利章典**」として正式に採択した。なお、この章典(Bill of Rights)は憲法ではないが、それに相当する基本的な法典の一つにあたる。

メアリー2世とウィリアム3世の間に子供は生まれなかったため、1702年、前者の妹のアンが女王として即位した。アンは13人の子供を授かったが、何れも流産や死産または早逝している。そのため、1714年に彼女が亡くなると、ステュアート朝は断絶し、縁戚関係にある神聖ローマ帝国のハノーヴァー選帝侯<sup>1443</sup>が新しい国王(ジョージ1世)として迎えられた。これによってイギリスは北ドイツのハノーヴァー公国(侯国)と同君連合を結成することになるが<sup>1444</sup>、ドイツ人のジョージ1世は英語がほとんど理解できないばかりか、ハノーヴァーに度々、帰国し、イギリスの政治には関与しなかったため、この島国では政党政治や責任内閣制が確立する。

## 9) 連合王国(イギリス)の成立

1536年、ウェールズはイングランドに統合され、後者の一部になる。それに際し、イングランドの国号は変更されず、「イングランド王国」のままであったが、「イングランドおよびウェールズ王国」と呼ばれることもあった。

前述したように、清教徒革命末期の1649年、チャールズ1世は処刑されたが、翌年、フランスないしオランダに亡命していた彼の次男(注1442参照)がスコットランドに上陸し、反旗を翻すと、クロムウェルは軍隊を率いて攻め入り、スコットランドを制圧した。イングランドによる支配は名誉革命の後に即位したウィリアム3世によって強化されるが、

---

時代、清教徒の一部はアメリカへ移住し、後にアメリカ独立戦争(358頁参照)を引き起こす。他方、イングランド国内では本文中で述べたように清教徒革命を起こした。

<sup>1441</sup> 共和国は「**コモンウェルス**」と呼ばれたが、1931年に成立した「**コモンウェルス**」(**英連邦**) (505頁参照)とは異なる。

<sup>1442</sup> チャールズ2世は、クロムウェルに処刑されたチャールズ1世の次男である。清教徒革命期の1646年、母親と共にフランスに亡命するが、1660年、帰国し、チャールズ2世として即位した。なお、1675年、彼はロンドン近郊のグリニッジに天文台を設立した君主としても知られている(vi頁参照)。

<sup>1443</sup> **選帝侯**とは神聖ローマ皇帝(ドイツ王)を選出する特権を与えられた者を指し、14世紀中頃、7名の者にこの権限が与えられた(528頁参照)。ハノーヴァーの君主はそれに含まれていなかったが、17世後半、オランダ侵略戦争(仏蘭戦争、469頁参照)やトルコとの戦い(**大トルコ戦争**、424頁参照)で功績を挙げたことが評価され、次世紀の初旬、正式に選帝侯として認められた。なお、ハノーヴァー選帝侯ではなく、ブラウンシュヴァイク=リュネブルク選帝侯と呼ばれることもある。

<sup>1444</sup> サリカ法典を継承するハノーヴァー公国(侯国)は女性君主を認めていなかったため、1837年、ヴィクトリア(次頁参照)がイギリスの王位を継承すると、同君連合は解消された。

彼の跡を継いだアン女王の時代 (1707 年)、イングランドはスコットランドと合併した。これによって両王国の同君連合は解消され、新しい国、つまり、「グレートブリテン王国」が誕生する。

クロムウェルとウィリアム 3 世は、アイルランドの植民地化も推進した (507 頁参照)。1801 年、グレートブリテン王国とアイルランド王国が合併し、「グレートブリテンおよびアイルランド連合王国」が成立する (507 頁参照)。

こうしてイングランドは領土を拡大する一方、1776 年、アメリカ合衆国が独立した (358 頁参照)。

## 10) 産業革命とフランス革命期

18 世紀後半に始まった産業革命によって連合王国は「世界の工場」としての名声を得た (361 頁参照)。また、18 世紀末から 19 世紀初旬にかけて、フランス革命戦争やナポレオン戦争に参戦し、ナポレオン軍を倒すと、列強としての地位を強固にする (581 頁参照)。

## 11) 帝国主義の時代

17 世紀初頭 (エリザベス 1 世の時代)、イングランドは海外に進出し、北アメリカやカリブ海地域 (西インド諸島) に植民地を建設した<sup>1445</sup>。18 世紀には、カナダ、インド、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカを植民地とする。さらに、19 世紀後半には、列強と共に、アフリカ大陸を分割した (373 頁参照)。こうして、イギリスは地球上の陸地の 4 分の 1 を支配する「太陽の沈まない国」<sup>1446</sup>となる。**大英帝国** (Empire of Great Britain) とも呼ばれたが、これは第 2 の帝国であり、1607 年から 1783 年までは「第 1 帝国」<sup>1447</sup>と目されていた。

### ◎ ヴィクトリア女王 (在位 1837~1901 年)

1837 年、ヴィクトリア女王 (画像右) が弱冠 18 歳で即位した当時、議会の権限が強化される一方、王の地位は低下していたが、1901 年まで続いた在位期、イギリスは繁栄を極め、世界各地に植民地を持つ帝国に発展した。そのため、61 年に亘るその在位期は**ヴィクトリア朝** (実際は**ハノーヴァー朝**、注 503 参照) と呼ばれる。1877 年、彼女はインド皇帝を兼ねるようになった。

ヴィクトリア女王は、1840 年、ドイツ地方にあったザクセン=コーブルク=ゴータ公国の公子アルバートと結婚し (476 頁参照)、9 人の子を産んだ。5 人の娘はヨーロッパ諸国の王室に嫁ぎ、次代の国家元首を産んでいる (168 頁参照)。



1922 年、アイルランドが「アイルランド自由国」として、イギリスから独立した (508 頁参照)。これに伴い、イギリスの名称は「グレートブリテン及びアイルランド連合王国」から現在の「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」に変わった。

1930 年、帝国会議は従来の大英帝国を**英連邦 (Commonwealth コモンウェルス)** に改めることを決定した。翌年、イギリス議会は**ウェストミンスター憲章**を採択し、英連邦を正式に発足させるとともに、本国と自治領<sup>1448</sup> (カナダ、

<sup>1445</sup> 北米にはヴァージニア (1607 年) に始まり、ジョージア (1732 年) まで、13 の植民地が建設された。

<sup>1446</sup> なお、15 世紀末、スペインはアメリカ大陸に広大な植民地を獲得した。1580 年にはポルトガルを併合して、さらに領土を広げ、世界史上、初の「太陽の沈まない国」となる (486 頁および 578 頁を参照されたい)。

<sup>1447</sup> イングランドは、1607 年、北米のジョージタウン (現バージニア州内の無人の集落) に最初の植民地を築き、帝国となる。北アメリカには 13 の植民地が建設されたが (注 1445 参照)、1783 年、アメリカの独立を承認すると (359 頁参照)、第 1 帝国期は終わった。

それとともに第 2 期が始まり、英連邦が成立する 1931 年まで存続した。その後もイギリスは植民地を保有し、形式的には帝国であったが、1997 年、最後の植民地である香港を中国に返還すると、帝国とは呼ばれなくなった。

<sup>1448</sup> 自治領 (ドミニオン Dominion) とは自治権を与えられた旧植民地で、白人が治めていた。実質的には独立国であり、自治が認められていなかった植民地とは異なる。

オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ連邦、アイルランド自由国、ニューファンドランド) の関係について定めた。

## 12) 第 2 次世界大戦後

第 2 次世界大戦後、旧植民地が相次いで独立した (376 頁参照)。また、米ソ 2 大国の覇権が強まる中、イギリスの国際的地位は低下することになる。

経済も慢性的に停滞し、いわゆる「イギリス病」に長らく苦しんだが、80 年代に厳しい経済改革を断行した結果、ようやく回復の兆しが現れ、90 年代半ば、上昇に転じた。

1960～80 年代には、アイルランド共和軍 (IRA) によるテロ活動が激化し、多くの犠牲者を出したが、1993 年、イギリスとアイルランドの間で和平共同宣言が出されたのを機に対立は沈静化する (508 頁以下参照)。

## 13) BREXIT

終戦からほどない 1950 年代、大陸諸国は平和の確立、人の移動の自由化、関税同盟の創設等を目的とし、EC (現在の EU) を設立した。前掲の目的を達成するため、加盟国は主権の一部をこの国際機関に移譲しているが、イギリスはそのような緊密な市場統合をきらい、1960 年、スイス、オーストリア、デンマーク等と共に EFTA を立ち上げた (660 頁参照)。しかし、EC の成功を受け、1972 年末、EFTA を脱退し、翌年初め、EC に加盟する。ただし、その政策の全てに参加していたわけではなかった (例えば、単一通貨ユーロの導入を見送っている)。また、国民の間で EU 懐疑論が根強く主張された (646 頁以下参照)。

2016 年 6 月、EU 離脱の是非を問う国民投票が実施され、脱退派が勝利を取めた。脱退はスムーズにいかなかったが、2020 年 1 月、それを実現し、現在に至る (648 頁参照)。

※ スコットランドの独立運動について、195 頁を参照されたい。

## 11. アイルランド史

アイルランドはアイスランドに次いで欧州最西端に位置する島国である。古くからイギリスの影響を強く受ける傍ら、この隣国とは異なる民族（主にケルト人）を祖とし、独自の慣習・文化を育んできた。とりわけ、宗教は大きく異なる。アイルランド国民の90%はカトリック教徒であるのに対し、イギリスでは国教徒やカルヴァン派の新教徒が主流であり、教派の違いは多くの紛争・対立を引き起こしてきた。また、17世紀、イングランドの植民地となり、搾取されてきたが、1922年に独立し、現在に至る。

### 1) ケルト人の移入

この国の第1公用語はアイルランド語であるが、それを話す国民は全体の3割程度で、もう一つの公用語である英語の方が広く普及している。この点にも、アイルランドは隣国の影響を強く受けていることが表れており、12世紀後半から約800年間、アイルランドはイングランドに支配されてきた。もっとも、民族的には隣国ないし**アングロ・サクソン人**（221頁参照）の影響を強く受けているわけではない。アイルランド人の祖先は紀元前5世紀頃、この島に移動してきた**ケルト人**（220頁参照）と、9世紀頃に渡来した**デーン人**（ヴァイキング）との間に生まれた人々と考えられている（『ブリタニカ国際大百科事典』参照）。なお、アイルランドのケルト人は「ゲール人」と呼ばれる。

### 2) キリスト教（ローマ・カトリック教）の発展

5世紀前半、ウェールズの伝道師**パトリック**（**パトリキウス**）によってキリスト教が伝えられた。彼はアイルランドの守護聖人とされており、命日にあたる3月17日は「**聖パトリックの日**」に指定されている。この日、アイルランドは国のシンボルカラーである緑色に染まり、各地で祭が行われる。また、この祝祭のシンボルになっている三つ葉のグローバーは**三位一体説**（265頁参照）を表す。

アイルランドではローマ・カトリック教とは異なる独自のキリスト教（ケルト系キリスト教）が発展し、司教ではなく、修道士が重要な役割を果たした。十字架にはラテン十字と太陽が融合されており、「**ケルト十字**」ないし「**ハイクロス**」と呼ばれている（右図参照）。



### 3) イングランドによる支配（植民地化）

9世紀、**デーン人**の侵入が相次ぎ（223頁参照）、大きな混乱が生じたが、アイルランド人は主権を保つことができた。

12世紀後半、イングランド王の**ヘンリー2世**（501頁参照）がアイルランド島を制圧し、宗主権を握った。イングランドから封建制が導入され、ゲルマン系の人々が領主になると、アイルランド貴族は反発し、蜂起を繰り返したが、16世紀前半、イングランド王**ヘンリー8世**（261頁参照）によって制圧された。以後、20世紀半ばまで、隣国による支配と搾取が継続する。なお、アイルランドの植民地化を開始したのは、1648年、清教徒革命（503頁参照）を起こして王政を倒した**クロムウェル**である。翌年、彼は王党派の討伐を理由に出兵し、アイルランドを制圧した。また、その後の名誉革命によってイングランド国王に迎え入れられた**ウィリアム3世**はプロテスタント軍を率いてアイルランドを攻略し、植民地支配を完成させた。カトリックの地主は土地を没収され、差別されるようになる。

なお、1541年、**ヘンリー8世**は「**アイルランド王**」を名乗った。これにより、アイルランドは王国となるが、実質的にはイングランドに隷属し、17世紀半ばには植民地化された。

イングランドの圧政が敷かれていた1726年、**スウィフト**<sup>1449</sup>は『**ガリヴァー旅行記**』を著した。その第1部では、主人公のガリヴァーが小人の国に漂流した様子が描かれているが、これにはアイルランドを抑圧する隣国を巨人にみたてた風刺が込められている。

Ferdinand-Philippe d'Orléans (1810-1842)  
“La patrie est en danger“



<sup>1449</sup> ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift 1667～1745年）はアイルランド・ダブリンで生まれた作家ないしジャーナリストである。

1801年、アイルランド議会はグレートブリテン王国との合併を可決した。これにより、グレートブリテン王国とアイルランド王国からなる連合王国が成立した。この頃、前者の圧政から逃れるため、多くのアイルランド人がアメリカに移住している。また、1845年、ジャガイモ大飢饉と呼ばれる大飢饉が発生したため、100万人近い国民が新大陸に逃れた。アイルランド国内では1851年までに100~140万人が飢饉と疾病の犠牲となり、亡くなったと推測されている<sup>1450</sup>。

#### 4) 独立 (1922年1月)

ヨーロッパ各地で民族主義運動が活性化した19世紀、アイルランドではイギリスへの反発が強まり、大規模な暴動が発生した。また、バーナード・ショー (1856~1950年)、ウィリアム・パトラー・イエーツ (1865~1939年) 等の文化人がアイルランド固有の文芸を復興すると、「シン・フェイン」(われわれ自身だけで) というスローガンの下で独立運動が活性化する。

このような状況を受け、イギリス議会はアイルランドに自治権を与え、懐柔しようとした。1914年9月には自治を認める法律が制定されたが、同年7月に勃発していた第1次世界大戦の影響により、施行は見送られることになった。なお、戦争中の1916年4月、アイルランドの民族主義者は武装蜂起したが (**イースター蜂起**)、英軍に鎮圧された。

終戦からほどない1919年1月、独立派 (シン・フェイン党) はアイルランド共和国の樹立を宣言した。これを機にアイルランド独立戦争が勃発すると、義勇兵からなるアイルランド共和国軍 (Irish Republican Army, IRA) が編成され、ゲリラ戦を展開した。イギリスはその弾圧に乗り出すが、国際社会より厳しく非難されたため、1921年12月、共和国軍と休戦協定 (英愛条約) を結び、アイルランドの独立を認めるに至った。こうして、翌年1月、島民は「アイルランド自由国」として独立を果たす。なお、アルスター地方と呼ばれる島の北部には、グレートブリテン島から多くのイングランド国教徒やプロテスタント (スコットランドのカルヴァン派) が移り住み、この地方の多数派になっていた。そのため、この地方は北アイルランドとしてイギリスに残る。これに伴い、イギリスの正式名称は「グレートブリテン及びアイルランド連合王国」から現在の「グレートブリテン及び北アイルランド連合王国」に変わった。

なお、アイルランド自由国は独立後も大英帝国 (後の英連邦、505頁参照) には留まり、その自治領となる。

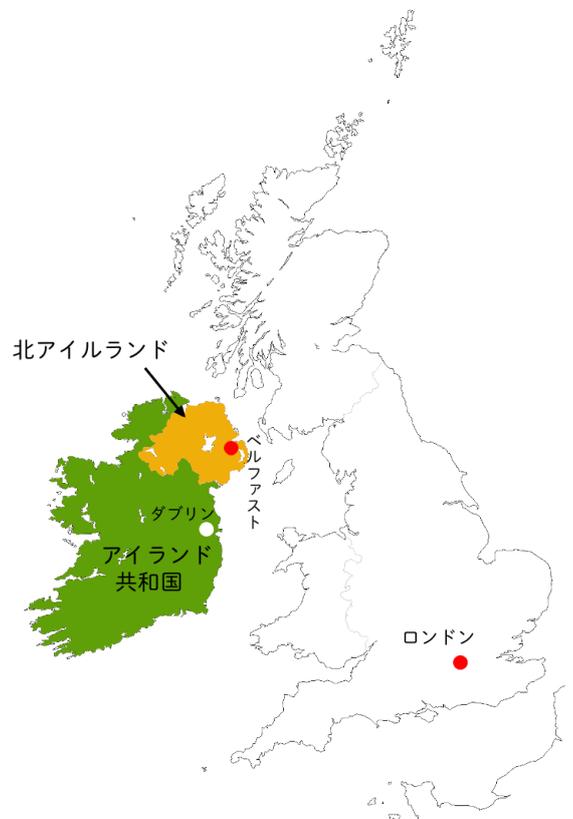
1937年12月、新憲法が施行され、国名はアイル (エール Éire) に変わった。また、イギリス国王の代理人である総督を廃止し、国民が選出する大統領のポストを新設した。これにより、アイルランドは英連邦を実質的に脱退することになる。

1949年4月、国号はアイルランド共和国に戻り、現在に至る。また、同年、英連邦から正式に離脱し、国家元首をイギリス国王から自国の大統領に変えた。

1973年1月、アイルランドはEC (現EU) に加盟した。これによって西欧諸国との関係が深まり、イギリスに依存する状況は解消された。とりわけ、同国への輸出に頼っていた農業は新たな輸出先を獲得しただけではなく、EUより多額の助成金を得られるようになった。

#### 5) 北アイルランド紛争の発生

アイルランドの独立後も、カトリック教徒とプロテスタントの対立は続き、1969年、アイルランド共和国軍 (IRA) が島北部の独立ないし南北アイルランドの統合を求めて蜂起すると、北アイルランド紛争に発展した。IRAの暴動やテロ行為に対し、英政府はスパイや特殊部隊を投入し、徹底抗戦で臨んだ。その結果、両者の対立は激しさを増し、イギリスは内戦状態に陥る。1972年には479人の犠牲者 (その内の半数以上は民間人) を出す状況にまで悪化したが、翌年、両



<sup>1450</sup> Christine Kinealy, This Great Calamity, Gill & Macmillan 1994, p. 168.

国が EU（当時は EC）に加盟すると、その政策の一環として、労働者や商品の移動は自由化されたため、南北アイルランドの統合を求める声も収まった。

1989 年末の冷戦終結も和平を促進することになり、1993 年 12 月、アイルランドとイギリスの首脳は共同平和宣言を出し、1960 年代末より続く紛争に区切りを付けた。

また、1998 年 4 月 10 日、両国は和平合意を締結した。これは、北アイルランドの政庁所在地であるベルファストで結ばれたことから、「ベルファスト合意」と呼ばれている。また、合意日が復活祭直前の金曜日であったため、「聖金曜日協定」とも呼ばれており、以下の点を柱とする。

- ① 両国政府は北アイルランドの領有権を主張しない。
- ② この地域の帰属は住民の意志に委ねる。
- ③ それまで同地域は自治政府によって治められる。

北アイルランドでは住民の 71%、アイルランドでは住民の 94%がこの合意に賛成し、北アイルランド自治政府が発足した。また、アイルランド・北アイルランド間の国境検査は廃止され、自由に通行できるようになった。

この合意の締結により約 30 年近く継続したプロテスタント系住民とカトリック系住民の抗争は終結した。なお、和平に反対する IRA は、その後もテロ攻撃を繰り返したが、カトリック系を含む住民の非難を受け、活動を止めるようになった。

## 【補説】イギリスの EU 脱退と北アイルランド

EU は域内における商品、労働者、サービス、資本の移動の自由を保障している。これらの自由が保障されているため、①ある加盟国で販売が認められている商品は、関税や数量制限を課されることなく、他の加盟国へ自由に輸出することができる。つまり、加盟国は自国製品を保護するため、他の加盟国からの輸入を制限してはならない。また、②ある加盟国の労働者は他の加盟国内で働くため、そこへ移動するだけでなく、居住することができる。他の加盟国出身者の給料を少なくしたり、年金や子供手当等を少なくしたりすることは許されない。つまり、労働や居住に関し、国籍を理由に差別することは禁止されている（635 頁以下参照）。

なお、労働者の移動の自由はパスポート検査を受けることなく、自由に入国することまで保障しているわけではない。これは他の加盟国で働くことを妨げるため、EU 加盟国は、1985 年 6 月、**シェンゲン協定**を締結し、国境検査の廃止を進めてきた（639 頁参照）。それが実り、例えば、ドイツ、フランス、ベネルクス 3 国は、1995 年 3 月、道路上でのパスポート検査を撤廃するに至った。空港でのパスポート検査は 2008 年 3 月 30 日に廃止された。

アイルランドとイギリスは、1973 年 1 月、EU（当時は EC）に加盟したため、両国間で商品や労働者は自由に移動できるようになった。しかし、両国はシェンゲン協定に加盟していないため、ドイツから両国に移動するにはパスポート検査（入国検査）を受ける必要がある。ただし、アイルランド・北アイルランド間の移動であれば、**ベルファスト合意**によって自由に移動することができる。

### ◎ 共通旅行区域（Common Travel Area, CTA）

1922 年まで、アイルランドはイギリスの一部であったため、それまで、グレートブリテン島とアイルランド島間に国境はなく、国境検査も存在しなかった。独立後に生じる国境検査の煩雑さを軽減するため、両国は「**共通旅行区域**」（Common Travel Area, CTA）と呼ばれる制度を設け、両国の国民であれば、パスポート検査を受けずに入国することができ、滞在にはビザを不要とした。ただし、両国の国民であることを証明する必要があるため、身分証明書の提示が必要である（パスポートを提示してもよい）。

なお、この制度に法的拘束力はなく、両国は任意に検査を実施することができるが、アイルランド島内の移動にはベルファスト合意が適用され、検査は行われていない。また、この制度は EU の制度ではないため、イギリスの EU 離脱（BREXIT）の影響を受けない。

2016年6月、イギリスのEU脱退が決まると、アイルランド・北アイルランド間の国境検査の復活が検討されるようになった。これは、両国間の貿易には再び関税が課されるため、輸出入をコントロールする必要があることによる。この問題について、EUとイギリスは、2019年10月、①アイルランド・北アイルランド間の国境は従来通り解放され<sup>1451</sup>、輸出入は自由に行われること、②イギリスのEU脱退後も北アイルランドにはEU法（関税法、商品の規格・品質に関する法律、医薬品の承認に関する法律等）が適用されること、また、③アイルランド島とグレートブリテン島の貿易には関税が課されることを決めた（修正北アイルランド議定書）。しかし、これによれば、イギリスの領土の一部、つまり、北アイルランドはEUに統制されることになる。また、グレートブリテン島と北アイルランドの間の取引には国内取引であるにも拘わらず、関税がかかることになる。そのため、イギリスは、一旦はEUと合意したものの、後にその実施を拒むようになった。

北アイルランドの住民の中にはEU・イギリス間の合意、つまり、北アイルランドがイギリスから切り離され、EUの統制下に置かれることに反対する者が少なくない。2022年2月、民主統一党（Democratic Unionist Party, DUP）に所属するギヴァン首相<sup>1452</sup>はEU・イギリス間の合意に抗議し、辞職した。これを受け、同年5月に実施された選挙ではアイルランドに基盤を置くシン・フェイン党（Sinn Féin）が勝利を収めたが、民主統一党が協力しなかったため、新政府は発足せず、無政府状態が続いた<sup>1453</sup>。

2023年10月、EU・イギリス間で新しい枠組み（**ウィンザー枠組み**、後述参照）が発効し、翌年1月末、イギリス政府がこの枠組みを踏まえた政策を打ち出すと、民主統一党は軟化するようになった。翌月（2024年2月）、シン・フェイン党のオニールを首相とし、民主統一党のリトル＝ベンジェリーを副首相とする新政府が発足した。

#### ◎ ウィンザー枠組み

2023年3月、EUとイギリスは後者のEU脱退後に生じた北アイルランド問題を解消するため、以下の点で合意した<sup>1454</sup>。

- ・北アイルランドもイギリスの一部としてEUから離脱するが、商品や付加価値税に関してはEU法の適用を受ける。ただし、将来、この法律が改正され、北アイルランド議会が改正法の施行に反対する場合、イギリス政府は施行を拒むことができる。なお、この措置はスコットランド議会が設置されている場所にちなみ、「ストーモント・ブレーキ」（Stormont Brake）と呼ばれている。
- ・北アイルランドに搬入される医薬品の認証はEUではなく、イギリスが行う。
- ・北アイルランドとアイルランド間の国境はこれまで通り解放される。
- ・グレートブリテン島から北アイルランドに輸出される商品には以下の異なる制度を適用する。
  - 〔グリーンレーン〕北アイルランドで消費される物品にEU法は適用されず、関税も課されない。なお、この物品には“Not For EU”と記載されたラベルを付け、EU向けの商品と区別できるようにする<sup>1455</sup>。
  - 〔レッドレーン〕北アイルランドからアイルランドやその他のEU加盟国に輸出される物品にはEU法が適用される。

<sup>1451</sup> これは北アイルランドにおけるアイルランド系住民（カトリック教徒）に配慮した決定である。

<sup>1452</sup> 「首相」の正式な役職名は「首席大臣」（First Minister）である。

<sup>1453</sup> 地方議会選挙で第1党になった政党から首相を、異なるグループの最大勢力から副首相を立てることになっている。なお、両者の権限は同等である。

<sup>1454</sup> See European Commission, Questions and Answers: political agreement in principle on the Windsor Framework, a new way forward for the Protocol on Ireland / Northern Ireland, in [https://ec.europa.eu/commission/presscorner/detail/en/qanda\\_23\\_1271](https://ec.europa.eu/commission/presscorner/detail/en/qanda_23_1271)

<sup>1455</sup> なお、“Not For EU”と記されたラベルの規格やロゴが作成されているわけではない。

## 12. チェコ史

チェコはヨーロッパ中央部に位置する共和国である。四方をドイツ、ポーランド、スロバキア、オーストリアに囲まれ、海は持たない。首都プラハは、14世紀、神聖ローマの帝都にもなった都市であり、ドイツ人が建てたわけではないが、ドイツ文化圏の中心地として栄えた(346頁参照)。多数の尖塔があることから「百塔の街」と呼ばれるこの古都にはチェコの人口(1082万人)の1割強にあたる人々が生活している。

日本の面積の約5分の1(78,866km<sup>2</sup>)にあたるチェコ領は西のボヘミア地方と東のモラビア地方に分けられ、首都プラハはボヘミアのほぼ中央に位置する。スメタナが交響曲のテーマにしたモルダウ川(ヴルタヴァ川)は市内を横断した後、エルベ川に注ぐ。

第1次世界大戦後、オーストリア=ハンガリー帝国から独立し、チェコは東隣のスロバキア<sup>1456</sup>と共に連邦制の国家を建設したが、冷戦終結後の1993年1月、チェコスロバキアは解体され、現在に至る。

なお、2004年5月、チェコとスロバキアは同時にEUに加盟しており、その枠内で再統合が図られている。スロバキアは2009年にユーロを導入したが、チェコは政府の方針で導入を見送った。現在でも自国通貨のコルナが使用されている。



### 1) 大モラビア国の成立と崩壊

現在、チェコの領土となっている地域には、紀元前4～前3世紀、東方よりケルト人の一派であるポイイ人が移り住むようになった。1世紀頃には、北方よりゲルマン人のマルコマンニ族が移動してくるが、西スラブ人の一派であるチェク人(チェコ人)が現れたのは5～6世紀のことである。



チェコは国土全体がドナウ川の北方に位置しており、当初、古代ローマの勢力図に入っていなかった。もっとも、ローマはこの地域の攻略を試みなかったわけではない。紀元前1世紀末頃、マルコマンニ族を率いていたマルボドゥウスは現チェコ領(ボヘミア、モラビア北部)に王国を興すと、エルベ川下流域まで勢力を拡大し、ローマの脅威となる。そのため、西暦6年、アウグストゥス帝は軍隊を派遣したが、その南方のローマ領内(イリュリア、ダルマツィア)で反乱が起きたため、マルボドゥウスと和議を結び、撤退した。また、9年、ローマ軍はトイトブルクの森で大敗を喫したこともあり(433頁参照)、ドナウ川やライン川を越えて進出することは断念するようになった。

その後、ローマがチェコ地方に進出するのは2世紀後半である。162年にマルコマンニ戦争が勃発すると、モラビア南部はローマ軍の重要な拠点となるが、180年にマルクス・アウレリウス帝が病死すると戦火は収まり、ローマ人はモラ

<sup>1456</sup> スロバキアは第1次世界大戦末期の1918年10月、チェコと共に独立を宣言するまではハンガリー(厳密には、オーストリア=ハンガリー帝国)の一部であり、10世紀から1000年に亘り、この国に支配されていた。なお、当時、現スロバキア領は「北ハンガリー」と呼ばれ、「スロバキア」という概念はまだ存在しなかった。「スロバキア人」は「スラブ人の一派」と目されており(227頁参照)、彼ら自身が独自の民族として自覚し、「スロバキア」という概念が使用されるようになるのは、ヨーロッパ各地で民族主義が高まった19世紀である(364頁参照)。この世紀の中頃、フランスで起きた二月革命に影響され、ハンガリーがオーストリアに対して蜂起すると(1848年3月のハンガリー革命ないし独立戦争)、スロバキアはハンガリーに対して暴動を起こした。それが実り、独立が達成されるのは、前述したように1918年10月である。それに貢献したチェコ人(チェク人)はスロバキア人とともに西スラブ人に属しており、外見、言語、文化等が似ている。See Ipb, Geschichte der Slowakei, in <https://osteuropa.lpb-bw.de/slowakei-geschichte>; Botho von Kopp, Slowakische Republik, Nomos 1997, pp. 13-14.

ビアから撤退した<sup>1457</sup>。

9世紀半ば、モラビア地方に最初の本格的なスラブ人国家である大モラビア国が建設された。同世紀末にはキリスト教（ギリシア正教）が広まる。大モラビア国はスロバキア地方を吸収し、勢力を拡大したが、10世紀初頭、東方からマジャール人（ハンガリー人）に攻め入れられ、滅ぼされた。その後、大モラビア国に支配されていたチェック人はボヘミア地方に王国を興した。こうして**ボヘミア王国**（プシェミスル朝）が成立するが、スロバキア地方は、ハンガリーに組み込まれた。

## 2) ボヘミア王国（プシェミスル朝、ルクセンブルク朝）の台頭

ボヘミア王国の成立後、大モラビア国の時代に広まったギリシア正教は衰退し、それに代わって、ローマ・カトリック教会が広まる。

11世紀初頭、**ボヘミア王国**はポーランドに攻め入れられ、占領されることになるが、神聖ローマ皇帝の力を借り、領土を回復した。その後、ボヘミア王は神聖ローマ皇帝に臣従し、神聖ローマ帝国に加わった。なお、この帝国はドイツ人が建てた国々・都市の連合組織である。ドイツ人の国ではないものの、帝国に加盟したボヘミアは、ドイツ人の東方植民を積極的に受け入れながら発展していった。

1246年、オーストリア公のフリードリヒ2世（バーベンベルク家）が男子の跡継ぎを残さず敗死すると、ボヘミアの王子**オタカル**（後のオタカル2世）は亡き王の姉と結婚し、1251年、オーストリアの公位を手に入れた。2年後、彼はボヘミアの王座にも就く。また、オーストリア南部だけではなく、ドイツ騎士団と協力して北海沿岸まで勢力を拡大し、名実ともに神聖ローマ帝国内の最有力者にのし上がった。しかし、1278年、ハプスブルク家のルドルフ**1世**との戦いに敗れ、オーストリアを奪われた（31頁参照）。

14世紀初頭、プシェミスル家の男系が断絶すると、王位をめぐる内乱が起きるが、1310年、神聖ローマ皇帝ハインリヒ7世の長男ヨハンが亡き王の娘と結婚し、王位に就いた。ヨハンはルクセンブルク家出身であり、1313年には父の跡を継ぎ、ルクセンブルク公にもなる。これにより、ボヘミアとルクセンブルクの間に同君連合が成立し、ボヘミアでも**ルクセンブルク朝**が開かれた。

ヨハンの権勢がさらに強まるのを阻止するため、彼が神聖ローマ皇帝に選ばれることはなかったが、1347年、彼の跡を継いでボヘミア王（ルクセンブルク公）になった長男のカール（カール4世、528頁参照）は、1355年、神聖ローマ皇帝に選ばれた。彼によって帝都プラハに遷されると、帝国におけるボヘミアの地位が高まり、王国は黄金期を迎える。なお、若い頃、パリに留学した経歴を持つ彼は、1348年、首都に大学を設置した。プラハ大学はドイツ文化圏で最も長い歴史を誇る最高学府である。

## 3) フス戦争

15世紀初頭、ボヘミアの首都プラハで神学教授を務めていた**フス**は聖職者の不道徳や教会の世俗化を批判し、ボヘミアで大きな支持を得る（337頁参照）。彼はドイツ（神聖ローマ帝国）支配に対する民族運動でも指導的役割を果たし、プラハ大学の学長に選出された。

1414年、教会が彼を異端者とみなし処刑すると、ボヘミアでは教会に対する批判が沸き起こる。このような状況下、ボヘミア王が教会に歩み寄ると、王に対する批判も強まった。さらに、ドイツ（神聖ローマ帝国）支配に対する反発も激化したため、神聖ローマ皇帝のジキスムント（前出のカール4世の子）が「**十字軍**」を編成し、出兵すると、「**フス戦争**」（1419～1436年）が勃発した。ボヘミア側は農民も参加して皇帝と対戦したため、戦闘は膠着し、17年近く続くことになる。武力による鎮圧を断念した皇帝がフス派の信仰を認めると、戦火は収まるが、教会との対立は残った。それから約200年後の1618年、フス派が起こした反乱をきっかけとし、30年戦争が勃発する（355頁参照）。

<sup>1457</sup> Till Janzer, Römer in Mähren – ein kurzes Gastspiel, in <https://deutsch.radio.cz/roemer-maehren-ein-kurzes-gastspiel-8171186>

#### 4) ハプスブルク体制

1526年、ボヘミア王がオスマン帝国との戦争中に亡くなると、姻族関係にあったハプスブルク家が王位を相続し、ボヘミアを治めるようになった(451頁の注1323参照)。

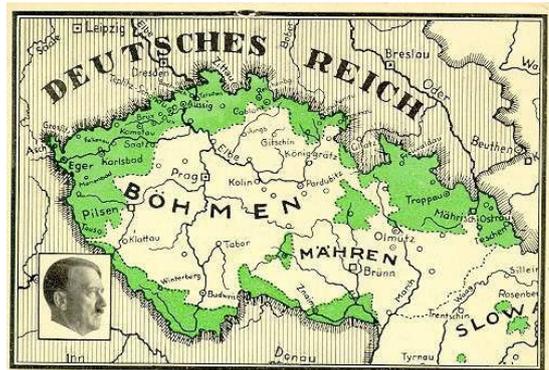
1618年、ボヘミアの新教徒が再び反乱を起こすと、**30年戦争**(1618～1648年)に発展した。彼らはワイセルベルクの戦いで大敗を喫し、ハプスブルク家の支配(宗教改革の弾圧、政策のゲルマン化)が強化されることになった。

#### 5) チェコスロバキア共和国の建設

19世紀中頃、フランスで発生した二月革命はチェコにも波及し、自由主義運動が高まったが、チェコが東隣のスロバキアと共にハプスブルク家体制から独立したのは、それから70年も経過した第1次世界大戦の末期である。当時、チェコはオーストリアの、スロバキアはハンガリーの支配下にあった。中でも、スロバキアは1000年もの長きに亘り、ハンガリーの一部になっており、住民の間でスロバキア人としての自覚が生まれたのは19世紀に入ってからである。20世紀初旬、プラハ大学で哲学の教授を務めていたトマーシュ・マサリクは、言語、文化、慣習等を共通にするチェコとスロバキアが一体となって国家を建設する運動(チェコスロバキア運動)を展開した<sup>1458</sup>。なお、汎スラブ主義を掲げていた帝政ロシアは革命によって崩壊し、1917年11月には共産主義者のレーニンによってソヴィエト政府が建てられているが、チェコスロバキア運動はこれに追随するものではない。

チェコスロバキアの建国は、1918年1月、米国のウィルソン大統領が提唱した民族自決によって後押しされることになった(385頁参照)。オーストリア＝ハンガリー帝国の敗戦が濃厚になった10月、**チェコスロバキア共和国**は独立を宣言し、翌月、国際的に承認された。初代大統領には独立運動指導者のマサリクが就任し、1935年まで務めると、盟友のエドヴァルド・ベネシュが跡を継いだ。

1930年代後半、チェコ人とスロバキア人の対立が激しくなった。また、ナチス・ドイツの外圧に晒されるようになる。ドイツやオーストリアとの国境沿いには中世より多くのドイツ人やオーストリア人が居住していたため(右図<sup>1459</sup>の緑色の部分がこの地域である)、ヒトラーが**ズデーテンラント**(**ズデーテン地方**、389頁の注1193参照)と呼ばれるこの地域の編入を要求すると、1938年9月、ミュンヘンで英仏独伊の首脳会談が開かれることになった。なお、この会議にチェコスロバキアのベネシュ大統領は招待されていない。ヒトラーの「これが最後の要求である」という言葉を信じた各国首脳は、ズデーテンラントのドイツ編入を認めたが、独裁者は約束を守らず、領土拡大を続けた。その結果、チェコスロバキアは解体され、チェコ(ボヘミア地方とモラヴィア地方)はドイツの保護領となる一方、スロバキアは「スロバキア共和国」として独立するが、ドイツの傀儡国家として支配された。こうして第1次世界大戦後に建設されたチェコスロバキアは実質的に消滅する。なお、ベネシュはロンドンに亡命し、チェコスロバキア亡命政府を建てた。



#### 6) 第2次世界大戦

1945年4月、スロバキアはソ連軍によって解放された。翌月にはチェコも解放されるが、ソ連軍はその後にもチェコに居座り、影響力を行使し続けた。ただし、直ちに社会主義化(共産主義化)されたわけではなく、議会制民主主義が復活する。

<sup>1458</sup> 国が解体された現在でも、チェコとスロバキアは文化的に多くの共通の要素を持っており、文化は両国をつなぐと見る見解が主張されている。See Katrin Sliva, Kultur verbindet Tschechen und Slowaken, in <https://deutsch.radio.cz/kultur-verbindet-tschechen-und-slowaken-8067558>

<sup>1459</sup> 出展: Schoolshistory.org.uk, "Sudetenland", in <https://schoolshistory.org.uk/topics/world-history/interwar-period-c1918-1945/sudetenland>

## 7) チェコスロバキア社会主義共和国の成立

1945年5月、亡命先から帰国したベネシュは共産党と共に国民政府を樹立し、チェコスロバキアが再建された。翌年6月、ベネシュが大統領に再選され、議会制民主主義は軌道に乗る。

1947年6月、米国がヨーロッパ経済復興計画（マーシャル・プラン、609頁参照）を発表すると、その受入れをめぐる国内情勢は大混乱に陥る。翌月、ベネシュはマーシャル・プランの受入れを表明したが、ソ連の介入を受け、撤回を余儀なくされた。翌年2月、反米路線を取る共産党は対立する閣僚を政権内から追い出し、一党独裁を開始するようになり、これを「チェコスロバキアのクーデター」または「二月事件」と言う。

同年5月、共産党主導で新憲法が制定され、**チェコスロバキア社会主義共和国**が発足するが、ベネシュはこれを認めず、辞任した。こうしてチェコは社会主義化され、冷戦期は東側（ソ連圏）の一員になる。

1960年、憲法が改正され、国号は「チェコスロバキア社会主義共和国」に変更された。

1963～68年、スターリン体制への抗議運動（1968年の**プラハの春**）が盛り上がりを見せた。1968年1月、ドプチェク第1書記は独自の社会主義路線を発表したが、ソ連のブレジネフ政権が同年8月、ワルシャワ条約機構軍を投入し、民主化の動きを弾圧したため、改革は実現しなかった（**チェコ事件**、401頁参照）。

なお、この事件を機に国体が再検討されることになり、1969年、チェコ社会主義共和国とスロバキア社会主義国からなる連邦制に移行した。これは両者間の格差を是正し、後者に自治を保障するものであったが、実際には中央集権体制が維持され、前者が実権を握った<sup>1460</sup>。

## 8) チェコ共和国の建設

1989年、東欧諸国で民主化運動が行われる中、チェコスロバキアでも11月に革命が起き、共産主義体制は崩壊した。なお、この革命は流血を伴わなかったため、柔らかな生地にたとえ「**ビロード革命**」（Velvet Revolution）と呼ばれている（404頁参照）。

その後、チェコスロバキアはソ連体制からの脱却とEU加盟を目指すようになった。このような状況下、チェコとスロバキアの（経済）格差を背景に、スロバキア人の間で国政や国体に対する不満が高まる。オーストリア＝ハプスブルク家体制下で工業が発展したチェコに対し、スロバキアは伝統的に農業国であり、経済力が弱かった。また、共和国は連邦制の国家であるものの、政治の実権はプラハに握られており、スロバキアはチェコの発展の犠牲になったという考えがスロバキアで増えていく<sup>1461</sup>。「スロバキアは次男ではない」という世論を反映し、1990年6月、超保守的で、ポピュリストのヴラジミール・メチアルが首相に選出された。これに対し、チェコでは改革派のヴァーツラフ・クラウスが首相に就任し、スロバキアを切り捨て、市場経済を導入しようとしたため、メチアルの批判を浴びた。両者の抗争がチェコスロバキアを解体させることになるが、国民はそれを望んでいなかったため、両者は国民投票を実施せず、解体を決定した。なお、スロバキアとの分離は「**ビロード離婚**」と呼ばれており、旧ユーゴスラビアのような戦争は起きていない。

※「ビロード離婚」と同時期に発生した旧ユーゴの民族紛争について、545頁以下を参照されたい。

### ◎ ハイフン戦争

1990年、新憲法を制定する際、チェコの議員は「チェコスロバキア連邦共和国」という国号を支持したのに対し、スロバキアの議員は共和国が異なる民族で構成されることを示すため、「チェコ」と「スロバキア」をハイフンで区切り、「チェコ＝スロバキア」（Česko-Slovensko）とすべきとした。これを「ハイフン戦争」と呼ぶが、双方とも妥協しなかったため、どちらも正しい表記として認められた。また、「チェコおよびスロバキア連邦共和国」（Česká a Slovenská）という国号も採用されたが、両者の対立を完全に解消することはできなかった<sup>1462</sup>。

<sup>1460</sup> Cezary Bazydło, Warum die Tschechoslowakei zerfiel, in <https://www.mdr.de/geschichte/zeitgeschichte-gegenwart/politik-gesellschaft/ende-tschechoslowakei-tschechien-slowakei-100.html>

<sup>1461</sup> Stefan Heinlein, Glücklich getrennt, in <https://www.deutschlandfunkkultur.de/tschechien-und-slowakei-gluecklich-getrennt-100.html>

<sup>1462</sup> Markéta Kachlíková, Gedankenstrich-Krieg, in <https://deutsch.radio.cz/gedankenstrich-krieg-8173100>

1999年、チェコは米国を中心とした西側諸国の安全保障体制である NATO に加盟する。2004年5月には、EU加盟を達成した。スロバキアも同時に加盟しているため、再統合が実現する形になる。両国はともにシェンゲン協定に加盟しているため、国境でパスポート検査は行われず、自由に移動することができる。なお、スロバキアとは異なり、チェコは政府の方針により、ユーロを導入していないため、通貨は統一されていない。

### 13. ロシア・ソ連史

1991年12月、ソ連が解体され、その承継国として**ロシア連邦**が発足した。ロシアは我が国とも国境を接する、世界で最も広い国である。伝統的な史観によると、その起源は、9世紀後半、遙か西方のバルト海と黒海の間で成立した**ノヴゴロド国**や**キエフ公国**に遡り、領土が太平洋沿岸にまで達したのは17世紀前半である。なお、両国は現在のロシア西部、ウクライナ、ベラルーシを領土にしており、3国のルーツとされている。このような歴史観に基づき、プーチン大統領は、2021年、3国を同一民族の国とみなし、議論を引き起こした<sup>1463</sup>。翌年、ウクライナとの戦争が勃発すると、ロシアの起源はノヴゴロド国やキエフ公国ではなく、13世紀後半に成立した**モスクワ公国**とし、民族の一体性を否定する見解がより強く主張されるようになる<sup>1464</sup>。

モスクワ公国はモンゴルの支配下で誕生し、14世紀初旬には**モスクワ大公国**に昇格した。15世紀後半、中央アジアの帝国から独立すると、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）よりキリスト教を受け入れ、西洋化していくが、この国がヨーロッパの国として目されるようになるのは18世紀に入ってからである。

第1次世界大戦中の1917年、帝政（ロマノフ朝）は崩壊し、1922年、ソ連が発足した。世界初の社会主義革命を実現したソ連は第2次世界大戦後、東欧諸国を統制し、ヨーロッパの分断をもたらすが、1985年、ゴルバチョフが書記長に就任し、衛星国への締め付けが弱まると、1989年、東側の体制が崩壊し、東西対立は終わった。1991年にはソ連も解体され、ロシアに引き継がれる。

2022年2月、プーチン大統領は前述した史観に基づき、ウクライナに侵攻した。ヨーロッパ諸国から批判されると、翌月、欧州の国際社会（欧州評議会、552頁参照）から脱退し、現在に至る。

#### 1) キエフ公国

862年、スウェーデン地方に住んでいたノルマン人（ヴァイキング、ヴァリヤーク人）は、首長の**リューリク**に率いられて東に移動すると、バルト海沿岸のノヴゴロド（現ロシア・ノヴゴロド州）を占領し、この地に**ノヴゴロド国**を建設した。伝統的な史観によると、この国がロシアの原型になる。また、「ロシア」という固有名詞はノルマン人の別名である「ルーシ」<sup>1465</sup>に由来する。後述するように、1478年、モスクワ大公国はノヴゴロド国を併合し、ルーシの承継を主張するようになった。

リューリクの死後、一族は**ドニエプル川**<sup>1466</sup>沿いを南下し、882年、この川の中流域に**キエフ公国**を興した。この国は現ウクライナの首都であるキーウを主都とし、「**キエフ＝ルーシ**」とも呼ばれた。



Viktor Vasnetsov 画(1848-1926)

『ラドガに到着するリューリク』(左中央)

ラドガとは現ロシア・レニングラード州内の小村である。

<sup>1463</sup> Vladimir Putin, On the Historical Unity of Russians and Ukrainians, <http://en.kremlin.ru/events/president/news/66181>

<sup>1464</sup> See Anna Veronika Wendland, Zur Gegenwart der Geschichte im russisch-ukrainischen Krieg, Krieg in Europa, APuZ 28-29/2022, pp. 28-34, 31-32. なお、ウクライナはキエフ公国の分国である**ハーリチ＝ヴォルイニ大公国**を起源にすることが指摘されている（521頁参照）。

<sup>1465</sup> スラブ人やフィンランド人はノヴゴロド国を建設したスウェーデン系のノルマン人を「ルーシ」と呼んだ。彼らはヴァイキングと、特に、ロシア方面に進出した者はヴァリヤーク人とも呼ばれた。Andreas Kappeler, Die Kiewer Rus: Geteilte Erinnerung in der Ukraine und in Russland, in <https://www.bpb.de/295403>

<sup>1466</sup> **ドニエプル川**はロシア北西部のヴァルダイ丘陵より流れだし、ベラルーシ、ウクライナを経て黒海に注ぐ。全長2290kmの内、115kmはベラルーシ・ウクライナ間の国境を形成している。

988年、キエフ公のウラディミル1世は、さらに南下して東ローマ帝国と交流を持つと、帝国で広まっていたギリシア正教(239頁参照)に改宗し、それを国教に指定した。また、帝国の制度や文化を取り入れ、国のヨーロッパ化を図った。

12世紀、キエフ公国は内紛によって分裂し、10~15の公国が誕生する。他の小国と区別するため、キエフ公国はキエフ大公国とも呼ばれているが、1240年、モンゴル帝国(キプチャク・ハン国)に征服され、消滅した。もっとも、幾つかの分国(ハーリチ、ヴォルニニ公国、ブスコフ公国等)やノヴゴロド公国はモンゴルに朝貢しながら存続した。

## 2) モスクワ大公国

その後、モンゴルの支配が240年間続き、この時代は「**タタールのくびき**」と呼ばれている<sup>1467</sup>。1271年、モンゴルの支配下で**モスクワ公国**が成立した。1318年、この国は**モスクワ大公国**に昇格し、1480年には、大公のイヴァン3世がモンゴル帝国からの独立を達成する。彼はロシア統一も実現し、近代的なロシア国家の基礎を築いた。なお、1453年、ビザンツ帝国(東ローマ)がイスラム勢力に滅ぼされると、イヴァン3世は、1472年、最後の皇帝の姪を妃とし、帝国やギリシア正教の盟主の承継を自認するようになる(263頁参照)。また、1471年、ノヴゴロド公国を攻略し、1478年に併合すると、ルーシの承継を主張した。

16世紀中頃、イヴァン4世が**ツァーリ**(大公より格上であるが、皇帝よりは格下の称号)を使用し、専制を敷くようになった。1584年に死去すると後継者争いが起き、ポーランドの介入を招いた。これに対抗するため、モスクワ大公国の諸貴族が団結し、1613年、まだ16歳であったミハイル・ロマノフをツァーリに選出すると、**ロマノフ朝**が開かれる。

なお、それまでは、862年にノヴゴロド公国を興したリューリクを皇祖とするリューリク朝が続いていた。

ミハイルの跡を継いだ長男アレクセイは、ウクライナ(かつてのキエフ公国)の東部とキエフをリトアニアから奪回した。



ミハイル・ロマノフの肖像画  
Johann Heinrich Wedekind 作  
(1674-1736)

## 3) ロシア帝国

アレクセイの末子で、第3代ツァーリとなった**ピョートル1世(大帝)**は自らヨーロッパ諸国を視察し、モスクワ大公国のヨーロッパ化を図った。また、バルト海進出を狙ってスウェーデンと交戦し、20年余り続いた**北方戦争**(1700~1721年)で勝利を収めると、バルト海の覇者になる。1721年、彼は議会にインペラートル(皇帝)の称号を贈らせ、**ロシア帝国**を成立させた。なお、スウェーデンとの戦争中、ピョートル1世がフィンランド湾の沿岸に**サンクトペテルブルク**を建設し、1713年、この都市に首都を遷すと、ロシアはヨーロッパの国と目されるようになる。ヨーロッパとアジアの境がウラル山脈にまで移動するのもこの頃であり、新しい基準に従い、ロシア領の全域が欧州に属すとみなされるようになった(8頁参照)。

18世紀末、ロシアはウクライナ地方とベラルーシ地方を編入し、西方へ領土を拡大した。

19世紀初頭、ナポレオン軍を撃退し、名声を高めたアレクサンドル1世はウィーン会議でポーランドの支配権を獲得し、ポーランド国王を兼ねるようになる。また、**ウィーン体制下**(585頁参照)で神聖同盟の盟主となり、ヨーロッパの民族運動や自由主義運動を弾圧した。そのため、ロシアは「ヨーロッパの憲兵」と呼ばれた。

この世紀の半ば、大国としての認識を強めたロシアは黒海に進出し、オスマン帝国と対戦したが(クリミア戦争、425頁参照)、自国領内での戦闘で敗北を喫し、その後進性が露呈された。戦後(1861年)、アレクサンドル2世は農奴解放令を出し、国の近代化を図った。

対外的には南下政策や**汎スラブ主義**(372頁参照)を強化し、オスマン帝国との争いを繰り返した。1877年に発生した**露土戦争**で、ロシアは勝利を収め、バルカン半島に住む南スラブ人をオスマン体制から解放するが、イギリスやオーストリア等の抵抗にあい、半島への進出は阻止された。

<sup>1467</sup> モンゴル軍の中に「タタール人」と呼ばれる部族がいたことから、モンゴル人はタタール人とも呼ばれた。

その後、ロシアは方向転換し、東アジア進出に力を入れた。その結果、満州や朝鮮で我が国と対立するようになり、1904年2月、**日露戦争**が勃発する。翌年1月、軍需産業での強制労働に抗議する労働者が軍隊と衝突する事件が発生した(血の日曜日事件)。これを機に労働者と農民が蜂起してソヴィエト(「評議会」の意)を立ち上げると革命に発展し、ロシアは戦争の継続が困難になる。戦争の拡大と長期化は我が国にとっても負担になったため、1905年9月、米国の仲介によってポーツマス条約が締結され、戦争は終わった。

1914年6月、バルカン半島でサラエボ事件(381頁参照)が発生し、オーストリア=ハンガリー帝国がセルビアに対し宣戦を布告すると、汎スラブ主義を掲げるロシアはセルビアの側に立って参戦した。なお、ロシアは英仏と**三国協商**を形成しており、オーストリア=ハンガリー帝国やその同盟国であるドイツとの戦闘は**第1次世界大戦**に発展する。

大戦中の1917年3月、ロシアでは戦時中の貧困・物価高騰等が原因となって再び革命が起き、帝政が崩壊した。ニコライ2世(168頁参照)は退位し、首都ペトログラード<sup>1468</sup>にはブルジョワジー主導の臨時政府が発足するが、同年11月、共産主義指導者のレーニン<sup>1469</sup>によって倒された。世界初の社会主義革命を実現したレーニンはソヴィエト政権を樹立し、その首長になる。

#### 4) ロシア=ソヴィエト連邦社会主義共和国(略称はロシア共和国)

1918年1月の選挙でレーニンが所属する政党(ロシア社会民主労働党)が第1党の座を逃すと、彼は武力を行使して議会を解散させ、同党の多数派であるボリシェヴィキによる独裁を開始した<sup>1470</sup>。また、7月、**ロシア=ソヴィエト連邦社会主義共和国**(略称は**ロシア共和国**)を立ち上げ、首都をモスクワに戻す。

#### 5) ソ連

世界初の社会主義革命は諸国より警戒され、1918年3月、対ソ干渉戦争が始まるが(注1470参照)、それが収束した1922年12月、ロシアは、ウクライナ、ペラルーシ、ザカフカース諸国(386頁の注1185参照)と共に**ソヴィエト社会主義共和国連邦(ソ連)**を発足させた。

その当時、レーニンは病により、すでに政治的指導力を失っていたが、1924年1月に死去すると後継者争いが起きた。この政争に勝ち、実権を握った**スターリン**<sup>1471</sup>は、世界主義革命を掲げるトロツキーを共産党から追放した。そして、「一国社会主義」<sup>1472</sup>という理念の下、5ヶ年計画を立て、ソ連の工業化を図った。農業分野では集団化を実施し、コルホーズ(集団農場)とソフホーズ(国営農場)を設けた。なお、当時、資本主義国の社会・経済は世界恐慌の煽りを受けて大混乱に陥っていたが、計画経済を採用していたソ連はほとんど影響を受けずに済む。経済発展によって国際的地位が向上すると、1934年、国際連盟に加盟した。

1922年にラパロ条約を締結し、ソ連を世界で最初に承認したのはドイツであり、良好な関係を保ったが、ヒトラーは反共産主義者であり、ソ連の壊滅を狙っていた。1935年、この独裁者が徴兵制を復活させると、スターリンはドイツの攻撃に備え、フランスと相互援助条約を結んだ。同様に英仏もヒトラーを警戒する一方、宥和政策をとり続けていることにスターリンは不信感を抱き(388頁参照)、1939年8月、ヒトラーと密約を交わし、相互に攻め入れられないことを取

<sup>1468</sup> 戦前、この都市はペテルブルクと呼ばれていたが、「○○○ブルク」というドイツ語(敵国の言語)を避けるため、ペトログラードに改名された。この点について、13頁の注53を参照されたい。

<sup>1469</sup> ドイツは敵国ロシアの国内情勢を混乱させるため、レーニンを支援した。それを受け、亡命先のスイスから帰国したレーニンは、1917年4月、停戦と臨時政府の打倒を訴える。なお、労働者の利益を擁護する共産主義者にとって皇帝や貴族は敵であった。そのため、レーニンはロシア人であるにも拘わらず、ロシアの敗戦を望んでいた(敗北主義)。

<sup>1470</sup> 1918年3月、ロシアはドイツと講和条約(ブレスト=リトフスク条約)を締結し、第1次世界大戦から離脱した。しかし、国内各地で反革命運動が起きると、共産主義の拡大を恐れる連合国が介入し、**対ソ干渉戦争**(1918~1922年)が勃発する。ソヴィエト政権が赤軍を組織して対抗すると反乱は収まり、列強も1921年までに撤兵したが、我が国は1922年までシベリアに駐留した。

<sup>1471</sup> スターリンとは「鋼鉄の人」という意の筆名であり、本姓はジュガシヴィリである。

<sup>1472</sup> 「一国社会主義」とはソ連単独でも社会主義を実現しようという考えである。

り決めた。それと同時にポーランドの分割で合意しており、翌月、この国に侵攻し、その東部を占領した。また、翌年6月、バルト3国を攻略し、強制的にソ連に組み入れた。

なお、スターリンは、1936年に「スターリン憲法」を制定した前後より、自らの政策に反対する者は共産党員であれ投獄・処刑するという大粛正を実施し、恐怖政治を敷いた。また、第2次世界大戦中は赤軍最高司令官を兼任し、ドイツ軍を撃退する(390頁参照)。

戦後、スターリンは、冷戦構造を作り出し、東欧諸国を衛星国化する一方で、東欧の共産化をめぐるユーゴスラビアのティトーと対立し、ユーゴスラビアをコミンフォルム(Cominform 共産党・労働者党情報局、396頁参照)から追放した。

スターリンの死後(1953年)、共産党第1書記長となったフルシチョフは西側諸国に歩み寄り、「雪どけ」をもたらしたが、次代のブレジネフは「新冷戦」を招いた。また、ブレジネフ・ドクトリン(制限主権論)を掲げ、「プラハの春」を弾圧した(401頁参照)。彼の死後、書記長のポストは、アンドロポフ、チェルネンコと短期間の内に変わるが、ブレジネフ時代に蓄積された腐敗や停滞は改善されなかった。また、共産党独裁や言論統制に対する国民の不満が膨らんでいく。

このような状況下、1985年に書記長に就任したゴルバチョフは、ペレストロイカ(改革・立て直し)とグラスノスチ(情報公開)という理念の下で複数政党制・大統領制の採用や市場経済の導入といった大胆な改革を行った。また、西側諸国との対立を解消し、東欧諸国に対する統制を廃止した(新思考外交)。

1990年3月、憲法改正を経てソ連大統領のポストが設けられた。ゴルバチョフは初代大統領に就任するが、翌年8月、民主化政策に反発した共産党保守派によって監禁された。この「8月クーデター」はエリツィン<sup>1473</sup>の活躍によって失敗に終わり、3日後、ゴルバチョフは解放されたが、実権はエリツィンに移っており、前者は共産党の解散と自らの辞職(共産党書記長の辞任)を表明した。これを受け、バルト3国、ウクライナ、ベラルーシ等が独立し、ソ連は崩壊へと向かう。

1991年12月8日、ロシア共和国のエリツィン大統領とその他のソ連構成国首脳はソ連の解体と独立国家共同体(CIS、405頁参照)の設立を宣言した。共同体は同月21日、アルマ・アタ宣言への署名を経て正式に発足する<sup>1474</sup>。これを受け、同月25日、ゴルバチョフはソ連大統領を辞任し、翌日、ソ連の解体がソ連最高会議によって宣言された。

## 6) ロシア連邦

1991年12月、ソ連が崩壊すると、その構成国であったロシア=ソヴィエト連邦社会主義共和国は国号を**ロシア連邦**に改め、ソ連に代わって発足した**独立国家共同体**に加盟した。ロシアはこの共同体の主要メンバー(指導国)であり、対外的にソ連を承継する国になる。



初代大統領に選出されたエリツィンは、ロシアからの独立を宣言したチェチェンに軍隊を派遣し(1994~1996年)、国際的な批判を浴びた。この軍事介入は1999年9月に再開されることになり、独立派を倒し、国民の人気を博したのがプーチンである。彼は2000年3月の大統領選挙で圧勝し、第2代大統領に就任すると、「大国ロシア」の再興を目指し、犯罪や汚職の摘発、新興財閥(オリガルヒ)の排除といった改革を実施した。また、2001年9月、アメリカで同時多発

<sup>1473</sup> エリツィンは、1991年8月のクーデター発生時、ロシア共和国の大統領であった。ソ連解体後は、ロシア連邦の初代大統領になる。

<sup>1474</sup> なお、バルト三国(エストニア、リトアニア、ラトビア)は共同体に加盟していない。ジョージアは1993年に加盟したが、南オセチア自治州をめぐるロシアと対立し、2009年8月に脱退した。

テロが発生した際は、自国でもテロ行為は容認しないという立場から（チェチェン独立派によるテロの取り締まり）、西側諸国と協調している。

2004年、プーチンは再選を果たしたが、憲法上、連続3期の続投は禁止されていたため、2008年、任期満了をもって退任した。もともと、第3代大統領メドヴェージェフの下で首相を務めた。そして、2012年3月の大統領選に出馬すると勝利を収め、大統領職に復帰した。さらに、2018年3月と2024年3月の選挙でも圧勝し、大統領職は通算5期目に入った。なお、2008年の憲法改正により任期は6年に延長されている。また、2020年の改正で当時、大統領を務めていた者の任期はリセットされたため、プーチンは2024年にも出馬できるようになった。同年3月に行われた選挙では90%近い票を獲得し、再選され、現在に至る。

## 14. ウクライナ史

ヨーロッパ大陸上の領土だけを考慮すると、ウクライナは欧州で最も大きな国である<sup>1475</sup>。首都キーウは国の北部に位置するが、ウクライナは隣接するロシア、ベラルーシのように、北ヨーロッパに建てられた国ではない。もっとも、歴史的に北方との関わりが強く、伝統的な史観によると、ウクライナは、9世紀末頃、北欧スウェーデンのヴァイキングが南下し、キーウの周辺に興した**キエフ公国**を起源とする（異説について、後述参照）。ロシア、ベラルーシも、この公国をルーツにするため、その首都として発展し、現ウクライナの首都でもあるキーウは3国共通の古都にあたる。

1922年、ウクライナがロシア、ベラルーシ等と共にソ連を立ち上げると、その歴史はソ連史の一部として扱われるようになる。このような状況が変わるのは、1992年にソ連が解散し、ウクライナが独立国になってからであるが、2014年2月、**ウクライナ紛争**が発生すると、ロシアとの関係を見直す動きが強まった。また、欧米では、ソ連時代を想起させる“Kiev”という表記の使用が避けられるようになるが、日本では、従前通り「キエフ」と記された。しかし、2022年2月に戦争が勃発すると、「キーウ」に置き換えられ、ロシア、ベラルーシと共通の歴史も見直されることが増えた。



### 1) キエフ公国とその分国であるハリチ=ヴォルイニ公国の時代

862年、スウェーデン地方に住んでいたノルマン人（ルーシ、ヴァイキング、516頁の注1465参照）は、首長のリュウリクに率いられ東に移動し、バルト海沿岸に**ノヴゴロド国**を建てた。彼の死後、一族はドニエプル川（注1466参照）に沿って南下し、その中流域に位置する**キーウ**<sup>1476</sup>を占領すると、882年、**キエフ公国**（キエフ＝ルーシ）を興した。バルト海と黒海の間位置するキーウは首都となり、交易で栄える。

988年、キエフ公の**ウラディミル1世**がさらに南下すると、東ローマ帝国にとって脅威になるが、彼は皇帝の娘を后にし、ビザンツ文化を受容した。また、ギリシア正教を国教に指定し、公国のヨーロッパ化を図った。跡を継いだヤロスラフ（賢公）は娘をフランス、ノルウェー、ハンガリーの王と結婚させ、「ヨーロッパの義父」とも呼ばれた。

11世紀中頃、公国はキエフ公の息子達によって分割して治められるようになるが、彼らは互いに争い、内乱を繰り返した。次世紀の初旬、再統一が達成されるが、1125年にウラディミル2世モノマフが亡くなると、再び分裂した。なお、10～15の分国と区別するため、キエフ公国は「**キエフ大公国**」と呼ばれている。

大公国は、1240年、モンゴル帝国（キプチャク・ハン国）に滅ぼされたが、ウクライナ西部では、分国である「**ハリチ=ヴォルイニ公国**」が帝国に朝貢しながら存続した<sup>1477</sup>。なお、この国は南部のハリチ公国と北部のヴァルイニ公国が合併して成立し、共に現ウクライナ北西部に位置する。また、最初のウクライナ国家とみなされており、ウクライナはキエフ大公国ではなく、この公国を起源とする見方が近年の有力説である<sup>1478</sup>。これに対し、ロシアは1271年に成立したモスクワ公国を起源にすると考えられている。

<sup>1475</sup> 国全体の面積では、ロシア（約1,710万km<sup>2</sup>）、デンマーク（約221万km<sup>2</sup>、77頁参照）、トルコ（約78万km<sup>2</sup>）に次いで4番目であるが、これらの3国の面積の大半はアジアまたはアメリカに位置する。

<sup>1476</sup> キーウは、5世紀末頃、ノルマン人（ルーシ）ではなく、東スラブ人のポリャーネ族によって建てられたとされている。1982年、キーウの公園には、創立1500周年を記念し、創立者である3兄弟と彼らの妹の像が設置された。

<sup>1477</sup> なお、ノヴゴロド公国もモンゴル帝国を宗主国としながら存続した。

<sup>1478</sup> NHK「【詳しく】プーチン大統領なぜ執着？キエフ・ルーシの歴史とは」(<https://www3.nhk.or.jp/news/special/>)

## 2) リトアニアとポーランドによる支配

14 世紀中頃、北方のリトアニア大公国がモンゴルとの戦いを制し、ウクライナ地方を占領した。ハーリチ=ヴォルイニ公国もリトアニアの支配下に入るが、この世紀の末頃、ハーリチはポーランド領に変わった。

16 世紀中頃、リトアニアとポーランドの同君連合が成立すると、ウクライナ貴族はポーランドへの編入を決め、その領土となる。

## 3) 帝政ロシアによる支配

17 世紀に入ると、ウクライナ・コサック<sup>1479</sup>が分離独立運動を起こし（フメリニツキーの乱）、自治権を獲得した。その後、帝政ロシアと対立するようになり、敗れると、1654 年、ウクライナ東部はロシアの支配下に置かれた。1667 年にはロシアに編入される。

これに対し、西部はポーランド領に留まったが、1795 年、ロシア、プロイセン、オーストリアでポーランドが分割され、消滅した際（393 頁の注 1202 参照）、ウクライナ地方の大部分は帝政ロシア領に、約 2 割はオーストリア（ハプスブルク家）領になった。

なお、ベラルーシも、1659 年、リトアニア=ポーランド王国に編入されていたが、18 世紀末頃、ポーランドが消滅すると、帝政ロシアに組み込まれた。

## 4) ソ連時代と独立

1917 年のロシア革命を機に、ウクライナは共和国として帝政ロシアより独立したが、1922 年には他の 3 つの社会主義共和国と共にソヴィエト社会主義共和国連邦（ソ連）を発足させた（394 頁参照）。なお、第 2 次世界大戦後、ウクライナは、ソ連と共に国連の原加盟国となる。これは社会主義国の数を増やすための策であり、スターリンが米国の反対を押し切り実現させた。

1954 年、フルシチョフはクリミア半島をロシア領からウクライナ領に変更した。これはウクライナにおけるロシア人の比率を高めるための措置であった。

1986 年 4 月、首都キーウの北方に位置するチョルノービリ（チェルノブイリ）で史上最大規模の原発事故が発生し、ウクライナは大惨事に陥る。なお、この事故はソ連を解体させる要因にもなった。

冷戦崩壊後の 1991 年 8 月、ウクライナはソ連から独立し、国号を「ウクライナ」に改めた。また、12 月、ソ連に代わって発足した独立国家共同体（CIS）に加盟した。もっとも、ロシアが単独でソ連の承継国になることに反発し、CIS 憲章を批准していないため、正式な加盟国ではない。

ソ連時代、ウクライナに配置されていた核兵器の取扱いについて、1994 年 12 月、アメリカ、イギリス、ロシアの核保有国は、ウクライナは核兵器をロシアに移転する一方で、ウクライナの独立、主権、領土、安全を保障することを取り決めた（**ブダペスト覚書**）。なお、全欧安全保障協力機構（OSCE、554 頁参照）が仲介役を務め、交渉の成立に貢献している。ウクライナは、ロシアがクリミア半島の返還請求を放棄する期待を込め、3 国の合意を受け入れたが、後述するように、2014 年 2 月、ロシアは半島に侵入し、翌月、自国に編入した。

## 5) オレンジ革命とユーロマイダン革命 ～ EU 加盟をめぐる対立 ～

21 世紀に入ると、親ロシア派と親ヨーロッパ（EU）派の対立が激化した。2004 年 11 月の大統領選挙で親ロシア派のヤヌコーヴィチの当選が発表されると、選挙の不正を指摘する抗議運動が沸き起こり、EU や米国の後押しもあって、翌 12 月に再選挙が実施されることになった。すると、選挙結果は覆り、親ヨーロッパ派のユシチェンコが当選した。11

---

[international\\_news\\_navi/articles/qa/2022/06/17/22839.html](http://international_news_navi/articles/qa/2022/06/17/22839.html)。

<sup>1479</sup> **コサック**（Cossack）とは群れから離れて生活する東スラブ系の自由民である。特定のヨーロッパ諸国には属さず、遊牧で生計を立てていたが、戦争が勃発すると武装共同体を結成し、兵役に就いた。ロシアを始めとする東欧の広い地域に存在したが、リトアニア大公国の南部の地域（現ウクライナ地方）で成立した武装集団はウクライナ・コサックと呼ばれた。See Paul Robert Magocsi, A History of Ukraine, University of Toronto Press 1996, pp. 179–181.

月の選挙結果に対する抗議運動では、オレンジ色がシンボルカラーとして用いられたため、政権交代をもたらした一連の過程は「オレンジ革命」と呼ばれている。

この革命を経て発足したユシチェンコ政権であったが、内部抗争が相次ぎ、2010年の大統領選挙では、2004年の対立候補ヤヌコーヴィチに敗れた。こうして雪辱を果たしたヤヌコーヴィチも、反EU路線（EUとの連合協定締結交渉の停止<sup>1480</sup>）や政権の汚職によって国民の支持を失っていく。大規模な政治デモが発生すると、2014年2月、ロシアに亡命した（ユーロマイダン革命）。その後、親EU派のトゥルチノフが大統領を代行していたが、5月に選挙が行われ、同じく親EU派のポロシェンコが大統領に選出された。

## 6) ロシアとの抗争

国政が再びヨーロッパ路線に傾くことを警戒したロシアは、2014年2月、ウクライナ領クリミア半島（97頁参照）に住むロシア人の保護を名目に、半島に侵攻した。なお、黒海に面する半島は、18世紀、帝政ロシアがオスマン帝国から奪った地域であり、それ以降、ロシアに属してきた（425頁参照）。第2次世界大戦後の1954年、ウクライナにおけるロシア人の比重を高めるため、ロシア領からウクライナ領に変わったが（なお、当時、ロシアとウクライナは共にソ連に属しており、フルシチョフが国家元首であった）、その後も住民の多くはロシア人であり、2014年の時点では、約6割がロシア人であった。

3月初旬までに半島全域を統制したロシアは住民投票を実施すると、9割以上の住民の賛成が得られたとして、ロシアへの併合を強行した。なお、併合はクリミア共和国をウクライナから独立させ、同共和国とロシアの間で併合条約を締結する形式で行われている。しかし、ウクライナ政府だけではなく、国際社会も併合を承認しておらず、ロシアに対して制裁を発動している。

併合条約が締結された3月18日、G8首脳（ただし、ロシアを除く）は臨時会合を開き、ロシアの首脳会議への参加を停止する決定を下した（97頁参照）。

なお、ウクライナは独立国家共同体（CIS）に正式に加盟していなかったが、4月12日、脱退を表明し、ロシアとの対立姿勢を強めた。

同月、ウクライナ東部のルガンスク州とドネツク州のロシア系住民が分離独立を宣言し、ウクライナ政府軍と衝突すると、ドンバス戦争（ウクライナ東部紛争）が勃発した。ロシアが独立派を支持し、戦闘が膠着する中、ロシア、ウクライナ、フランス、ドイツの4国は、2015年2月、ベラルーシの首都ミンスクで会合を開き、ウクライナはロシア系住民に特別な地位を与えることを決め、停戦を実現させた（ミンスク合意）。

2019年3～4月、ポロシェンコ大統領の任期満了に伴い、選挙が行われた。彼は汚職疑惑をかけられていたため、得票を伸ばすことができず、コメディアンで知名度の高いゼレンスキーに大差で敗れる<sup>1481</sup>。ゼレンスキーはNATO加盟を



<sup>1480</sup> EUはウクライナのEU加盟を支援するため、同国と連合協定の締結する作業を進めていたが、2013年11月、ヤヌコーヴィチ大統領は協定の締結を凍結した。これを受け、国民の反政府運動が高まり、政権は崩壊した。EUはロシアとの関係が緊迫する中、協定の締結作業をさらに進め、翌年、それを実現する。その後、一部のEU加盟国で反発する動きも生じたが、2016年1月、協定は発効し、現在に至る。See Zeit Online, EU stoppt Arbeit an Assoziierungsabkommen mit Ukraine, in <https://www.zeit.de/politik/ausland/2013-12/assoziierungsabkommen-auf-eis; lpb, EU-Beitritt der Ukraine, in https://osteuropa.lpb-bw.de/ukraine-eu-beitritt>

<sup>1481</sup> ポロシェンコとの一騎打ちとなった2019年4月の投票で、73.22%の高い支持を得た。See Warsaw Institute, Apparent Revolution – Presidential Elections in Ukraine, in <https://warsawinstitute.org/apparent-revolution-presidential-elections-ukraine/>

公約に掲げていたため、ロシアを刺激することになったが(408頁参照)、2020年7月、プーチン大統領、OSCEとテレビ会談を行い、ウクライナ東部における政府軍と新ロシア派の戦闘を停止することで合意した。

もっとも、両国間の関係が改善することはなく、2022年2月21日、ロシアはルガンスク州とドネツク州の独立と「人民共和国」の創設を承認し、それらを自国に編入するに至った。また、その3日後(2月24日)、ウクライナ本土に侵攻し、全面的な侵略戦争を勃発させた。

4日後、ウクライナはヨーロッパ諸国との結束力を強化するため、また、諸国から支援を得るため、EU加盟を申請した。これを受け、EUは異例の速さで加盟交渉の開始を決定したが、加盟が実現する見通しは全く立っていない(654頁参照)。ゼレンスキー大統領は、2022年9月、NATO加盟も申請しているが、ウクライナは加盟要件(特に民主主義の確立や経済発展)を満たしていないばかりか、交戦中であるため、目標の達成は困難な状況にある。また、同国のNATO加盟はロシアを過度に刺激することになるため、現加盟国が承認する可能性はほとんどない。EUは集団的安全保障を目的とした国際機関ではないが、加盟国間の結束を高めることに貢献しており、NATOに代替しうる要素を持つが、前述したように、ウクライナが早期にEU加盟を実現する可能性も排除されている<sup>1482</sup>。

なお、2022年6月1日の時点で約400万(前人口の約1割)のウクライナ国民がEU内に避難しており、戦争は第2次世界大戦後、最大規模の避難民を出すことになった(212頁参照)。

---

<sup>1482</sup> See lpb, EU-Beitritt der Ukraine, in <https://osteuropa.lpb-bw.de/ukraine-eu-beitritt>; Christoph Elhardt, «Die EU wird kein Verteidigungsbündnis à la Nato», in <https://ethz.ch/de/news-und-veranstaltungen/eth-news/news/2022/04.html>



## 2. 帝国の三つの要素：「神聖」「ローマ」と「帝国」

神聖ローマ帝国の実態は「神聖」「ローマ」「帝国」という三つの観点から考察されなければならない。

### 1) 「神聖」～ キリスト教との結び付き ～

帝国は神の恩寵を受けて発足し、帝位は神聖とされた<sup>1485</sup>。帝国が「神聖」とされたのは、そのため、つまり、帝国そのものではなく、帝位が神聖であることによる。なお、国名に「神聖」が付くのは1157年以降のことである。これは皇帝が教皇と対立する過程で生じ、前者は後者に屈しないことを示すものであった。つまり、帝位は教皇が創設したのではなく、神の恩寵によるとされた。「聖なる父親」は自らの行為によって皇帝という新たな権力者を生み出したため、後に権威を失墜させることになる。962年、オットー1世に帝冠を授けたヨハネス12世も、前者に廃位を言い渡された(332頁参照)。また、「神聖」を付けることで、古代ローマ帝国と区別する意義もあった。

右に掲載する肖像画でカール大帝が被っている帝冠の正面に付けられている十字架、右手で持つ聖槍、左手で持つ宝珠はキリスト教に由来し、帝位は神より授けられたものであることを示している。

なお、キリスト教とはギリシア正教ではなく、ローマ・カトリック教会<sup>1486</sup>を指しており、帝国の実態はローマ・カトリック教国であった<sup>1487</sup>。しかし、それゆえに「神聖」と呼ばれたわけではない。つまり、ヨーロッパにはその他にもキリスト教国があるが(例えば、パチカン、スペイン)、神聖であるとは限らない。なお、16世紀の宗教改革は帝国内で始まり、新教は帝国内でも広まった。その結果、もはやカトリック帝国とは呼べなくなる。

### 2) 「ローマ」～ ゲルマン(ドイツ)人によるローマの再興～

国号に「ローマ」が付くのは1254年で、「神聖」が付くよりも100年ほど遅いが、帝国は発足した当初より「ローマ」としての性質を持っており、古代ローマを承継する国として発足した。これは、ある程度、実態に合致しており、カール大帝は戴冠時、ローマの統治者であった。オットー1世も同じであり、彼は962年の戴冠時、イタリア王の称号も持っていた(次頁の注1490参照)。

なお、カール大帝の戴冠時、東方にもローマ帝国の承継を自認する国、すなわち、東ローマ帝国(ビザンツ帝国)が存在し、先代の母親、つまり、女性が皇帝の座にあった。797年、エイレーネは息子であるコンスタンティノス帝を追放し、即位しているが、皇帝は男性に限られるため、彼女の即位は無効であり、800年、カール大帝が空いていた帝位を取得したと考えることができる。エイレーネはカールに結婚の話を持ちかけ、帝位の統一、言い換えるならば、東ローマと神聖ローマの統合を図ったが、802年に失脚し、女帝の地位を失ったため、統一構想も立ち消えた。

国号に「ローマ」が付いた1254年、皇帝ないしドイツ王(ローマ王)はいても、実質的には存在しない**大空位時代**が続いていた(434頁参照)。



「カール大帝」  
アルブレヒト・デューラー作  
(1511年 - 1513年)



神聖ローマ皇帝の冠

<sup>1485</sup> 君主の権威は神より授けられるとする考えは神聖ローマに固有の思想ではない。17～18世紀には王権神授説が唱えられ、絶対王政の根拠となる。19世紀にはロシア皇帝の提唱の下で神聖同盟が結成された(585頁参照)。

<sup>1486</sup> 神聖ローマ帝国が800年ないし962年に成立した当時、プロテスタント諸教会はまだ存在していなかったが、皇帝は教皇から冠を授けられて即位したことが示すように、皇帝は教皇の権威を認めていた。なお、ルターは神聖ローマ帝国内で教皇を批判し、宗教改革を開始した。カトリックの皇帝(カール5世)はルター派と対立するが、改革の進展を止めることができなかった(350頁参照)。その結果、帝国内でもプロテスタントは広まっていく。

<sup>1487</sup> オットー1世は教会に土地を寄進し、領土内での行政権を与えた。その見返りとして、聖職者を任命する権利(叙任権)を取得し、自らが選んだ者を国家行政の主要な役職に登用した。これは、高位の聖職者は結婚して子孫を残すことが許されていないため、高級官吏の一門が役職を世襲し、力を付けるのを阻止するための方策であり、**帝国教会政策**の一環として実施された。なお、彼は末弟をケルン大司教に就けている(596頁参照)。

### 3) 「帝国」

神聖ローマが「帝国」と呼ばれたのは、君主が皇帝、つまり、古代ローマ皇帝の後継者とみなされていたことによる。なお、ドイツ語で神聖ローマ帝国は“*Heiliges Römisches Reich*”と表記するが、これは「帝国」を意味しているわけではない。独語で「帝国」は“*Kaiserreich*”と書くが、神聖ローマ帝国にはそれではなく、「国」を意味する“*Reich*”が使われている<sup>1488</sup>。カール大帝が治めた国も同様であるが、それが「フランク帝国」と呼ばれることはない(注 1136 参照)。

|  |
|--|
| Kaiser + Reich → Kaiserreich<br>皇帝 国 帝国                                  |
| <i>Heiliges Römisches Reich</i><br>神聖 ローマ 国 <u>帝国 (Kaiserreich) ではない</u> |

初期の神聖ローマ帝国はドイツ人の領邦国家、帝国都市ないし自由都市、司教領、イタリア王国(332 頁参照)、フランス北東部にあったアルル王国<sup>1489</sup>で構成され、それらが一人の皇帝の下でまとまっていた。後にボヘミア王国も加わるが(512 頁参照)、このように複数の国で成り立っていたため、「帝国」と捉えることもできる。

11 世紀後半、イタリア王国とブルグンド王国を除いた趣旨で「ドイツ王国」(ラテン語では *regnum Teutonicum*) という語が生まれたが、これは皇帝の権威を矮小化するものである。当時、教皇は聖職者の叙任をめぐり皇帝と激しく対立しており(334 頁参照)、皇帝を「ローマ皇帝」ではなく、「ドイツ王」と蔑んだ。

イタリアやフランス北東部における領土を失うと「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」(*Heiliges Römisches Reich Deutscher Nation*)と呼ばれるようになった(1512 年)。

| 【国号の変遷】       |                |
|---------------|----------------|
| 800 年 (962 年) | ローマ帝国          |
| 1157 年        | 神聖帝国           |
| <u>1254 年</u> | <u>神聖ローマ帝国</u> |
| 1512 年        | ドイツ民族の神聖ローマ帝国  |

## 3. 帝位

### 1) 世襲制

初代皇帝は教皇によって選ばれたが、12 世紀末、選帝侯による選挙制が導入されるまで、帝位は世襲により引き継がれた。なお、皇帝は男性に限られた(531 頁参照)。

843 年、カール大帝の王国、つまり、フランク王国が 3 分割された際、帝位は中フランク王国の王が引き継いだ(331 頁参照)。後にこの王国がさらに分割されると、帝位はイタリア王国(332 頁参照)の王が承継したが、924 年、王朝は途絶え、空位になる。帝位が復活したのは、約 40 年後の 962 年、オットー 1 世が即位した時である。彼は、中フランク(後のイタリア王国)の王ではなく、東フランクの国王であったが、イタリア国王<sup>1490</sup>との争いで窮地に立たされていた教皇ヨハネス 12 世を救った恩賞として、教皇よりローマ皇帝の冠を授かる。なお、当時、東フランクはドイツ王国と目されるようになっていた(331 頁参照)。ほとんどの国王は皇帝を兼ね、その地位は身内の間で引き継がれた(世襲)。

<sup>1488</sup> ドイツ語で「古代ローマ」は“*Römisches Reich*”と記し、帝政期のローマ、つまり、「ローマ帝国」は“*Römisches Kaiserreich*”と書く。

<sup>1489</sup> アルル王国はブルグンド王国(221 頁参照)が存在した地域に建てられたため、ブルグンド王国とも呼ばれた。

<sup>1490</sup> イタリア国王のベレンガリーオ 2 世(在位 950~961 年)は教皇を攻撃したため、961 年、教皇の擁護者であるオットー 1 世の報復にあい、廃位に追い込まれた。なお、当時はオットー 1 世もイタリア国王(951~973 年)を名乗っていたが、それは前イタリア国王の娘と結婚していたためである。

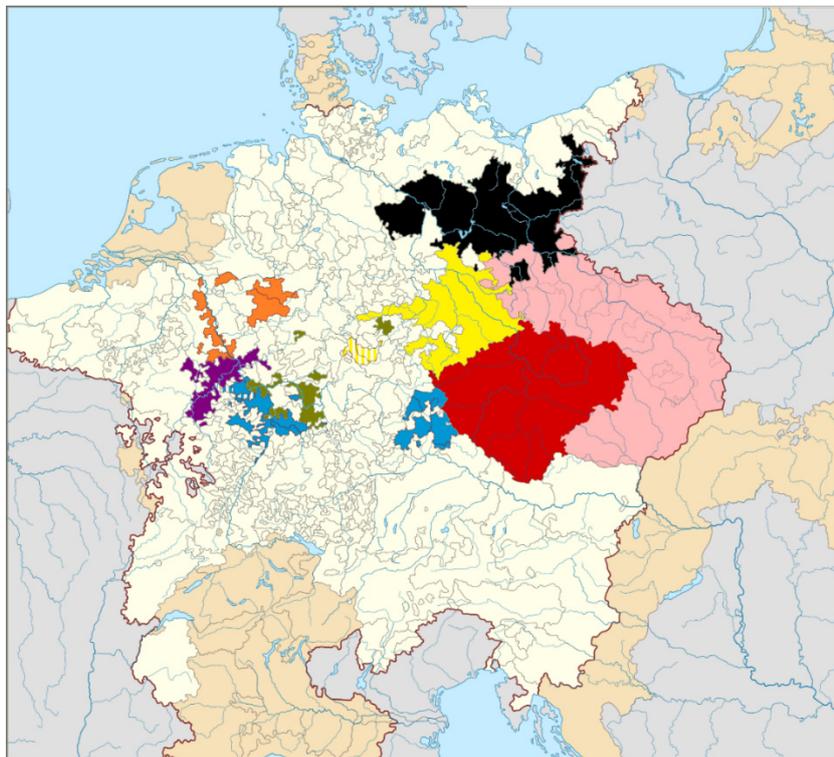
## 2) 選挙制

1024年、オットー1世が開いた王朝（オットー朝ないしザクセン朝）が断絶すると、後継者は諸侯の選挙によって選ばれた。その後も跡継ぎが途絶える度に選挙が行われているが、1197年、ハインリヒ6世（ホーエンシュタウフェン朝）が病死し、シュタウフェン家とヴェルフェ家の間で激しい後継者争いが生じると(215頁参照)、教皇の意向に沿い、ケルン大司教、マインツ大司教、プファルツ伯、ザクセン公に選出権が与えられた。これを機に皇帝は帝国内の有力者によって選ばれるようになる。また、投票権を持つ者は**選帝侯**と呼ばれ、通常の諸侯とは区別されるようになった。

選帝侯は時代によって変わったが、混乱を避けるため、1356年、神聖ローマ皇帝の**カール4世**（ルクセンブルク朝、512頁参照）は金印勅書を発し、当時の慣行を明文化した。これにより皇帝を選出する特権を持つ者は下記の7名に確定し（ただし、後に若干変更されている。504頁の注1443参照）、地方分権が進んだ。

### ◎ 1356年の金印勅書で定められた7名の選帝侯

- ・ マインツ大司教（下図の緑色）
- ・ ケルン大司教（燈色）
- ・ トリーア大司教（紫色）
- ・ ボヘミア王（赤色）
- ・ プファルツ伯（ライン宮中伯 水色）
- ・ ザクセン侯（黄色）
- ・ ブランデンブルク辺境伯（黒色） ※ オーストリア大公（ピンク）



1618年（30年戦争勃発時であり、金印勅書の発令時ではない）の7選帝侯の所領<sup>1491</sup>

カール4世は選帝侯の一人であるボヘミア王を兼ねていた。**ボヘミア**は現チェコ西部に存在した国で、非ドイツ人によって建てられたが、すでに11世紀前半、国王は神聖ローマ皇帝に臣従し、ドイツ人の東方植民を受け入れながら発展していた（512頁参照）。当初、ボヘミア王はドイツ人ではないことを理由に投票に参加できなかったが、北海沿岸まで領土を拡大した**オタカル2世**がオーストリア公の地位を承継すると、7人目の選帝侯として、1257年の選挙に参加することが許された。なお、この年、彼は候補者の2名にそれぞれ票を入れたため、2名の当選者が出て、皇帝が権威を欠く**大空位時代**が継続することになった。1273年の選挙では彼自身が有力な候補者となるが、彼の名声さがさらに高まることを恐れた選帝侯の思惑により、ハプスブルク家のルドルフが選出された。

<sup>1491</sup> 画像出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Locator\\_Electorates\\_within\\_the\\_Holy\\_Roman\\_Empire\\_\(1618\).png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Locator_Electorates_within_the_Holy_Roman_Empire_(1618).png)

選帝侯はマインツ<sup>1492</sup>、ケルン、トリーアの司教が中心になり、それに世俗の諸侯を加える形で構成された。なお、これらの司教はローマ・カトリック教会の高位の聖職者であるが、何れもライン川流域に広大な所領を持つ諸侯でもあり、権勢をふるった(117頁参照)。また、帝国内の諸地域で行政官長(Reichserzkantler)を務めており、皇帝選挙への参加はこの資格による。聖職者である彼らは教会の法に従い任命されたが、神聖ローマ皇帝や諸侯が干渉することも少なくなかった(596頁の注1640)。その選任をめぐる聖俗の権力者が激しく争った時代もあるが(叙任権論争について、334頁参照)、結婚し、子孫を残すことは許されていなかったため、直系の世襲は行われていない。

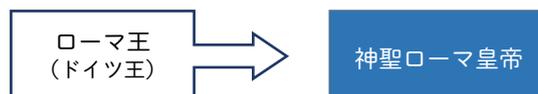
各大司教領の中心地であるマインツ、ケルン(65頁参照)、トリーア(165頁参照)は何れもライン川の左岸にあり、古代ローマ人はこの地域に植民市を築いた。中でも紀元前16年に建設されたトリーアはドイツ最古の都市である。3世紀以降、ローマ・カトリック教会はこれらの都市に司教座を置き、ライン川中・下流域における要所とした。9世紀、何れも中フランク王国の領土になるが、後に、東フランク王国領に変わった。

11世紀以降、大司教領の中には**自由都市**、つまり、自治権を与えられた都市が成立した(531頁参照)。ケルンはその一つであるが、「自由都市としてのケルン」と「ケルン大司教領」は同一ではなく、後者の方が圧倒的に広い。

1794~1814年(フランス革命期からその後のナポレオンの帝政期)、ライン川流域はフランスに占領され、行政区画は大幅に変更された。ナポレオンの統制下で、大司教領は1803年に廃止されるが、1806年には神聖ローマ帝国も消滅した。なお、大司教というカトリックの聖職位は現在でも存在するが、領主として地位、つまり、世俗の権限は持っていない。

残りの4人はライン川より東に位置する地域の有力者であり、世俗の君主・諸侯として、その地位は親族間で引き継がれた。彼らは皇帝(ドイツ王)を選出する権限を持っていた点では皇帝より上の立場にあり、帝国の地方分権を助長したが、帝国解体後、それを構成していた諸邦も崩壊していき、現在は何れも残っていない。

代々の皇帝を輩出し、帝国を牽引したオーストリア公(ハプスブルク家)は7名の選帝侯に含まれていないが、それは金印勅書が出された14世紀中頃、同家の勢力は弱かったことによる。帝位の実質的な世襲が始まったのは1438年である。なお、1526年以降、ハプスブルク家は選帝侯の一人であるボヘミア王を輩出した(451頁の注1323参照)。また、大司教(選帝侯)を身内から出している。



前掲の7人は「選帝侯」と呼ばれたが、彼らを選ぶのは神聖ローマ皇帝ではなく、**ローマ王**である点に注意を要す。ローマ王とはドイツ王の別名で、王は教皇より冠を授けられ皇帝となった<sup>1493</sup>。教皇は投票結果に異議を述べることはできなかったため、皇帝は実質的に前掲の7名によって選ばれていたことになる。

ローマ王と**イタリア王**は異なる。前者はドイツ王に選出された者が神聖ローマ皇帝になるまでの期間に用いた称号である。なお、ドイツ王(神聖ローマ皇帝)の皇太子をローマ王と呼ぶことがあった。

これに対し、イタリア王は、西ローマ帝国の消滅後、イタリアを制した君主が用いた称号である。イタリア北部を支配したドイツ王(神聖ローマ皇帝)はイタリア王も名乗った。つまり、ドイツ王はイタリア王を兼ねており、教皇から冠を授けられ、神聖ローマ皇帝となった。

なお、1805年、フランス皇帝のナポレオン1世はイタリア王として即位している。また、息子のナポレオン2世(364ページの頁の注1131 above参照)、つまり、皇太子をローマ王に叙した。

<sup>1492</sup> マインツ大司教は神聖ローマ帝国のカトリック教会で最も権威のある聖職者であり、アルプス以北における教皇の代理人を務めていた。See katholisch.de, Mainzer Dom: Kaiserdom und Kathedrale für das "Zweite Rom", in <https://www.katholisch.de/artikel/27589>

<sup>1493</sup> ハプスブルク家による王位ないし帝位の独占はアルブレヒト2世の選出(1438年)で始まったが、彼は皇帝として即位していない。ただし、これは2世がドイツ王に選出された翌年に急死したという特殊事情に基づいている。

1147年以降、選挙はライン川沿いのフランクフルトで行われることが多かった。選出された者はカール大帝の王座が置かれているアーヘン大聖堂でローマ王として即位し、王冠（帝冠ではない）は選帝侯の一人であるケルン大司教によって授けられた。



アーヘン大聖堂 © CEphoto, Uwe Aranas<sup>1494</sup>

アーヘン大聖堂は異なる時代に異なる様式で建立された礼拝施設の融合体であり、一棟の教会ではない。最も古く、中央に位置する教会（Oktogon）は、795年、カール大帝の命によって建築が始まり、803年に完成した。この八角形の「神の家」ではビザンティン様式（ないし前ロマネスク様式、136頁参照）が採用されているが、後世、尖塔とステンドグラスを特徴とするゴシック様式のチャペルやホールが併設された。

### 3) 教皇による戴冠

当初、歴代皇帝は教皇より冠を授けられていたが、1508年、マクシミリアン1世は戴冠を受けずに即位した。これは交戦中にあった北イタリアのヴェネツィア共和国（208頁の注632参照）にローマ行幸を阻止されたため、彼は教皇から「選ばれしローマ皇帝」（Electus Romanorum Imperator）の称号を使い、即位することを許された。

次代のカール5世（576頁参照）も、1520年、この称号を使用し、戴冠を受けずに即位したが、1530年、教皇より冠を授かっている。ただし、戴冠式はローマではなく、ポーニャで行われた<sup>1495</sup>。

<sup>1494</sup> 画像出典 [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/be/Aachen\\_Germany\\_Imperial-Cathedral-01.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/b/be/Aachen_Germany_Imperial-Cathedral-01.jpg)（画像は著者により切り取られている）

<sup>1495</sup> カール5世はフランス国王との対戦を繰り返したが、教皇クレメンス7世がフランス国王側についたため、1527年5月、教皇と対戦し、ローマに侵攻している。これを「ローマの劫掠」と呼ぶが、皇帝軍によって教会は破壊された。また、ルネサンスの文化人も殺害された。1529年、カール5世は教皇と和解し、翌年、戴冠を受けている。

教皇から冠を授かったのはカール 5 世 (ハプスブルク家より 5 人目の皇帝) が最後となる。つまり、代々の皇帝がハプスブルク家より輩出されるといふ新しい伝統が生まれると、「聖なる父」による戴冠という古い伝統は廃止され、ローマ・カトリック教会の首長の権威を否認する風潮が生まれた。

#### 4) ハプスブルク家による実質的な世襲

15 世紀前半以降も皇帝選挙は行われたが、歴代の皇帝はハプスブルク家より輩出された。つまり、1438 年以降、オーストリアは帝位を独占する。ただし、**マリア=テレジア**の家督相続 (452 頁参照) が争われた 1742 年からの 3 年間は南バイエルン・ヴィッテルスバッハ家のカール 7 世が皇帝を務めた。1745 年に彼が亡くなると、マリア=テレジアの夫であるフランツ 1 世が帝位に就き、皇帝は再びハプスブルク家 (厳密には、ハプスブルク=ロートリンゲン家、452 頁参照) より輩出されることになる。

なお、ハプスブルク家をライバル視したフランス国王が立候補したこともあるが (ドイツ王の候補として名乗り出ている)<sup>1496</sup>、選出されなかった。

#### 5) 女帝

フランク人の伝統 (**サリカ法典**、329 頁参照) に従い、女帝は認められなかった。マリア=テレジアの父親で、神聖ローマ皇帝のカール 6 世も家督を彼女に継承させようとしたが、女帝の誕生は考えていない。彼の死後、帝位はヴィッテルスバッハ家に奪われたが (前述参照)、3 年後、娘婿のフランツ・シュテファンが即位し、帝冠はウィーンに戻った。

なお、東ローマ帝国では女帝が認められていた。これはまさしく皇帝としての地位であり、皇帝の妃、つまり、皇后を指しているのではない。初の女性君主となった**エイレーネ**は、797 年、息子であるコンスタンティノス帝を追放し、即位している (526 頁参照)。ロシアでも女帝が認められており、例えば、ピョートル 1 世の死後、彼の後妻はエカチェリーナ 1 世として即位した。なお、彼女は平民出身で、ロマノフ家の血をひいていない。イギリスの**ヴィクトリア女王** (505 頁参照) もインド皇帝として君臨し、大英帝国を象徴する君主となった。

### 4. 構成

神聖ローマ帝国は公国、非ドイツ人が建てた王国、辺境伯領、司教領、都市で構成され、地方分権化が進んだ 14 世紀 (金印勅書が出された頃)、それらの数は 300 を越えた。

公国 (大公国) はドイツ貴族が興した国で、例えば、オーストリア、バイエルン、フランケン、ザクセン、ブランデンブルク (ブランデンブルク=プロイセン、26 頁参照)、ルクセンブルクが挙げられる。なお、これらは王国ではない。王国はドイツ王国のみであり、その王が神聖ローマ皇帝になった。例外的に帝国に加わった王国もあるが、これは皇帝が外国の王位を相続するか (アルル王国について 532 頁参照)、外国の王が神聖ローマ皇帝に臣従するようになったためである (ボヘミア王国について 512 頁参照)。

#### ◎ 帝国都市と自由都市

13~14 世紀頃、諸侯が断絶するか、権勢を失い、その支配から解放される都市が各地に誕生した。これらの都市は皇帝に直属する一方、皇帝より自治を認められた一種の独立国であった。その内、世俗の諸侯 (大公や公) より独立した都市を「**帝国都市**」と、また、聖界の諸侯 (大司教や司教) より独立した都市を「**自由都市**」と呼ぶ。

- ・帝国都市：アーヘン、フランクフルト・アム・マイン、リューベック等
- ・自由都市：ケルン、マイantz、ストラスブルク等

後者とは異なり、前者は神聖ローマ皇帝に対し貢納や軍役の義務を負っていたが、後にそれを免除された。その結果、両者の違いはなくなり、両者を併せて「**帝国自由都市**」または単に「**自由都市**」と呼ばれるようになった。

<sup>1496</sup> 1519 年の選挙でフランス王のフランソワ 1 世は、ハプスブルク家出身のカール 5 世とドイツ王の座を争った。なお、この選挙でドイツ王に選出されたカール 5 世 (576 頁参照) はハプスブルク家領のネーデルラント南部 (現ベルギー・フランドル地方) で生まれている。生誕地のヘントは神聖ローマ帝国に属していたが、公用語はフランス語で、彼もフランス語を母語とした。また、立候補した時はスペイン王の地位にあり、ドイツ人としての要素は少なかった。

## 5. 領域

帝国の領域は現在のドイツ、オーストリア、スイス、ルクセンブルク、リヒテンシュタイン、オランダを中心としたが、ベルギー東部、チェコ西部（ボヘミア）、イタリア北部、サルデーニャ島、コルシカ島、フランス東部（プロヴァンス、サヴォワ、ブルゴーニュ、アルザス、ロレーヌ）、ポーランド西部（ポメラニア、シレジア）、スロベニア等にも及んだ。

### 1) イタリア

成立当初、帝国の領域はイタリア半島中部のローマにまで達しており、半島上の帝国領は「帝国イタリア」とも呼ばれた。13世紀中頃、ホーエンシュタウフェン朝<sup>1497</sup>の家系が途絶え、大空位時代に入ると、中部を失い、帝国領はハプスブルク家が領有する北イタリアに限定されるようになった。

### 2) ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、スイス、フランス

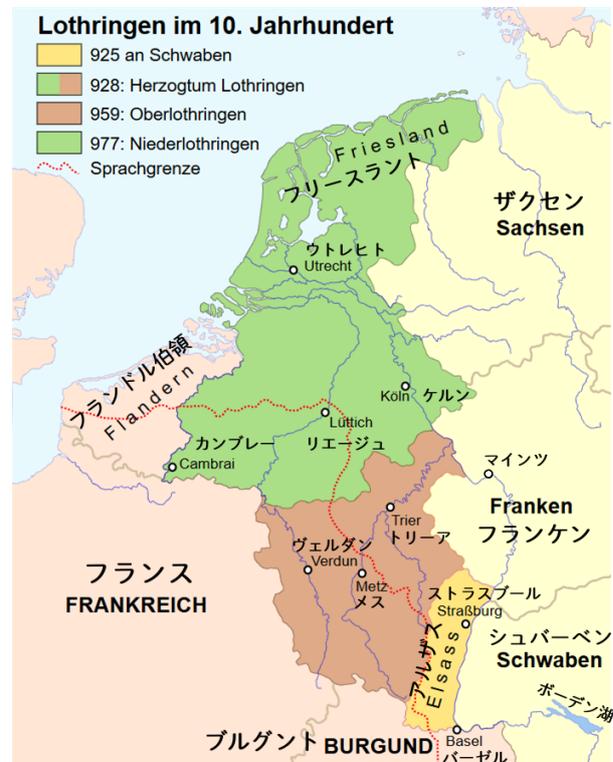
9世紀中頃、現在のベルギー、オランダ、ルクセンブルク、ドイツ・ライン川左岸にまたがる地域は「**ロタリンギア**」と呼ばれ、中フランク王国の領土であったが、880年、その大部分は東フランク王国に編入された（525頁参照）。同王国が神聖ローマ帝国に変わると、この地域は帝国領になる。

10世紀中頃（959年）、ロタリンギアは二つに分割され、川上にある「**上ロタリンギア**」にはロレーヌ公国（ドイツ語ではロートリンゲン公国、右図の茶色の地域）が成立した。17世紀以降、フランス国王が領有を主張し、領土問題が度々、発生する。1766年、ルイ14世はこの地域の併合に成功した（596頁の注1642参照）。

他方、「**下ロタリンギア**」（右図の緑色の地域）は12世紀末に消滅し、多数の公国や司教領に分割された。前出のマイント、ケルン、トリーアの各大司教領もこの地域にあった。

933年、現フランス北東部に**アルル王国**（ブルグント王国、527頁の注1489参照）が成立した。1032年、神聖ローマ皇帝がこの国の王位を相続すると、この国は帝国に加わった。なお、1378年、アルル王国はフランスに割譲され、消滅したが、その後も神聖ローマ皇帝はアルル王を名乗り続けた。

1648年、ヴェストファーレン条約に基づき、スイスが帝国から独立し、オランダは帝国から脱退した（579頁参照）。



10世紀のロタリンギア<sup>1498</sup>

### 3) ボヘミア（現チェコ西部）

現チェコ西部に建てられていた**ボヘミア王国**はチェック人、つまり、非ドイツ人が建てた国であるが、11世紀初頭、国王がドイツ王（神聖ローマ皇帝）に臣従するようになり、帝国に加わった。後に皇帝を輩出するまでになり、1356年に金印勅書を出したカール4世はボヘミア出身である。近世に作成された地図で、この地域はヨーロッパの中心として位置づけられている（346頁参照）。

1526年、ボヘミアの王位はハプスブルク家に移った（451頁の注1323参照）。それと同時にハンガリーの王位も同家が相続するが、ハンガリーは神聖ローマ帝国の伝統的な領域の外にあり、帝国に加わっていない。

<sup>1497</sup> 13世紀、ホーエンシュタウフェン家は両シチリア王国を領有したが、この王国は帝国には加わっていない。

<sup>1498</sup> 画像出典 [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e4/Lotharingen-959\\_de.svg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e4/Lotharingen-959_de.svg) (日本語は著者が付け加えたものである)

※ プロイセン

プロイセンは現在のポーランド北部、つまり、神聖ローマ帝国の領域外で成立したため (26 頁の地図参照)、帝国に属さなかったが、同盟関係にあった。なお、選帝侯の一人であるブランデンブルク辺境伯は、1618 年以降、プロイセン国王を兼ねた。そのため、広い意味ではプロイセンも帝国の一員であった。



11 世紀初旬の神聖ローマ帝国

※ 当時、オーストリアはまだバイエルン公国 (上図の Duchy of Bavaria) から独立していない。また、プロイセンはまだ成立していない。

## 6. 統治

初期の頃、帝国は統一国家としての性質を有していたが、諸侯が権勢を強め、緩やかな連合体に変わっていく。

帝国は議会の他に、領邦間の争いについて審査する裁判所（宮廷裁判所 Hofgericht）を設置していた。13 世紀以降、領邦内の紛争に関する裁判だけでなく、築城、貨幣鑄造、徴税（関税を含む）、信仰に関する権限は諸侯に与えられるようになり、地方分権が進む。外交に関する権限も諸侯が持ち、戦争への参加は諸侯によって決定された。なお、大空位時代には、帝国の機能を補うため、都市間で協力制度が設けられている（ライン都市同盟について、62 頁参照）。

15 世紀末、マクシミリアン 1 世（576 頁参照）は永久平和令を制定し、帝国の強化に乗り出した。全ての諸邦が参加する帝国議会や帝国裁判所が設置されるとともに、実力行使による紛争解決は禁止されたが、地方分権の進行を止めることはできなかった。

16 世紀前半、帝国中部のザクセン選帝侯領でルターが宗教改革を始め、新教を立ち上げると、帝国の衰退は加速する。旧教徒である皇帝はルターの著作の閲読・頒布を禁止する命令を出す、帝国全土でそれを実施する権限を持っていなかった。そのため、宗教改革の進行を抑えることができず、教派間の対立は戦争に発展する（351 頁参照）。その一つである **30 年戦争** によって帝国は荒廃するだけでなく<sup>1499</sup>、フランスにアルザス地方を奪われた。また、スイスやオランダの独立を許すことになる（579 頁参照）。さらに、帝国内の領邦を主権国家として認めたため（1648 年に成立したヴェストファーレン条約では、領域内で信仰する教派を決定する諸侯の権利が再確認された）、帝国は有名無実化した。

## 7. 解体

19 世紀初頭、フランス皇帝のナポレオン 1 世は神聖ローマ帝国に加盟していたドイツ諸邦との戦いに勝ち、帝国内の実権を握った。また、1806 年 7 月には、オーストリアとプロイセンに続く「第 3 のドイツ」を創設するため、諸邦に**ライン同盟**を結成させた（435、594 頁参照）。翌月、諸邦が神聖ローマ帝国から脱退すると、フランツ 2 世（在位 1792～1806 年、453 頁参照）が退位し、帝国は消滅した。

なお、それまで神聖ローマ皇帝はドイツ王を兼ねており、帝国領内で他の者がドイツ人の王を名乗ることは許されていなかった（その特殊な例である「**プロイセン人の王**」について、353 頁の注 1108 参照）。そのため、王が治める王国も存在しなかったが、神聖ローマ帝国の解体に伴い、ザクセン公国、バイエルン公国、ヴュルテンベルク公国はそれぞれ王国に昇格した。なお、それを認めたのはフランス皇帝のナポレオンである。

帝国を承継する組織は設けられなかったが、1814 年、ナポレオンが失脚すると、翌年、帝国を構成していた諸邦によってドイツ連邦（ドイツ同盟）が創設され、歴代の皇帝を輩出したオーストリアが盟主を務めた（442 頁参照）。

<sup>1499</sup> 1618 年から 30 年間、続いた戦争中、ドイツ地方の人口は 3 分の 1 近く減ったとされている。都市部だけでなく、農村も略奪の対象になり、帝国全体が荒廃した。See Generaldirektion der Staatlichen Archive Bayerns, Menschen im Krieg, Die Oberpfalz 1618 bis 1648, München 2018, p. 43.

## 【補説】ブルゴーニュ公国

Duché de Bourgogne 898～1790 年

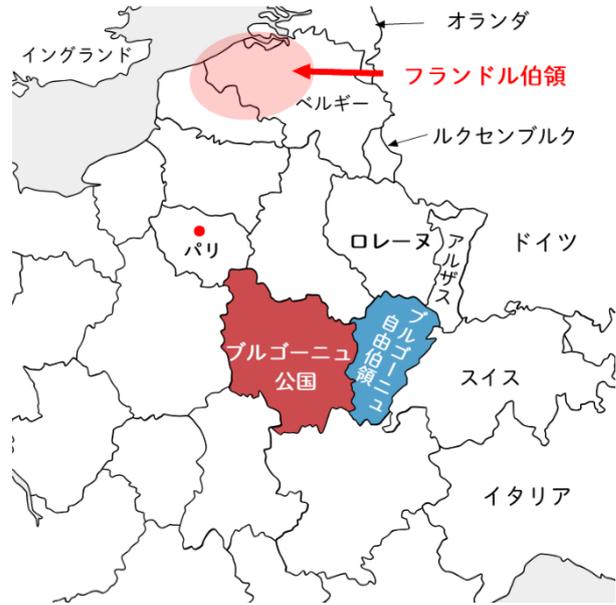
### 1. 建設

ブルゴーニュ公国は、898 年、西フランク王国の家臣（ボゾン家のリシャルド）が国王よりフランス中部に封土を与えられ、成立した。なお、その当時、フランスまだ建てられていない（333、459 頁参照）。

ゲルマン人の大移動期、一派のブルグンド人は現フランス北東部にブルグンド王国（443～534 年）を興した（222 頁参照）。王国の消滅後も、この地域は「ブルグンド」（Burgund）と呼ばれ続けたが、仏語では「ブルゴーニュ」（Bourgogne）と言い、それが国号の由来になる。

ブルグンド王国は、534 年、フランク王国に滅ぼされ、併合された。843 年にフランク王国が 3 分割されると、旧ブルグンド王国領の大部分は中フランク王国の領土になるが（331 頁参照）、北西部は西フランク王国領となり、この地にブルゴーニュ公国が成立した。

百年戦争中の 1361 年、ブルゴーニュ公（カペー家）は断絶し、封土は没収されたが、1363 年、フランス国王ジャン 2 世（ヴァロワ家）の 4 男のフィリップ 2 世がブルゴーニュ公に叙され、復活する。



### 2. フランドル伯領の取得とネーデルランド支配



シャルル豪胆公（在位 1467 年～1477 年）  
ピーテル・パウル・ルーベンス作（1618 年頃）

1369 年、フィリップ 2 世は現ベルギー北西部を治めていたフランドル伯の娘マルグリッドと結婚した（473 頁参照）。また、1384 年、彼女と共に爵位を相続すると、後にフランドル伯の家督はブルゴーニュ家に移る。

当時、フランドル地方は毛織物業で栄え、欧州随一の経済・文化圏に発展していた。それを手に入れたブルゴーニュ公は富を増したが、この地域とフランス中部に位置する本領は隣接しておらず、統治は容易ではなかった。代々のブルゴーニュ公が両地域を連結すべく、領土拡大に努めた結果、1 世紀が経過した 1468 年、シャルル豪胆公（突進公、画像左）はベネルクス 3 国の領土に重なる広い地域を支配するに至った。一般にこの地域はブルゴーニュ領ネーデルラントと呼ばれている。1475 年、彼は、さらにロレーヌ地方（594 頁参照）を攻略し、フランドルとブルゴーニュの連結を達成した。

対岸にあるイングランドから羊毛を輸入し、毛織物業で栄えたフランドル伯領は伝統的にイングランド国王との関係が強く、フランス国王と対立してきた。この地域を手に入れたブルゴーニュ公も、フランス王家に属すが、地域の利益を優先させ、国王と度々、対戦している。1474 年に始まった一連の戦いはブルゴーニュ戦争と総括されるが、ネーデルラントとの連結を達成したシャルル豪胆公は、1477 年、ナンシーの戦いで命を落とした。

シャルルには男子の跡継ぎがいなかったため、ブルゴーニュ公爵領は廃止され、フランス国王の所領となる。国王のルイ 11 世はネーデルラント（現ベネルクス 3 国）の獲得も画策し、まだ 7 歳の王太子をシャルルの一人娘のマリーと結婚させようとしたが、19 歳の彼女は父親が婚約者に指名していたハプスブルク家の跡継ぎと結ばれ、フィリップを生んだ（576 頁参照）。1482 年、女公が早逝すると、ネーデルラントは息子のフィリップが相続し、ハプスブルク家領になる。

その後、爵位が下賜されることはなく、旧公国領は国王が任命した貴族によって治められたが、ハプスブルク家はブルゴーニュ公の承継を主張し続けた。また、旧公国領の領有を放棄する一方で、ネーデルラントを相続し、ブルゴーニュ公として治めた。なお、フランス国王とブルゴーニュ公の争いは、マクシミリアンとマリーの結婚により、ハプスブルク家に引き継がれ、同家は 19 世紀前半まで、300 年に亘り、フランスと戦争を繰り返すことになる。



シャルル豪胆公（突進公）の時代のブルゴーニュ公の所領<sup>1500</sup>

<sup>1500</sup> 出典 [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Karte\\_Haus\\_Burgund\\_4.png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Karte_Haus_Burgund_4.png)

### 3. 地域圏の創設

1789年、フランス革命が勃発すると、王侯貴族は失墜し、ブルゴーニュ公国は最終的に廃止された。その後、地方行政区画は幾度か変わったが、1956年、旧公国領内の諸地域が統合され、ブルゴーニュ地域圏が成立した。さらに、2016年、東方に位置するフランシュ＝コンテ地域圏と合併し、現在のブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏 (Region Bourgogne-Franche-Comté) が誕生した。

#### ◎ ブルゴーニュ自由伯領

なお、この地域圏の名称に含まれている「フランシュ＝コンテ」(Franche-Comté) とは「自由伯領」(Freigrafschaft) という意で、神聖ローマ皇帝への臣従義務を免除されていたため、そう呼ばれたが、正式名称は「ブルゴーニュ自由伯領」である。自由伯領は前述したブルゴーニュ公国とは異なる領邦国家で、986年、公国の東に建てられた。前頁の地図で、公国は“Duchy of Burgund”と、他方、伯領は“County of Burgund”と記されている。

1032年、ブルゴーニュ伯のルドルフ3世が死去すると、家系は断絶し、所領は神聖ローマ帝国に併合されることになったが、皇帝がブルゴーニュ伯となり、伯領を存続させた。しかし、1384年、フランドル地方との連結を目指し、所領拡大に邁進していたブルゴーニュ公に奪われ、伯領は公国に編入された。

1477年、ブルゴーニュ公のシャルル(豪胆公、535頁参照)が亡くなると、フランス国王は伯領を没収したが、1493年、サンリス(Senlis)条約により、ハプスブルク家領に変わった。また、1588年、同家がオーストリア＝ハプスブルク家とスペイン＝ハプスブルク家に分離した際には、スペイン領になる。

17世紀、「太陽王」として君臨したフランスのルイ14世は、ライン川を国境とみなし、その左岸に位置するブルゴーニュの獲得を狙った。1668年、彼は自由伯領の占領に成功したが、アーヘン(Aachen/Aix-la-Chapelle)の和約に従い、返還した。しかし、1674年、再び攻め入ると、1678～1679年、ナイメーヘン(Nimwegen)の和約に基づき編入し、フランスへの帰属を確立する<sup>1501</sup>。なお、その後、伯領は州(province)となるが、1790年、フランス革命政府によって廃止され、旧領内には三つの県が設置された。



ブルゴーニュ・フランシュ＝コンテ地域圏の首府ディジョン

<sup>1501</sup> Historisches Lexikon der Schweiz, Freigrafschaft Burgund, in <https://hls-dhs-dss.ch/de/articles/006624/>

## 【補説】ユーゴスラビア史

バルカン半島（85 頁参照）では言語、文化、宗教の異なる多くの民族が共存している。ユーゴスラビアはその象徴とされていたが、実際には言語・文化を共通にしていることが国家建設の基盤となった（188 頁参照）。この「南スラブ人の国」の創設は、第 1 次世界大戦の終結直後、オスマン体制やハプスブルク家体制から独立する過程で、セルビアが中心となって実現した。「第 1 のユーゴ」（1918～1941 年）と呼ばれるこの国は中央集権型の王国であったが、クロアチアは連邦制を希求しており、当初より対立構造を抱えていた。第 2 次世界大戦期、ドイツ軍に占領され、崩壊する。



この大戦期、共産主義者のティトーはパルチザンを組織し、ゲリラ戦を展開した。ほとんどの東欧諸国はソ連によってナチス・ドイツないしファシズムから解放されたのに対し、赤軍の支援を得られなかったティトーは独力で、いち早く国土回復を成し遂げている<sup>1502</sup>。

1945年初頭、ドイツ軍が撤退すると、ティトーは臨時政府を立ち上げ、その首相に就いた。また、11月、「第 2 のユーゴ」（1946～1991 年）を創建し、ユーゴスラビアは六つの共和国からなる連邦国家に生まれ変わった。当時、彼はスターリンの右腕となり、東欧の社会主義化を推進していたが、バルカン同盟の結成をめぐるスターリンと対立し、東側の体制から排除されると、独自の社会主義路線を歩むことになる。

私企業<sup>1503</sup>（特に自動車メーカーのザスタバ）の操業を認めたユーゴスラビアは西側諸国と提携し、経済成長を成し遂げたが、1980年に建国の父が死去すると、社会主義の理念が失われていった。経済危機が国家危機に発展する中、1989年、東欧で共産党の一角独裁が倒されると、翌年、ユーゴスラビアでも社会主義体制が崩壊した（なお、これは東欧革命の影響を直接的に受けていたわけではない）。連帯性を失った諸民族は分裂し、戦闘を繰り返すようになるが、民族や言語・文化の違いが強調されるようになったのは、国の解体後である。



ヨシップ・ブロズ・ティトー  
(1892～1980年)

彼はクロアチア人の父とスロベニア人の母の間に生まれた。なお、出生地のクロアチアはオーストリア＝ハンガリー帝国に属していた。ティトーはあだ名で、本名ではない（ヨシップは名、ブロズは姓）。

<sup>1502</sup> See bpb, Vor 75 Jahren: Ausrufung der Föderativen Volksrepublik Jugoslawien, in <https://www.bpb.de/216101>

<sup>1503</sup> 農業部門では国有化はほとんど進まなかったが、経営には多くの制限が設けられた。Hans-Christian Iversen, Wirtschaft und Wirtschaftspolitik in Jugoslawien Die Krise in der Ära nach Tito, APuZ 6/1988, pp. 13-23, 15-20.

## ◎ 南スラブ人と旧ユーゴスラビア構成国

バルカン半島には多くの民族が住んでいるが、ギリシアより北の地域の住民の大半は、6世紀以降、ポーランド西部（カルパティア山脈の北方）から移動してきた人々を祖とする。彼らは民族的に**南スラブ人**と呼ばれ（226頁参照）、20世紀、「**南スラブ人の国**」という意のユーゴスラビアを建設した。

ユーゴ + スラビア  
南            スラブ人の国

南スラブ人には多くの種族が存在するが、大勢を占めているのは、①セルビア人、②クロアチア人、③ブルガール人である。その他にも、④スロベニア人、⑤モンテネグロ人、⑥マケドニア人が挙げられる。⑦オスマン帝国の統治下でイスラム教に改宗した南スラブ人の末裔はボシュニャク人（ボスニアク人）と呼ばれている。なお、ボシュニャク人の多くはボスニアに住んでいるが、ボスニア人とは異なる。後者はボスニアの住民を指しており、南スラブ人でなくても、この共和国に住んでいる者はボスニア人である。

現在、これらの種族（ボシュニャク人を除く）は独自の国を建設しており、各国の基幹民族となっている。例えば、「セルビア人」が建てた国は「セルビア共和国」と呼ばれているように、諸国には民族の名が付けられているが、国内には他の民族も住んでおり、種々の対立を引き起こしてきた。

「第1のユーゴ」は、1918年12月の建国時、「**セルビア人＝クロアチア人＝スロベニア人王国**」を国号としていた。モンテネグロ人、ボスニア・ヘルツェゴビナ人、マケドニア人等は挙げられていないが、これは民族として認められていなかったためである。例えば、モンテネグロは建国直前、セルビアに併合されており、「モンテネグロ人」とは、その地域の住民を指していた。第2次世界大戦後に「第2のユーゴ」が成立し、モンテネグロがそれを構成する共和国の一つになると、モンテネグロ人には国民や民族という属性が加わった。なお、セルビア人とモンテネグロ人の違いは小さく、言語もほとんど同じである。

セルビア人、クロアチア人、スロベニア人という概念にも、それぞれの国の国民としての意義が追加された。なお、クロアチアでは「クロアチア人」は先住民であるイリュリア人を祖とする見方があり、19世紀、「イリュリア」は民族運動のキーワードになった（後述参照）。ただし、当時、イリュリア人は南スラブ人の種族の一つとして捉えられており、「イリュリア運動」は南スラブ人の民族運動に他ならなかった。現在、イリュリア人は南スラブ人とは異なる民族として考えられている。

「南スラブ人の国」であるユーゴスラビアは次の6つの国で構成されていた。

### 1) スロベニア

バルカン半島北西部にはアルプスの高峰がそびえており、6世紀、この地域に移住したスラブ人は「アルプス・スラブ人」と、または、スラブ人と同意義の「スロベニア人」と呼ばれた（227頁参照）。つまり、「スロベニア」は地域名ではなく、民族名である。7世紀、彼らは「ヨーロッパの緑の宝庫」<sup>1504</sup>とも呼ばれる半島北西部にランタニア公国を建てたが、8世紀後半にはフランク王国に併合され、ゲルマン人に支配された。1282年には**オーストリア＝ハプスブルク家**（31頁参照）の所領になる。

### 2) クロアチア

スロベニアの南に位置するパンノニア地方（スラヴァニア地方）とダルマツィア地方には、7～8世紀、クロアチア人やセルビア人が定住するようになった。なお、「クロアチア人」の語源は分っていないが、「ネクタイ」を意味するフランス語の“cravate”（クラヴァート）やドイツ語の“Krawatte”（クラヴァッテ）は「クロアチア人」に由来する。30年戦争が勃発した17世紀、クロアチアの騎兵隊が結成

<sup>1504</sup> 「ヨーロッパの緑の宝庫」(Grüne Schatzkammer Europas) はスロベニアの別称として用いられることがあり、自然環境は同国の象徴でもある（398頁参照）。See Europe Direct, Slowenien, in <https://www.strasbourg-europe.eu/slowenien>

され、彼らは首の周りに目印になる布を結んでいた。現在でも、ネクタイはクロアチア人の象徴として用いられている。

9世紀初旬、フランク王国のカール大帝が両地域に遠征し、攻略したが、同世紀の後半(879年)、クロアチア人は独立し、次世紀の初旬(910年頃)、クロアチア王国を興した。この王国が現クロアチア共和国の起源になるが、1102年、国王が嗣子なく死去したため、姻戚関係にあったハンガリー国王を君主とする同君連合が発足した。15世紀中頃にはオスマン帝国に占領されたが、1527年、オーストリアによって解放され、その支配下に入る。それから1918年まで、クロアチアは、スロベニアと共にハプスブルク家体制に組み込まれていたため、宗教(カトリック)や文化の面で、その他のバルカン諸国とは大きく異なっている(104頁の地図上の分類参照)。同年、第1次世界大戦でオーストリアが敗れ、ハプスブルク体制が崩壊すると、両国は独立し、セルビアと共に、ユーゴスラビアを建設した。

### 3) セルビア

セルビアは、6世紀、東ローマ帝国領に定住したセルビア人が、12世紀後半、帝国の衰退に乗じて興したセルビア王国を起源とする。1389年に起きたコソボの戦いでオスマン帝国に敗れるも、異民族の皇帝に臣従し、存続していたが、1459年、帝国に滅ぼされた(422頁参照)。イスラム勢力による支配は400年以上、継続し、セルビア人が独立を達成したのは1878年である(427頁参照)。その後、セルビアは「大セルビア」、つまり、セルビア人が住む地域の統合を目指し、領土を拡張していった。1913年にはオスマン帝国の支配から解放された北マケドニアを(380頁参照)、また、1918年にはモンテネグロを併合する。なお、1913年、非スラブ人(アルバニア人)が住民の9割に達するコソボを併合し(89頁参照)、現在まで続く紛争の原因を作った(546頁参照)。

「セルビア」は「同胞」ないし「仲間」という意の“srp”より派生したと考えられている<sup>1505</sup>。

### 4) 北マケドニア

ギリシアの北に位置する北マケドニア(首都はスコピエ)はアレクサンドロス大王の祖国マケドニアを想起させるが、これらは地理的にも、民族的にも異なる国である(92頁参照)。「古代マケドニア」とも呼ばれる後者の領土は北マケドニアの南部に達していたが、その大部分は南方に位置し、重なっていない。紀元前2世紀、古代ローマはこの地域を含め、バルカン半島を広く支配し、395年にローマ帝国が東西に分割されると、東ローマ帝国領に変わったが、7世紀、ブルガリアに奪われた。11世紀初旬、東ローマはブルガリアを滅ぼし、マケドニアを奪い返した。12世紀末頃、ブルガリアは再建され、帝国と再び争うようになるが、14世紀末、オスマン帝国に滅ぼされた。東ローマも15世紀中頃、オスマン帝国に屈した、マケドニアはオスマン領となる。20世紀初旬、その支配から解放されたマケドニアの北部(北マケドニア)はセルビアに編入され、ユーゴスラビアの一部になる(380頁参照)。

### 5) モンテネグロ

モンテネグロ(首都はポドゴリツァ)は10世紀に建てられたドゥクリャ公国を祖とするが、12世紀後半、セルビアに編入され、従属するようになった。15世紀中頃、セルビアはオスマン帝国に滅ぼされ、消滅したが、山間部に位置するモンテネグロは、帝国を宗主国として仰ぎながら存続することができた。なお、「モンテネグロ」(Montenegro)とは「黒い山」という意であるが、実際には森は少ない。モンテネグロ語では「ツルナゴラ共和国」(Crna Gora)と呼ばれる。

1878年、モンテネグロ人はセルビア人と共に独立を達成するが、1918年、つまり、ユーゴスラビアを建設する過程において、モンテネグロは再びセルビアに併合された。

### 6) ボスニア・ヘルツェゴビナ

ボスニア・ヘルツェゴビナ(首都はサラエボ)は北部のボスニア地方と南部のヘルツェゴビナ地方からなり、6世紀後半、スラブ人(セルビア人)が定住するようになった。12世紀半ば、ハンガリーの影

<sup>1505</sup> Heinz Schuster-Šewc, Poreklo i istorija etnonima Serb, "Lužički Srbin", in [https://www.rastko.rs/rastko-lu/jezik/hsuster-srbin\\_l.html](https://www.rastko.rs/rastko-lu/jezik/hsuster-srbin_l.html)

響力が強まり、この世紀の後半、その属国として、ボスニア王国が成立した。14 世紀前半、王国は南部のヘルツェゴビナを編入し、ボスニア・ヘルツェゴビナとしての一体性が生まれる。

ボスニアは 1463 年、ヘルツェゴビナは 1482 年、オスマン帝国の属州になる。その後、400 年以上に亘り、両地域はこのイスラム勢力に支配されたが、1878 年、オスマン帝国は露土戦争で敗れ、地域の行政権はオーストリア＝ハプスブルク家に移った。同家によって、この地域は近代化される（427 頁参照）。30 年後（1908 年）、トルコで革命が起き、その波及を恐れたオーストリアがこの地域を併合すると、南スラブ人の反発を生む。1914 年 6 月、ボスニアの首都サラエボでオーストリア皇位承継者夫妻が暗殺され、オーストリアが報復に乗り出すと、翌月、第 1 次世界大戦が勃発した（381 頁参照）。戦後、ボスニア・ヘルツェゴビナはオーストリアから独立し、ユーゴスラビアに加わった。

なお、現在、ボスニア・ヘルツェゴビナは同国とセルビア人の多い**スルプスカ共和国**（657 頁参照）で構成される連邦共和国である。

前述したように、ボスニア・ヘルツェゴビナとは地域名であり、民族名ではない。国内には、セルビア人（ギリシア正教徒）、クロアチア人（ローマ・カトリック教徒）、また、ボシュニャク人（イスラム教徒）等が住んでいる。

### （参考）コソボ

これらの国とは異なり、**アルバニア**は南スラブ人ではなく、イリュリア人が建てた国を祖とする。1478 年から 1912 年まで、オスマン帝国に支配されたが、他のバルカン諸国とは異なり、アルバニアではイスラム教が浸透した。現在でも、アルバニア人のほとんどはイスラム教徒である。

17 世紀後半から 18 世紀前半にかけて、オスマン帝国はアルバニア人を**コソボ**に移住させた。現在でも、コソボの住民の大半はアルバニア人であり、彼らは「コソボ人」ではなく、「アルバニア人」と呼ばれている。

「コソボ」(Kosovo) とは「クロウタドリ」という意で（89 頁参照）、12 世紀後半、セルビア王国はこの地域で成立したため、コソボは「セルビア建国の地」と目されている。また、コソボ南部のプリズレン (Prizren) にはセルビア正教会の首座が置かれ、セルビア人の「聖地」となる。

## 1. イリュリア人の興亡

ユーゴスラビアはアドリア海に面しており、漁業や観光業が発展した。古代、その東岸にはイリュリア人が王国を建てており、その勢力はバルカン半島北西部（現スロベニア、クロアチアのダルマチア地方）にまで及んだ。彼らはギリシア人、ローマ人、南スラブ人とは異なる民族と考えられているが、詳細は分っていない。

紀元前 4 世紀、王国は古代マケドニア（315 頁参照）に滅ぼされるが、同世紀の後半、アレクサンドロス大王が急逝し、マケドニアが衰退すると、イリュリア人は王国を再建した。彼らは現アルバニア・シュコドラ近郊に首都を構え、モンテネグロ地方やボスニア・ヘルツェゴビナ地方を支配した。ギリシアやローマを脅かす存在になるが、前 2 世紀中頃、ギリシアから支援を要請されたローマに滅ぼされ、その属州になる。ローマ人はバルカン半島を広い範囲で支配し、395 年、ローマ帝国が東西に分割されると、半島は東ローマに属した。

## 2. 南スラブ人の移住

6 世紀頃、現ポーランド西部より南スラブ人が半島に移動してきた。彼らの主要部族であるセルビア人は、12 世紀後半、東ローマの衰退に乗じて、セルビア王国を建設した。アドリア海沿岸に達する広い地域を領土とし、次世紀の前半には、ステファン＝ドゥシャン王（在位 1331～1355 年）の下で最盛期を築いたが、1389 年、コソボの戦いでオスマン帝国に敗れた。以後、19 世紀後半まで、約 500 年に亘り、このイスラム勢力に支配されることになる。

同様に、ボスニア・ヘルツェゴビナとクロアチアも、15 世紀中頃、オスマン帝国に滅ぼされたが、険しい山脈に囲まれた**モンテネグロ**はイスラム勢力の攻撃に耐え、オスマン体制に組み込まれるも、自治権を維持することができた。他方、最北部のスロベニアは、1282 年より、オーストリア＝ハプスブルク家の所領となっていたため、オスマン帝国に支

配されることはなかった。クロアチアは、1527年、オーストリアによって解放され、ハプスブルク家体制に組み込まれた。

※ バルカン半島の歴史について、87頁を参照されたい。

### 3. イリュリア運動

1809年、オーストリアはフランスとの戦いに敗れ(453頁参照)、スロベニアとクロアチアを奪われた。ナポレオンはこれらの地域を「イリュリア州」と名付け、フランスに併合したが、諸国との戦争に敗れ、失脚すると、1815年、ハプスブルク家体制に戻った。オーストリアは旧フランス領を「イリュリア王国」に改編し、統制した(28頁の地図参照)。

1830年、フランスで再び革命(七月革命、463頁参照)が起きると、クロアチアでも自由主義が高まり、ハプスブルク家体制からの解放運動が始まった。また、クロアチア人、セルビア人、ボシュニャク人(539頁参照)等、共通の言語・文化を持つ南スラブ人の一体性が叫ばれるようになる。彼らは同じ言語を使用するが、諸地域で異なる方言が話されていたため、標準語を設ける試みが言語学者や作家等によって行われた。

**イリュリア運動**と呼ばれたこの文化活動が始まった1830年、セルビア人はオスマン帝国から自治権を獲得した(426頁参照)。その後、彼らはクロアチア人と合流し、南スラブ人の一体性を強化していく。特に、スラブ国家建設の前提として、標準語の導入が進められた。なお、この活動はオーストリアの首都ウィーンで行われている。1850年、セルビアとクロアチアの文化人は「セルビア・クロアチア語」(188頁参照)を考案し、民族統一の基盤を整えるが、南スラブ人による国家建設が実現するまでには多くの戦争と70年の歳月を要した。

### 4. ユーゴスラビア王国(第1のユーゴ)の建設

1867年6月、(プロイセンとの戦いに敗れ、弱体化した)ハプスブルク家はハンガリーの独立を認めるに至った(454頁参照)。これはハプスブルク体制に組み込まれていたクロアチアとスロベニアを刺激することになり、両者は、オーストリア、ハンガリーに並ぶ「第3の国家」の建設を希求したが、オーストリアによって却下された。

その一方、セルビアは、1878年、オスマン帝国からの独立を達成した。これによって民族主義(汎スラブ主義)はさらに高まり、1882年、セルビア王国の樹立を宣言した(それまでは公国であった。426頁参照)。また、20世紀に入ると、セルビアはクロアチアと共に「南スラブ人の国」の建設を目指すようになる。

セルビアはギリシア正教を、他方、クロアチアはローマ・カトリック教を国教としていたが、宗教上の違いは統合の妨げにはならなかった。もっとも、「心のユーゴスラビア」とも呼ばれたボスニア・ヘルツェゴビナの領有をめぐる対立するようになる。15世紀より、この地域はオスマン帝国に支配されていたが、1878年、露土戦争で帝国が敗れると、帝国領であることは変わらないが、統治権はオーストリアに移った。その30年後(1908年)、帝国内で青年トルコ革命が発生すると、その余波がボスニア・ヘルツェゴビナにも及ぶことを恐れたオーストリアはこの地域を併合した。これはスラブ人の反発を招き、第1次世界大戦の遠因になる。なお、併合に際し、オーストリアはオスマン帝国に補償金を支払い、紛争を解決している(381頁参照)。

1914年6月、ボスニアの首都サラエボでオーストリアの皇位継承者夫妻(381頁の注1176参照)が射殺される事件が発生した。オーストリアはセルビアの陰謀とみなし、翌月、このスラブ国家に対して宣戦布告すると、英露やその他の列強が参戦し、第1次世界大戦が始まった。

1914年11月、オーストリア軍に攻め入られたセルビア政府はロンドンに亡命するが、この都市で、クロアチアやスロベニアの政治家と共に「ユーゴスラビア委員会」を立ち上げ、南スラブ人の国家建設について審議した。1917年7月、同委員会の議長(クロアチア人のアンテ・トルンビッチ)とセルビア首相(ニコラ・パシッチ)はコルフ宣言を採択し、セルビア国王(カラジョルジェヴィチ家)を元首とする王国の建設について合意する。

1918年11月、オーストリアは戦争に敗れ、ハプスブルク家体制は崩壊した。クロアチア、スロベニア、ボスニア・ヘルツェゴビナは独立し、翌月、**セルビア人=クロアチア人=スロベニア人王国(セルブ=クroat=スロヴェーン王国)**を立ち上げた(国号にボスニア・ヘルツェゴビナが含まれていない点について、539頁参照)。なお、1918年1月、米大統領のウィルソンが発表した「第14ヶ条宣言」の第11条ではバルカン半島の民族の独立が謳われており(385頁参照)、南スラブ人の王国の独立は国際社会によって承認された。

王国は近代的な立憲君主制を採用し、セルビア国王が元首になる。また、フランス型の中央集権体制が導入され、「一つの民族、一人の元首、一つの国家」を理念としたが、連邦制を目指したクロアチアで分離運動が起きると、1929年1月、国王のアレクサンダル1世は専制を敷き、民族主義政党の活動を禁止した。また、10月、民族の一体性を強化するため、国号をユーゴスラビア王国に改めた。

1934年10月、アレクサンダル1世は外遊先のフランス・マルセイユ(635頁参照)でクロアチア分離派によって暗殺され、国王による独裁は終わった。また、1939年8月、分離派を懐柔するため、クロアチアに自治権が与えられると、セルビア、スロベニア、ボスニアにも同様に自治が認められ、国の一体性が損なわれることになった。



ユーゴスラビアの民族舞踊コロを踊る人々  
(1934年作成の絵葉書)

中央にはアレクサンダル1世の最後の言葉“Čuvajte Jugoslaviju”(ユーゴスラビアを守れ)が記されている。

## 5. 第2次世界大戦とティトーによる共和国(第2のユーゴ)の建設

第2次世界大戦中の1941年、王国はドイツ、イタリア、ブルガリアの枢軸国(390頁参照)に倒された。その後、スロベニアはドイツに併合される一方<sup>1506</sup>、クロアチアはドイツの傀儡<sup>かいらい</sup>国家となってユーゴスラビア王国から独立し、「クロアチア独立国」となる。しかし、何れも1945年初頭までにはティトーが率いる共産党パルチザン(正規軍に入っていない遊撃軍)によって解放された。

大戦後、王政は廃止され、国体はそれまでとは正反対の共産主義体制に移行する。1945年11月、ティトーは以下の六つの共和国で構成されるユーゴスラビア連邦人民共和国を建設した。この国は「連邦制」を採用し、七つの国境、五つの民族、四つの言語、三つの宗教、二つの文字を持つ多民族国家であったが、ソ連と同様、実際には共産主義者によって民族主義は封じ込まれ、セルビアを盟主とする中央集権型の統一国家であった。

- ① 七つの国境：イタリア、オーストリア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、ギリシア、アルバニア  
※ なお、四方を他国に囲まれていたわけではなく、西部はアドリア海に面していた。
- ② 六つの共和国：スロベニア、クロアチア、セルビア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、マケドニア
- ③ 五つの民族：スロベニア人、クロアチア人、セルビア人、モンテネグロ人、マケドニア人  
※ 1960年代後半、ボスニア・ヘルツェゴビナ人も「ムスリム人」という名称でユーゴスラビアの主要民族として認められるようになった。
- ④ 四つの言語：スロベニア語、クロアチア語、セルビア語、マケドニア語(ブルガリア語、94頁参照)  
※ なお、これらの言語は基本的に異ならないが、1990年代以降、意図的に区別されている(188頁参照)。
- ⑤ 三つの宗教：ローマ・カトリック教、セルビア正教、イスラム教(スンニ派、414頁参照)
- ⑥ 二つの文字：ラテン文字(ローマ字)、キリル文字(191頁参照)

1947年、ソ連とその影響下に置かれた東欧7ヶ国は、米国の欧州復興支援計画(マーシャル・プラン)に対抗し、コミンフォルム(共産党情報局)を結成した(396頁参照)。その本部はユーゴスラビアの首都ベオグラードに設置され、ティトーはスターリンの右腕となって東欧諸国の共産主義化を推進する。

しかし、ティトーはブルガリアやアルバニアとバルカン同盟の結成を進めたため、スラブ主義に傾倒しているとして、スターリンから批判されるようになった(397頁の注1210参照)。共産主義の実現に関しても両者の方向性は異なっていたため、1948年、ユーゴスラビアはコミンフォルムから除名された。これを受け、同国は独自の社会主義路線を歩む

<sup>1506</sup> 当時のドイツ(ヒトラー政権下のナチス・ドイツ)は1938年にオーストリアを併合しており、スロベニアはナチス体制下のオーストリアに組み込まれた。

ことになる。アメリカが軍事・経済支援を行うと、西側諸国との貿易も発展するが、1953年にスターリンが死去すると、ソ連との関係も改善された。

なお、その他の東欧諸国とは異なり、ユーゴスラビアでは経済活動の自由や私有財産の取得が認められていた。また、言論や旅行の自由も保障されていたため、西側諸国からは理想的な社会主義国としてみなされた。1984年2月にはサラエボで冬季オリンピックも開催されている。

1963年、国名は**ユーゴスラビア社会主義連邦共和国**（旧ユーゴ）に変わった。

1970年代に入ると、オイルショックや通貨危機の影響を受け、経済が停滞し、国家危機に似た状況が生じた。また、1971年の「クロアチアの春」に象徴される民族主義運動がコソボや、ボスニア・ヘルツェゴビナ等でも発生しているが、ティトーによって封じ込められ、ユーゴスラビアは体制を維持することができた。

## 6. ユーゴスラビアの解体

東欧革命が起き、周辺の国々で旧体制が次々と崩壊していった1989年、ユーゴスラビアは独自の社会主義路線を歩んでいたため、その影響を直接的に受けることはなかったが、翌年、共産主義政党<sup>1507</sup>が自主的に一党体制を放棄し、自由選挙を実施すると、ほとんどの構成国で同党は敗退し、民族主義の強い政権が発足した。連邦制を維持する試みは失敗し、1991年6月、スロベニアとクロアチアが、また、11月、マケドニアが、さらに、翌年3月にはボスニア・ヘルツェゴビナが独立を宣言するに至った。他方、セルビアとモンテネグロはユーゴスラビアに留まるが、1992年4月、両国が**ユーゴスラビア連邦共和国**（新ユーゴスラビア）を興すと、従来のユーゴスラビアは消滅した。

多くの民族・宗教が共存するバルカン半島南西部において、セルビアとモンテネグロは言語（セルビア語）と宗教（セルビア正教）を共通にし、親密な関係にあった。また、民族的にもほとんど異ならず、セルビア共和国の国民はセルビア人と、また、モンテネグロ共和国の国民はモンテネグロ人と呼ばれた。なお、セルビアの人口は約1000万であるのに対し、モンテネグロは約65万と、両者間には大きな格差が存在し、セルビアのスロボダン・ミロシェビッチ大統領（1997年からユーゴスラビア連邦大統領）がモンテネグロを統制した。

後述するボスニア・ヘルツェゴビナ紛争（546頁参照）の終結後、モンテネグロで独立の機運が強まった。コソボ紛争やNATOによるセルビアへの空爆は独立運動が勢い付かせることになり、2000年10月の「民衆革命」によってミロシェビッチ政権が崩壊すると、独立は決定的になった。しかし、2002年3月、EUの仲介により、両者は緩やかな連合国家を建設することで合意した。翌年2月、連邦議会がこれを了承し、セルビア・モンテネグロが発足すると、「ユーゴスラビア」という名称を持つ国は地図上より消えた。

なお、3年後、モンテネグロでは、この国家連合の存続について国民投票を実施することが予め決まっていた。2006年5月、それが行われると、独立派が55.5%に達したため、翌月、モンテネグロは独立した。

さらに、2008年2月、コソボがセルビアからの独立を宣言し、現在に至る（546頁参照）。

### ◎ 国名の変更過程

- 1918年 セルビア人＝クロアチア人＝スロベニア人王国（セルブ＝クロアート＝スロヴェーン王国）
- 1929年 ユーゴスラビア王国
- 1943年 ユーゴスラビア民主連邦
- 1945年 ユーゴスラビア連邦人民共和国
- 1963年 ユーゴスラビア社会主義連邦共和国（旧ユーゴ）
- 1992年 ユーゴスラビア連邦共和国（新ユーゴ）
- 2003年 国名が「セルビア・モンテネグロ」に変わり、「ユーゴスラビア」という国号を持つ国は消失

<sup>1507</sup> ユーゴスラビア共産党（KPJ）は、1952年、ユーゴスラビア共産主義者同盟（SKJ）と改称した。

## 7. 解体後の民族紛争

構成国が独立を宣言すると、対立はさらに深まり、冷戦終結後では最大規模の民族紛争に発展した。一連の戦争は1992年6月下旬、スロベニア警察軍とユーゴスラビア連邦軍の間で発生した武力衝突を嚆矢とし、10年近く、場所を変え勃発したが、戦闘は断続的に行われていたわけではない。また、当事国も異なる。なお、スロベニアを除いた諸国は長期に亘り争いを繰り返したため、何れもEU加盟を目指すようになるが、対策が遅れ、そのほとんどは30年以上が経過した現在でも実現していない<sup>1508</sup>。

ユーゴスラビア連邦軍はセルビアを中心として編成され、実質的にはセルビア軍であった。同軍は旧体制の維持だけでなく、セルビアの勢力拡大(大セルビア主義)を目的とし、独立派と対戦せいでいる。また、国内に居住するセルビア人は60%に留まり、クロアチアやボスニア・ヘルツェゴビナ等にも多くのセルビア人が住んでいたとされ<sup>1509</sup>、彼らの保護を目的としていた。

一連の戦闘の概要は以下の通りである。なお、コンボの独立をめぐる争いはまだ完全には収まっていない。

### 1) 十日間戦争

1991年6月25日、スロベニアが独立を宣言すると、2日後、セルビアを主体とするユーゴスラビア連邦軍が侵攻し、スロベニア警察軍と衝突した。なお、連邦軍はセルビアが主体となって編成され、国外に住むセルビア人の保護を名目に掲げていたが、スロベニアに居住するセルビア人は少なく、彼らがスロベニア国内で独立運動に反発することもなかった。また、25日には、クロアチアも独立を宣言し、セルビアに対してより大きな影響を及ぼしたため、セルビアは早期に撤退を決め、7月7日、EUの仲介の下で休戦協定が結ばれた。これによってスロベニアは独立を勝ち取る。

### 2) クロアチア紛争

上述したように、ユーゴスラビア連邦軍はスロベニアとの戦争を10日程度で終わらせているが、クロアチアとの戦闘は4年近く続けた。これは同国内には大勢のセルビア人が住んでおり、住民も巻き込んだ戦闘が繰り返されたためである。

1991年6月25日、スロベニアと同時に、クロアチアが独立を宣言すると、同国内に住むセルビア人による蜂起が散発するようになった。3ヶ月後、ユーゴスラビア連邦軍がセルビア人の保護を目的として侵攻すると、クロアチア共和国軍と衝突し、本格的な内戦に発展した。特に、セルビアに隣接し、連邦軍の侵攻が容易であったクロアチア東部のスラヴォニア(ヴコヴァル Vukovar<sup>1510</sup>)ではクロアチア系とセルビア系の住民の双方が約3ヶ月に亘り、市街戦を展開し、犠牲者は3,000人に達する。11月末、国連の仲介により停戦合意が成立した。翌1992年2月、国連は保護軍(平和維持軍 UNPROFOR)の設置を決め、翌月、派遣した。

なお、1991年12月、EU(当時はEC)がクロアチアの独立を承認すると、セルビア人はそれに反発し、クライナ・セルビア人共和国の創設を宣言して対抗した。1995年5月、クロアチアは停戦合意を破り、西スラヴォニアを占領するに至る。また、8月にはクライナ・セルビア共和国の首都クニンを占領し、共和国を崩壊に追いやった。これを受け、約30万のセルビア人が難民となり国外に流出する。



クライナ・セルビア共和国(赤い部分) <sup>1511</sup>

1991年12月～1995年8月

<sup>1508</sup> スロベニアは2004年5月にEU加盟を果たしたが、クロアチアの加盟は2013年7月になってようやく実現した。なお、その他の旧ユーゴスラビア構成国は、まだ目標を達成していない(656頁以下参照)。

<sup>1509</sup> Landeszentrale für politische Bildung Baden-Württemberg, Jugoslawienkrieg, in <https://osteuropa.lpb-bw.de/jugoslawien-krieg>

<sup>1510</sup> クロアチア・セルビア間の国境沿いに位置するヴコヴァルはドナウ川沿いに建てられた都市(現在の人口は約3万人)で、クロアチア最大の河川港が設置されている。

<sup>1511</sup> 画像出典 <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Krajina.png>

その後、セルビア人の居住区は東スロヴオニアのみとなるが、1995年11月、この地域をクロアチアに統合することで停戦に応じ、紛争は終息した。

1996年1月、国連は東スラヴオニア暫定統治機構（UNTAES）を設置し、セルビアに隣接するこの地域の平和維持・復興を図ってきたが、翌年11月の地方選挙でクロアチア人政党が勝利を収めると、セルビア人政党は協力を約し、対立が解消されていった。1998年1月、暫定統治機構は解散し、統治権はクロアチアに遷され、現在に至る。

なお、独立期に制定されたクロアチアの現行憲法第142条はユーゴスラビアの再建やバルカン国家の建設を目的とするか、その可能性のある国際組織への加盟（他国との連携）を禁止している。

### 3) ボスニア・ヘルツェゴビナ紛争（ボスニア紛争）

1992年4月、ボスニア・ヘルツェゴビナの独立をめぐる、同国内のセルビア人（セルビア正教徒）、クロアチア人（カトリック教徒）、ボシュニャク人（イスラム教徒）が対立し、内戦に発展した。セルビア人は数週間の内にボスニア・ヘルツェゴビナ領の70%を占領し、数10万のボシュニャク人が追放された（**民族浄化**<sup>1512</sup>）。また、当初、ボシュニャク人とクロアチア人は連携してセルビア人に対抗していたが、1992年末頃には互いに争うようになり、内紛は三つ巴の状態に陥る。なお、前述したクロアチア紛争で停戦が成立し、クロアチアのフラニョ・ツジマン大統領はボスニア・ヘルツェゴビナにおけるクロアチア人への支援を強化するようになっていた。

1994年11月、NATOは一連の旧ユーゴスラビア内戦で初めてセルビア人勢力に対し空爆を行った。また、翌年7月、セルビア人が国境沿いの山村**スレブレニツァ**で、大勢のボシュニャク人を虐殺すると、8月、NATOは空爆を再開した。

1995年12月、米国の主導下で**デイトン和平合意**（ボスニア和平協定）が締結され、3年半続いた紛争はようやく収まった。この合意に従い、二つの政体、つまり、①クロアチア人が中心になる「ボスニア・ヘルツェゴビナ連邦」と、②セルビア人が中心の「スルプスカ共和国」で構成される一つの国家ボスニア・ヘルツェゴビナが発足し、現在に至る（近時の状況について、657頁参照）。

### 4) コソボ紛争

セルビアはセルビア人を基幹民族とする国であり、人口約693万の約8割はセルビア人であるが、南部のコソボ（人口約180万）では住民の約9割がアルバニア人である。1974年、この地域には自治権が与えられたが、1989年、セルビアは憲法を改正し、この権利を廃止した。これに反発したコソボの住民は、1991年9月、セルビアからの独立を宣言するに至った。また、翌年、コソボ民主同盟のルゴバ議長を大統領に選出した。彼はセルビアとの交渉（平和的な独立）を優先したが、進展しなかったため、1994年、コソボ解放軍（KLA）が編成されることになる。

1998年2月、セルビアが同解放軍の掃討作戦を実施すると、**コソボ紛争**（コソボ戦争）が勃発し、多数の犠牲者を出す。翌月、NATOはアルバニア人の保護を理由にセルビアを空爆するが、それはより多くの被害者や難民を生むことになった。特に、NATOの空爆後、ユーゴスラビア軍によるコソボ制圧が強化されたため、約80万のアルバニア人が難民となって出国した。また、空爆は国連安保理の承認を得ていなかったため、ロシアや中国の反発を招き、より大きな国際問題に発展した。特に、米軍が誤って中国大使館を爆破すると、中国では米国やNATOに対する抗議運動が起きた。

1999年6月、セルビアが（米国、ロシア、EUが作成した）和平案を受け入れ、コソボから撤退すると、78日間続いたNATOの空爆は終了した。その後、コソボは国連安保理の決議に従い、国連の暫定統治下に置かれた。これを受け、アルバニア人が帰還すると、今度は彼らによってセルビア人や少数民族のロマへの迫害が発生し、約20万のセルビア人が難民として流出する事態に陥った。

紛争の最終的解決を図るため、セルビア・コソボ間で交渉が続けられることになったが、2007年12月、決裂する。翌年2月、コソボは一方的に独立を宣言し、現在に至る。なお、2024年3月1日現在、国連に加盟する大半の国（我が国や米国を含む）はコソボの独立を承認しているが、セルビア、ロシア、中国等は承認していない。EU加盟国の態度も異なっており、ドイツ、フランス、イタリア、ベネルクス3国等は承認する一方、スペイン<sup>1513</sup>）、ギリシア、キプロス、

<sup>1512</sup> 一連の旧ユーゴスラビア内紛では、他の民族の大虐殺や強制移住が行われたが、1992年のボスニア・ヘルツェゴビナ紛争後、それらを「**民族浄化**」（ethnic cleansing）と呼び、批判することが多くなった。

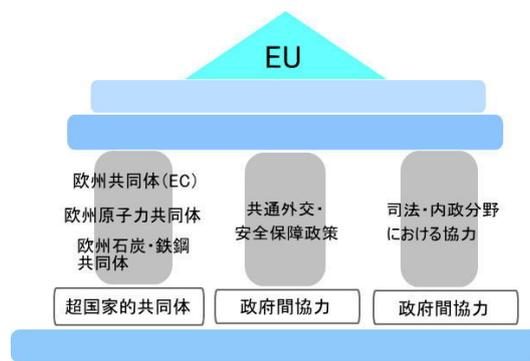
<sup>1513</sup> Koha, Die wichtigsten spanischen Parteien sind gegen die Anerkennung der Unabhängigkeit des Kosovo, in <https://www.koha.net/de/arberi/424134/partite-kryesore-spanjolle-kunder-njohjes-se-pavaresise-se-kosoves>

ブルガリア、ルーマニア等は承認していない。EU は独立を支持し、コソボの EU 加盟を支援している (657 頁、また、553 頁参照)。

◎ コソボ紛争と EU

域内市場の創設やユーロの導入等、経済分野において EU 統合はダイナミックに発展しているのに対し、政治分野の統合は後れている。これは特に外交政策の分野において当てはまる。確かに、1993 年 11 月に発効したマーストリヒト条約に基づき EU 体制が発足した際、その第 2 の柱として、共通外交・安全保障政策が導入されたが (下図参照)、EU に政策を決定・実施する権限は与えられていない。つまり、外交・安全保障に関する権限は加盟国が保有しており、EU は加盟国の外交・安全保障政策を調整しうるに過ぎない。これは EU の創設から 30 年以上、経過した現在でも変わらない (409 頁参照)。

EU 発足当初 (1993 年 11 月) の 3 本柱構造



加盟国が外交・安全保障に関する権限の移譲に反対しているのは、例えば、イギリス (ただし、イギリスは 2020 年 1 月に EU から脱退した)、フランス、スペインなど、かつて世界各地を支配した国々が自らの外交権限を放棄し、これを EU に与えることに躊躇しているためである。また、国連安全保障理事会の常任理事国であり、核保有国でもある英仏が独自の安全保障体制を重視していることも、EU への権限移譲を拒む理由になっている。

NATO の空爆 (1999 年 3 月 24 日) によって激化したコソボ紛争は、EU の行動力を測る試金石となったが、以下の点を指摘することができる。

① 当時の EU 加盟 15 ケ国の全てが NATO に加盟していたわけではないため、NATO のユーゴ空爆に関し、EU レベルで統一した行動はとれなかった。特に、NATO に加盟していないオーストリアは、自国の領空を NATO 軍機が飛行するのを禁止した。他方、同じく NATO に加盟していなかったフィンランド<sup>1514</sup>のアーティサリ (Ahtissari) 大統領は、1999 年 5 月以降、NATO/EU とユーゴスラヴィアの仲介だけではなく、フィンランド・ロシア間の友好関係を生かし、NATO/EU とロシア間の意見調整に貢献した。

② NATO に加盟している EU 加盟国の間でも空爆に関しては見解が割れた。イギリスは当初から、つまり、米国が空爆を決断する前から空爆を積極的に支持していたのに対し、ユーゴスラビア (ないしセルビア人) との友好関係を重視するギリシア政府やイタリアとフランスの議会は空爆に消極的で、早い段階から、その中止を要請していた。また、非軍事施設への攻撃に関しては、ギリシアとドイツの抵抗が強く、NATO 内の結束は非常に困難であった。

<sup>1514</sup> なお、2022 年 2 月に発生したロシアのウクライナ侵攻の後、フィンランドは NATO 加盟を申請し、翌年 4 月、目標を達成している (81 頁参照)。

③ EU 加盟国の政策の相違が顕著に表れたのは難民の受入れに関してであった。一般に、受入れに積極的なドイツ<sup>1515</sup>は、コンボ難民を最も多く迎え入れたが、他の加盟国は非常に消極的であった。

④ 他方、外交面で EU (加盟国) は統一して行動することができた。その要因として、欧州理事会 (EU 理事会) の議長国であったドイツが加盟国の見解調整に貢献したことや、コンボ紛争特別委員が任命され、同人によって加盟国の統一見解が表明されたこと等が挙げられるが、最も重要な要因は、ヨーロッパにおける紛争はヨーロッパ諸国によって解決すべきという考えが EU 加盟国間に浸透したことである。これにはボスニア・ヘルツェゴビナ紛争の際の失策が教訓として活かされている。

⑤ NATO の空爆が中止された 1999 年 6 月 10 日、バルカン半島安定化協定が多数の関係諸国によって締結された。これは当時の EU 理事会議長国ドイツのイニシアチブに基づき作成されており、紛争後の和平交渉において EU (加盟国) は主導的な役割を果たした。

コンボ紛争は米国に頼らない独自の安全保障制度の必要性をヨーロッパ各国に強く認識させた。また、西ヨーロッパにおける平和の確立 (特に、独仏両国の対立の解消) には欧州諸共同体の設立が必要であったように、バルカン半島で平和を確立するには、地域全体の調和のとれた発展が必要であることや、その方法の一つとして、東欧諸国が EU に加盟する必要性が強く認識された。

## 5) マケドニア紛争

マケドニア (現北マケドニア) の人口の約 3 割はアルバニア人であり、かねてより自治を求めてきたが、コンボ紛争が発生すると、コンボよりアルバニア人が難民として流入し、民族主義運動が強まった。2001 年 2 月、差別の撤廃とアルバニア語の公用語認定を求めていた武装勢力がマケドニア政府軍と衝突すると、マケドニア紛争が勃発する。

小競り合いが続く中、同年 8 月、NATO が介入すると、アルバニア系住民の権利拡大を承認するオフリド合意が成立し、紛争は収まった。11 月、マケドニア憲法改正案が採択され、アルバニア人の権利拡大が正式に認められた。

※ 2019 年 2 月の国名変更 (マケドニアから北マケドニアへ) について、92 頁を参照されたい。

## ◎ モンテネグロの独立

2000 年 10 月、セルビアでミロシェビッチ政権が崩壊すると、モンテネグロで独立の気運が高まり、セルビアとの間で対立が生じる。EU の仲介の下で合意が成立し、2006 年 5 月、モンテネグロは独立を達成した (544 頁参照)。なお、それに際し、軍事衝突は発生していない。

<sup>1515</sup> ドイツはヒトラー政権下でユダヤ人や少数派を迫害し、多数の難民を出した。それを反省し、第 2 次世界大戦後は難民受け入れに積極的である。



旧ユーゴスラビア<sup>1516</sup>

- Slovenia (Ljubljana); 1991-
- Macedonia (Skopje); 1991-
- Central Serbia (Belgrade) | FR Yugoslavia; 1991-2003
- Serbia - Vojvodina (Novi Sad) | Serbia and Montenegro; 2003-2006
- | Serbia (Belgrade); 2006-
- Kosovo (Pristina); 2008- | FR Yugoslavia; 1991-2003
- Status pending | Serbia and Montenegro; 2003-2006
- | Serbia; 2006-2008
- Montenegro (Podgorica); 2006- | FR Yugoslavia; 1991-2003
- | Serbia and Montenegro; 2003-2006
- Croatia (Zagreb); 1991-
- Federation of Bosnia and Herzegovina (Sarajevo); 1994- |
- Republic of Srpska (Banja Luka); 1992- | Bosnia and Herzegovina (Sarajevo); 1992-

<sup>1516</sup> 画像出典 [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/20/Former\\_Yugoslavia\\_2006.png](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/20/Former_Yugoslavia_2006.png)

なお、文字は著者が付けたものである。また、画像は加工し、掲載してある。



この資料は入稻福智著『地域研究ヨーロッパ～欧州の本質～』からの抜粋です。

全編（PDF A4 約 700 枚）は下の URL よりダウンロードすることができます。

ファイルのサイズは約 70MB と容量が大きいため注してください。

<https://eu-info.jp/europe2025.pdf>

